



平成 27 年度

日本文理大学
「地（知）の拠点整備事業」年次報告書

おおいた、つくりひと[®]

日本文理大学COC事業

NBUが大分で育む、豊かな心と地域愛。

体感。感動。感謝。

おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、
素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

NBU日本文理大学が取り組むCOC事業

「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。

お金やモノだけでは図ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。

日本の未来を担う若者ができることは？

きっと、その答えはひとつではありません。

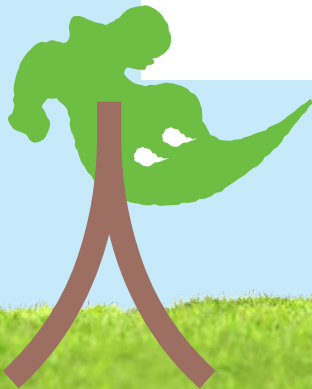
だからこそ今、私たちは動き始めます。

そのステージは、私たちの大学がある大分県。

大分への愛着を勇気に変えて、大分でしかできないことにチャレンジします。

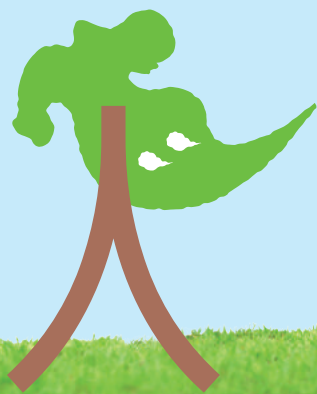
私たちは自分の力を信じて未来を拓く

そんな、『おおいた、つくりびと』になりたい。



目次

1. 事業概要・目的・事業計画
2. 大学COC事業 プロジェクトシート
3. 地域志向プロジェクト研究
卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト
4. 平成 27 年度
成果発表会&合同シンポジウム
チャレンジ OITA 地域創生活動報告会
5. 平成 27 年度 連携推進会議
6. 平成 27 年度
大学COC事業メディア掲載一覧
図書リスト



1. 事業概要・目的・事業計画

事業概要・目的

平成 27 年度事業計画

平成 27 年度大学 COC 事業活動紹介

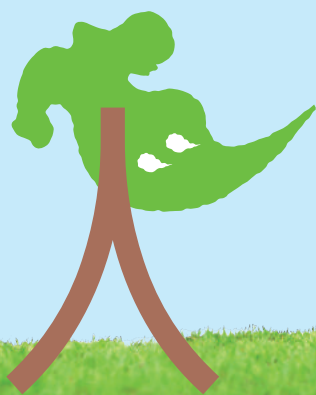
平成 27 年度事業統括シート

平成 28 年度事業統括シート

達成目標の進捗状況

地域志向科目について・地域志向科目一覧

教育における数値目標



【事業概要】⇒

⇒日本文理大学における地（知）の拠点整備事業「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」は、本学の建学の精神である「産学一致」に「人間力の育成」「社会・地域貢献」を加えた教育理念に基づき実績を上げてきた産業界・地域社会を意識した実践活動を主体とした全学での人間力教育をベースとして、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」育成へ発展させ、これを地域との実践的協働活動により実現する事業である。県内の少子高齢化が深刻である地域での「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を可能とする教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域力の向上につなげるものである。⇒

⇒

⇒

【目的】⇒

⇒本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することであり、具体的には、以下の通りである。⇒

⇒

I. 教育⇒

⇒⇒⇒大分県内の少子高齢化が深刻であり、本学から30分圏内の大分市佐賀関地区及び1時間圏内の豊後大野市での「体験交流活動」＋「課題解決に必要な知識の修得」＋「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を学修のサイクルとした教育体系に再編、確立する。また、これらの学修サイクルにおいて、学部、学科横断型の教育カリキュラム体系（副専攻制度）、連携ゼミ活動を可能とする体制を合わせて確立する。さらには、正課外学習活動も本学における人材育成（ディプロマポリシー）においては重要な役割を果たすことから、大分の豊かな自然を活用した教育・社会貢献活動である「大分チャレンジアワード」制度を正課外プログラムとして創設する。以上の取り組みにより、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編を実現し、地域創生人材を輩出する。⇒

⇒

II. 研究等⇒

⇒⇒本学の限られた研究資源（人材、研究時間）の中で、地域の課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを「産学官民連携推進センター」を窓口として完成させる。地域ニーズに対応できるよう大学が持つシーズをチームプロジェクトとして編成し、

必要としている企業・地域とのマッチングを図る。これらの取組により、研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革を実現し、地域の課題解決につなげる。⇒

⇒

Ⅲ. 社会貢献⇒

⇒⇒⇒学生の正課活動と正課外活動をリンクさせ、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整え、学生ボランティア活動がさらに有効なものとなるように発展させる。また、地域貢献活動や公開講座を拡充し、行政と連携し、「地域創生人材」育成のための「県民参画講座」を開講する。これらの取組により、地域との実践的協働活動の体制を実現し、地域再生・活性化を推進する。⇒

⇒

Ⅳ. 全体⇒

⇒⇒⇒以上の取組を統括し、学長のリーダーシップのもと、教育改革・改善の調整・推進にあたる学長室を有効に機能させる。学内の全学部・学科及びセンター・部局の連携を促進、調整するほか、「自治体」「地域住民」「地域企業」「関係財団・NPO」等のステークホルダーとの横の連携を強化し、本事業目的を実現するためのそれぞれの強みを活かした「実践的協働学習体制」を構築し、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地（知）の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。⇒

⇒

⇒

【平成 27 年度事業計画】 ⇒

⇒平成 27 年度では、以下の 16 項目を計画する。⇒

I. 教育⇒

①⇒4 月⇒⇒⇒教養基礎科目である「大分学・大分楽」を必修化⇒

②⇒4～3 月⇒正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ス⇒
⇒⇒テークホルダーとの協働による課題解決型学修」を学修サイクル体系として試行⇒

③⇒4～3 月⇒大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワー⇒
⇒⇒ド」の本格運用⇒

(大分市佐賀関地区周辺での活動：②③共通) ⇒

・学生地域活動拠点の開設、運営⇒

・前年度試行した 1 次体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア
活動、NPO の経営支援の本格実施⇒

・前年度確立した学生と地域の意見交換の場である「さかのせきローカルデザイン会議」
の定期的な実施⇒

・地域コミュニティの活性化活動（福祉活動、地域づくり活動、商店街活動）、地域支援
ものづくりの本格実施⇒

・商店街組合・NPO・商工会との連携による職業体験活動⇒

・総合型地域スポーツクラブの支援活動の試行⇒

(豊後大野市での活動：②③共通) ⇒

・学生グリーンツーリズム協会（エコパークの観光資源発信活動）の設立、拠点の開設、運営⇒

・前年度試行した 1 次体験活動（農林業）、集落におけるコミュニティ維持活動の本格実施⇒

・高齢者向け学生 IT 講習会の実施⇒

・6 次化活動体験、地域でのサービスラーニング体験活動、地域支援ものづくりの本格実施⇒

・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動⇒

II. 研究等

④⇒4～5 月⇒地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択

⑤⇒5～3 月⇒地域志向プロジェクト研究の実施

III. 社会貢献

⑥⇒9 月⇒⇒⇒ジオ・エコパーク活用のための地域住民向け講習会の実施

⑦⇒11～12 月⇒未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分楽」の実施

⑧⇒1～2 月⇒ 実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座の実施

IV. 全体

- ⑨⇒4～3月⇒⇒学長室（事業推進WG）による事業推進・統括・情報発信
 - ⑩⇒4月⇒⇒⇒事務補佐職員1名の追加採用
 - ⑪⇒4月・1月⇒学生能力アセスメントテスト（nEQ、PROG）の実施、専門的課題解決力
⇒⇒⇒⇒アセスメントの開発・試行
 - ⑫⇒5月・10月⇒連携自治体との連携推進会議の開催
 - ⑬⇒9月・3月⇒地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施
 - ⑭⇒11月⇒⇒⇒大学COC事業合同フォーラムの開催（県内COC事業採択校である大分県立
⇒⇒⇒⇒看護科学大学と合同開催）
 - ⑮ 2月⇒⇒⇒ 学修成果・地域志向研究成果発表会の対象地域での開催
 - ⑯⇒3月⇒⇒⇒ 事業検討・評価委員会の開催、年次成果報告書の発行
- ⇒

NBUが大分で育む、豊かな心と地域愛。

体感。感動。感謝。
おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける。素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

事業概要

本事業の目的は、大分県の地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を「おおいた、つくりびと」を育成することである。

【教育分野】 大分県内の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の習得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルによる教育体系を確立し、地域創生人材を輩出をはかる。

【研究分野】 地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決につなげる。

【社会貢献】 県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整え、行政と連携した「県民参加講座」を開講し、地域再生・活性化を推進する。

以上の各分野の取り組みを通じて、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編を行うことで、教育分野と社会貢献活動との有機的な接続と、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地(知)の拠点の形成を目指す。

連携自治体

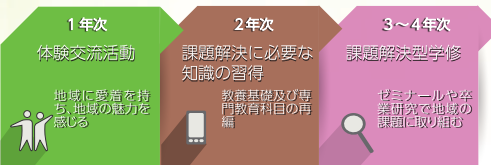


『おおいた、つくりびと』が取り組む 地域再生・活性化7つの視点

- 1 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化
- 2 人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」
- 3 自然の多様な活用による保全と地域活性化
- 4 商店街の活性化による地域振興
- 5 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持
- 6 NPO法人の活動・経営支援
- 7 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化(6次化)

教育 × 体感

『地域創生人材』育成のための学修サイクル



地域志向カリキュラムの特徴

- 1年前期全学教養基礎科目[大分学・大分県](2単位)を必修化(受講生450名)し、体験交流活動をはじめのための基本的知識を獲得
- 経営経済学部における「ゼミナール」(2~4年に開講、全科目必修・各2単位)の教育内容を再編し、地域実践活動を中心としたゼミを全体の半数以上に設定
- 工学部における「プロジェクト系科目」(1~3年に開講、選択・各2単位)において、地域実践活動を行う取組を拡充し、「卒業研究」(4年必修・6単位)において地域の課題解決を扱う「プロジェクト型研究」全体の半数以上を設定
- 時間割に「実践型教育実施科」を確保し、まとまった時間で地域活動が行いやすい教育環境を確保

体験交流活動から課題解決型学修への取り組み

【事例】『工学部建築学科 プロジェクト科目』
豊後大野市大野町土前地区において、地域住民とともに小規模集落でのコミュニティ維持を目標とした活動。

- ・1年次
地域住民の指導のもと、林業体験、環境維持活動を行うことで、地域の実態を肌で感じ、地域が抱えている課題を正しく認識することを目的に体験交流活動を実施。
- ・3年次
1年次の現場での体験活動を踏まえ、地域が抱えている課題についてのフィールドワークや住民とアライアンス等を実施し、空き家対策、文化・行事の継承や生活福祉対策の提案等を地域住民に行う。

『実践型教育実施科』を用いた特徴的な授業

【事例】プロジェクト型授業『社会参加型小企業実務体験型プロジェクト』
～大学×企業×NPOによる地方創生のための中小企業家活躍支援～

地域の中小企業の雇用問題(地域企業の魅力発信、雇用のスマッチ、地元企業への地元大学からの就職率向上、若者定着率向上)の解決に向けて、大分県中小企業家同友会加盟企業、地元NPOと協働して、学生の目標で地域の中小企業のリアルビデオの作成を行った。

初年度(2015年度)は、(株)ジョイフル、(株)豊和銀行など、計6社の動画作成を行った。

大分チャレンジアワード(正課外活動)

大分の地域をフィールドとした「自然体験」「運動・スポーツ」「ボランティア活動」「科学・文化・芸術」の4つの分野全ての活動に参加し、設定した基準をクリアした者について大分チャレンジアワード終了者として認める制度を制定。

豊後大野市をフィールドとして自然体験活動を実施。地理、歴史、文化的背景から地域を考え、民泊等の異世代交流も実施。

日本文理大学×大分県立看護科学大学 成果発表会&合同シンポジウム開催

「地域をまもり、地域をつくる。大学の取り組み」をテーマに、両大学の学生生活の発表や、パネルディスカッション「大分の未来をまもり、つくる人材育成の可能性」を行った。地域の方々や両大学COC事業の関係者、および、高校生など幅広い年齢層の方々約300名が参加し、地(知)の拠点大学としての役割を展開していくことの重要性を再確認した。

研究 × 感動

○特徴ある地域づくりのための地域・企業との共同研究の推進
○複数教員によるプロジェクト型研究の促進

教育、社会貢献活動を通じて見つけた「地域再生・活性化7つの視点」の地域の課題解決に向けて、専門分野の知識・スキルをもって研究に取り組み、特色ある地域づくりに取り組む。異なる分野が融合することによる「プロジェクト型研究(地域志向研究プロジェクト)」を主に、ゼミナールでの活動(経営経済学部、卒業研究(工学部)、地域との共同研究などに積極的に取り組んでいる。

【平成27年度 地域志向研究プロジェクト】

大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発

プラズマから発生する活性酸素(ROS)の適度な供給は、植物の成長を促進させると注目されているが、未解明な部分が多い。
本プロジェクトでは、種子への照射、水への照射、土壌への照射などの実験を行い、ROS供給量・方法が植物成長促進因子に与える影響を明らかにすることを目的とする。

(工学部 機械電気工学科 航空宇宙工学科 建築学 情報メディア学科 連携自治体:大分県)

要介護者のコミュニケーション支援システム開発 ～共通プラットフォームによる効率的IT技術の活用～

情報入力による情報発信や体を動かすことで生じる振動による「意思表示」をセンサで収集することで、発声システムでないまたは聴こえが悪い人が、地域コミュニティの一員として参加できることを目的としたコミュニケーション支援システムを構築する。
(工学部 情報メディア学科 連携自治体:大分市)

**地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する
域学協働プロジェクト研究**

豊後大野市では、「地域で一人ぼっちをつくらない」のスローガンのもと、市高齢福祉課、市社会福祉協議会、地区社会福祉協議会の連携により、地域住民を主体とした地域づくりが行われている。本プロジェクトでは、それまでの地域づくりの基盤を前提に、域学協働で新たな進捗的に関するニーズ調査を実施し、そのニーズに対応した活動の提案などを行い、これからの地域づくりの課題と展望を明らかにする。
(経営経済学部 連携自治体:豊後大野市)

徘徊老人の位置検出システムのための 画像処理ソフトの開発

過疎地域である豊後大野市において、「徘徊高齢者の位置検出システム」を開発することを目指す。街路に設置するセンサーの画像を利用して、徘徊高齢者の位置検出につなげる。将来的には、子供たちの見守り情報など、住みやすい街づくりを実現するだけでなく、安全・安心な街づくりにつなげる。
(工学部 情報メディア学科 機械電気工学科 連携自治体:豊後大野市)

社会貢献 × 感謝

地域のお祭りへの参加、小学生と一緒に防犯マップ作り、地元企業と共同で水辺の環境保全など、学生活動を中心とした地域社会への貢献活動を行うことで、地域と共に成長する大学を目指す。



大分合同新聞社と共同主催で開催した「AQUA SOCIAL FES!! 2015」は、磯崎海岸でビーチクリーニングと防砂堤の補修を行い、ワミガメが産卵・ふ化しやすい環境を整備。

大分市鶴崎地区で開催される加藤清正公ゆかりの歴史の行事(鶴崎二十三夜祭)へ参加し、地域の伝統文化である祭りの意義を次世代に伝える。



NBU大分県空港エクスプレッションキャンパスにおいて、小学生のお仕事見学イベントを開催。(株)豊和銀行およびセイ・アグリ(株)の協力を得て、6つのお仕事体験ブースを開設し、それぞれの職業の魅力伝える活動をおこなった。

徘徊老人の位置検出システムのための 画像処理ソフトの開発

画像処理ソフトの開発のフローチャートと人物の特定例、人の動きだけを入れる例を示す。



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは図ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ、私たちは動き始めます。
そのステップは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分できないうちにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元氣なまちをつくりまします。
私たちは大分県の未来を担い、『おおいた、つくりびと』になりました。

平成27年度 日本文理大学 COC事業総括シート

		事業全体の概要	H27年度の実施計画	H27年度の実施概要	H27年度の成果
概要		<p>本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することである。つまり、教育では大分県内の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルによる教育体系を確立し、地域創生人材を輩出する。研究では、地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決につなげる。社会貢献では、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整えとともに、行政と連携した「県民参画講座」を開講し、地域再生・活性化を推進する。学長のリーダーシップのもと、以上の取組を通じて、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地(知)の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。</p>	<p>本年度の目的は、教育では、学修サイクルを試行し、次年度の本格運用に向けた枠組みを確立する。また「大分チャレンジアワード」の本格運用を行う。研究では、地域志向研究プロジェクトの学内公募、研究を実施し、地域の課題解決に向けた基礎研究の成果を地域に還元する。社会貢献では、学生ボランティア活動が有効に機能するための県民と学生の協働学習体制の環境を確立する。以上の取組を通じて、地(知)の拠点としての基盤を実現する。</p> <p>I. 教育 今年度入学生より全学部1年生対象に開講する地域学科目「大分学・大分学」を必修化し、地域活動をはじめのための基本的知識を習得させる。大分市佐賀関地区周辺及び豊後大野市での「体験交流活動」、「課題解決に必要な知識の修得」、ゼミ活動における「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を積極的に試行し、次年度より本格運用する学修サイクルの枠組みを確立する。また、「大分チャレンジアワード」の本格運用を行い、制度の概略を確立する。あわせて、副専攻制度、実践型教育実施枠を本格開設し、教育カリキュラム体系の全学的な再編に向けた環境整備を実現する。</p> <p>II. 研究等 地域志向研究プロジェクトの学内公募、研究を実施し、地域の課題解決に向けた基礎研究の成果を地域に還元する。また、地域で活動しているNPOや企業の取り組みに着目し、その中で必要とされているニーズに対して、チームプロジェクトを編成し、地域の課題解決に向けた取り組みを実施する。</p> <p>III. 社会貢献 地域が持つ魅力や地域が持つ課題に対する公開講座を実施することで、地域との実践的協働活動の体制実現を目指す。また、その中で学生ボランティア活動が有効に機能するための県民と学生の協働学習体制の環境を整え、次年度の事業拡大の基盤を確立する。</p> <p>IV. 全体 以上の取組に対して、学長室に前年度に設置した事業推進ワーキンググループ(WG)の機能を強化・活用することで、各取り組みが実効性を持つように整理し統括する。学内の体制構築、地域志向の制度設計の浸透、学外のステークホルダーとの連携強化を通じて、地(知)の拠点改革、ガバナンス改革の基盤構築を実現する。特に今年度においては、各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、地域実践教育推進のための体制を整理することで、次年度より本格運用する学修サイクルの枠組みの確立を実現させる。</p>	<p>H27年度は、地域学科目「大分学・大分学」を全学必修科目として実施した。「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」からなる学修サイクルについて各学科で運用を行い、一部科目群においては、枠組みが確立してきている。また、地域志向のゼミ活動、卒業研究数もH26年度よりも増加していることから、昨年度よりも、より一層地域への研究成果の還元を行っている。正課外活動については、「大分チャレンジアワード」の本格運用を開始した。社会貢献活動についても、環境保全に関する各種公開講座、企業向けの地域創生人育成の講座等、活動が充実した。また、学生活動においても、環境教育や地域の小学生に対する体験教室など学生活動の幅が広がり、また、企画・運営する機会が増加している。</p> <p>それぞれの活動については、当初計画をほぼ達成することが出来た。あわせて学長のリーダーシップのもと、学内の地(知)の拠点に向けた体制強化とガバナンス改革にむけて動き出している。</p>	<p>本年度における取り組みの成果としては、</p> <p>○教育活動:地域学科目「大分学・大分学」を全学必修科目として実施し、大分市佐賀関地区および豊後大野市での「体験交流活動」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」からなる学修サイクルを含む科目について実施し、学生の地域志向の高まりなど、一定の成果を上げている(地域志向科目160科目)。</p> <p>また、「大分チャレンジアワード」について運用を行い、取組参加学生の地域に対する興味や愛着、課題解決への意欲の向上が見られた(修了者17名)。</p> <p>○研究分野:地域志向プロジェクト研究の公募・採択を行い、4件の地域志向プロジェクト研究を実施した。それぞれのプロジェクトとも一定の成果をあげており、教員間連携による地域研究の可能性が広がってきた。次年度も同様の規模の地域志向プロジェクト研究を展開する。</p> <p>○社会貢献活動:学生参加型の公開講座、企業向けの人材育成講座を実施し、地域の方々と学生・教員との意見交換の場を設けることで、地(知)の拠点としての位置づけを地域に発信、理解を得ることが出来た。また、これらの講座に学生が参加することで、地域課題へ取り組み姿勢の意識が変化した(11講座開設)。</p> <p>○全体:ホームページやリーフレットをもちいて学内外への事業内容の周知のほか、新聞・メディアにおいても活動内容が報道されるなど、活動の拡がりをみせている。また、FD/SD研修会を実施することで、学内外のCOC事業へのさらなる協力体制の構築を行うことで、地域志向の学生教育を実施する体制が前年度より一層すすみ、COC事業を発展的に推進するための成果を残すことが出来た。</p>

		計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価
教育	①	4月	教養基礎科目である「大分学・大分学」を必修化	H27年度より全学部1年生を対象に地域学科目である教養基礎科目「大分学・大分学」(2単位)を必修化し(受講者数:450名)、地域活動をはじめのための基本的知識を習得させる。	全学部の全1年生が地域学科目「大分学・大分学」を受講し、具体的な地域の魅力・問題を知ること、地域に関する興味がわき、全学で導入する他の地域志向科目の受講者数の増大を図ることができる。また、学生の授業評価等の反応をもとに、H28年度の学修サイクル本格運用へ向けた取り組み改善に反映することができる。	地域学科目である1年前期教養基礎科目「大分学・大分学」をH27年度入学生より、全学必修実施科目として実施した。また、必修化に伴い受講生数の増加が見込まれたことから、これまでの全学1クラスから、学部毎にクラスを設定し、2クラス開講とした。講義は学内の関係教員がオムニバスで担当したほか、大分商工会議所の姫野会頭が1コマ担当した。	受講者数:工学部204名(うち再履修生12名)、経営経済学部317名(うち再履修生40名)。学生の授業の総合評価として、工学部3.35、経営経済学部3.02という結果を得た(5点満点)。また、授業を通じた成長の自己評価として工学部3.42、経営経済学部3.12という結果を得た(5点満点)。	A
	②	4~3月	正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を学修サイクル体系として試行	学修サイクル体系を確立するための試行として、正課教育における「体験交流活動」、「課題解決に必要な知識の修得」、ゼミ活動等における「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の各取組を大分市佐賀関地区周辺、豊後大野市のそれぞれにおいて実施し、H28年度の学修サイクル本格運用へ向けた取り組み改善に反映する。また学生活動の拠点を開設し、学生と地域との交流・情報発信の場とする。	正課教育における「体験交流活動」、「課題解決に必要な知識の修得」、ゼミ活動等における「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を試行することで、学生の地域志向性を高め、地域との連携体制構築の足掛かりができると同時に、「地域創生人材」育成のためのH28年度の学修サイクル本格運用へ向けた取り組み改善に反映することができる。また、学生活動拠点を学生自身が運営することで、地域住民との関わりが促進され、学生の地域志向性が大幅に高まるとともに、豊かな心と専門的課題解決力の成長につながる可能性がある。	建築学科における豊後大野市土師地区の小規模集落支援プロジェクト、工学部3学科における佐賀関・木佐上地区でのロボットプロジェクト、経営経済学科における福祉マネジメントコースにおける豊後大野市千歳町等での福祉支援プロジェクト等、全学科において「地域志向科目」による学修サイクルの試行を行った。また、佐賀関・間あじ間さば通りコミュニティ食堂「よらんせえ〜」内及び豊後大野市清川町「ロジッキよかわ」内にそれぞれ学生活動拠点を開設した。	「地域志向科目」として160科目を開設した(本年度目標100科目)。地域志向のゼミ活動を行う研究室・ゼミ数が22研究室・ゼミとなった(全55研究室・ゼミ中、40.0%、最終年度目標50%)。プロジェクト活動として大分市佐賀関地区周辺及び豊後大野市全域において、24プロジェクトの活動を行った。学生活動拠点・情報発信拠点として、佐賀関地区は5月1日より、豊後大野市は3月16日より開設した。	A
	③	4~3月	大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の本格運用	大分の地域をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の4つの分野すべての活動に組み込み、設定した基準をクリアした学生に対して大分チャレンジアワード修了者として認める制度を本格運用する。	大分チャレンジアワードの導入により、学生個人に対応した地域活動プログラムを確立することができる。	アドバイザー(指導者)資格研修に職員1名が参加した。年間を通じて、自然体験、スポーツ、ボランティア活動、教養体験の4分野に20名の学生が取り組んだ。	アドバイザー資格を1名が取得したことにより、6名が資格所有者となり、支援体制が充実した。本年度チャレンジアワード登録者20名、修了者17名。H26年度からの累積修了者31名。	A
			(大分市佐賀関地区周辺での活動:②③共通) ・学生地域活動拠点の開設、運営 ・H26年度に試行した1次体験活動(農業漁業)、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の本格実施 ・H26年度に確立した学生と地域の意見交換の場である「さかのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施 ・地域コミュニティの活性化活動(福祉活動、地域づくり活動、商店街活動)、地域支援ものづくりの本格実施 ・商店街組合・NPO・商工会との連携による職業体験活動 ・総合型地域スポーツクラブの支援活動の試行			※それぞれの活動についてはプロジェクトシートを参照。	※それぞれの活動についてはプロジェクトシートを参照。	

		(豊後大野市での活動:②③共通) ・学生グリーンツーリズム協会(エコパークの観光資源発信活動)の設立、拠点の開設、運営 ・H26年度に試行した1次体験活動(農林業)、集落におけるコミュニティ維持活動の本格実施 ・高齢者向け学生IT講習会の実施 ・6次化活動体験、地域でのサービスラーニング体験活動、地域支援ものづくりの本格実施 ・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動				
--	--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--	--	--	--

	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	
研究	④	4～5月	地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択	地域課題の解決に向けて、本学の研究資源を活かした学内共同研究を充実させることで、その成果を地域に還元し、地域での取り組みを活発にするための地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択を行う。	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行うことで、全教員に地域課題の周知を図ることができると同時に、複数教員によるプロジェクト型研究を顕在化することができる。また、採択に至らなかった課題に関しては、フォローアップを行うことで、教員間による新たな地域志向プロジェクト研究立ち上げの可能性を探ることができる。	「地域志向教育研究費」(200万円)を活用して、本事業で設定している7つの地域課題に対する地域志向プロジェクト研究を5月12日より学内公募を行った(締切6月1日)。公募にあたっては、教員間の専門分野の連携・融合による地域課題解決の促進、学内研究体制の活発化を図るため、3名以上のプロジェクトチームを条件とした。	公募に対して7件の応募(工学部4件、経営経済学部3件)があり、外部委員3名(豊和銀行、大分県信用組合、NPO)を含む審査委員会で審査を行い、学長が4件を採択した(工学部3件、経営経済学部1件)。→共同研究者数14名。連携自治体:大分県、大分市、豊後大野市。採択地域課題テーマ数:3分野。 また、不採択課題のうち、2件については、学長裁量経費で実施する「教育改革推進事業」への応募を勧めた(別途審査の上、採択)。	A
	⑤	5～3月	地域志向プロジェクト研究の実施	地域志向プロジェクト研究を実施し、地域の課題解決に向けた基礎研究の成果を地域に還元する。	地域志向プロジェクト研究の実施により、複数教員によるプロジェクト型研究を促進することができ、地域へ大学の知を還元することができる。	採択通知後、7月1日より研究活動を開始し、H28年3月18日までを研究期間とした。研究成果については、年次報告書にまとめるとともに、豊後大野市及び大分市佐賀間で開催した学修成果地区報告会での発表を義務づけた。また、研究推進時の留意点、不正防止を目的とした採択者説明会を7月2日に実施した。	・豊後大野市での地区報告会を2月13日に豊後大野市役所で開催し、3件が研究発表を行った。参加者87名(副市長、地区住民、学生、教職員)。 ・佐賀間での地区報告会を2月20日に佐賀県市民センターで開催し、1件が研究発表を行った。参加者78名(支所長、地区住民、学生、教職員)。 ・実績報告書はCOC事業年次報告書に収録。成果の検証は、今後、審査委員会にて行う。	A

	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	
社会貢献	⑥	9月	ジオ・エコパーク活用のための地域住民向け講習会の実施	地域自然環境を活かしたジオパーク、エコパークを推進していくための自然保存の意識向上、対策のための地域住民向け講習会を実施する。	地域の自然を活かした観光資源であるジオパーク、エコパークの保全・活用にあたって、学内研究シーズを活用し、その成果を公開講座を通じて、地域住民の自然保護活動・意識向上に還元することで、地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。	・「外来種リスクから生物多様性を考えるシンポジウム」(主催:NPO法人おおい環境保全フォーラム)を共催者として10月25日にホルトホールで実施した(他の共催者:北海道大学大学院文学研究科)。 ・「“大地”と“生きもの”シンポジウム～大地の恵みを未来のこどもたちへ～」(主催:豊後大野市・NPO 法人おおい水フォーラム)を共催者として11月14日にエイトピアおおいで実施した(他の共催者:大分県、おおい豊後大野ジオパーク推進協議会、大分県祖母傾ユネスコエコパーク推進協議会、(一財)日本造園修景協会 大分県支部、NPO 法人 大分環境カウンセラー協会)。 ・「生きものあふれる田んぼと地域づくりシンポジウム～「生物多様性ぶんごおの戦略」の策定に向けて」をNPO法人ラムサール・ネットワーク日本、豊後大野市、NPO法人おおい水フォーラムと共同で主催した(2月27日、エイトピアおおい)。	地域自然環境に関する多様な公開講座、講習会を開催することができた(3講座)。それぞれの参加者は約30～100名。	A
	⑦	11～12月	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分策」の実施	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分策」を開催し、本取組における大学シーズを広く公表するとともに、地域住民等との意見交換を行う場とする。	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分策」を実施することで、大分の地域資源の再発見や未来への提言などを行うとともに、地域住民等との意見交換を通じて地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。	人間育成センターと大分大学経済学部合同で6月6日(土)にコンパルホール300階議室でワークショップ型学生地域活動インカレ「第3回わかもの大分がく」(地域活動を軸とした大学生と地域住民の交流)を開催した。	参加学生団体11ブースと興味のある学生・住民約120名が集まり交流できた。	A
	⑧	1～2月	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座の実施	地域企業向け地域創生人材に関する講座やワークショップを開催し、本事業における大学シーズ及び人材育成像を広く公表・普及するとともに、地域企業等との意見交換を行う場とする。	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座を実施することで、本学の「知の資源」を地域の人材育成に還元することができ、また、地域企業との意見交換を通じて、事業改善につなげることで、地(知)の拠点としての取り組みを促進することができる。	・大分市産業活性化プラザ主催の「地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座(全6回)」として実施した。また、最終回は本学との共催で「ゲームで学ぶコミュニケーション～聴く・訊く・伝える～」として実施した。 ・大分県信用組合との包括協定を活用し、「けんしん大学」講座として27年度後期講座「まち・ひと・しごと「地方創生」に挑む(全5回)」として実施した。 ・(一社)大分県工業連合会、大分県との共同主催「第3回ものづくり大分産学交流会」を本学で実施した(3月18日)。	・大分市産業活性化プラザの講座は、1月7日、14日、21日、28日、2月4日、18日(毎週木曜夜)に開催し、経営経済学部の3名の教員が担当した。毎回20名程度の受講生が参加した。 ・「けんしん大学」講座は、10月31日、11月28日、1月23日、2月20日、3月5日(月1回、土曜日)に開催し、両学部の7名の教員が講座を担当した(コーディネーターを含む)。毎回30名程度の受講生が参加した。 ・ものづくり大分産学交流会は、本学を会場として、2名の教員が講座及びERC(エンジニアリング・リサーチ・センター)を活用した3Dファブリケーション機器のデモンストレーションを実施した。参加者約30名。	A

	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	
全体	⑨	4～3月	学長室(事業推進WG)による事業推進・統括・情報発信	学長のリーダーシップを補佐し、本事業を着実に推進・統括する学長室において、H26年度に設置した事業推進ワーキンググループ(WG)の機能を活用して、各取り組みが実効性を持つように整理し統括する。これらの活動において、各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計を行う。また、本事業の取組をホームページを通じて、広く情報発信するとともに、活動内容のアーカイブ化を行う。SNSと連動させることで、県民との双方向型コミュニケーションを取り入れる。	学長室に設置した事業推進ワーキンググループ(WG)の機能強化を図ることで、学長のリーダーシップを補佐し、事業を適切に統括し、円滑に推進することができる。また、本事業の取組をホームページを通じて、広く情報発信することで、本事業の目的や意義を地域住民等へ周知し理解を得ることができる。あわせてデータベースを活用することで活動内容のアーカイブ化を行うことができる。	27年度の新規教員の採用に伴い、学長室ワーキンググループのメンバーを拡大した(13名体制)。年間スケジュールに応じて、隔週～1月のペースで随時、打合せを行った。ホームページについては、主要な取組について掲載し、情報発信を行った。	ワーキンググループによる方針をもとに、各学科、部署との調整を行った結果、円滑な事業推進を図ることができた。ホームページについては、タイムリーな情報発信までにはつながっておらず、今後SNSの導入、仕様変更等により、双方向型の情報発信を目指す。	B
	⑩	4月	事務補佐職員1名の追加採用	事務補佐職員1名を追加採用し、本事業において発生する事務作業の効率化を図る。特に大分市佐賀関地区、豊後大野市それぞれに学生地域活動拠点を新たに開設することから、学生拠点において発生する運営事務、現地における地域連携窓口の運営補佐を行う。	H27年度より本格運用する「大分チャレンジアワード」や正課地域活動、地域志向プロジェクト研究活動の拡大に伴い、学生地域活動拠点を開設、運用する。そのため、関係する事務作業が急増することから、事務補佐職員1名を追加採用することで、本事業において発生する事務作業の効率化を図ることができる。	4月1日に事務補佐職員1名を追加採用し、左記の事務にあたった。	27年度は事業の本格化により、事務作業が急進したが、事務補佐員の追加により、効率化を図ることができた。	A
	⑪	4月、1月	学生能力アセスメントテスト(nEQ、PROG)の実施、専門的課題解決力アセスメントの開発・試行	学生に対して「地域創生人材」の汎用的能力についてのアセスメントテスト(nEQ、PROG)を実施し、全国平均に対しての学生個人の豊かな心(nEQ)やジェネリックスキル(PROG)の強みと弱みの部分を把握する。あわせて、汎用的能力をベースにした専門的課題解決力を評価するアセスメントツールを開発、試行し、アセスメントツールの統合化に向けた検討を行う。	学生に対する「地域創生人材」の汎用的能力に関するアセスメントテスト(nEQ、PROG)結果から、本事業における地域志向の正課教育、正課外活動の状況と照らし合わせることで、正課教育、正課外活動の取り組みについて評価することができる。あわせて、本事業独自に開発する専門的課題解決力の評価ツールの検討につなぐことができ、H28年度以降の統合的なアセスメントツールの開発に資することができる。	「こころの力」を測る外部テスト(nEQアセスメント)を入学時(4月)及び2年終了時(1月)に、「リテラシー」及び「コンピテンシー」を測る外部テスト(PROG)を2年当初(4月)及び3年終了時(12月)に実施した。	・nEQ 2年終了時平均スコア「リーダーシップ」51、「社会的役割意識」53、「自然等に感動する心」46、PROG 3年終了時平均スコア「リテラシー」4.25、「コンピテンシー」3.37 ・専門的課題解決力を評価するアセスメントツールの開発は、3月23日に開催したFD/SD研修におけるディプロマポリシーのルーブリック化に留まったが、H28年度はこれをベースとして、各科目における専門的課題解決力を評価するルーブリックの開発、試行を行う。	B
	⑫	5月、10月	連携自治体との連携推進会議の開催	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を半期に1回開催し、本事業の円滑な推進、連携を図る。	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を開催し、情報共有、意思統一を図ることで、本事業の円滑な推進、連携を図ることができる。	第1回を6月26日に、第2回を11月27日に実施。	大分県、大分市、豊後大野市の関係部課長らが出席し、本事業に対して率直な意見交換ができた。外部出席者は第1回16名、第2回11名が出席した。また、第2回はオブザーバーとして金融機関関係者3行5名が出席した。	A
	⑬	9月、3月	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会を実施し、地域志向科目・活動の実施方法等について検討する。また、プログラムの一部は外部講師を招き、各地のCOC事業の取り組み状況を知る機会とする。	FD/SD研修会を実施することで、地域志向の理解を促進するとともに、これまでの事例や地域志向科目・活動の状況を知ること、それらの実施方法等について理解を深めることができる。	「ルーブリックによる学修評価とディプロマ・ポリシーの実質化」をテーマに3月23日に実施した。青山学院大学 杉谷 祐美子 教授が「今求められている学修評価に関する基礎知識」の基調講演を、その後、本学のディプロマポリシー(学位授与方針)をルーブリック化するワークショップを行った。	約80名の教職員が参加した。ルーブリックは定性的なパフォーマンスを評価する方法であり、地域活動を主体とするCOC事業においても有益な評価手法であり、その作成過程を体験できた。年2回実施する予定であったが、3月の1回開催に留まった。	B
	⑭	11月	大学COC事業合同フォーラムの開催(県内COC事業採択校である大分県立看護科学大学と合同開催)	大分県内のCOC事業採択校が合同でフォーラムを開催し、県民やステークホルダーに本事業の成果を発表、発信する。	大分県内のCOC事業採択校が連携フォーラムを開催することで、広く県民に地(知)の拠点事業の取り組み内容を知ってもらうことができる。また、お互いの事業内容を知ること、2大学連携プロジェクトなどへの展開など、一層の事業促進に繋がることが期待できる。	日本文理大学・大分県立看護科学大学 平成27年度 大学COC事業 成果発表会&合同シンポジウム～地域をまもり、地域をつくる、大学の取り組み～として、2月11日(木・祝)にホルトホール大分大会議室において合同シンポジウムを開催した。	両大学の取り組み説明、両大学の学生による活動報告(各2件)、パネルディスカッション「大分の未来をまもり、つくる人材育成の可能性」(コーディネーター:栗田 充治 亜細亜大学 学長、パネリスト5名)を行った。一般参加者210名、高校生43名、両大学学生29名、両大学教職員84名の合計366名が出席した。全体評価は「大変良かった」53%、「良かった」42%、「普通」5%と大変好評であった。	S
	⑮	2月	学修成果・地域志向研究成果発表会の対象地域での開催	事業重点地区(大分市佐賀関地区、豊後大野市)において、学生の学修成果発表、教員の地域志向研究成果を報告する報告会やワークショップを開催し、市民やステークホルダーに成果を還元する。	活動対象地域において学生と教員の取組成果報告会を開催することで、地域課題に対するステークホルダーなど、広く市民、ステークホルダー、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信でき、本事業の目的や意義の理解を得ることができる。あわせて学生の成長の場としても活用できる。	・豊後大野市での報告会を2月13日(土)に豊後大野市役所で実施し、学生の地域活動・研究活動報告7件、教員のプロジェクト研究報告3件を行った。 ・佐賀関地区での報告会を2月20日(土)に佐賀関市民センターで実施し、学生の地域活動・研究活動報告8件、教員のプロジェクト研究報告1件を行った。	・豊後大野市での報告会には、学外参加者27名、本学教職員27名、本学学生33名の合計87名が参加した。活動報告内容の全体的な評価:大変良かった53%、良かった44%、あまり良くなかった3%。 ・佐賀関での報告会には、学外参加者16名、学教職員25名、本学学生37名の合計78名が参加した。活動報告内容の全体的な評価:大変良かった32%、良かった68%。	A
	⑯	3月	事業検討・評価委員会の開催、年次成果報告書の発行	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、H27年度の事業成果を総括、評価するとともに、H28年度に向けた取組計画の妥当性について検討する。また、年次成果報告書を発行し、事業成果を広く公表・普及する。	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、H27年度の事業成果を総括、評価するとともに、H28年度に向けた取組計画の妥当性検討を通じて、H28年度の事業について見直し、改善を図ることができる。また、年次成果報告書を発行することで、事業成果を広く公表・普及することができる。	外部委員として、自治体委員3名(大分県、大分市、豊後大野市)、民間委員5名(日本政策投資銀行、大分県中小企業家同友会、日本財団学生ボランティアセンター、セブンイレブン記念財団、NPO)を任命し、3月28日(月)に事業検討・評価委員会を実施予定である。また、年次報告書を3月末に発行した。	委員会での意見を踏まえ、次年度への事業改善、カリキュラム改善につなげる予定である。	

※自己点検評価:S:特筆すべき進捗が見られる、A:順調に進んでいる、B:やや順調に進んでいる、C:やや遅れている、D:遅れている・未実施

平成28年度 日本文理大学 COC事業総括シート

	事業全体の概要	H28年度の実施計画
概要	<p>本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することである。つまり、教育では大分県内の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルによる教育体系を確立し、地域創生人材を輩出する。研究では、地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決につなげる。社会貢献では、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整えるとともに、行政と連携した「県民参画講座」を開講し、地域再生・活性化を推進する。学長のリーダーシップのもと、以上の取組を通じて、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地(知)の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。</p> <p>本年度の目的は、教育では学修サイクルの本格運用を目指し、教育カリキュラム体系の全学的な再編に向けた環境整備を実現する。また「大分チャレンジアワード」の本格運用を行う。研究では、地域志向研究プロジェクトの学内公募、研究を実施し、地域の課題解決に向けた研究成果を地域へ還元していく。社会貢献では、地域が持つ魅力等の公開講座・</p>	<p>I. 教育 大分市佐賀関地区周辺及び豊後大野市での活動を中心とした「体験交流活動」、「課題解決に必要な知識の修得」、「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」からなる学修サイクルの本格運用を目指す。そのために必要な地域志向科目の精査を行い、先行する学科での学修サイクルの本格運用、水平展開するための全学科での学修サイクルの本格運用の試行を行う。また、教育カリキュラム体系の全学的な再編に向けた環境整備を実現する。卒業研究、ゼミ活動等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を積極的に実施できる体制をとる。「大分チャレンジアワード」を本格運用し、前年度までの運用経験を活かし、学生個々人に対応した地域活動プログラムを確立する。</p> <p>II. 研究 地域志向プロジェクト研究の学内公募を行い、6月から本年度の研究を実施する。前年度採択課題については、フォローアップなどを必要に応じて実施し、地域の課題解決に向けた研究成果を地域へ還元していく。また、地域で活動しているNPOや企業の取り組みに着目し、その中で必要とされているニーズに対して、チームプロジェクトを編成し、地域の課題解決に向けた取り組みを実施する。本年度末には、これまでの地域志向プロジェクト研究の成果をまとめた学内紀要特集号を発刊し、その成果を学内外に公表する。</p> <p>III. 社会貢献 地域が持つ魅力や地域が持つ課題に対する公開講座・ワークショップ等を実施することで、地域との実践的協働活動の体制実現・確立を目指す。大学の「知」の地域への還元を行うため、履修証明制度を用いた学習機会を提供することを検討し、社会人等の地域創生への意識の向上を目指す。</p> <p>IV. 全体 以上の取組に対して、学長室に設置した事業推進ワーキンググループ(WG)の機能を強化・活用することで、各取り組みが実効性を持つように整理し統括する。学内の体制構築、地域志向の制度設計の浸透、学外のステークホルダーとの連携強化を通じて、地(知)の拠点改革、ガバナンス改革の基盤構築を実現する。特に今年度においては、各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査を行い、教育カリキュラム体系を整えることで、次年度以降の正課教育における学修サイクルの拡充を目指す。</p>

	計画	項目	内容	期待される成果	
教育	①	4～3月	正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクル体系の確立に向けたカリキュラム内容の再調整、試行と本格運用	正課教育における「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を積極的に実施し、学修サイクルの本格運用に向けた地域志向科目の体系化を行う。それをもとに、学修サイクルの本格運用に向けた科目間調整を実施、随時本格運用に移行し、ゼミ活動や卒業研究等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を充実させる。	正課教育における学修サイクルを本格運用することで、学生の地域志向性を高め、地域との連携体制を固めていくと同時に、ゼミ活動や卒業研究等での「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を充実させ、「地域創生人材」育成に向けた取り組みを強化することで、学生の豊かな心と専門的課題解決力を高めることができる。
	②	4～3月	<p>大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の運用</p> <p>(大分市佐賀関地区周辺での活動:①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生地域活動拠点の運営(2箇所、関地区および木佐上地区) ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実させる <ul style="list-style-type: none"> ・1次体験活動(農業漁業)、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動、NPOの経営支援の実施 ・学生と地域の意見交換の場である「さかのせきローカルデザイン会議」の定期的な実施 ・地域コミュニティの活性化活動(福祉活動、地域づくり活動、商店街活動)、地域支援ものづくりの実施 ・高齢者向け学生IT講習会の実施 ・総合型地域スポーツクラブの支援活動 ・前年度までの活動に加え、以下の活動を試行、実施する <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決型学修によるものづくり成果の還元活動 ・課題解決型学修による6次化活動にむけた本格調査の開始 <p>(豊後大野市での活動:①②共通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生ツーリズムのための学生地域活動拠点の運営 ・以下の前年度までの教育活動の内容を見直し、活動を改善、充実させる <ul style="list-style-type: none"> ・1次体験活動(農林業)、集落におけるコミュニティ維持活動 ・地域でのサービスマーケティング体験活動(観光・コミュニティビジネス・福祉支援等)、地域支援ものづくりの実施 ・課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動 ・前年度までの活動に加え、以下の活動を試行、実施する <ul style="list-style-type: none"> ・エコパーク等学生ガイドの育成に向けた取り組み ・課題解決型学修によるものづくり、コミュニティビジネス成果の還元活動 ・課題解決型学修による6次化活動にむけた本格調査の開始 	大分の地域をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の4つの分野すべての活動に取り組み、設定した基準をクリアした学生に対して大分チャレンジアワード修了者として認める制度をH27年度に引き続き運用する。	大分チャレンジアワードの導入により、学生個々人に対応した地域活動プログラムを確立することができる。

	計画	項目	内容	期待される成果	
研究	③	4～5月	地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択	地域課題の解決に向けて、本学の研究資源を活かした学内共同研究を充実させることで、その成果を地域に還元し、地域での取り組みを活発にするための地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択を行う。	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行うことで、全教員に地域課題の周知を図ることができると同時に、複数教員によるプロジェクト型研究を顕在化することができる。また、採択に至らなかった課題に関しては、フォローアップを行うことで、教員間による新たな地域志向プロジェクト研究立ち上げの可能性を探ることができる。
	④	6～3月	地域志向プロジェクト研究の実施	地域志向プロジェクト研究を実施し、地域の課題解決に向けた基礎研究の成果を地域に還元する。	地域志向プロジェクト研究の実施により、複数教員によるプロジェクト型研究を促進することができ、地域へ大学の知を還元することができる。
	⑤	3月	学内紀要の地域創生特集号発行	H27.28年度で実施した地域志向プロジェクト研究に関する紀要を発行する。	紀要として地域志向プロジェクト研究内容を公表し、学内外にその取り組みを普及することで、本格的な地域課題解決に向けた足掛かりとすることができる。

	計画	項目	内容	期待される成果	
社会 貢献	⑥	4～3月	地域創生リーダー制度のシステム(履修証明制度)の整備、試験運用	地域創生リーダーを育成するために、社会人等の多様なニーズに応じた学習機会を提供し、その内容について履修証明制度としてシステム化するための検討、試験運用を行う。	履修証明制度を用いた学習機会を提供することで、社会人等の地域創生に対する意識向上につながり、地(知)の拠点としての取り組み促進ができ、かつ、社会のニーズを学内教員が知る機会ともなるため正課教育に対しても良い影響を及ぼすことができる。
	⑦	6～2月	エコパーク等に関連した近隣住民の知識を深めるためのワークショップ講座開講	地域自然環境を活かしたエコパーク等を推進していくための自然保存の意識向上、対策のための近隣住民向けワークショップを実施する。	地域の自然を活かした観光資源であるエコパーク等の保全・活用にあたって、学内シーズを活用したワークショップを実施することで、近隣住民の自然保護活動・意識向上につながり、地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。
	⑧	8～12月	外来生物駆除等のための地域住民向け講習会の実施	地域自然環境を活かしたジオパーク、エコパーク等を推進していくための自然保存の意識向上、対策のための地域住民向け講習会を実施する。	地域の自然を活かしたジオパーク、エコパーク等の保全・活用にあたって、学内研究シーズを活用し、その成果を公開講座を通じて還元することで、地域住民の自然保護活動・意識向上につながり、地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。
	⑨	9～3月	地元企業の大分CSRプログラムの検討、実施(大分のニーズに合ったCSRの提案)	地元企業と大学が協働して、多様なステークホルダーと社会の間での共通価値の創造を含むこれからの「おおい」のためのCSRプログラムを検討し、地元企業と試行する。	企業の単独の視点でのCSRではなく、地(知)の拠点としての大学の「知」を活用することで、企業体として地域に即したCSRを実施することができ、大学としては地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。
	⑩	11～12月	未来志向型の県民対象公開講座「豊後大野里の旅観光」「大分学・大分案」の実施	未来志向型の県民対象公開講座「ぶんご大野里の旅観光」「大分学・大分案」を開催し、本取組における大学シーズを広く公表するとともに、地域住民等との意見交換を行う場とする。	未来志向型の県民対象公開講座「ぶんご大野里の旅観光」「大分学・大分案」を実施することで、大分の地域資源の再発見や未来への提言などを行うとともに、地域住民等との意見交換を通じて地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。
	⑪	4～3月	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座の実施	地域企業向け地域創生人材に関する講座やワークショップを開催し、本事業における大学シーズ及び人材育成像を広く公表・普及するとともに、地域企業等との意見交換を行う場とする。	実践を伴う地域企業向け地域創生人材講座を実施することで、本学の「知の資源」を地域の人材育成に還元することができ、また、地域企業との意見交換を通じて、事業改善につなげることで、地(知)の拠点としての取り組みを促進することができる。

	計画	項目	内容	期待される成果	
全体	⑫	4～3月	学長室(事業推進WG)による事業推進・統括・情報発信	学長のリーダーシップを補佐し、本事業を着実に推進・統括する学長室において、H26年度に設置した事業推進ワーキンググループ(WG)の機能を活用して、各取り組みが実効性を持つように整理し統括する。これらの活動において、各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計を行う。また、本事業の取組をホームページを通じて広く情報発信するとともに、活動内容のアーカイブ化を行う。H28年度はSNSを用意し、ホームページと連動させることで、県民との双方向型コミュニケーションを取り入れる。	学長室に設置した事業推進ワーキンググループ(WG)の機能強化を図ることで、学長のリーダーシップを補佐し、事業を適切に統括し、円滑に推進することができる。また、本事業の取組をホームページ、SNSを通じて、広く情報発信することで、本事業の目的や意義を地域住民等へ周知し理解を得ることができる。あわせてデータベースを活用することで活動内容のアーカイブ化を行うことができる。
	⑬	4月、2月	学生能力アセスメントテスト(nEQ、PROG)の実施、専門的課題解決力アセスメントの開発・試行	学生に対して「地域創生人材」としての汎用的能力についてのアセスメントテスト(nEQ、PROG)を実施し、全国平均に対しての学生個人の豊かな心(nEQ)やジェネリックスキル(PROG)の強みと弱みの部分を把握する。あわせて、汎用的能力をベースにした専門的課題解決力を評価するアセスメントツールを開発、試行し、アセスメントツールの統合化に向けた検討を行う。	学生に対する「地域創生人材」としての汎用的能力に関するアセスメントテスト(nEQ、PROG)結果から、本事業における地域志向の正課教育、正課外活動の状況と照らし合わせること、正課教育、正課外活動の取り組みについて評価することができる。あわせて、本事業独自に開発する専門的課題解決力の評価ツールの検討につなぐことができ、H29年度以降の統合的なアセスメントツールの開発に資することができる。
	⑭	5月、10月	連携自治体との連携推進会議の開催	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を半期に1回開催し、本事業の円滑な推進、連携を図る。	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を開催し、情報共有、意思統一を図ることで、本事業の円滑な推進、連携を図ることができる。
	⑮	3月	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会を実施し、地域志向科目・活動の実施方法等について検討する。また、プログラムの一部は外部講師を招き、各地のCOC事業の取り組み状況、学修評価法を知る機会とする。	FD/SD研修会を実施することで、教職員の地域志向の理解を促進するとともに、これまでの事例や地域志向科目・活動の状況を知ることで、それらの実施方法等について理解を深めることができる。
	⑯	9月	九州地区COC採択校「学生発表交流会」の実施	九州地区COC事業採択校の学生間の交流を促進し、それぞれの地域志向性を高めるため、合同学生取組活動発表会を実施する。	学生・教員の取組発表を通しての交流を行うことで、COC事業の共通認識や共通課題を明らかにすること、また当該大学の地域それぞれの志向性を高めることができる。さらに各校間の協力体制を築き、今後のCOC事業を発展的に推進していくことが期待できる。
	⑰	8～9月	本学の地域貢献度、地域ニーズを把握する県民アンケート中間調査の実施	本学のこれまでの大学COC事業に対する地域貢献度や地域ニーズ・課題を把握するための県民アンケート調査を実施し、現状を明らかにするとともに、H29年度以降の取り組みに向けた事業内容の精査に活用する。	県民アンケート調査を実施することで、事業中間時点における本学の地域貢献度や地域ニーズ・課題を把握することができる。現状を明らかにできるとともに、H29年度以降の取り組みに向けた事業内容の精査に活用することができる。
	⑱	8月	中間事業成果パンフレットの制作・公表	H28年度前半までの大学COC事業の取り組みをまとめた事業パンフレットを制作・公表し、広く県民、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信する。	中間事業成果パンフレットを制作・公表することで、広く県民、学内構成員にこれまでの本事業の取り組み成果状況を発信でき、本事業の目的や意義の理解を得ることができる。また、寄せられた意見を集約する事で、H29年度以降の取り組みに向けた事業内容の精査に活用することができる。
	⑲	2月	大学COC事業合同シンポジウムの開催(県内COC採択校である大分県立看護科学大学と合同開催)	前年度に引き続き、大分県立看護科学大学(H25年度COC採択校)と合同でフォーラムを開催し、県民やステークホルダーに本事業の成果を発表、発信する。	大分県内のCOC採択校が連携しフォーラムを開催することで、広く県民に地(知)の拠点事業の取り組み内容を知ってもらうことができる。また、お互いの事業内容を知ることで、2大学連携プロジェクトなどへの展開など、一層の事業促進に繋がるのが期待できる。
	⑳	2月	学修成果・地域志向プロジェクト研究成果発表会の対象地域での開催	事業重点地区(大分市佐賀関地区、豊後大野市)において、学生の学修成果発表、教員の地域志向研究成果を報告する発表会を開催し、市民やステークホルダーに成果を還元する。	活動対象地域において学生と教員の取組成果報告会を開催することで、地域課題に対するステークホルダーなど、広く市民、ステークホルダー、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信でき、本事業の目的や意義の理解を得ることができる。あわせて学生の成長の場としても活用できる。
	㉑	3月	外部評価委員会の開催、年次成果報告書の発行	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、H28年度の事業成果を総括、評価するとともに、H29年度に向けた取組計画の妥当性について検討する。また、年次成果報告書を発行し、事業成果を広く公表・普及する。	外部委員を含めた事業検討・評価委員会を開催し、H28年度の事業成果を総括、評価するとともに、H29年度に向けた取組計画の妥当性検討を通じて、H28年度の事業について見直し、改善を図ることができる。また、年次成果報告書を発行することで、事業成果を広く公表・普及することができる。

フォローアップ（選定時の申請書における達成目標の進捗状況）【速報版】

H28年3月22日現在

大学名：日本文理大学

事業名：豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地方創生人材の育成

【教育】

	H26現状(H26年度始め)	H26達成状況(H26年度末)	H27達成目標	H27達成状況(速報)	最終年度達成目標
地域志向科目数	26 科目	26 科目	100 科目	160 科目	200 科目
地域志向カリキュラムの再編成 (全学生が12単位以上を取得)	4 単位	4 単位	6 単位	12 単位	12 単位
副専攻制度	0 名	0 名	4 名	4 名	30 名
正課外活動「天分チャレンジアワードの導入」	3 名	14 名	30 名	17 名	100 名
地域志向科目を履修した学生の満足度	地域志向科目を設定	体験科目：平均3.9 知識修得科目：平均3.9 課題解決型学修科目：平均3.9 正課外学習活動：	体験科目：平均3.9以上 知識修得科目：平均3.9以上 課題解決型学修科目：平均3.9以上 正課外学習活動：	体験科目：平均 知識修得科目：平均 課題解決型学修科目：平均 正課外学習活動：	体験科目：平均4.0以上 知識修得科目：平均3.5以上 課題解決型学修科目：平均4.2以上 正課外学習活動：平均4.2以上
ジェネリックスキルの育成	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」 51 「社会的役割意識」 53 「自然等に感動する心」 44 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」 3.42 「コンピテンシー」 3.48	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」 50 「社会的役割意識」 52 「自然等に感動する心」 44 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」 3.52 「コンピテンシー」 3.50	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」 51 「社会的役割意識」 53 「自然等に感動する心」 45 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」 3.60 「コンピテンシー」 3.60	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」 51 「社会的役割意識」 53 「自然等に感動する心」 46 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」 4.25 「コンピテンシー」 3.37	nEQ 2年終了時平均スコア 「リーダーシップ」 52 「社会的役割意識」 54 「自然等に感動する心」 50 PROG 3年終了時平均スコア 「リテラシー」 4.00 「コンピテンシー」 4.00
県内就職率	31.35 %	31.32 %	32 %	30.0 %	35 %

【研究】

	H26現状(H26年度始め)	H26達成状況(H26年度末)	H27達成目標	H27達成状況(暫定)	最終年度達成目標
地域との共同研究を行う教員数	8 名	8 名	12 名	14 名	20 名

【社会貢献】

	H26現状(H26年度始め)	H26達成状況(H26年度末)	H27達成目標	H27達成状況(暫定)	最終年度達成目標
地域向けボランティアの活動数	675 名	723 名	750 名	名	800 名
地域向け公開講座数	3 講座	3 講座	5 講座	11 講座	7 講座
県民の本学に対する本事業分野の地域貢献度の評価	(推定値) 20 %	27 %	- %	- %	40 %

「地域志向科目」について

大学 COC 事業では、「地域での体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルにより、学生が地域に愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的課題解決力（知識をただ持っているだけでなく、知識を活用し、組み合わせ、また様々なステークホルダーや他の学生と協働し、地域社会に役立つ解決策を導き、実践することで身につけた専門力を定着させる）を習得させることを目指しています。これらの学修活動を通じて、県内のみならず、社会で主体的に活躍できる人材を育成することが目的です。

上記の学修サイクルに関わる科目を「地域志向科目」と定義し、平成 27 年度シラバスより、該当するカテゴリーを明示しています。

1. カテゴリーⅠ「地域での体験交流活動を教育内容に含む科目」

☐ 大分県内の地域（学外）へ学生が出向き活動する内容がある

☐ 大分県内に所在する企業・団体等を訪問し、外部の人との交流（講話や意見交換を含む）がある

☐ 大分県内の企業・自治体・団体・住民の方を対象とした学生発表がある

（大分県内に関する調査・研究内容を含む場合は「カテゴリーⅠ」）

- …（例）農林業体験や高齢化が深刻な地域コミュニティに入っの住民との交流の中で、地域のことを肌で感じ、自分たちの地域での役割を認識し、学修への意欲と主体性、ジェネリックスキル、人間力を高める

2. カテゴリーⅡ「地域における課題解決に必要な知識を修得する科目」

☐ 大分県内に関する歴史・文化・産業・社会・地域問題など大分に関する具体的な知識の教授を行う内容（全国や県外と大分との対比を含む）がある

☐ 大分県内に関わるものをケーススタディとして扱う講義・演習がある

☐ 大分県内の企業・自治体・団体・住民の方の講話（ゲストスピーカー）がある

（非常勤講師が学問的なことのみを教授するケースは除く）

☐ 大分県内に関する調査・研究内容についての学生発表がある

☐ カテゴリーⅢ「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目」において必要となる知識・技能を教授する内容がある（授業計画の学修内容に明示することが必要）

- …（例）単に知識を獲得するだけでなく、獲得した知識を地域の題材や課題に結合する、もしくは地域の題材や課題をもとに理論的な知識を構築するための能動的な学修（書く、話す、議論する、分析する、発表するなど）を通じて、知識の活用法や思考・判断力を深く認知化させる

3. カテゴリーⅢ「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目」

☐ 大分県内の課題を解決する調査・研究内容を明示的に扱っている（ゼミ・卒研含む）

☐ 調査・研究内容を大分県内の企業・自治体・団体・住民の方を対象として学生発表している

- …（例）地域での実践活動により獲得した知識を活用してリアルな課題を発見、整理し、解決策を立案し、実践する

平成27年度 地域志向科目 一覧表

構築する地域志向学修サイクル (H30年度目標：200科目以上)

カテゴリー I：地域での体験交流活動を教育内容に含み科目	25 科目
カテゴリー II：地域における課題解決に必要な知識を修得する科目	100 科目
カテゴリー III：ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目	35 科目
合計	160 科目

地域志向のゼミ活動 (H30年度目標：各学部ゼミ数の半数以上)

	地域志向ゼミ数	全体ゼミ数	割合
【工学部】 卒業研究	10 研究室	36 研究室	27.8%
【経営経済学部】 ゼミナール	12 ゼミ	19 ゼミ	63.2%
合計	22 研究室・ゼミ	55 研究室・ゼミ	40.0%

学年	1		2		3		4	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
教養基礎科目								
	【必】大分学・大分県 【必】人間力概論 【必】社会参画入門 提携講座 (ボランティア概論)	【必】社会参画実習1 現代社会要論 森里海連環学と地球的課題	【必】社会参画応用【キャリア型】 社会参画応用【企業課題型】 【必】産学一致の勧め	【必】社会参画実習2【キャリア型】 社会参画実習2【企業課題型】				
工学部 機械電気工学科								
		ロボットプロジェクト入門2	ロボットプロジェクト基礎1	ロボットプロジェクト基礎2	半導体工学 技術者倫理			
工学部 建築学科								
	プロジェクト1 プロジェクト実習 フィールドワーク インターンシップ		プロジェクト2 提携講座 (グローバルコミュニティ演習) CAD1 流域生態論 設計製図1 データ解析演習	環境計画論 設計製図2	【必】地域再生論 【必】技術者倫理 環境・地域創造演習 設計製図3 建築法規2 CAD2 研究ゼミナールA (2) 研究ゼミナールA (6)	設計製図4 設計製図4【インテリアデザインクラス】 建設マネジメント演習及び実習 研究ゼミナールB (3) 研究ゼミナールB (4)	設計製図5	【必】卒業研究 (5) 【必】卒業研究 (3)
工学部 航空宇宙工学科								
		ロボットプロジェクト入門2	【必】熱力学 ロボットプロジェクト基礎1 航空工学演習2	ロボットプロジェクト基礎2				卒業研究 (1)
工学部 情報メディア学科								
	情報技術と職業-入門	【必】IT基礎 ロボットプロジェクト入門2	情報技術と職業-演習 ロボットプロジェクト基礎1 インターネット基礎 データ解析及び演習	ロボットプロジェクト基礎2 インターネット応用	インターネット3 データベース3 研究ゼミナールA (1)	インターネット4 研究ゼミナールB (1)	情報特別演習7 卒業研究 (1)	情報特別演習8
経営経済学部 経営経済学科								
	【必】経営学入門 【必】簿記入門 フィールドワーク サービスマーケティング1A	【必】社会福祉入門 【必】経済学入門 心理学	スポーツリテラシーIII ボランティア実習 特殊講義 (スポーツイベント実践) 財務諸表論 社会福祉原論A 原価計算論A 発達心理学 相談援助の基盤と専門職A 児童福祉論 社会保障論A ゼミナールIIA (1) ゼミナールIIA (6) ゼミナールIIA (5)	地域とスポーツ 社会福祉原論B 原価計算論B カウンセリング 相談援助の基盤と専門職B 社会保障論B ゼミナールIIB (1) ゼミナールIIB (4) ゼミナールIIB (5)	スポーツリテラシーVI (スポーツビジネス実践) 地域福祉論 監査論A 精神保健学 データ解析A 憲法A スポーツ法学	管理会計論B 監査論B コミュニティワーク論 NPO・NGO論 福祉経営論 権利擁護と成年後見 憲法B		ゼミナールIV (1) ゼミナールIV (1) ゼミナールIV (4)

※備考

研究ゼミナールA、研究ゼミナールB、卒業研究、ゼミナールIIA、ゼミナールIIB、ゼミナールIII、ゼミナールIV の () 内の数字は、地域志向科目としての登録クラス数。

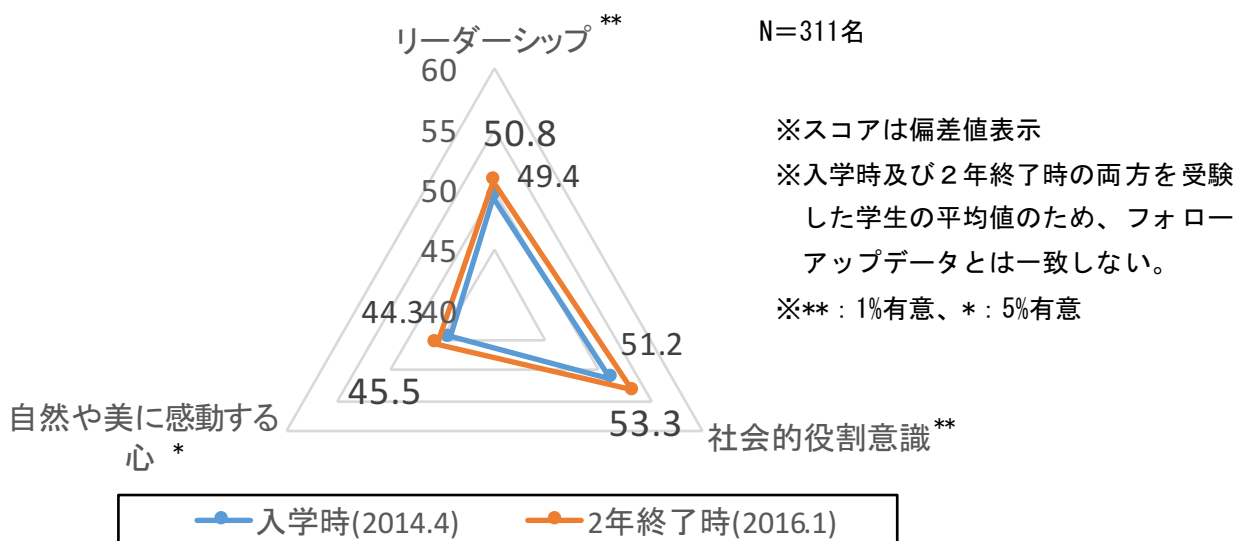
【教育における数値目標】ジェネリックスキルの育成

本事業では、地域創生人として育成する学部によらず共通した能力として、地域で活躍するための「こころの力」と汎用的技能を挙げており、具体的には「リーダーシップ」「社会的役割意識」「自然や美に感動する心」「リテラシー（知識を活用し問題解決する力）」及び「コンピテンシー（経験から学ぶ力）」などとしている。

本事業における「地域志向科目」による教育プログラムを通じて、これらの能力の成長を適切に評価するため、「こころの力」を測る外部テスト（nEQアセスメント）を入学時及び2年終了時に、「リテラシー」及び「コンピテンシー」を測る外部テスト（PROG）を2年当初及び3年終了時に実施している。

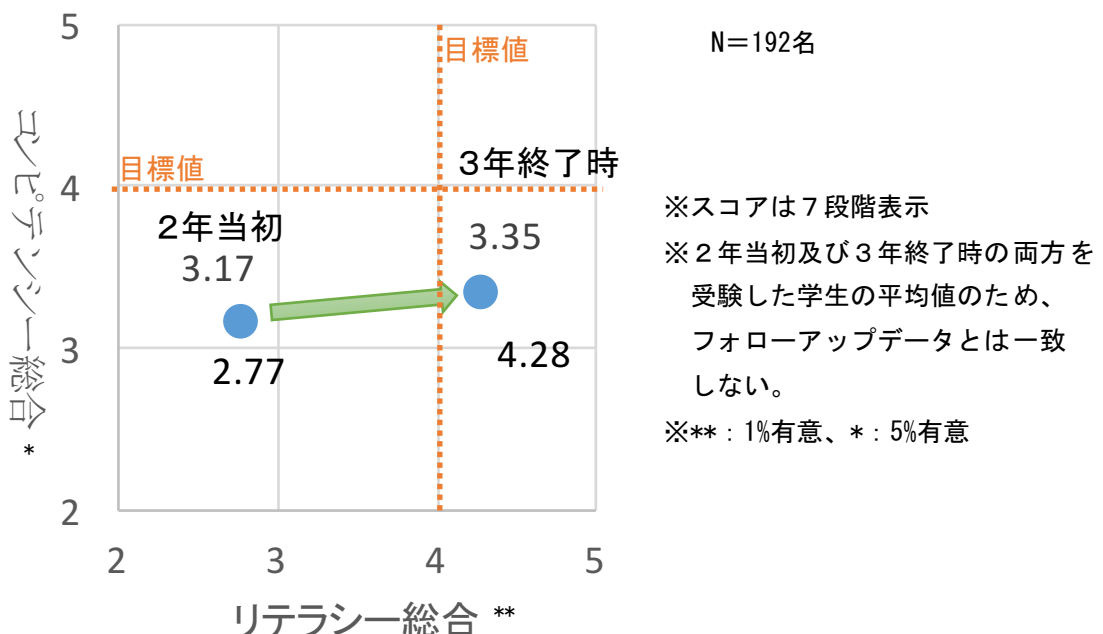
＜こころの力の成長＞

現2年生（平成26年入学生）の入学時及び2年終了時の結果を下図に示す。
いずれも統計的に有意な差が認められた。



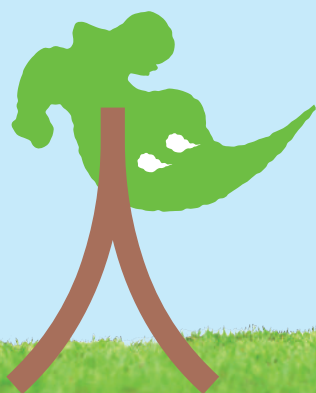
＜リテラシー及びコンピテンシーの成長＞

現3年生（平成25年入学生）の2年当初及び3年終了時の結果を下図に示す。
いずれも統計的に有意な差が認められた。



おおいた、つくりひと

2. 大学COC事業 プロジェクトシート



2015年度 COC事業 プロジェクトシート

体感。感動。感謝。

おおいた、つくりびと

豊かな自然と歴史や文化を大切に守り続ける、素晴らしい大分県が、私たちのキャンパスです。

プロジェクト

1

「小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化」

1. 豊後大野市大野町土師地区における住民と学生による地域コミュニティ維持活動
2. 木佐上地区 IT 講習会
3. 韓国料理教室による佐賀県住民との交流会



プロジェクト

2

「人口減少社会を支えるための先進的な”ものづくり”」

4. 『地域にいきるものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践
5. 地域創生を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する基礎研究
6. 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発
7. 要介護者のコミュニケーション支援システムの開発
8. プライバシー問題を生じない見守りシステム実現に向けた電磁波レーダの利活用



プロジェクト

3

「自然の積極的な活用による保全と地域活性化」

9. 豊後大野市の地域資源を活かしたサービスラーニング科目への展開
10. 豊後大野市ジオパーク・エコパーク・生物多様性戦略に関する市民・学生の普及活動
11. 大野町土師地区における防災と生物多様性回復のための基礎的研究
12. 地域創生・豊後大野まるごとインターネット・エリアピアビジネス
13. 佐賀県半島・触れる観光プロジェクト
14. アクアソーシャルフェス in 大分に参加して



プロジェクト

4

「商店街の活性化による地域振興」

15. フィールドスタディーを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラム
16. けんしん大学 まち・ひと・しごと「地方創生」に挑む
17. 地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座



プロジェクト

5

「健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持化」

18. 小学生を対象とした夏休み体験型自由研究教室
19. 地域づくり支援～市民交流の場・楽しく広場「ひょうたん」の活動サポートを通して～
20. 佐賀県地区での市内小学生とその保護者を対象とした地域交流教室
21. 朝地小学校における継続的な予防的心理教育プログラムの実践
22. 大分市大在地区における総合型地域スポーツクラブのイベントを通じた教育実践活動
23. 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究



プロジェクト

6

「NPO 法人の活動・経営支援」

24. 地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取り組み報告



プロジェクト

7

「地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）」

25. 道の駅原尻の滝インターンシップ
26. 6次化産業の取組



プロジェクト

L

「おおいた、つくりびと」育成のための地域志向科目・正課外活動」

27. 教養基礎教育における地域志向科目の全学必修化
28. 身近な政策課題を題材とした課題解決型学修
29. 地方創生のための“おおいた”企業求人動画制作
30. 大分チャレンジアワード（青少年体験活動奨励制度）の取り組み
31. 小学生のお仕事発見ランド in NBU 県央空港キャンパス



豊後大野市大野町土師地区における 住民と学生による地域コミュニティ維持活動



実施体制：池畑 義人、杉浦 嘉雄、園田 一則、吉村 充功（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市大野町土師地区

連携機関：土師振興協議会、NPO法人ABC野外教育センター

概要 大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。そこで、建築学科では地域の課題を技術者の視点で解決できる人材を育成する「環境・地域創生コース」を設置している。本コースでは、人口200人弱、高齢化率約67%の小規模集落である豊後大野市大野町土師地区をフィールドとして、コミュニティの維持策を探り、実践する取組を、地区の協力を得て、正規のカリキュラムとして取り組んでいる。本コースでは『体験交流活動による動機付け』→『知識の修得・定着』→『課題解決型学修』という学修サイクルを明確化した科目群を導入している。このサイクルにより、学生は地域でのやりがいを感じるとともに、自分に不足する知識・技能を自覚し、その後の学びを深化できる。上位学年では実際に地域の課題解決に取り組むことで、将来、地域で活躍するために必要な幅広い能力の定着を図ることを目指している。

取組内容 1年次は通年科目『プロジェクト1』において、地域の営みを知るため、季節に応じた農林業体験を5/30、8/4～5(合宿)、10/10の3回、体験交流活動として実施した。体験交流活動を通じて地域に対する興味関心が高まった学生は、学年を越えて地域での活動に正課外活動としても参加している。今年度は地域の交流拠点施設「ふるさと体験村」にある河川プールの土砂出し・ペンキ塗装を7/4、5に実施した。また、7/19の「開村式」には運営スタッフとして地区住民と受付や鮎のつかみ取り・もちつきなどのイベント運営を行い、河川プールに水を引く水路に木製の水車を設置した。3年次は課題解決型学修として、2つの取組を行っている。1つは『環境・地域創造演習』における2泊3日の合宿形式の授業である（8/27～29）。「古民家の魅力発見」「空き家対策」「文化・行事の継承」「地域の生活維持策」のいずれかをチームで選択し、地区住民へのインタビュー、フィールドワークを行い、専門分野の視点等から解決すべき地域課題を整理し、今後の方向性や具体策について地区住民への成果発表・提案会を実施した。もう1つは『建設マネジメント演習及び実習』における体験村ケビン（3棟）前のウッドデッキ施工である。11/29の下見、デザイン案の提案、学内での図面製作等を経て、1/9に施工した。その他にも土師地区を対象とした「卒業研究」に複数の学生が取り組んでいる。

地域での成果 上記に記載した体験村での各種施設の改修、充実を実現した。また、学生との様々な協働活動は地区住民に活力をもたらしており、体験村の振興協議会での自主運営への一助にもなっている。さらには、学生達の訪問を心待ちにしている地区住民の生きがいにもつながっている。

学生の学び 課題解決型学修では専門知識・技能の活用を通じた専門力の深化が見られる。低学年の各活動では地域住民との交流や学生同士がチームで活動するため、チームワークやコミュニケーションの重要性の理解、向上が見られる。各活動の前には学生が個々の目標を設定し、教員の事前面談、事後の振り返りを徹底しており、学修効果が高まっている。学生からは「頼りにしてくれて、もっと地域のために役立ちたい」「成長を実感できた」等の意見が出されている。

今後の展開 夏期休業期を活かした地域インターンシップへの展開、ゼミによる課題解決策の実践を検討している。また、この取組方式を他学科に波及させるため、学内他プロジェクトとの交流や連携・融合を推進する必要があると、協議を進めている。

環境・地域創生コースの科目群

科目名	開講学年	属性		
大分学・大分案	1年	教養基礎	必修	体験交流活動
森里海連環学	1年	教養基礎	選択	
プロジェクト1	1年	専門	選択	
正課外活動	-	-	-	知識の修得
データ解析演習	2年	専門	選択	
流域生態論	2年	専門	選択	
環境計画論	2年	専門	選択	
地域再生論	3年	専門	必修	課題解決型学修
環境・地域創造演習	3年	専門	選択	
建設マネジメント演習	3年	専門	選択	
研究ゼミナールA/B	3年	専門	選択	
卒業研究	4年	専門	必修	



プロジェクト1における農業体験活動



建設マネジメント演習及び実習におけるウッドデッキ施工



環境・地域創造演習での地区発表会

木佐上地区IT講習会



実施体制：福島学（情報メディア学科）、市田 秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分市木佐上地区

連携機関：木佐上連合区、木佐上コミュニティー

概要 高齢化社会の中で安全・安心なくらしや、コミュニティの維持など、様々な生活の場面において情報端末の役割が注目されている。スマートフォンやタブレット端末などに搭載されている『情報バリアフリー』と呼ばれる『文字通信』や『音声読み上げ』などについては、使ってみないと分からない機能が多く、普段の生活ではなかなか使われていない。そこで、その使い方を知っていただき、安全・安心なくらしに役立つ便利な情報端末としての理解を深めていただく内容を、大分市木佐上地区にて高齢者向けのIT講習会「タブレット端末をためしてみよう！」として計画した。ICTを活用する時に使われる「タブレット」はスマートフォンに比べて「画面が大きい」という特徴を持っている。しかし「いざ触ってみよう」としたとき「どうやればいいの？」や「そもそも本当に便利なの？」と思う方も少なくない。そこで、地域活動を経験した学生が主体となり、出てきたアイデアを盛り込んだ「IT講習会」を開催した。



取組内容 「タブレット端末をためしてみよう！」と題して、次の4項目を約2時間の講習会を構築した。実機を使い「実体験」することで便利さや使うコツを学ぶ。

1) とにかく触れてみる！

実機を手にとってみる、または手元にあるけど最近電源も入れていないタブレットで、困った時にとにかく「何を押せばもとに戻るか」を学ぶ。これで安心して気軽にタブレットに触れられるようになる。

2) ルーペとメモ帳の代わり！

新聞や広告で「気になるけど文字が小さくて。。。」をタブレットのカメラ機能で解決できることを体験する。また「写真」や「音声」で「メモ」ができることを体験する。

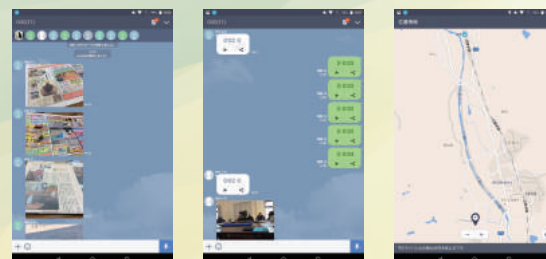
3) 知り合いに伝える！

LINE（今回は予め設定）で、2) ので作成したメモ（写真、音声、場所）を手軽に連絡できることを体験する。

地域での成果 10名程度の募集に対して20名程度の方々が参加され、地域住民の関心の高いことが分かった。その中には、持っているけど最近使っていないタブレットを持参くださった方もいた。約2時間の講習会に参加してくださった地域住民に、楽しく「タブレットの魅力」に触れていただき、次回の開催への要望の声もいただいた。

学生の学び 決められた時間内で「完結」した講習会を考える過程で「タブレットの本質」に向き合うことが出来た。普段何気なく使っている便利な情報端末だが「何が便利なのか？」「どう便利なのか？」「便利さを実感するには何を体験すればいいか？」を考えることで、「知っているはずの事」が「再発見／新発見」につながった。

今後の展開 アンケートに「いろいろな事を学びたい」「継続的に開催して欲しい」との意見をいただき、内容を検討しながら、今後も継続的な開催を計画していく。今回の講習会において、地域住民との意見交換を通して、「新しいアイデア」の発見につながる場面もあり、今後の展開を検討していく。



『おait、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おait、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない『ほんとうの豊かさ』とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分ですしかできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おait、つくりびと』になりたい。

韓国料理教室における佐賀関住民との交流会



実施体制：泉 丙完、金 恩聲（経営経済学科）、間 結夏（機械電気工学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：大分市佐賀関支所、NPO法人さかのせき・彩彩カフェ

概要 韓国人留学生、日本人学生らが、韓国料理教室による佐賀関地域住民との交流会を行った。韓国人留学生らにとって、日頃は馴染みの薄い佐賀関地区において、日本人学生や地域住民らと一緒に料理を作ることにより、お互いの交流を促進し、佐賀関地域について知る機会にもなった。また、この交流会がきっかけとなって、その後に地域の住民との個人的な交流も芽生え、他地域での料理教室や、韓国語教室、韓国旅行を自主的に行ったりする交流活動に発展していった。



佐賀関住民との韓国料理教室

取組内容

<背景とねらい>

日本文理大学には、多くの韓国人留学生がいるが、日本人学生や佐賀関地域住民との交流がほとんどなかった。そこで、3者が一緒になって韓国料理を作るという共同作業を通して、以下のような交流を図った。

○日本人学生や佐賀関地域住民に、韓国料理や文化に もっと興味を持ってもらう。

○韓国人留学生に、佐賀関地域をもっと知ってもらう。

<活動内容>

準備期間中は、韓国人学生と日本人学生らが一緒になってリハーサル等を通して、お互いにコミュニケーションを図っていった。佐賀関公民館で行った韓国料理教室には、韓国人留学生、日本人学生及び佐賀関住民ら計34名が参加し、韓国の家庭料理を作って食べた後、漁港等の佐賀関地域と一緒に見て回った。



交流会の背景とねらい



韓国人留学生と日本人学生

地域での成果

交流会を通して、佐賀関地域住民に韓国料理や韓国の文化を知ってもらうことができた。また、韓国人学生らと地域住民らとの個人的なつながりもでき、留学生らによる韓国語教室、日中韓料理教室等の交流活動が行われるようになった。



佐賀関漁港での様子

学生の学び

学生らが自主的に行った韓国料理教室において、参加した学生の多くは、準備期間及び当日、さらに、その後の活動を通して、異なる世代や文化、さまざまな環境で生活する人々と交流することで、コミュニケーション能力が向上したとともに、地域創世活動に対する理解を深めることができた。また、韓国人留学生は日本語でのコミュニケーション能力も向上させることができた。

今後の展開

この韓国料理教室は、学生らが地域創生にどのような貢献ができるかを考えるきっかけとなった。今後はさらに、日本人学生、韓国人留学生だけでなく、他の国の留学生らも参加した地域活動を継続的に行っていく予定である。



留学生による韓国語教室

『地域にいきるものづくり』を目指したプロジェクト科目の実践



実施体制：川崎 敏之、稲川 直裕、筑紫 彰太（機械電気工学科）
河邊 博康、岡崎 覚万（航空宇宙工学科）
福島 学（情報メディア学科）、市田 秀樹（COC事業担当）
実施フィールド：大分市 木佐上地区
連携機関：木佐上連合区、木佐上コミュニティー

概要 日本の現状を取り巻く社会において、働き方の変化や人口減少に伴う少子高齢化など、さまざまな社会問題が取り上げられている。これらの問題に向き合いながら、将来の社会が持続的に豊かになっていくためには、それを支えるための「ものづくり」が必要となる。特に、高齢化にともなう医療福祉問題、労働人口の減少による産業構造の変化や生産の効率化など「もの」が果たす役割は大きい。そこで、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、自由な発想をもって創造的に問題解決に取り組める人材を育成するための教育プログラム作りを目指す。

本プロジェクトでは、「地域にいきるものづくり」をテーマとして、学生自らが地域（大分市木佐上地区）に出て、その現状を自分たちの目で見、肌で感じ、そこからさまざまな社会問題と関連する課題を発見する事からはじめる。その後、課題解決に必要なだと考える「もの」について、自由な発想をもって考え、それをカタチにすること（プロトタイピング）を実践していく。このプロセスを通して、「ものづくり」と社会との接続について考えることで、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指す。

取組内容

専門基礎科目『ロボットプロジェクト入門2』（1年生後期科目 工学部 機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科）では、授業前半を地域活動を含む形での「課題抽出 / 発見」→「問題定義 / 課題設定」のプロセスに設定している。「課題抽出 / 発見」のプロセスにおいて、少子高齢化の地域課題に直面している大分市木佐上地区の中で活動することで、多様な地域社会の課題について学生自らが触れる機会をつくる。さらに授業後半では、その中で抽出された課題に対する解決手法の検討においては、創造性を大切にしながら、アイデアをカタチにするプロトタイピングを行う。プロトタイピングでは、3学科それぞれの分野の学生の特徴が融合されるようにプログラムの設計を行った。全体のプログラムを通じて、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指した。

地域での成果

最終報告会を旧木佐上小学校体育館にて行い（学外参加者：24名）、全12チームが、自ら考えたアイデアについて報告を行った。鳥獣害対策や高齢者向けの情報端末、安全・安心のためのデバイス、郵便システムの改善案など多岐にわたるアイデアが出た。地域住民からは、若者が地域課題に取り組む事への期待、活動の継続性への期待など、今後の展開に期待する声が多かった。

学生の学び

「細かく計画し、変更があれば確認しながら作業を進めること」「各自の作業の進捗状況など、情報を共有すること」など、プロジェクトを進めるにあたっての必要な力への気づきや、「実際に木佐上地区に行ったことで、現地では分からない気づきがあったこと」など、「ものづくり」において最も必要なユーザー目線の獲得など想定以上の学びがあった。

今後の展開

次年度以降も実施していく。特に、上位学年での展開も視野に入れることで、「ロボットプロジェクト」全体として地域と連携しながら、「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指していく。



H27年度のロボットプロジェクト入門2の授業パターン

01

地域を感じる

地域を訪れ、その状況を感じることで、地域の魅力や、問題点について自ら考えてみる。



02

地域の声を聞く

地域の住人の方に、地域の文化・伝統・歴史や、現在の状況について話を聞く事で、地域への理解を深める。



03

地域を知る

地域の状況を観察することで、新たな発見や疑問点を見つけることで、地域の特徴と地域特有の課題を考える。



将来の社会を支えるための「ものづくり」について考える力を養うことを目指す。

04

問題定義・課題設定

「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、様々な社会問題と関連する課題を発見する。



05

プロトタイピング

課題解決のための「もの」について自由な発想をもって創造し、そのアイデアをカタチにする。



旧木佐上小学校体育館にて最終報告会を実施。全12チームが、自ら考えたアイデアを形にして報告を行った。



地域創生を目的とした自然エネルギー 利用型プラズマ農業に関する基礎研究



実施体制：川崎 敏之（機械電気工学科）、池畑 義人（建築学科）、
坂井 美穂（情報メディア学科）、小幡 章（航空宇宙工学科）

実施フィールド：日本文理大学

概要 大分県は豊かな自然と大地のおかげで農業が盛んに行われている。しかしながら、図1(a)、(b)に示すように、農家数は減少傾向にあると同時に、40歳未満の若者が特に少ないのが現状で、高齢化、後継ぎ不足という状況が加速傾向にあり、大分県ではこのような状況を改善することが課題となっている。

近年、農業への新しいアプローチとしてプラズマ技術が注目されている（プラズマ農業）。プラズマ農業は比較的新しい研究分野であるため、解決すべき課題が多く残されているのが現状で、まだ実用化はされていない。よって、このプラズマ農業により農業が活性化されることは、非常に有効であると考えられる。

本研究ではプラズマ農業によって大分県農業が抱える課題を解決することを主な目的とする。また、これまで、農業に関係のなかった企業においては、農業分野への参入も期待される。教員と学生による研究活動から始まり、地域貢献へとつなげたい。まだ始まったばかりではあるが、異分野融合型科学技術による地域課題解決と学生教育を行うプロジェクトとして活動する。

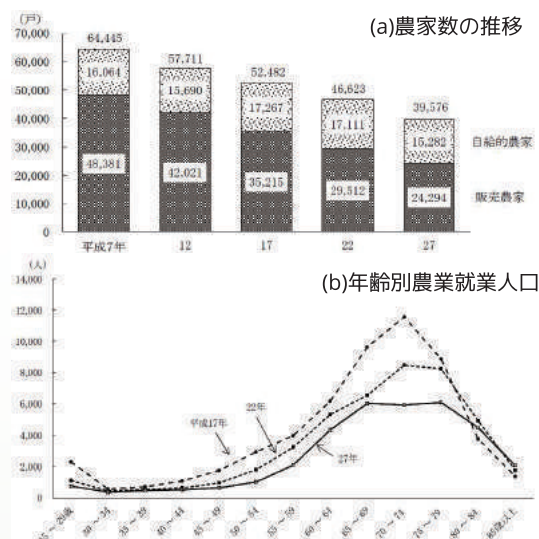


図1 大分県農業の現状

(2015年農林業センサス、大分県企画振興部統計調査課資料
(平成27年11月27日公表)より抜粋)

取組内容 近年、人体にも照射可能なプラズマ源が注目を集めている。本研究は図2に示すように、そのようなプラズマを植物の種子に照射して生長を促進させようとするものである。プラズマ照射によって植物（写真はかいわれ）の生長が大きく促進されている様子がわかる。この場合、プラズマをどのように照射するかがキーポイントで、その条件を見出すための実験を行っている。現在は学生らと実験データを蓄積し始めた段階で、まだ地域課題解決に貢献するまでは進んではいない。また、この分野は電気、流体、生物など幅広い専門知識を必要とするため、本工学部全体での活動をより活性化させていく予定である。



図2 種子へのプラズマ照射と生長への効果

学生の学び 学生はチームで研究活動を行っていく中で、実験計画、実施、データ整理と解析、学外発表（図3）を行い、専門知識だけでなくジェネリックスキルなどを含めた将来必要となる力を身につけることができている。また、学外発表など成果をアウトプットすることで、研究成果に対する達成感や満足感を得ることができ、それが研究活動をさらにすすめていく上での向上心につながっている。



図3 学生による学会発表の様子

今後の展開 本プロジェクトにおいて最も重要である地域との連携ネットワークがまだ構築されていないため、今後は、地域との連携を常に意識しながら、学生らとともにじっくりとデータを蓄積していく。



おおいた、つくりびと

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない『ほんとうの豊かさ』とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分でもできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おおいた、つくりびと』になりたい。

徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発



実施体制：鈴木 秀男、吉森 聖貴、福島 学（情報メディア学科）、稲川 直裕（機械電気工学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市、養護老人ホーム常楽荘

概要 高齢化社会に伴い、認知症などによる高齢者の徘徊が社会問題となっている。本研究では、徘徊高齢者の捜索に役立つ、位置検出システムを構築することを目的としている。このシステムでは、徘徊高齢者の位置を検出するために、防犯カメラ等のカメラ映像を使用する。本年度の研究では、カメラ映像を使つての画像認識ソフトウェアの開発を行った。画像認識には、顔認識と歩行認識の組み合わせを利用することとした。

高齢者の経路をビッグデータとして解析することで、高齢者が住みやすい街づくりを実現するだけでなく、位置検出システムを活用して、子供たちの見守り情報など、安全・安心な街づくりへの貢献も目指している。

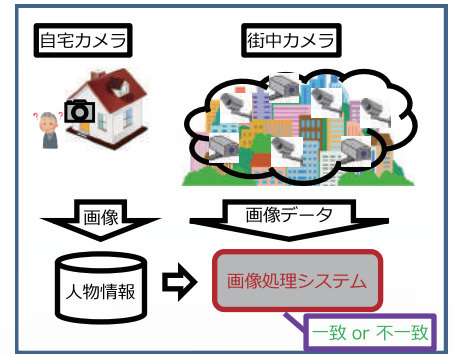
取組内容 本研究では、徘徊高齢者の位置検出を実現するために、ノン・ウェアラブル方式を採用した。ノン・ウェアラブル方式の位置検出とは、徘徊高齢者が特別な機器を身に付ける必要がない方式のことであり、徘徊対象の高齢者の立場からは、身に付けるものを強要（強制）しないため、まったく制約がないことになる。このようなノン・ウェアラブルな位置検出として、街中に設置してある防犯や監視用のカメラ映像を入手し、画像を解析する技術が必要になる。

本研究では、人物の顔による認証と、人物の歩行に関する認証を利用する。さらに、両者を組み合わせることで、認証の信頼性を向上させる。

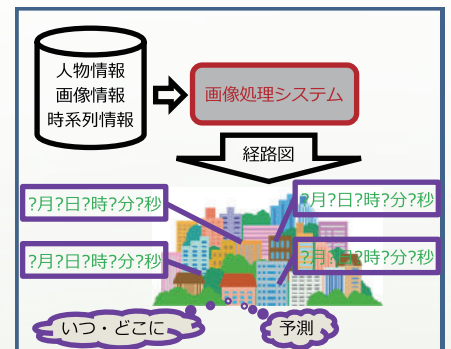
顔認証は、撮影された動画から人物と顔の画像を複数枚抽出し、人物毎に複数枚の画像を取り出す。このとき、取り出した複数枚の画像を人物毎にまとめたものを未知画像群と呼ぶ。次に、あらかじめ用意してある複数人物のテンプレート画像群と未知画像群の中の未知画像を比較する。その結果、マッチングが成功すれば、人物を特定することができる。このための処理ソフトウェアの開発が本研究の主たる目的である。

地域での成果 顔認証については、室内での実験段階の認識率と屋外での実際の映像を用いた認識率がほぼ同等となったことで、採用したアルゴリズムの正当性は検証できたと考えている。歩行認証については、歩行パターンから解析に必要なバックデータを収集する方法に目途が立ったところである。

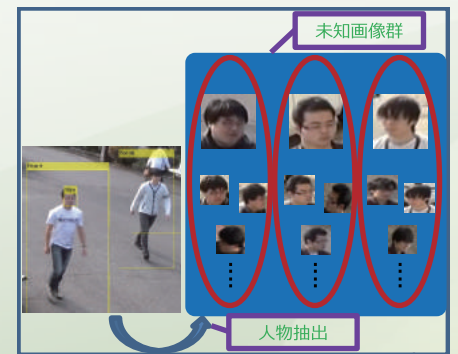
今後の展開 認識率は、カメラの解像度、テンプレートの数や種類に依存する。認識率の向上を目指し、検討を重ねたい。また、歩行認証については、機械学習方式を取り入れて、人物を特定することを考えている。最終的には、「顔+歩行」での認証を可能とし、信頼性の向上を目指す。



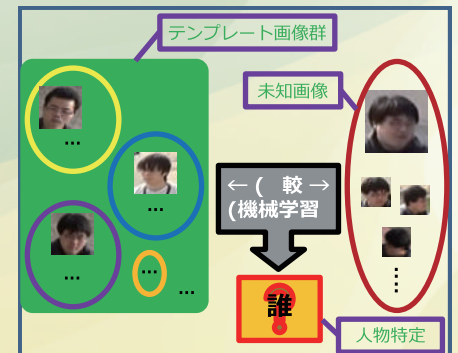
システム概略図



システム運用イメージ図



動画から未知画像群生成



機械学習による人物特定



要介護者のコミュニケーション支援システム の開発 -共通プラットフォームによる効率良いICT技術の利活用-



実施体制：福島学、坪倉篤志、濱田大助（情報メディア学科）、市田秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分県、大分市、別府市

連携機関：Uuu（障がい者サポート支援事業）、（医）謙誠会・博愛診療所重度認知症デイケア

概要 コミュニケーションがスムーズでないがゆえに、意志の疎通が困難となり孤立する場合がある。特に地域コミュニティでは、孤立者の存在は豊かな日常生活を送ることに障りが出るだけでなくコミュニティの減退につながりかねない。本取組みは、要介護者の相互コミュニケーション支援を目的とする。その中で研究成果を統合し課題解決につながる「成果を持ち寄れる基盤」を確立する。

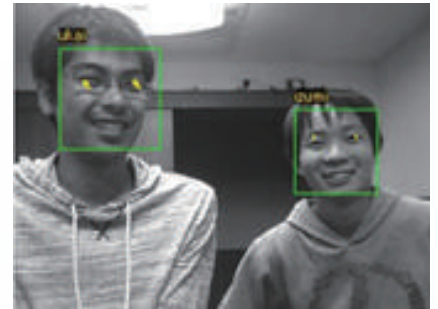


図1 顔・個人・視線方向判別の例

取組内容 1) 顔抽出と本人認証および視線方向識別、2) ステレオビジョンによる空間把握、3) 映像統合による地域把握、4) 調音材による住環境改善、5) 共通プラットフォームの有用性確認、に取り組んだ。

- 1) の成果：図1 顔抽出、個人識別、視線方向判別
展開：何に気を取られているかを取得可能であり、事故防止に応用可能。視線の安定性を使うことで「徘徊検知」への応用が可能。
- 2) の成果：図2 部屋および中にあるものの位置取得
展開：住環境に応じた情報の伝え方を制御することに応用可能。発作や転倒等の危険動作検出への応用が可能。
- 3) の成果：図3 地域の全景取得と部分更新
展開：お祭りなどの地区の集まりでの人の動きを確認することに応用可能。災害時の避難経路確認や防災への応用が可能。
- 4) の成果：図4 住環境改善によるリラックス度の改善
展開：予備実験から睡眠の質が改善する可能性が得られており、生活の質向上への展開を考えている。

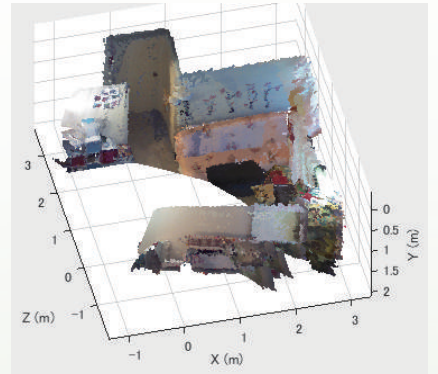


図2 空間把握の例

地域での成果 研究成果を「別府市福祉まつり」で展示発表し、多くの方に体感していただいた。図5に会場の様子（左）と学生が地域の方に成果を説明している様子（右）を示す。



図3 地域把握の例

学生の学び 授業で学んだ内容を「いかに活かすか」が問われる取組みで、アイデアが湧く「源（みなもと）」が「学んだ内容の理解」であることに気づくことができた。また地域課題への取組みを通して「学ぶ目的/意欲/意義」を自分なりに持てるようになった。

今後の展開 検証を行い、誰もがどこでも安心して気軽に使える技術に完成度を高めることと、検証そして展開を通して「笑顔あふれる地域」づくりにつなげていく予定である。

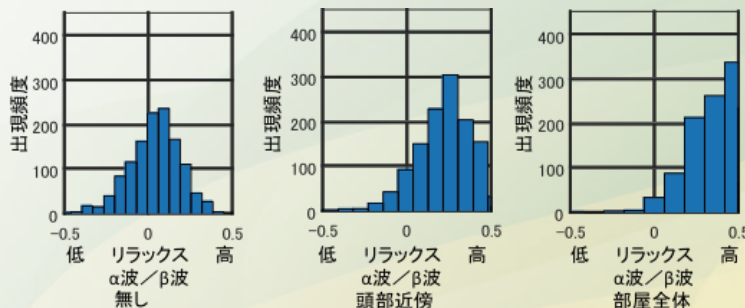


図4 住環境改善例



図5 別府市福祉まつりでの展示発表の様子

プライバシー問題を生じない見守りシステム 実現に向けた電磁波レーダの利活用



実施体制：鶴飼 拓也、福島 学（情報メディア学科）

実施フィールド：大分市

連携機関：(株)エイビス

概要 独居老人に限らず人目の少ない宅内での事故を早期に見察または予防することは、安心した日常生活を送る上で本人を含む関係者にとって重要である。一般に使われるカメラはプライバシー問題を生じ、見守りではなく「監視」と感じてしまうことがある。一方で検知漏れが人命に関わる場合があるのでいかなる環境であっても高い精度で検知できることと、大量の誤検知による見守り側の危機感減衰を防ぐ「見守り技術」が必要不可欠である。本取組では視覚情報を必要とせずかつ遮蔽物による死角の少ない小出力電磁波レーダを用いた見守りシステム構築の基礎となる電磁波レーダの基礎データ収集と分析を行う。図2に使用した電磁波レーダを示す。

取組内容 電磁波レーダに対して等間隔計測法を用いて動体の距離と電磁波の減衰量の調査を行った。図3に電磁波レーダと対象物の距離・方向・減衰の関係を示す3次元等高線図を示す。調査の結果、センサの感度などの電磁波レーダセンサの特性を捉えることが出来た。この特性をもとに、動体の位置推定などを行う。

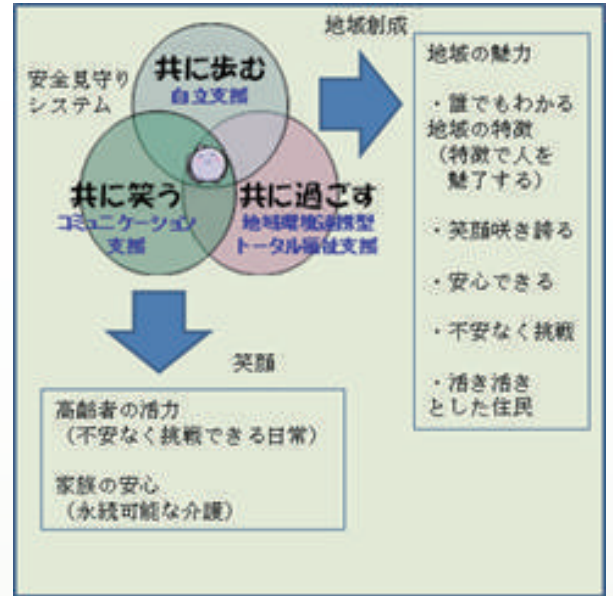


図1 システムの基本コンセプト



学生の学び 木佐上地区での活動に参加し、地域住民の声を聴くことができた。学内での活動だけにとどまらず、地域に赴いて話を聞くことで、実際に地域で何が問題になっているのかを、実感する事ができ、本研究の意義を考えることにつながった。今後、本研究の展開を含め、木佐上地区での活動を検討し、地域において役に立つシステムの開発に取り組む。

今後の展開 2つのセンサから得た信号の減衰量から動体の位置推定を行う。図5に「位置の変化」を計測した例を示す。単に位置がわかるだけでなく、動体の「速度」の変化を計測する。図6に「移動する速度の変化」の例を示す。これらのデータを組み合わせることにより、例えば転倒などの危険動作を動作パターンとしてデータベース化することができ、お風呂場やトイレ等カメラを入れられない場所の安心・安全をもたらす「見守り」を実現していく。

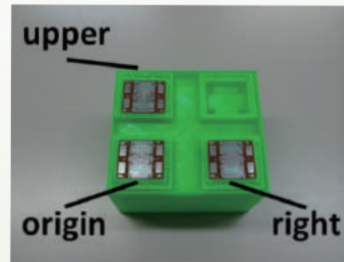


図2 本研究で用いた電磁波レーダ

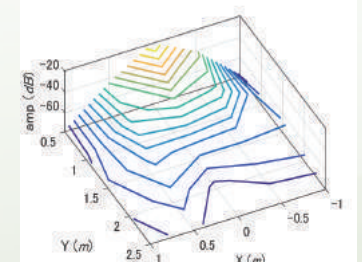


図3 センサからの距離と減衰量の関係



図4 木佐上地区に住んでいる方と話

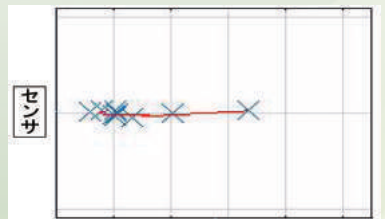


図5 位置推定/時間追従の様子

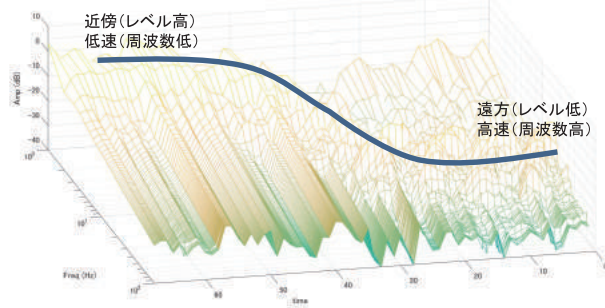


図6 センサ遠方(図左側)から足早にセンサに近づき「立ち止まる」様子をセンサで計測した結果例



豊後大野市の地域資源を活かした サービスラーニング科目への展開

実施体制：舩田佳弘、今西 衛（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：一般社団法人ぶんご大野里の旅公社

概要 豊後大野市には、ジオパークなどの地域資源が数多く存在するが、有効な地域観光資源となっておらず、ジオパークを中心とした地域資源を活用し、継続的な事業を行える地域観光サービス人材の育成が求められている。

経営経済学科では、H27年度より地域マネジメントコースを新設した。本コースは、地域資源観光に経営の概念を取り入れ、地域が顕在的・潜在的にもつ魅力を観光資源として発掘・利活用し、まちづくりマーケティングによって観光サービスを持続可能な事業へとプロデュースし実践する能力を備えた人材の育成を目指している。

サービスラーニング科目では、1年次より、地域で発生している問題に触れることで、若者の新鮮な感覚や感動をまちづくりに活かすとともに、社会人・地域人としての自覚を育てていくことに繋げていくことを目的とする。さらに、知識やスキルの継承ならびに共有を図り、学年を横断したアクティブラーニングの機能を持たせる。

取組内容 前記開講科目「サービスラーニングIA」では、2泊3日の合宿形式で実施し、14名が受講した。学生は豊後大野市の観光地や道の駅などを訪問・取材し、地域が顕在的・潜在的にもつ魅力に触れ、観光資源として利活用できるかをグループワークによるポスター作製やディベート、報告を通して行った。

さらに、後期開講科目「サービスラーニングIB」では、「サービスラーニングIA」の課題を踏まえ、学生自身でツアープランを立て、実際にそのプランを体験し、プランの課題を挙げ、再度、ツアープランを練り直し、プランを体験するという反復活動を行うことで、ツアーの評価と課題解決の能力を身につけた。また、里の旅タクシーのツアープランも体験し、プロが考えたツアープランとの比較・検証も行った。

地域での成果 豊後大野市役所にて地域住民に向けて開催した報告会では、学生9名が報告した。忌憚のない意見を出すことで、「手厳しい意見もあったが、若者の感覚として真剣に受け止めた」（豊後大野市副市長）とのコメントをいただき、地域の方に「豊後大野に潜在的な観光資源がある」という強烈なメッセージを伝えることができた。

学生の学び ディベート形式を取り入れたことで、当初は控えめであった学生も積極的に質問を発し、議論に参加するようになった。1年次より地域に対する意識や責任感の芽吹きを促している。地域の顕在的・潜在的な問題に対する取り組みや解決策を体験や実践を通じて学ぶことができた。

今後の展開 自らツアープランを作成し体験することで、学生はツアープランの作成や実施、魅力を引き出すことの難しさを実感した。今後は地域の方と密にコミュニケーションをとることで、地域の課題を精緻化すると同時に、統計学、経営学など専門科目とも連携し、学術的な観点をもち論理的に指向する能力を身につけることを目指す。



豊後大野市での報告会の様子



観光客が訪れない観光資源について説明を受ける学生



グループワークの様子

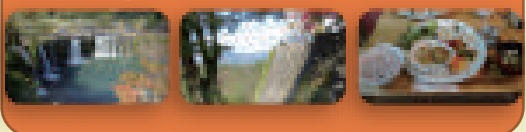


JR 豊肥本線を活用したツアー体験

豊後大野紅葉くらべコース
白山溪谷 → 宝生寺 → 用作公園



秋を五感で楽しむコース
原尻の滝 → 岡城跡 → バジ・カフェ・ミス



学生が考えたプラン

『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おいた、つくりびと』になりたい。

豊後大野市ジオパーク・エコパーク・生物多様性戦略に関する市民・学生の普及活動

実施体制：杉浦 嘉雄（建築学科）、船橋 玲二（環境科学研究所）

実施フィールド：豊後大野市、エイトピアおおの

連携機関：豊後大野市、NPO法人おおいた水フォーラム、祖母傾ユネスコエコパーク推進協議会など

概要 豊後大野市では、既に認定されている日本ジオパーク（市内全域）、大分県・宮崎県の2県6市町が登録を目指す「祖母傾ユネスコエコパーク」推進活動（申請区域は市内全域）、県内初の市町村単独による策定を目指す「生物多様性ぶんごおおの戦略」に関する、市民と学生の理解や積極的な参画を探ることを目的として、次の【第1事業】及び【第2事業】の2事業を有機的に実施した。



取組内容 【第1事業】

- 事業名：「大地」と「生きもの」シンポジウムII
- 開催日：平成27年11月14日（土）9：30～17：30
- 開催地：豊後大野市 エイトピアおおの・小ホール
- 対象者：豊後大野市民・学生及び大分県民
- 参加人数：延べ150名
- 本学の参加学生：両学部1年生12名、2年生10名、3年生7名
- プログラム：
 - <第1部>連続講演「ジオ・エコパークで豊後大野市を元気にする」
 - <第2部>連続講演「自然との共生が豊後大野市を元気にする」
 - <第3部>パネルディスカッション
「環境保全と地域振興が両立する仕組みを求めて」

【第2事業】

- 事業名：生きものあふれる田んぼと地域づくりシンポジウム
- 開催日：平成27年2月27日(土) 13：00～17：15
- 開催地：豊後大野市 エイトピアおおの・小ホール
- 対象者：豊後大野市民・学生及び大分県民
- 参加人数：延べ80名
- 参加学生：工学部1年生2名、2年生2名、3年生6名
- プログラム：
 - <第1部>先進事例と参加者へのエコ田んぼ実践活動の可能性
 - <第2部>豊後大野市の実践報告
 - <第3部>パネルディスカッション
「“生きものあふれる田んぼと地域づくり”をめざして」



【第1事業】チラシと記録写真

地域での成果

第1事業では、ジオパーク、エコパーク、生物多様性戦略、全般の普及活動に重点を置き、第2事業では、豊後大野市の主幹産業である農業、特に田んぼのあり方（環境と経済全般）について焦点をあてたため、市民の上記事業への理解が段階的に深まった。その成果のためか、市民と学生からの質問も積極的に行われた。

学生の学び

抽象的になりがちな「持続可能な地域づくり」に関する学びに対し、この2事業を経験することで、実践者自身による先進事例の紹介や、地元での実践例を具体的に学ぶことができ、さらにこれらの概念に関する具体的なイメージを参加学生の多くが持てるようになった。

今後の展開

今後は参画意識のある学生に対し、例えばフットパス等の手法を用いて「理解」の段階から「実践」段階の体験学習を実施したい。



【第2事業】チラシと記録写真



大野町土師地区における防災と生物多様性回復のための基礎的研究

実施体制：池畑 義人（建築学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：土師地区振興協議会

概要 大分県内に多く見られる小規模集落は、超高齢化、人口減少により、地域コミュニティを維持することが難しくなっている。この状況において、建築学科では1年次より大野町土師地区をフィールドとした実践型教育を実施し、地域の課題を学生自らの目で見つめ、その課題に主体的に取り組む力の育成/教育をおこなっている。この土師地区にある、ふるさと体験村は、地域資源の一つであるが、その運営が地域の手任せに委ねられており、高齢化率（67%）の高い小規模集落において、その運営/維持管理を継続的に進めていくことは、大きな地域課題となっている。このふるさと体験村の運営/維持活動にあたっては、来場者数の増加が一番の解決策となるが、これまでの建築学科のふるさと体験村での活動や調査から、夏場にその来場者数が集中し、その前後の時期での来場者数が少ないことが1つの課題である事が明らかとなってきた。そこで、河川に棲息するゲンジボタルを地域資源として活用できれば、来場者数が少ない、ホタルが活動する5、6月においてふるさと体験村野来場者を増やせる可能性があることが分かった。しかし、一方で、大雨が降って増水したときに河川プールに土砂が堆積して、プールが使用できなくなり、土砂の除去には大きな費用が生じることも、地域の課題として明らかになった。そこで、卒業研究をフィールド教育の集大成と捉え、専門教育で学んだ知識を活かし、地域が抱える上記2つの課題に対して、ふるさと体験村の河川プールが設置されている柴北川について、以下の2つの視点から研究を行った。

- ① 平常時の水位におけるゲンジボタルの生息環境の評価
- ② 増水時の水位における土砂の動きと河川プール周辺の流れの評価

取組内容 ゲンジボタルの生息域を拡大することと、出水時の土砂動態を明らかにして対策を講じることの2つの課題を解決するために、河道シミュレーションを実施している。

シミュレーションにはiRic(<http://i-ric.org/ja/>)を使用している。河道シミュレーションの境界条件を策定するためには、河道の形状を明らかにする必要があるため、図-1に示すようにトータルステーションを用いて横断面測量を実施している。

シミュレーションの結果から、図-2に示すような平水時の流れの様子、および氾濫時の流れの様子が再現されている。また、シミュレーションの結果からゲンジボタルについてHSC(Habitat Suitability Index)と呼ばれる指標を求め、生息環境の妥当性を評価したところ、図-3に示すように流量が1.5m³/s付近で最適となる結果が得られた。

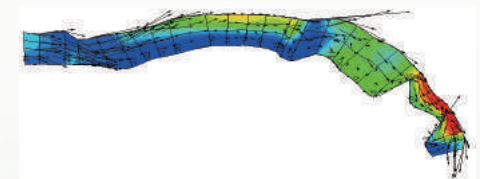
地域での成果 地域においても河川プールは、ふるさと体験村の利用促進のための貴重なツールであるため、大きな期待を持たれている。また、体験交流活動から始まった地域の学びが、工学的な課題解決に帰結したことに対して、喜びの声があがっている。

学生の学び 一年次からの学びのフィールドであった土師地区における課題解決ができることが研究に対する熱意を継続させていた。その過程において、測量の技術、データ処理、河川工学の基礎知識を身につけていった。

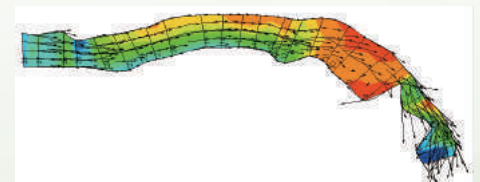
今後の展開 今年度は2名体制で実施してきたが、より多くの学生を巻き込むことを計画している。その結果として、より広範囲で高精度のシミュレーションが可能となる。



図-1 横断面測量の様子



(a) 平水時の流れの様子



(b) 氾濫時の流れの様子

図-2 流況シミュレーション結果
(色は水深、矢印が流速ベクトル)

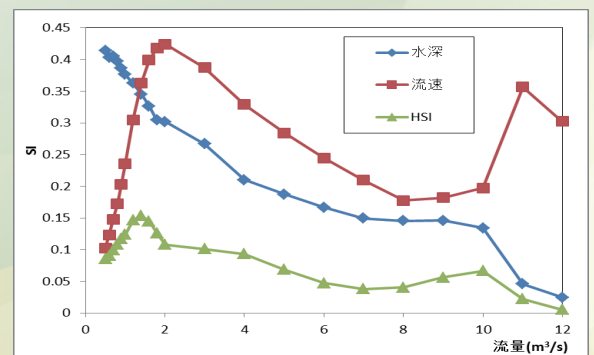


図-3 シミュレーション結果から求めたふるさと体験村付近のHSC

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない『ほんとうの豊かさ』とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分のできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

地域創生・豊後大野まるごと インターネット・エリアピアビジネス

実施体制：大塚 優太、佐藤 慈信、高倉 大暉、中原 晴紀、原岡 慶、山本 祥平、橋本 堅次郎（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市

概要 豊後大野市はおんせん県である大分県に位置しながら温泉がなく、周辺の観光地（別府、竹田、湯布院など）との競争が激しい。観光資源がありながら注目を浴びず、差別化ができていない。そこで経営経済学科の橋本研究室では3年次の教育プログラムとして観光資源化が困難な豊後大野市にあえて焦点をあて豊後大野市の事前調査、行政トップの橋本市長へのインタビュー、現地調査を踏まえて豊後大野市の観光資源の再発掘と活用の方法をビジネスとして提案することに取り組んだ。このさまざまな体験活動を通して自ら考えビジネスプランを作成する力、プレゼンテーション力、関係者と交流しチームとして成果を目指すことでコミュニケーションをとる力を育成するとともに地域の課題解決の視点を持ち、将来の地域に貢献できる人材の育成を目指した。

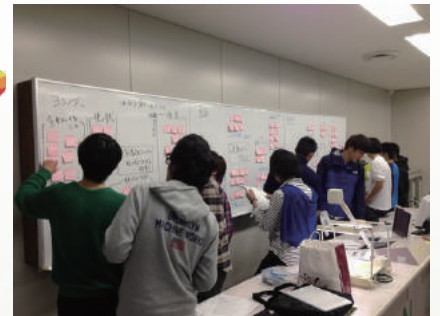


豊後大野市橋本市長ヘインタビューを行い、豊後大野市の課題・強みについて伺いました。（7月）



取組内容 教育プログラムと取り組み内容

1. 4月～5月：新聞記事を使用し ①テーマの設定（個人）、②テーマの調査とまとめの手法の獲得（個人研究、KJ法、パンフレット活用、インターネット調査）を行った。
2. 6月：チーム編成を行い「豊後大野市の観光資源」をテーマに「調査」「課題形成」「仮説」の構築を行った。
3. 7月：「市長インタビュー」「現地視察」を実施した。
4. 7月～10月：夏休みの期間を挟んで「豊後大野市の観光資源」をテーマに企画の作成を行った。
5. 大学生観光まちづくりコンテスト2015（ポスターセッション参加）（H27年9月10日 ホルトホール大分）
6. 第2回九州未来アワード学生起業アイデア部門（本選ファイナリスト）（H27年12月1日 レンブラントホテル）
7. NBUチャレンジOITA 地域創生活動報告会2016 in 豊後大野で発表（H28年2月13日 豊後大野市庁舎）



6月：チーム編成によるゼミ活動



第2回九州未来アワードファイナル出場(12月)

地域での成果 豊後大野市の観光資源については、上記以外の取り組みにもゼミ担当教員による豊後大野市での街づくり協議会での報告を含め2回の報告を行っている。学生ならではのインターネットを使った新しい視点を地域に提供することができた。



地域創生活動報告会(2月)

学生の学び 今回の9か月の活動を通して、回を重ねるごとに教員に頼らず「自ら歩む力」が身についたことが実感できた。企画段階からコンテストへの応募、事前の練習など多様な情報を集約、計画し段取りをつけ実行する一連の流れを身に付けることができた。学生自身が自信をもって何事にも取り組む意欲を醸成できた。

今後の展開 今年度の成果を活かし、留学生も含め新しい視点をもった観光資源の活性化に取り組むことを予定している。

事業構想

インターネットでピアを募集。NPO法人PIAが窓口になる

PIAのアイデア			
カメラ小僧ピア	春夏秋冬の風景・イベント	農村インターンシップピア	JA
神楽好きピア	神楽会館、年末	定住・移住ピア	移住・定住応援サイト 空き家バンク
合コンピア	井崎河川公園 キャンプ場	ボランティアピア	農林業 外部NPO
陶器づくりピア	倶楽(りがく)の里	お米・野菜づくりピア	JA
オルレピア	奥豊後コース	フルーツピア	道の駅、物産直売、青果店
地元酒蔵秘蔵酒ピア	蔵元 (吉良、浜崎、丹誠)	漁好きピア	原尻の庵 ちんだの庵

・構成：学生、豊後大野市
・役割：情報発信、PIAのお世話
新規イベント「開拓」

提携外部組織
NPO法人Good
NPO法人Nice
株式会社りーな

『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分ではかできないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おいた、つくりびと』になりたい。



佐賀関半島・触れる観光プロジェクト



実施体制：吉村 充功（建築学科）、市田 秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：NPO法人さかのせき・彩彩カフェ、JT(日本たばこ産業(株))

概要 近年、地域活性化に繋がるものとして、地域の特性を活かした新しいツーリズムが着目されている。これまで観光資源としては気付かれていなかったような地域固有の資源を新たに活用し、体験型・交流型の要素を取り入れた旅行の形態が盛んに企画され、実施されている。大分市佐賀関地域では、人口減少にともなう典型的な経済活動の縮小が起こっているが、地域資源に目を向けると、佐賀関半島一帯には、「文化・自然」や「漁業・農業」などの地域資源がある。そこで、学生や地域住民が参加し、地域の魅力を主体的に掘り起こし、観光事業として立案・実行できる人材を養成することを目的とした、『JT NPO 助成「地域の再生と活性化に向けたリーダー育成講座佐賀関半島・触れる観光プロジェクト」(NPO 法人さかのせき・彩彩カフェ/日本文理大学 共同セミナー)』を実施した。



日本文理大学は、大分市佐賀関に期待を込めた。開所と同時に「まちの駅「よろんせ」」内、時に地元NPOと協同で取り組む「地域の再生と活性化」に向けたリーダー育成講座がスタート。第一回は「佐賀関半島の歴史・文化」と題し、佐賀関地域の学生と地域住民の意見交換や交流活動の定期的な実施していく。今後、講座を続け、地域と関係者の約15人が参加し、地域力しながら課題解決の糸口を探る。学生は学生の若い力を新しい発見する。

地域の課題に取り組む拠点

日本文理大 佐賀関「まちの駅」に

開所のまちの駅「よろんせ」内、時に地元NPOと協同で取り組む「地域の再生と活性化」に向けたリーダー育成講座がスタート。第一回は「佐賀関半島の歴史・文化」と題し、佐賀関地域の学生と地域住民の意見交換や交流活動の定期的な実施していく。今後、講座を続け、地域と関係者の約15人が参加し、地域力しながら課題解決の糸口を探る。学生は学生の若い力を新しい発見する。

大分合同新聞 2015年7月2日付

取組内容 「地域の再生と活性化に向けたリーダー育成講座佐賀関半島・触れる観光プロジェクト」の実施プログラム

第1回 (H27年6月13日) 「佐賀関半島の歴史・文化」

第2回 (H27年7月11日) 「関あじ関さばブランド！」

第3回 (H27年8月8日) 「地元農産物の特色」

第4回 (H27年9月12日) 「商業・商店街の活性化策は！」

第5回 (H27年10月10日) 「海・星をめぐる触れる観光とは！」

第6回 (H27年11月14日) 「今後の観光とは、おんせん県！」

第7回 (H28年1月16日) 「案内先で料理を体験する」

実証実験 (H28年3月12日) 「関あじ関さばまつり会場にて実証実験実施」

各回、地域資源に関わるステークホルダーを講師に招き、佐賀関の現状と今後について参加者との意見交換を行った。

その後、各テーマにもとづいてのワークショップを行い、参加者自身が佐賀関地域の魅力について考えた。

地域での成果 佐賀関地域の魅力についてのプロモーションムービーと若者を惹きつける食についての案を考えた。

プロモーションムービーでは、佐賀関地区の「幸せ」の地名にもとづく「さかのせき潮騒物語」を題材に、「しあわせになりたい」というテーマで制作を行った。食の提案では、ブランド魚「関あじ・関さば」をつかった「関のりゅうきゅう丼」について提案を行った。

「佐賀関半島・触れる観光プロジェクト」の最終成果としての観光プランについては、平成28年3月12日に実際に参加者を募り、実施を行い、参加者には好評を得たが、ターゲット層の絞り込みや、PR不足など等問題点もあり、今後の展開についてのヒントを得る事が出来た。

学生の学び 地域資源について、普段、何気なく触れているモノ、見ているモノが、地域資源になり得るということについて経験が出来、また、実際に地域の魅力についての提案を行う事で、地域の状況について再認識させられた。実際に観光プランを実施し、参加者との意見交換を行うことで、体験型・交流型のツーリズムの「楽しさ」や地域資源の活かし方についてのヒントを得る事ができている。

今後の展開 今後、実際の観光プランとして実施する事を検討している。今回の実証実験から、観光ガイドとして、若者（学生）が活躍することによるメリットがある事が、アンケートの結果から得られており、今後はそれを含めたプラン全体の検討を行っていく。

『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくりたい。私たちは大分県の未来を拓く『おいた、つくりびと』になりたい。

アクアソーシャルフェス in 大分に参加して

実施体制：人間力育成センター

実施フィールド：大分市佐賀関馬場地区 磯崎海岸

連携機関：大分合同新聞社、トヨタ自動車、NPO法人おおいた環境保全フォーラム、馬場地区自治会

概要 アクアソーシャルフェスとは、全国の新聞社とトヨタ自動車の協賛で、H24年から「水辺の環境保護」を目的としたボランティアイベントの事で、全47都道府県で年に2回開催されている。大分県でもこれまで別府市冷川でホテルの生息環境を守る清掃活動や田ノ浦ビーチでの清掃活動が行われおり、本学からも多くの学生がNBUチャレンジプログラムの一環として参加してきた。

取組内容 H26年からは、地域の里山保全活動に取り組む「四季の森プロジェクト」が運営スタッフの一員として、アクアソーシャルフェスに参画し、企画の立案から運営まで一貫して携わった。学生達は、H23年、H24年にアカウミガメが海岸で産卵し大きな話題になった大分市馬場地区の磯崎海岸に着目。「磯崎海岸をアカウミガメの古里にしよう！」というテーマの元、アカウミガメの産卵環境を豊かにする為のビーチクリーニング、竹垣作成などを立案した。当日は、160名を超える参加者が訪れ、海岸整備、美化活動に汗を流した。



四季の森プロジェクトについて

H25年8月に発生した山口・島根豪雨災害における災害ボランティアに参加した1年次生（現在4年生）が、浸水した住宅の殺菌、脱臭対策として竹炭利用の可能性を模索したことから始まった。学生達は、行政やNPO、林業従事者の協力を得ながら、地域の里山の整備を実施すると同時に、大分県森林環境税を活用した竹炭焼きを実施。災害発生時における備品として貯蓄している。現在では、地域の小学生を対象とした環境教室や人口減少が進む中山間地域での植樹祭の実施など、活動のフィールドは広がりを見せている。



アクアソーシャルフェスを終えて

アクアソーシャルフェスでは、学生が運営スタッフの一員としてイベント運営に携わらせていただいた事で、環境意識の高まりに加え、主体性や協調性を育む実践教育の場として有意義な機会となった。参加した学生からも「学生だけで取り組むプログラムとは異なり、企業の方々との協働作業を通じて学ぶ事が多かった」という声が挙がっている。また、昨年を上回る43名の学生が参加するなど、活動の輪は広がりを見せている。

『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分ですることができないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

フィールド・スタディを中心とした 学生主体の地域活性化カリキュラム



実施体制：今西 衛、本村 裕之、工藤 順一（経営経済学科）

実施フィールド：大分市中心商店街

連携機関：株式会社大分まちなか倶楽部

概要 本事業は、学生が大分市中心商店街の現場に出て、商店街の魅力を発掘する。発掘した魅力を消費者に関心を示してもらうために、どのような情報を提供することが効果的かを学生同士で議論し、いくつかの情報提供手段を出し合うことで、どの情報が最も効果的か検証することで、マーケティングの技能を身につける。

取組内容

【背景】

大分市中心部再開発事業や、H27年4月のJR大分シティ開業前後で、大分都心部がどのように変化するのか調べるため、本村研究室では、4年以上にわたって来街地ベースの回遊行動調査を行ってきた。この中で分かってきたことは、セントポルタ中央町、トキハ本店、大分フォーラスを中心とした比較的狭いエリアでの回遊が中心であり、府内やガレリア竹町などへの回遊が少ないこと、商店街内も全国チェーンのお店の立ち寄りが多いことなどである。また、JR大分シティ開業後、パークプレイス大分、トキハわさだタウンなどの郊外ショッピングモールから大分都心部へ消費者が訪れるようになると予測したが、その多くは、JR大分シティへのみ立ち寄り、中心商店街へは足を運ばない恐れがあることが分かった。



【目的】

この原因として、商店街の魅力が消費者に十分に伝わっていないことが考えられ、商店街の魅力をいかに発信していくべきかが課題となっている。また、大学生を含む若者の多くが、郊外ショッピングモールに行く現状を踏まえ、学生の視点で商店街の魅力は何か、逆に、足りないものは何かといった意見を地元商店街は求めている。

そこで、本学学生が実際に大分市中心商店街の現場に出て、商店街の魅力や欠点を洗い出し、同世代の若者が商店街にきてもらうためにはどのような施策が必要かを学ぶことで、マーケティングの技能を身につけると同時に、専門知識を活かして、地域課題解決に取り組む力の育成を目的とする。

【方法】

本学学生が現場で集めてきた情報を整理し、同一情報をいくつかの情報提供手段にわけて、消費者に発信することで情報提供の効果を計測し、どの情報が最も効果的かを検証する。情報提供の手段としてスマートフォンアプリを用いる。



今後の展開

学生が魅力を発見し情報提供することで、地域マネジメント、マーケティングの手法を学ぶと同時に、自己ブランドを確立する。また、フィールド活動によって、一般社会人としての常識や人間力の育成が図られる。

学生がまち魅力を発掘することで、商店街の活性化に寄与するとともに、本事業終了後も継続的にフィールド活動を行うことで、ノウハウの継承と継続的な商店街の発展に寄与することを目指す。

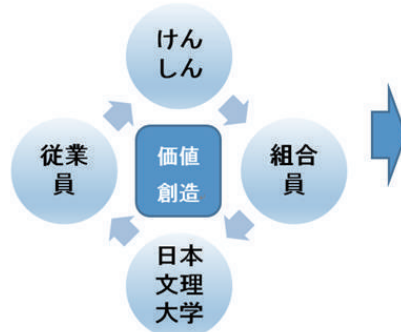
けんしん大学 まち・ひと・しごと「地方創生」に挑む



実施体制：橋本 堅次郎、本村 裕之、梅本 光一（経営経済学科）、川崎 敏之（機械電気工学科）
近藤 正一、吉村 充功、池畑 義人（建築学科）

連携機関：大分県信用組合

概要 けんしん大学は、大分県信用組合の職員及び当組合の組合員並びに取引先などを対象とし、急速に変化する外部環境への適応力を養うために、行政、日本文理大学、産業支援機関及び各種専門家の協力と連携のもとに企業内大学を設置し、「学びの場」「交流の場」を形成することで相互研鑽を図り、価値共創を通じて、大分県信用組合職員のコンサルティング能力の向上を図るとともに組合員等並びに地域経済の発展に資することを目的とした大学となっている。



- 顧客価値の創造
地域イノベーションの創出
- 地域密着
- 次世代リーダーの輩出
- 日本文理大学との連携強化
- 学習する組織文化の醸成

取組内容 講義内容
 第1回 全ての人活躍できる社会を目指して
 第2回 アジアに開いた観光と“今”出来ること
 第3回 ライフサイエンス分野の新しい道具「プラズマ」
 第4回 これからどうする？大分のまちづくり
 第5回 『おおいた、つくりびと』が創る地域の未来
 学習年度は1年間とし、次の2学期に分け、学期毎に定めた授業を実施。第1学期4/4-9/30第2学期10/1-3/31で授業の種類は重点5分野を中心に定員50名の無料授業である。



地域での成果 現在は、職員の受講者が中心であり、地方創生とは？という非常に基本的な内容となっており、重点5分野についても基礎的知識の習得となっている。今年度は、基礎的内容を中心に置きながら着実に成果をあげていく。
 また、セミナー後に実施しているアンケートでは、非常に満足及び満足を合わせ96%と高い評価を受けている。大学が実施するセミナーは非常に俯瞰的な話なので役に立つというお声もいただいています。ワークショップ型形式の授業も取り入れ積極的なディスカッションが行われ好評であった。



今後の展開 今後は、より深く、専門的な内容へと深めていく。さらに大分市民の方に積極的に参加を促していく。



地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座



実施体制：梅本 光一、橋本 堅次郎、吉本 圭一郎（経営経済学科）

実施フィールド：ホルトホール大分2F セミナールーム

連携機関：大分市産業活性化プラザ

概要 地方創生において、地域企業の競争力の向上は、地方にしごとをつくり、地方で安心して働けるようになるために重要なポイントである。しかしながら、地域企業において、経営に携わる優秀な人材の確保という点では、大都市圏に比べて困難であり、地域の産業競争力の向上において、障害となっている。地域企業がさらなる成長を目指し「攻めの経営」に転じることができるよう、経営の感覚に秀でた「地方創成人材」を養成することは、地方創生の一つのポイントである。そこで、大分の企業が競合他社に対して優位性を高めるために、実践的に企業経営を促進できる「地方創成人材」を養成し、大分市の産業競争力を向上させるために、大分市産業活性化プラザとの連携でセミナーを開催した。

取組内容 テーマ：地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座

「顧客の期待に応え感動を与える手法とは」

- 第1回「ケースで学ぶマーケティング1」（H28年1月7日）
- 第2回「ケースで学ぶマーケティング2」（H28年1月14日）
- 第3回「ボードゲームで学ぶ簿記1」（H28年1月21日）
- 第4回「ボードゲームで学ぶ簿記2」（H28年1月28日）
- 第5回「ゲームで学ぶスリーシップ」（H28年2月4日）
- 第6回「ゲームで学ぶコミュニケーション」（H28年2月18日）

第1回、第2回では、ブランドづくり、顧客サービスのミニケースを使用しながら、受講生との双方向のやり取りのなかでマーケティングとは何かを学ぶことを目指した。

第3回、第4回では、ボードゲームを使用しながら、受講生が楽しみながら、難しいと思われがちである簿記の基礎知識を身に付けることを目指した。

第5回、第6回では、ビジネスゲームを使用しスリーシップ（リーダーシップ、フォロワーシップ、メンバーシップ）のあるべき姿を学び、またコミュニケーション力を実習を通して学び身に付けることを目指した。

以上、全6回の講座を開催し、毎回20名から30名の市民の方が参加した。

地域での成果 難しく捉えがちな経営や簿記の基礎知識を具体的な事例の紹介やゲームを通して学ぶことで受講生に理解を深めていただいた。マーケティングではアイドルグループのケースを使い「ブランド」について学び、テーマパークのケースを通して「サービス」について学んだ。簿記ではボードゲームを使用し「複式簿記」の記帳を楽しみながら学ぶことができた。また、チームマネジメントを理解する上でのスリーシップについてもゲームを通し心情理解も含めて学ぶことができた。組織の基本であるコミュニケーションもゲームを通して「聴く力」「伝える力」「訊く力（質問力）」を理解し実践する力をつけることができた。

今後の展開 今後は今年度の成果を活かし、大分市産業活性化プラザと連携し、地域創生関わる地域企業や様々なセクターのステークホルダーに対して、学びの場を提供し、地域創生人材育成に向けて貢献していきたい。

大分市産業活性化プラザ主催セミナー

地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座

顧客の期待に応え、感動を与える手法とは。

第1回 1.7 (1月7日) 第2回 1.14 (1月14日)
第3回 1.21 (1月21日) 第4回 1.28 (1月28日)
第5回 2.4 (2月4日) 第6回 2.18 (2月18日)

大分の企業が競合他社に対して優位性を高めるため、実践的に企業経営を促進できる「地域創生人材」を養成し、大分市の産業競争力を向上させます。

時間 18:30～20:30 (18:00開場)

会場 ホルトホール大分2F セミナールーム

第1回「ケースで学ぶマーケティング1」 講師 梅本 光一 先生
第2回「ケースで学ぶマーケティング2」 講師 梅本 光一 先生
第3回「ボードゲームで学ぶ簿記1」 講師 橋本 堅次郎 先生
第4回「ボードゲームで学ぶ簿記2」 講師 橋本 堅次郎 先生
第5回「ゲームで学ぶスリーシップ」 講師 吉本 圭一郎 先生
第6回「ゲームで学ぶコミュニケーション」 講師 吉本 圭一郎 先生

●セミナー後に交流会を開催します！ ●館内の有料託児施設をご利用ください

大分市産業活性化プラザ主催セミナー

地域企業向け「地域創生人材」育成のための経営学実践講座

顧客の期待に応え、感動を与える手法とは。

大分の企業が競合他社に対して優位性を高めるため、実践的に企業経営を促進できる「地域創生人材」を養成し、大分市の産業競争力を向上させます。

第1回 ケースで学ぶマーケティング1 第3回 ボードゲームで学ぶ簿記1 第5回 ゲームで学ぶスリーシップ

第2回 ケースで学ぶマーケティング2 第4回 ボードゲームで学ぶ簿記2 第6回 ゲームで学ぶコミュニケーション

講師 梅本 光一 先生 橋本 堅次郎 先生 吉本 圭一郎 先生

セミナーの募集ポスター及びチラシ



ワークショップの様子



『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛を勇気に変えて、大分できがけないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『あおいた、つくりびと』になりたい。

小学生を対象とした 夏休み体験型自由研究教室

実施体制：高橋 淳一郎、鍋田 耕作、河村 裕次、坂口 昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：大分市



概要 福祉マネジメントコースの地域志向教育の取組みとして、「社会福祉援助技術演習Ⅰ（2年次対象）」及び「社会福祉援助技術演習Ⅱ（3年次対象）」の履修学生が中心となり、小学生を対象とした体験型の自由研究教室を実施し、これまでの学生の知識や技術を活かす機会を提供し、学修意欲の向上を図る。

ここでは、この教室の企画、運営、振り返りを通じて、学生自ら“PDCA（Plan（計画）、Do（実施）、Check（評価・検証）、Act（改善・修正））サイクル”を経験することにより、社会人基礎力を養う。また、学年ごとに役割を変え、3年次の学生は、「計画力」、「実行力」、「課題発見力」、「プレゼンテーション力」を意識した活動、2年次の学生は、「主体性」、「働きかけ力」、「傾聴力」、「柔軟力」を意識した活動に取り組んだ。



本番に向けてのロールプレイ

取組内容 この教室は、H27年7月26日（日）2回（午前・午後）、8月8日（土）2回（午前・午後）と計4回、自由研究を何しようかと悩んでいる小学生とその保護者を対象に、学生が中心となり、本学の教育カリキュラムを活かした体験型の自由研究のサポートを行った。

テーマを「みんなが快適に生活していくために大切なことは何だろう？」と設定し、様々な体験活動を通して、色々な特徴を持った人たちに合わせた便利な道具の理解や周りの人たちや地域社会に対する配慮の大切さについて学ぶという内容とした。具体的には、福祉食体験（様々な特性に合わせた食に関する工夫を知ろう）、ポスター製作（地域のお祭りのポスターをつくろう）などを実施した。



思い出絵はがきづくりの様子

地域での成果 第1日目の反省と振り返りを経て、第2日目には、次のような保護者の意見をいただいた。「子どもたちが楽しめながら、気づきを提供できていた」、「最初はちゃんとできるか心配したが、お友達と楽しそうに参加できていたので良かった」、「学生の方々が笑顔でやさしく接してくれたので、子どもたちがのびのびできたと思います」などがあった。



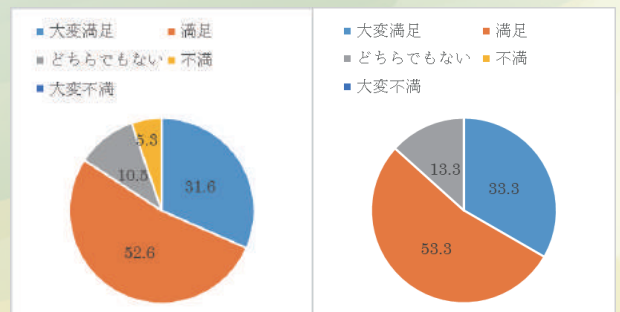
福祉食体験の様子

学生の学び 第1日目では、参加者を意識した取組ができていなかったが、保護者の声、振り返り等を踏まえて、自分たちで改善点を見つけ、第2日目ではそれを実行に移すことができた。（例えば、「活動の進行役がわからず、誰の説明を聞けば良いのかわからなかった」という保護者の声から、福祉食体験では、総合司会が全体進行を行い、内容の説明は別の学生が行う。）

今後の展開 これまでは大学内で実施してきたが、今後は地域に出て、このような取組を実施していきたい。また、自由研究教室の内容も、参加者のニーズに合わせて変更していきたいと考えている。

第1日目（7月26日）

第2日目（8月8日）



教室に対する保護者の満足度

『おait、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おait、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない『ほんとうの豊かさ』とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分ですることができないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おait、つくりびと』になりたい。

地域づくり支援

～市民交流の場・楽しく広場「ひょうたん」(千歳町)の活動サポートを通して～



実施体制：鍋田 耕作、河村 裕次、坂口 昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市千歳町

連携機関：豊後大野市高齢者福祉課、市民交流の場・楽しく広場「ひょうたん」

概要 豊後大野市千歳町で実施されている市民交流の場・楽しく広場「ひょうたん」は、「ちょっと寄り道・・・ところとからだが軽くなる場所」を目的として、週1回（月曜日の午前中・2時間30分程度）千歳町の住民が集まり（現在の利用者は、後期高齢者が中心）、一緒に体操をしたり、お茶を飲んだり、レクリエーション等を行っている。この活動の中でもレクリエーションは週替わりで行われており、この内容をどのようにするかが課題となっていた。そこで、本学学生が参加者のニーズを把握した上で、企画を立案し、提案・実践することで、活動の幅を広げてもらうことにした。またレクリエーションを機能訓練や認知症予防等に効果的につながる企画に加え、参加者の生きがいづくりや地域貢献・役割の創出につなげていくことにも着目し、取り組んだ。また、地域課題解決に向けた取組に対して学年ごとの役割を設定し、将来、「子ども」「高齢者」「障がい者」、そして「ビジネス」など様々な視点から、つながりある地域社会の実現に貢献できる人材を育成することを目指した。

取組内容 本学の学修サイクルである①体験交流活動（ひょうたんの活動見学・参加、スタッフとの打ち合わせ、レクリエーションを考える上での参加者の状況把握など）、②住民のニーズに応じた課題解決に必要な知識の習得（レクリエーションの内容を参加者同士のコミュニケーションの図れるもの、多世代で楽しめるものなど、参加者の特徴に合わせた効果的な技法、企画書作成などを検討）、③ステークホルダーとの協働による課題解決型学修（実際に企画立案した内容をスタッフとともに実践、振り返りを行うなど）の一連の過程を実践した。



体験交流活動

地域での成果（参加者への効果・影響）若い世代がこの活動に参加することによって、利用者が孫に接するような温かい雰囲気の中で活動ができるようになった。スタッフからは、学生の新しい発想や取組から、今後の活動の参考になったなどの意見があった。

（活動全体の活性化）新しい事に挑戦したことで利用者の生きがいが生まれた。利用者がこれまでにやったことのない新しいゲームなどを楽しみにしていることなど、この活動サポートにより、より活動が活性化したという評価を受けた。



事前打ち合わせ

学生の学び 体験交流活動では、自分から参加者とコミュニケーションが取れるようになったなど、主体性が身についたと考えられる。必要な知識の修得では、これまでの福祉関係の学修を活かしたレクリエーション等の計画立案を行った。そして、課題解決型学修の中では、まず企画をした内容を正確に実行することができる能力（計画力・実行力）が養われ、人前での説明、他の人を動かすことができるようになった（発信力・働きかけ力）などの学生の意見が出されている。

今後の展開 この活動サポートを継続しながら、これまで学生・スタッフとともにやってきたレクリエーション等の取組を地域の人々に引き継いでいきたい。また、今後は地域内での活動等にも参加し、地域内での互助や交流にも貢献できればと考えている。



クリスマス会での交流

佐賀関地区での市内小学生とその保護者を対象とした地域交流教室



実施体制：鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：大分市、大分市教育委員会

概要 佐賀関地区は、少子高齢化にともない小学生人口が減少し小学校の統廃合が進んでいる地区である。小学校の統廃合がおこると通学時間などの差から、小学生同士の交流や、またその保護者同士の交流も減るなど、学校運営にとっても問題が生じる。そこで、こども・福祉マネジメントコースとスポーツマネジメントコースでは、これまでに「大在子どもルームでの体験」「夏休みの小学生対象の体験型自由研究教室の企画運営」を行い、小学生同士や保護者同士の交流をしたいというニーズ（地域課題）に対して、本学学生が中心となり、体験型の交流活動を行った。ここでは、H27年12月20日（日）に実施した佐賀関地区での地域交流教室「クリスマス直前!! 妖怪たちもビックリ!! 小学生コミュニティセンター」について報告する。

この教室では、①多くの人と触れ合うことでコミュニケーション能力の向上を図る、②誰でも気軽に楽しめることで、身体能力の向上を図る、③親子、親同士、子ども同士の交流の場を作る、④世代を超え大学生との交流を行う、⑤グループワークを行うことで団結力（他人との協力）を学ぶ、の5つのテーマについて小学生が体験できるような企画内容とすることで、小学生同士だけでなく、保護者や企画運営に携わる大学生との交流を通して、普段の小学校生活では経験出来ない、多世代間交流をを目指した。

取組内容 この企画を実施するまでに、佐賀関地区の地域の状況把握、地域課題の選定、企画書・チラシの作成、学生による佐賀関地区の小学校・こども園・幼稚園などでの広報活動を行い、当日に向けて必要な資料等（スケジュール、役割分担、看板等）の作成、当日の流れに沿ったロールプレイなどを行った。イベント当日は、会場の飾りつけ、事前打ち合わせ、受付・駐車場整備・案内、開会式、アイスブレイキング、4種類のゲーム（釣りっこ・RDチャレンジ・プラズマカー・オーバルボール）、親子での交流企画を実施し、閉会式ではメダルの授与、表彰、記念撮影を行った。また、この取組に当たって、オリジナルのスタンプカード、賞状、メダル、クリスマスカードを用意した。このように、これまでの企画立案から運営の経験と知識・技術を活かして、地域課題の解決に向けて企画を検討し、学生主体での交流活動の運営を行った。



事前打ち合わせ

地域での成果 今回の企画の目的でもあった、子どもどうしの交流、子どもと学生との交流を十分に果たすことができた。また、参加した保護者の声として「遊びを通して、他校のお友達とも仲良くでき、よかった」や「子供たちが楽しそうだった」、「兄弟がバラバラに行動でき、よかった」などの意見があった。



釣りっこの様子

学生の学び 実際に、企画を立ち上げから当日の運営までを経験したことで、コミュニケーション能力や企画を立てる能力、どんなケースでも臨機応変に対応できる能力が必要であり、今後、さらに向上させていく必要があることを学んだ。学生からは、「実際に、子供たちの笑顔、保護者の笑顔、そして運営している学生スタッフの笑顔をたくさん見ることができた」などの感想があり、自分たちで考えた企画運営についての達成感を感じているようであった。

今後の展開 今後の企画を検討するに当たって、地域のこどもと高齢者が触れ合うような機会が必要ではないかと考えている。そこで、佐賀関地区内での世代を超えた交流をもっと増やし、幅広い世代で楽しめるイベントを行っていきたい。



全員で記念撮影

朝地小中学校における継続的な 予防的心理教育プログラムの実践



実施体制：高橋 淳一郎（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市立朝地中学校・小学校

概要 朝地小・中学校をはじめとして、豊後大野市内の多くの学校では学年に1クラスしかない小規模校となっている。それらの学校では小規模であるが故、以下のような課題が挙げられる。

①人数が少ないため社会性を学ぶ機会が限定される

②クラス替えがないため人間関係が固定化される

この結果、中学卒業後の大きな社会へ巣立っていく環境移行の際に不適應に陥りやすくなる。このため、小規模校であっても児童生徒が社会性を身につけ、適應力を上げていくための支援が必要である。そこで、「ソーシャルスキルトレーニング (SST)」・「対人関係ゲーム (SIGs)」・「構成的グループエンカウンター (SGE)」の3つの手法を用いて、小中学校すべての学年を対象とした予防的心理教育プログラムを1年間継続的に実施することとなった。



取組内容 予防的心理教育プログラムは、右のような構成とした。なお、小規模であることの課題を解決するため、SIGsでは複数の学年を合同で実施し、児童生徒ができるだけ多くの行動モデルに触れることができるよう工夫されている。

小1・2	2か月に1回程度SSTを実施
小3	2か月に1回程度SSTを実施、2か月に1回程度SIGsを実施
小4～6	1か月に1回程度SIGsを実施
中1	1か月に1回程度SIGsを実施
中2・3	1か月に1回程度SIGsを実施、年1～2回SGEを実施

地域での成果 小学生では、全学年を対象としたソーシャルスキルの変化についてプログラム実施前と後では有意にスキルの上昇が見られた。また、高学年を対象とした不適應感に関する調査では有意な低下が見られた。中学生はソーシャルスキルの一部に有意な上昇が見られたものの、低下している因子も見られた。また、不適應感については有意な差が見られなかった。

以上の結果から、小学校低学年の早期に予防的な介入を行なうことで、より高い効果が得られることがわかった。一方で、中学生からスタートするのでは効果は限定的であることも明らかになった。小規模の中で工夫をしたプログラム構成となっているが、小規模だからこそ時間をかける必要があると考えられる。



学生の学び 現段階では教員のサポートという側面が強いものの、一部の学生はファシリテーターを務めるなど大きな成長が見られる。学校という現場で子どもたちに関わることで学生にも責任感が生まれ、内面的な成長を促しているものと思われる。

今後の展開 現今年1年間の取り組みをさらに発展させ、来年度以降もプログラムを継続させていく予定である。



大分市大在地区における総合型地域スポーツクラブのイベントを通じた教育実践活動



実施体制：堀仁史、竹田 隆行、鈴木 照夫、本村 裕之、武田 正芳（経営経済学科）

実施フィールド：大分市大在地区

連携機関：OZAI元気クラブ（総合型地域スポーツクラブ）

概要 大分市大在地区は新興住宅地として発展し、少子高齢化社会において珍しく人口の急激な増加とともに児童数も増加している地区である。このような急激な環境の変化に伴い、地域コミュニティの希薄化が懸念される。また児童・生徒の身体活動は心身の健全な発育のために重要であり、それらを通じて社会性の発達が可能であるとともに、小児期は健康のために良い習慣を定着させる重要な時期でもある。しかしながら各種調査報告では、テレビゲームなどの非活動的余暇時間の増加などにより、生徒・児童の身体活動量は低下傾向にあり、また運動を実施する児童・生徒と、しない児童・生徒の二極化も問題点として挙げられている。このような社会環境の中で、総合型地域スポーツクラブは運動や文化的な活動を通じた地域コミュニティの構築や、地域活性化への貢献が期待されている。そこで、大在地区の総合型地域スポーツクラブ（以下、OZAI元気クラブ）で身体活動を通じた地域コミュニティの構築と、子どもたちの運動への関心を高めるためのイベントを、学生自らが企画し、広報活動や運動指導・支援を実践することを通して、スポーツビジネスコースやNSCA認定校カリキュラムで学習した専門知識や技能を活用し、それらを高めるとともに学生のコミュニケーション能力の向上を目指し、将来の地域創生に貢献できる人材の育成を目的とした。



取組内容 運動指導・支援においては、誰もが取り組める運動としてレクリエーションスポーツの「チャレンジ・ザ・ゲーム大会」（以下、CG大会）を年間5回（7月、9月、11月、1月、3月）、「かけっこ教室」を1回（8月）、「おおざいクイズラリーウォーク」を1回（3月にCG大会と合併）計画・実施したが、CG大会の4回目は降雪のため中止となった。イベント指導・支援は教員・学生が主体で行い、OZAI元気クラブのスタッフが補助をする形で実施した。また「かけっこ教室」ではより専門的な知識を必要とするため、本学陸上競技部とコーチ、陸上競技部の選手7名に協力頂いた。広報活動はOZAI元気クラブが行っているチラシを使った活動を行い、広報に効果的なチラシを話し合いながら作成し、イベントごとに大在小学校と大在西小学校に全戸配布した。またOZAI元気クラブも地元タウン誌を活用してイベントの告知を行った。

地域での成果 CG大会では計4回に保護者と合わせて27名の申し込みがあり、非常に高いリピート率であった。また子どもの頑張りに感動して保護者が涙を流す場面もあり、身体活動を通して教育的な効果も十分に得られたと考えられる。またその場面に遭遇した学生にとっても非常に高い教育的な効果があったと考えられる。「かけっこ教室」では児童・生徒46名の参加があり、保護者に対するアンケート調査（27名）では、「目的の達成」について、達成できた（20名）、達成されなかった（1名）、分からない（4名）、未回答（2名）であった。「プログラムに対する満足度」は、大変良かった（16名）、良かった（11名）であった。「学生スタッフの印象」は、大変良かった（20名）、良かった（7名）であった。「指導者の印象」は、大変良かった（19名）、良かった（6名）、未回答（2名）であった。

学生の学び 活動を通してゼミナールでの学生間のコミュニケーションが非常に活性化した。また学生からの積極的な発言や自身の考えをしっかりと伝えるなどコミュニケーション能力の向上が感じられた。また子どもたちや保護者とのふれあいや、「おおざいクイズラリーウォーク」では地域を実際に歩いて地域の方と話をしたり、インターネットなどを通じて地域について学んだりすることで、学生にも地域への愛着や地域社会への関心が生まれた。これらは地域を創生していく上で非常に重要であると考えられる。

今後の展開 これまでのイベントを維持しつつ、運動指導・支援の内容をNSCA認定校カリキュラムの内容が活用できるプログラムにし、大学施設を活用した取り組みの検討。またイベント型から教室型といった指導期間のあるプログラムの実施。地域のニーズに合ったプログラムを実施できるようにニーズ分析を行うなど、より一層、地域と密着した活動を目指す。

『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分ですることができないことにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おいた、つくりびと』になりたい。

地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究



実施体制：鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏（経営経済学科）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：豊後大野市高齢者福祉課・千歳町市民交流の場「楽しく広場ひょうたん」

概要 豊後大野市の実施する住民主体の介護予防に向けた地域づくりは、地域全体に一定の効果を与えているが、さらに、この実践を通して新たなニーズの充足や地域課題の解決に向けた取組みへと展開できる可能性がある。そこで、この研究では、「地域づくりによる介護予防」を「地域における住民間での互助や交流を通して、高齢者が地域の中で生きがいや役割をもって生活できるようにすることで、介護を予防する効果をあげる取組」と位置付けた。このような取組を実践するために、まず、これまでの地域づくりを基盤に、域学協働で、①住民間での互助（助け合い、支え合い）や交流ができるように下地を作る、②参加者が地域の中での生きがいや役割を持つために、何ができるのかを考える機会を提供することにした。具体的には、大学から新たなニーズに対応した介護予防活動の提案・実践を行い、地域の有機的な連携の関係づくり（住民間のよりよいつながりを促し、地域内の互助関係の構築）ができるよう地域住民とともに実践し、今後の住民主体の地域づくりによる介護予防の方向性を模索する。それから、この取組が及ぼす地域への効果を検証するとともに、この活動を本学の教育プログラムの一環として実施することで、本学学生に対する効果（社会人基礎力の向上等）についても検証を行う。

取組内容 本年度は、本研究を進めるにあたり、豊後大野市でこのような支援が必要なのかということを地域診断により検討（地域課題としての該当性の判断）し、必要であれば、どのような高齢者を対象にすべきか（対象者の選定）、どのように支援すべきなのか（支援の目的とその方法）を考察し、大学として地域課題解決に向けた取組にどう関わるか（域学協働のあり方）を検討し、これを地域志向教育の中に取り込むための教育プログラムの構築を試みた。また実際に検証を行うに当たり、地域づくり活動の参加者の増加と取組の方向性を確認する必要があると考え、千歳町市民交流の場「楽しく広場ひょうたん」の活動サポートを行った。

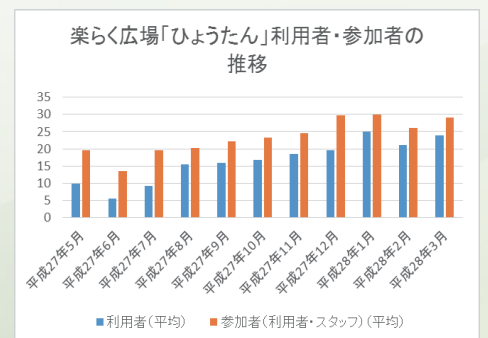


幼稚園児との交流（クリスマス会）

地域での成果 ○地域づくり活動への参加者（利用者・スタッフ）の増加
ひょうたんの参加者の推移を見ると、大学との協働での取組以前は、平成27年7月の利用者の平均は9.3名、参加者は19.7名であった。協働での取組から7か月後となる平成28年2月には、利用者の平均が21.2名、参加者は26名となっている。

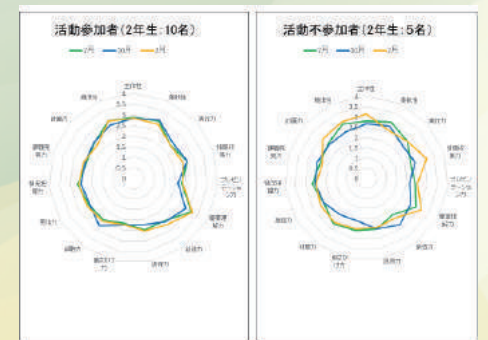
○他世代（幼稚園児など）との交流

この活動の感想として「普段はなかなか地域の子どもたちを見ることもなく、接する機会がほとんどないので、この活動（幼稚園児との物による交流やクリスマス会での交流）をとおして、スタッフ・利用者ともに地域の子どもを知る機会、関わる機会ができたことはとても良かった」という意見をいただいた。



楽しく広場立ち上げから参加者の推移

学生の学び 地域づくり活動サポートに参加することにより、これまで社会人基礎力を主観的基準による自己評価（その時々で異なる）で行っていたものが、活動を通しての客観的基準による自己評価（一定した基準）へと変化している。また参加学生の振り返りシートなどからは、今後、社会に出るために必要なレベルの社会人基礎力の自覚が見られた。



活動参加・不参加者の社会人基礎力の差

今後の展開 本年度は、活動サポートを行うことで、参加者の増加という面では、一定の成果はあったのではないかと考えられるが、今後は、この活動に参加したことによる効果についても、実証研究（質的調査、量的調査）を行っていく。また、この調査とともに本研究を活用した教育プログラムの構築が必要である。

『おいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分ではできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『おいた、つくりびと』になりたい。



地域活性化プロジェクト 「楽・楽マルシェ」での取組報告

実施体制：吉村 充功（建築学科）、吉本 圭一郎（経営経済学科）

実施フィールド：大分市佐賀関地区

連携機関：NPO法人さかのせき・彩彩カフェ



概要 少子高齢化が急速に進んでいる大分市佐賀関地区（4,613世帯、人口9,386人、65歳以上の割合を示す高齢化率50.1%（平成28年2月末現在））。平成22年から平成32年までの10年間で約1割以上の人口が減少する見通しもあり、地域コミュニティの維持が大きな課題となっている。

現在、佐賀関地区のNPO法人さかのせき・彩彩カフェは、地域住民の生活支援活動や住民のふれあいの場を設け、地産料理や小規模多機能施設を運営するなど地域コミュニティの維持を目的とした活動に精力的に取り組んでいる。

本活動では、当該NPO法人と協働して地域の課題を考え、その解決を目指して取り組んでいく。学生は、地域の課題を考えるとともにNPO法人や地域住民の人々との交流を通じて、チームで働く力や考え抜く力、前に踏み出す力を養う。またこの活動が、理論と実践の融合をはかる場や機会のひとつとなることも期待している。

取組内容 毎月第4土曜日実施されている地域交流イベント「楽・楽マルシェ」に参加し、学生主体で模擬店を運営した。模擬店では地元野菜の販売をおこなったり、学生自身で考案した商品を販売したりした。
また、佐賀関市民センターでおこなわれた「関の夜市」に参加し、模擬店を出店した。



地域での成果 高齢者が多いこの佐賀関地区の交流イベントに域外の若い学生達が参加し活動することは、地域に活気をもたらし、にぎわい創出の一助にもなっている。

学生の学び 「楽・楽マルシェ」では現金管理を複式簿記で記帳しておこない、事後、NPO法人の代表者に報告している。
「関の夜市」では、模擬店運営をするにあたり、事前にマーケティングの4P分析や予算設定、損益分岐点計算などの原価計算を行った上で臨んだ。そして事後、結果分析を行った。
学生からは「授業で学んだことを実際に使うことで意味がよくなった」、「利益を上げることの大変さがわかった」などの意見が聞かれた。

今後の展開 今後は引き続き「楽・楽マルシェ」の活動を継続し、さらにNPO法人の経営分析や決算支援業務などの活動にも取り組んでいく予定である。



あおいた、つくりびと

『あおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『あおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分のできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く
『あおいた、つくりびと』になりたい。

道の駅「原尻の滝」インターンシップ



実施体制：泉丙完、韓在石、許星愛、（経営経済学部）申東海、朴正訓（工学部）

実施フィールド：豊後大野市

連携機関：道の駅「原尻の滝」、全国道の駅連絡会

概要 韓国人留学生が、豊後大野市の道の駅「原尻の滝」で、インターンシップを行った。留学生らにとって馴染みがなかった原尻の滝において、インターンシップ活動を行うことにより、地域住民との親睦や交流を深めることができ、また、原尻の滝を多くの外国人客にもアピールするきっかけにもなった。

インターンシップ先の道の駅「原尻の滝」からは、留学生が行った外国人客向けの広報活動や、地域の祭りの手伝いに対して感謝とともに高い評価をいただいた。

取組内容 インターンシップに参加した学生は、男性2人、女性2人の計4人で、活動期間はH27年8月10日～8月23日までの13日間、主な活動内容は次の通りであった。

1. 外国人客向けサービスの提案
韓国語でのパンフレット、案内等の作成
2. 現地販売実習及び改善活動
現地での物品販売及び学生の視線による、販売活動への改善、助言
3. 新規顧客、リピーター向けの提案
インターネット広告等を活用した新規顧客及びリピーター向け提案
4. お祭りイベントの準備支援
地元の小松明火祭りの準備、手伝い

これらの活動に対し、道の駅「原尻の滝」の吉野駅長から、韓国人

地域での成果 これまで、道の駅「原尻の滝」では、韓国人客に対して案内や説明等の対応が不十分であったが、学生らが作った韓国語版の案内表示やパンフレットによりそのサポートが可能になった。また、学生の視点で製品やサービスのアドバイス等を積極的に行った。



大分合同新聞の記事（平成27年9月29日）



外国人客向けサービスの実施※

学生の学び 本活動を通して、学生らは、原尻の滝での実践的な問題解決の能力を高めることができた。特に、将来、日韓交流に携わるビジネスを目指している留学生にとっては、有意義な経験であった。また、地域の住民との交流を通し言葉や日本の文化に対する知識を深めることができた。



作成した韓国語パンフレット※



作成した韓国語パンフレット※

今後の展開 今後も継続的に道の駅においてインターンシップ活動を行うことで、学生らが、地域創生にどのような貢献ができるかを検討しつつ、実践的な教育を行う場とした。

※全国道の駅連絡会HPより抜粋



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない「ほんとうの豊かさ」とは何だろう。日本の未来を担う若者ができることは？
きっと、その答えはひとつではありません。
だからこそ今、私たちは動き始めます。
そのステージは、私たちの大学がある大分県。
大分への愛着を勇気に変えて、大分のできないことにチャレンジします。
地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。
私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

6次化産業の取組



実施体制：工藤 順一（経営経済学科）

連携機関：大分市産業振興課 地域産業育成担当班

概要 農山魚村地域では、少子高齢化による担い手となる人材の不足、また、輸入競争による農林水産物の価格の低価格化など、大きな問題を抱えている。その一つの解決策として、地域の特産品をいかした農林水産業・加工業・サービス業を掛合せた6次化産業が各地で試されている。特に6次化によって創出される産物に関しては、都市部などでの販売に活路を見出す場合が多く、商品開発やデザイン開発等において、若者の声を必要としている。このような地域（企業）における6次化産業の取り組みに学生が参加することは、若い消費者の意見を企業の活動に反映できるだけでなく、学生自身も経営能力等の専門力を高めることができ、ひいては、地域の活性化につながると考えられる。

取組内容 【背景】

米から純米酒を作る生産活動においては、田植え・稲刈り・酒の仕込み・初搾りといった一連の活動がある。宇佐市安心院町松本で生産される「純米酒イモリ谷」では、農家や醸造会社が一体となった地域ぐるみの活動が行われており、このお酒を販売に関与する全ての会社は、一連の生産活動に参加する必要がある。これらの活動を通して、地域が一体となった6次化生産活動が可能となり、地域の活性化に対する意識が芽生えてくる。このような活動に学生が参画することで、経営経済学科の専門知識からの視点と、6次産業化に向けた地域活性化の視点が組み合わさることが期待される。



【現在の活動内容】

1. 大分市6次産業化セミナーへの参加

6次産業化の基礎を学ぶため、大分市産業振興課主催の「食品の表示方法」や「効果的なマーケティングの方法」等各種セミナーに参加している。学生は、会場準備や研修の受付を体験。また、研修終了後は研修の担当者に大分市の施策や6次産業の育成についていろいろなお話を伺った。



2. 大分県内企業との連携

6次産業化を実践的に学ぶため、県内の元気の良い企業の経営者に大学のゼミナールに参加していただき、事業の内容、採用方針、学生に期待するもの等について講演をいただいている。また、米麴を使った新商品を開発し販売している企業の活動に参加し、試飲や商品化に向けた企画作りを学んでいる。



今後も上記1、2のような活動を広げていく予定である。

学生が過疎化しつつある地域に行き、そこで頑張っている企業の活動と一緒に参加することで、元気がなかった地域も少しずつ活性化。学生は、地域の人々が気が付かないような地域の良さ（資源）を発見し、商品化を提案する。そのとき、学生は、経営経済だけの知識でなく関連する学問（農学系や工学系）も学ばなければならない。また、多くの人々と接する中で、人々の優しさを知り、地元企業への就職を本気で考えるようになる。そして、地元企業へ就職し、将来的には起業も考える。そのような展開につながることを期待している。



今後の展開 学生が魅力を発見し情報提供することで、地域マネジメント、マーケティングの手法を学ぶと同時に、自己ブランドを確立する。また、フィールド活動によって、一般社会人としての常識や人間力の育成が図られる。

学生がまちの魅力を発掘することで、商店街の活性化に寄与するとともに、フィールド活動を行うことで、ノウハウの継承と継続的な商店街の発展に寄与することを目指す。

教養基礎教育における地域志向科目の 全学必修化～『大分学・大分楽』『産学一致の勧め』ほか



実施体制：各科目担当教員、人間力育成センター

実施フィールド：大分県

連携機関：大分県、大分市、大分商工会議所、大分県中小企業家同友会、県内NPO法人、県内企業

概要 「地域創生人材」育成のための学部・学科によらず根幹となる科目の全学必修化により、すべての学生が地域に関する科目を卒業までに12単位以上履修することとした。地域学の導入科目である1年前期「大分学・大分楽」（2単位）を平成27年度入学生より全学必修とした。また、全学共通の教養基礎科目の必修科目のうち、6科目10単位の教育内容を見直し、地域志向科目として設定した。

取組内容 平成27年度開講の教養基礎教育（全学共通）における「地域志向科目」の開設状況は、下表の通りである。



学年	1		2	
	前期	後期	前期	後期
教養基礎科目				
	【必】大分学・大分楽(2)	【必】社会参画実習1(1)	【必】社会参画応用【キャリア型】(2)	【必】社会参画実習2【キャリア型】(1)
	【必】人間力概論(2)	現代社会要論(2)	社会参画応用【企業(2)課題型】	社会参画実習2【企業課題型】(1)
	【必】社会参画入門(2)	森里海連環学と地球的課題(2)	【必】産学一致の勧め(2)	
	提携講座(ボランティア概論)(2)			

※【必】は必修科目、それ以外は選択科目。科目名の後ろの()は単位数。

※ カテゴリーⅠ：地域での体験交流活動を教育内容に含む科目

カテゴリーⅡ：地域における課題解決に必要な知識を修得する科目

カテゴリーⅢ：ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目

【大分学・大分楽】（学部毎に開講）

多様な講師陣より講話を受け、大分の魅力を多面的に学び、楽しみ、魅力的に育む（獲）導入とする。学内教員の他、大分商工会議所 姫野清高会頭も講演。

【産学一致の勧め】（学部毎に開講）

大学と産業界、社会、地域をつなぐことを意識しながら、良き社会人として活躍するキッカケとする。

① 大分県中小企業家同友会の講演（学部毎3名）：(株)光建エンジニアリング、大分パブリックリゾー(株)、法友建設(株)、(株)SOA大分、(株)ひなの里山陽館、(株)翼

② 県内で活躍するNPO等の講演（学部毎2名）：NPO法人夢苞、NPO法人大学ジョージムおおいた、NPO法人日本少年少女育成プロジェクト、おおいた地域若者サポートステーション

【社会参画入門】（担任毎に開講）

アカデミックスキルの習得のほか、早期に社会との関わり方を体感するため、県内の企業等の取材を行う。

〔取材先例〕フド-キ醤油(株)、(株)菊家、(株)豊和銀行、大分県信用組合、大分県

【社会参画実習2】（学科クラス毎に開講）

キャリア開発プログラムとして、業界研究等を行う。大企業と中小企業、全国企業と地域企業の違いも理解する。

〔取材先例〕新日鐵住金(株)、佐伯重工業(株)、パークプレイス大分(株)、(株)オーガス

地域での成果 本地域志向科目で「おおいた」に関する知識を習得し、関心を持った学生が、専門教育科目や正課外活動で地域で実践活動を行うことにつながった。

学生の学び 県内企業の社長等から大分の企業の魅力を講話いただいたり、企業取材で実際に会社を訪問させていただくことで、県内企業について正しく理解するきっかけとなった。

今後の展開 次年度以降についても、各種団体、企業、地域等と連携しながら、体系的にプログラムを構築することで、学生の地域への興味、関心、理解の向上を図っていく。



身近な政策課題を題材とした課題解決型学修 ～『社会参画実習1』における学部混成ワークショップ



実施体制：人間力育成センター（統括）、各学科1年担任

実施フィールド：大分県、大分市

連携機関：大分県、大分県警察本部、大分市

概要 1年教養基礎科目「社会参画実習1」（必修）では、学科の異なる学生でチーム活動を行い、社会で必要な人間力、社会人基礎力（特にチームで働く力の基礎）＝ジェネリックスキルの向上を図った。授業では大分県・大分市の身近な政策課題に対して、チームで課題の整理や根拠のある提案を行う活動を行い、成果を企画書としてまとめ、プレゼンテーションを行った。また、代表チームは自治体担当課へ直接発表を行った。



取組内容 原則として工学部と経営経済学部からなる13クラスを編成し（担当教員はそれぞれの学科の担任がチームティーチングで行う）、全80チーム、481名の学生が下記の5つのテーマのうち、いずれか1つを選択し、下表の授業スケジュールで活動を行った。

【設定したテーマ（大分県・大分市が進める施策）】

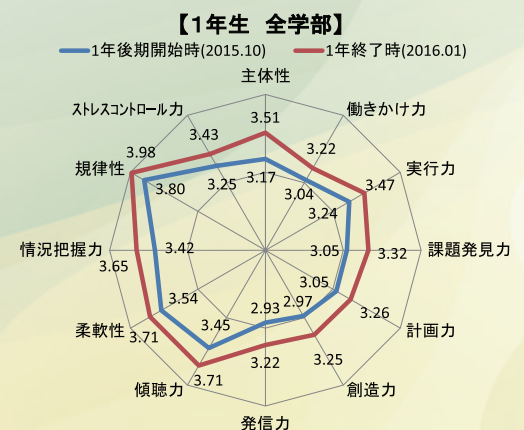
- ① ゴミ捨てに関するマナーと減量・リサイクル（大分市 清掃管理課）
- ② 自転車のルール・マナー（大分市 都市交通対策課）
- ③ 選挙権の18歳への引き下げ（大分市 選挙管理委員会事務局）
- ④ 特殊詐欺の撲滅（大分県警察本部 生活安全部 生活安全企画課 安全・安心まちづくり推進室）
- ⑤ 若年者の就業問題（大分県 商工労働部 雇用・人材育成課）

主な授業日時	授業内容
11月2日～	ワークショップクラスで活動を開始
11月9日	⑤担当者 出張教室
11月16日	①～④担当者 出張教室
～12月14日	混成チームによるWS（情報収集・分析・課題発見・アイデア整理・企画書作成・プレゼン準備）
12月21日	全チームの成果発表会 ⇒ 各教室で優秀チームを選出
1月18日	優秀チームによる 県・市への成果発表会 (県・市の担当者が来学)

地域での成果 全80チームが、政策テーマに対して、より促進したり、若者が参画する具体的な取り組み提案を企画書としてまとめた。また、代表12チームは提案内容を自治体担当者に対して直接発表し、政策推進の参考にしていただくことができた。

学生の学び 本科目内で学修サイクルを回した結果、チーム活動を通じて、学生の社会人基礎力の自己評価が全体的に向上した。右図は事前と事後の学生自己評価の全体平均値である（5段階評価）。社会人基礎力の12の要素すべて統計的に有意な自己評価の伸びが確認できた。特に「主体性」「課題発見力」「創造力」「発信力」の伸びが大きく、本科目の目的を達成できた。

今後の展開 1年生の全学生が基礎となる学修サイクルを経験できたことから、2年次以降の専門教育科目で各学科の特徴に応じた地域志向科目の受講に展開していく。



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない『ほんとうの豊かさ』とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できないうちにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。



地方創生のための “おおいた”企業求人動画制作

実施体制：吉村充功、高見大介（建築学科）、鈴木照男、泉丙完（経営経済学科）、市田秀樹（COC事業担当）

実施フィールド：大分市、豊後大野市

連携機関：(株)地域経済情報センター、(株)ロックス・カンパニー、大分県コミュニティビジネス創造機構

概要 少子高齢化や地方の人口減少への打開策の一つとして東京一極集中を是正するための地方創生政策が動き出している。その中で若者の大学進学時及び就職時の地方から大都市圏に向けた人口流出を食い止める必要性が求められている。そのためには、地域の企業の雇用問題、1)地域企業の魅力発信、2)雇用のミスマッチ、3)地元企業への地元大学からの就職率向上、4)若手社員の定着率向上の解決が必要である。そこで、“おおいた”地域の企業リクルートビデオ作成することで、地域企業の魅力を発見し、企業の雇用問題の解決に寄与していくことをねらった。



企画提案・取材の様子

取組内容 本プロジェクトは、2年生教養基礎科目「社会参画応用2（前期）」および「社会参画実習2（後期）」＜企業課題挑戦型クラス＞として実施を行った。リクルートビデオの制作にあたっては、大学×企業×NPOが協働して、学生達が若者目線で地域企業の3分程度の動画の制作を行い、同世代の若者などに広く地域企業の魅力を伝えた。



インタビューの様子

H27年度においては、①協栄工業(株)、②リファイン大分(株)、③大分デバイステクノロジー(株)、④(株)ジョイフル、⑤光建エンジニアリング(株)、⑥(株)豊和銀行の6社についてのリクルートビデオの制作をおこない、動画共有サイトYouTubeに動画を掲載している（YouTubeチャンネル「おおいたつくりびとNBU COC」）。

地域での成果 企業の求人ターゲット（学生）に対して、学生目線での動画について一定の評価を得ることができている。特に企業側が伝えたい情報と学生が知りたい情報の差を、企業求人動画制作を通じて企業側が知る事が出来ており、求人に対しての新しい視点獲得に繋がっている。また、制作した動画については、Webでの公開の他に、就職説明会等で再生されている。



大分合同新聞（2015年8月2日付）

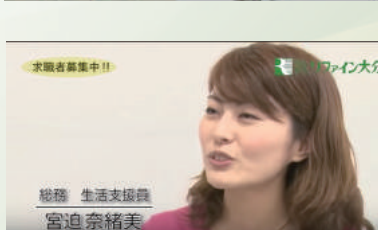
学生の学び 動画制作においては、学生自らが、企画書の作成・提案、取材、動画撮影・編集のプロセスを行うことで、実際のビジネスの現場を学べ（OJTの要素）、実際のビジネスを行う上で必要なビジネススキル、ジェネリックスキル、ビジネスマナー等を学ぶ事が出来ている。また、これまで知らなかった企業の魅力を発見したり、既知の企業においても、普段、外からは見えないシゴトの存在など新たな発見につながり、今後の就職活動での企業選択での新たな視点確保に繋がっている。

今後の展開 今後、継続的に展開しながら、“おおいた”企業の魅力を企業求人動画を通じて発信し、雇用のミスマッチや地元企業への地元大学からの就職率向上に繋げていく。



毎日新聞（2016年1月29日付）

【企業求人動画一覧 2015年制作分】



リファイン大分(株)



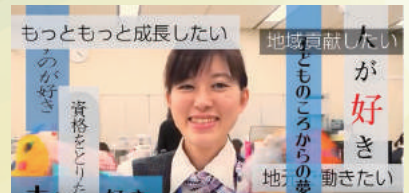
協栄工業(株)



光建エンジニアリング(株)



(株)ジョイフル



(株)豊和銀行



『おおいた、つくりびと』について。

私たちは、このプロジェクトを『おおいた、つくりびと』と名付けました。お金やモノだけでは計ることができない『ほんとうの豊かさ』とは何だろうか。日本の未来を担う若者ができることは？ きっと、その答えはひとつではありません。だからこそ今、私たちは動き始めます。そのステージは、私たちの大学がある大分県。大分への愛着を勇気に変えて、大分できないうちにチャレンジします。地域の皆さんとともに、もっともっと元気なまちをつくります。私たちは大分県の未来を拓く『おおいた、つくりびと』になりたい。

大分チャレンジアワード ：青少年体験活動奨励制度



実施体制：人間力育成センター

実施フィールド：大分県内各地

連携機関：大分県農林水産部、香々地青少年の家、大分県立社会教育総合センター、
公益財団法人森林ネットおおいた、豊後大野市商工会犬飼支所 他

概要 正課外活動として、文部科学省「青少年体験活動奨励制度（チャレンジアワード）」大分版の活動に取り組んでいる。本年度は20名の学生が挑戦し、17名が修了した。「青少年体験活動奨励制度」は、14歳から25歳の青少年が様々な体験活動を行うことを奨励する制度で、本学では大分の豊かな自然をフィールドとして実施している。「自然」「運動」「ボランティア」「教養」の4領域の体験活動を一定期間継続した実績に応じて、修了証（アワード）が文部科学省から授与される。



取組内容

【自然体験】



- 「豊後大野市の自然を体感する」（ジオパーク）11月14日～15日実施
- 「豊後大野市犬飼町の自然を体感する」（里山保全）11月14日～15日実施
- 「豊後高田市の自然環境について学ぶ」9月1日～2日実施

【ボランティア体験】



- 大分市久土地区における里山保全活動
- 豊後大野市犬飼町の活性化に向けたイベント企画運営

【運動体験】



○軟式球での遠投の飛距離を伸ばす為のトレーニング、運動不足解消に向けた持久走等

【教養体験】



○宅地建物取引主任者の取得に向けた学習、数学に対する苦手意識を克服する為の学習等

学生の学び アドバイザーの指導のもと活動することで、17名の学生が継続的に体験活動する習慣を身につけた。自然体験活動やボランティア活動を通じて、大分県内の自然や文化についての魅力を感じ取ることができた。

今後の展開 「大分チャレンジアワード」として次年度も運用し、年間20名の修了者輩出を目指す。



実施体制：人間力育成センター、各学科教職員

実施フィールド：日本文理大学県央空港エクステンションキャンパス（豊後大野市）

連携機関：(株)豊和銀行、シセイ・アグリ(株)

後援：豊後大野市、豊後大野市教育委員会

概要 豊後大野市において、小学生にリアルなお仕事体験をととして「お仕事とはなんだろう?」「はたらくことの大切さ」など、楽しみながら社会のしくみが学べる機会を提供するために、H27年7月4日に「小学生のお仕事発見ランド」をNBU県央空港キャンパスにおいて開催した。当日は、本学の学科構成に関係する職業や、地元企業である(株)豊和銀行やシセイ・アグリ(株)の協力を得て、地域の職業についての体験企画を催した。体験教室を本学の拠点の一つである県央空港キャンパスを会場とし、本学教職員だけでなく、学生が運営に関わることで、地域住民に本学の当地での活動に対する理解を深めていただく機会とした。

取組内容 小学生述べ150名を受入対象とし、下記6つのお仕事ブースを開設、運営した。1回20分を基本として各ブースを同時進行し、3クール70分、1人あたり最大3回のお仕事を体験できるようにした。12:00～と13:30～の2クールを受付、実施した。また、未就学児等を対象とした輪投げや三輪車で遊べる「レクリエーションスペース」も開設した。

- ① 航空整備士のお仕事：航空宇宙工学科（格納庫）
- ② 銀行のお仕事：経営経済学科 及び 豊和銀行（講義室2）
- ③ インテリアのお仕事：建築学科（講義室2）
- ④ ゲームクリエイター：情報メディア学科（講義室2）
- ⑤ 自動車塗装のお仕事：機械電気工学科 及び シセイ・アグリ(株)（屋外）
- ⑥ 椎茸農家のお仕事：人間力育成センター（屋外）



地域での成果 本企画に対し、市内小学生64名が参加した。保護者アンケートの結果より、全体評価として「大変良かった」82%、「良かった」18%となった。また、本学の地域貢献度として、82%が「とても貢献している」と回答した。

学生の学び 30名の本学教職員・学生スタッフが6つの体験ブース、レクリエーションブースにわかれて運営を行った。学生は小学生への説明、指導を通じて、習った専門の知識をわかりやすく説明するコミュニケーション力の向上につながった。

今後の展開 地域ニーズを確認しながら、今後も県内での定期開催を検討する。

3. 地域志向プロジェクト研究 卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト

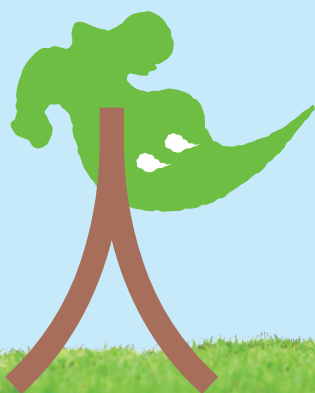
平成 27 年度地域志向プロジェクト研究

・実施報告書

プロジェクトテーマ

- 大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発
- 要介護者のコミュニケーション支援システム開発
～共通プラットフォームによる効率良いICT技術の利活用～
- 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する産学協働プロジェクト研究
- 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発

卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト



地域創生を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する基礎研究

川崎敏之¹，池畑義人²，坂井美穂³，小幡章⁴

¹ 日本文理大学工学部機械電気工学科，² 同建築学科，

³ 同情報メディア学科，⁴ 同航空宇宙工学科

研究成果の概要：地域創生を目的としたプラズマ農業に関する基礎研究を行った。プラズマを用いた活性酸素（ROS）供給による植物の生長促進について調べ、農業に応用しようとするものである。これが近年注目されているプラズマ農業である。今回、貝割れの種子にプラズマを直接照射し、照射時間が生長に与える影響を調べた。プラズマは最大で120秒間照射した。今回の実験条件下においては、平均草丈は照射時間10、30、60秒間照射において同程度であったが、照射時間60秒の時に最も草丈のばらつきは小さい結果となった。一方、照射時間120秒の時には発芽しない種子もあった。プラズマの照射時間が貝割れ種子の発芽と成長に影響を与えることが実験で明確に示された。

1. 研究の目的

安全安心な食糧供給は世界的な課題であり、農業に関わる食料・環境問題の克服を飛躍的に進める新規科学技術が強く求められている。そのような中、大分県は農林水産業が盛んで、食料のブランド化が大分県主導で推進されている。農林水産業関連の研究開発が大分県では精力的に進められている。本研究はこれらの中で特に農業の活性化に対してプラズマ技術で貢献することを目的とする。

大分県は豊かな自然と大地のおかげで農業が盛んに行われている。しかしながら、図1に示すように、大分県における農家数は減少傾向にある。また、図2には大分県の年齢別農業就業人口の推移を示す。40歳未満の若者が特に少ないのが現状で、高齢化、後継ぎ不足という状況が加速傾向にある。図3には九州各県の主業農家率を示す（主業農家：農家所得の50%以上が農業所得で、1年間に60日以上自営農業に従事している65歳未満の世帯員がいる農家）。九州7県の中で最も主業農家率は低く、早急な解決が求められている。このような状況を改善することを目的に大分県では、ホームページ等において「新しく農業を始めたい方」という就農相談に関する取り組みも行われている。

近年、農業への新しいアプローチとしてプラズマ技術が現在注目されている（プラズマ農業）。プラズマを用いた殺菌、ウイルス不活化による害虫駆除⁽³⁾、水中放電を利用した生長促進⁽⁴⁾、種子へのプラズマ照射⁽⁵⁾などが報告されている。プラズマ農業はまだ比較的新

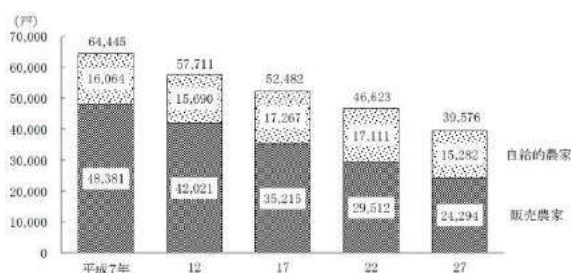


図1 大分県における農家数の推移 (1)

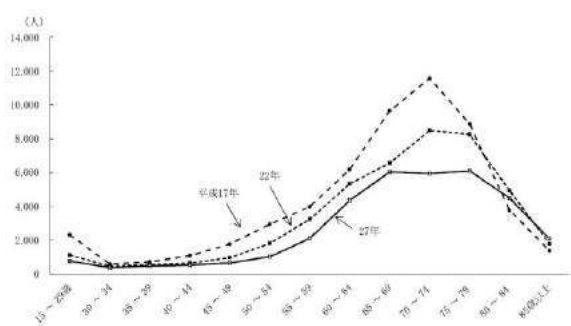


図2 大分県の年齢別農業就業人口の推移 (1)



図3 九州各県の主業農家率 (2)

しい研究分野であるため、解決すべき課題が多く残されているのが現状で実用化はされていない。よって、このプラズマ農業による大分県農業の活性化は非常に有効であると考えられる。大分県発農業技術としてのブランド化が可能である。

本研究ではプラズマ農業によって大分県農業が抱える課題を解決することを主な目的とする。今まで農業に関係のなかった大分県企業の農業の参入も期待される。まず今回は大分県内の農業関連事業・産業との連携への足掛かりを構築するための基礎実験を行った。プラズマ照射時間と植物生長との興味深い関係が得られたので報告する。

2. 研究の方法

図 4 に実験装置の概略図と種子へのプラズマ照射の様子を示す。プラズマジェット発生器本体は、外径 8 mm、内径 2.5 mm のガラス管に、図に示すようなサイズ、位置に電極 2 枚を巻き付けたシンプルな構造となっている。ガラス管出口側の電極に高電圧 (20 kV_{p-p}, 3 kHz) を印加し、もう一方の電極は接地している。ヘリウムガスに酸素を 1% 添加した混合ガスをガラス管に流量 3 l/min で供給した。プラズマジェットは大気開放の空間で発生させ、距離 10 mm で種子 (貝割れ、水に 5 時間浸したものに照射した。種子へのプラズマ照射の様子を図中の写真に示す。照射時間は 10, 30, 60, 120 秒間とし、今回は照射時間が種子の発芽、成長に及ぼす影響を調べた。

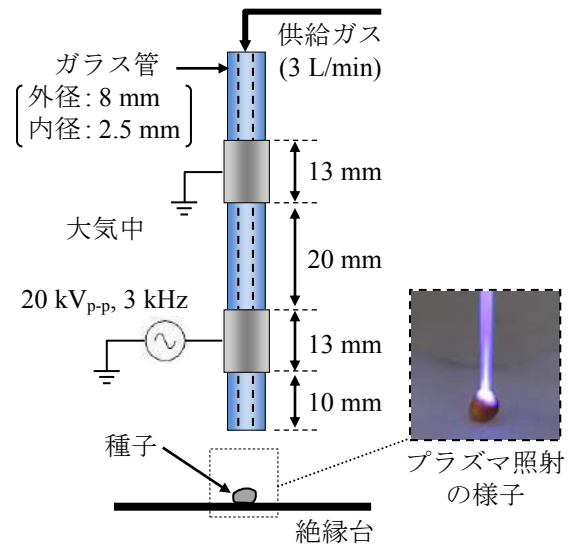


図 4 実験装置概略図とプラズマ照射の様子

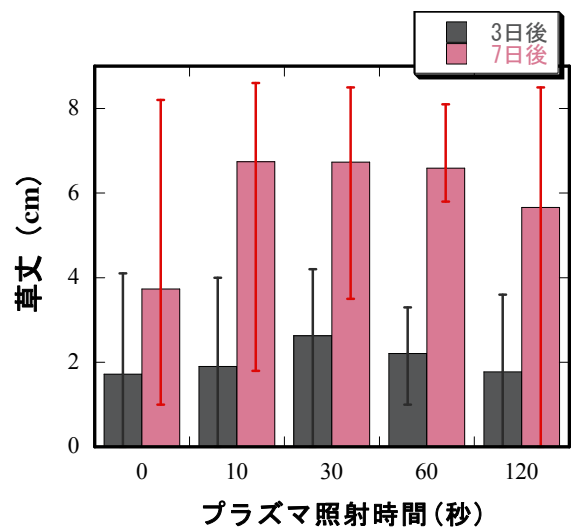


図 5 プラズマ照射時間と貝割れ草丈の関係

3. 研究成果

図 5 にプラズマの照射時間と貝割れの草丈の関係を示す。それぞれの時間における 3, 7 日後の平均値を示す (各条件で 10 個の種子に照射)。横軸の 0 秒はプラズマを照射していない場合を示す。3 日後の草丈を比較すると、照射時間 30 秒において若干長い傾向にあるが、草丈に与える影響は比較的小さいものと考えられる。一方で、7 日後の場合では、照射時間 10, 30, 60 秒の草丈が、0 秒に比べて約 1.8 倍程度長い傾向にあった。60 秒以上の 120 秒になると草丈は減少した。0 秒と比較したこの草丈の変化はプラズマ照射の効果であろうと思われる。では、今回の実験条件下においては照射時間 10~60 秒の効果は同じかというところでもなさそうである。図 5 に示したエラーバーは草丈の最小値と最大値を示している。この数値をまとめたのが表 1 である。照射時間 60 秒の時、草丈の最小値と最大値の差が 2.3 cm と最も小さい。また、照射時間 120 秒の場合では発芽していない種子があることも示され

表 1 草丈の最大値と最小値

プラズマ照射時間 [s]	草丈 [cm]		
	最小	最大	範囲
0	1.0	8.2	7.2
10	1.8	8.6	6.8
30	3.5	8.5	5.0
60	5.8	8.1	2.3
120	0	8.5	8.5

ている。これらの結果は、今回の実験では照射時間 60 秒が発芽と草丈の生長においては最も良い照射時間であることを示している。今回は草丈でしか評価していないので、今後は

遺伝子レベル、栄養価などの観点での評価も必要である。

4. 今後の展開

今回は比較的成長が早い貝割れの種子をターゲットにしたが、今後は全ゲノムが解読されているシロイヌナズナを用いることによって、プラズマの影響を遺伝子レベルで評価しなければならない。また、プラズマの影響は植物の種類によっても効果が異なると言われているので、様々な植物を対象に議論しなければならない。

本研究では自然エネルギーによりプラズマを発生させることも重要項目の1つである。今回、自然エネルギーの利用まで進めることができなかつたことが悔やまれる。今後早急に進めていきたい。

本研究では同時に種子に供給されるROS分布の可視化や定量化を進めている。これらの実験によって、照射時間ではなくROS供給量と生長との関係も明らかにしていきたい。

また、本研究と地域とのネットワークもまだ構築されていない。今後、本研究結果を明確に示すことができるデータをより多く蓄積した後に先に進めていきたい。

謝辞

本研究は次の学生の協力のもとに遂行されました。日本文理大学機械電気工学科2年生の足立拓也君、伊東巧君、同学科4年生の久壽米木捷太君、工藤章裕君、坂之下朋大君、鶴丸拓也君、佐藤晃弘君。ここに感謝の意を表します。

参考文献

- (1) 2015年農林業センサス、大分県企画振興部統計調査課資料(平成27年11月27日公表)より抜粋。
- (2) 大分県HPより(<http://www.pref.oita.jp/site/syuraku/genjyou.html>)
- (3) 林信哉ら、日本AEM学会誌, 22(2014)447.
- (4) J. Takahata ら, Jpn. J. Appl. Phys. 54(2015)01AG07.
- (5) 小野大帝ら, 電学論 A, 135(2015)347.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

1. T. Kawasaki, W. Eto, M. Hamada, Y. Wakabayashi, Y. Abe, and K. Kihara, "Detection of reactive oxygen species supplied into the water bottom by atmospheric non-thermal plasma jet using

iodine-starch reaction", Japanese Journal of Applied Physics, Vol. 54, 086201 (7 pages), 2015, 査読有.

2. A. Nakajima, G. Uchida, T. Kawasaki, K. Koga, T. Sarinont, T. Amano, K. Takenaka, M. Shiratani, and Y. Setsuhara, "Effects of gas flow on oxidation reaction in liquid induced by He/O₂ plasma-jet irradiation", Journal of Applied Physics, Vol. 118, 043301(9 pages) 2015, 査読有
3. T. Kawasaki, K. Kawano, H. Mizoguchi, Y. Yano, Y. Yamashita, and M. Sakai, "Visualization of the Two-dimensional Distribution of ROS Supplied to a Water-containing Target by a Non-thermal Plasma Jet", International Journal of Plasma Environmental Science & Technology, 6 pages, 印刷中, 査読有.

[学会発表]

○本人の招待講演(計3件)

1. 川崎敏之, "大気圧非熱平衡プラズマ照射による液中ラジカル生成の可視化", プラズマ・核融合学会九州沖縄山口支部特別講演会, 2015年4月27日, 九州大学
2. 川崎敏之, "プラズマが気液相中にあるターゲットに供給する活性酸素量の簡易評価法—ゲル状試薬を用いて—", 静電気学会—放電プラズマによる水処理委員会, 2015年9月23日, 首都大学東京
3. 川崎敏之, "Detection of Reactive Oxygen Species Generated by Non-thermal Plasma Jet Using Iodine-starch Reactions", 第25回日本MRS年次大会, 2015年12月9日, 横浜市開港記念会館

○本人による学会発表(計4件)

1. 川崎敏之, 久壽米木捷太, 工藤章裕, 坂之下朋大, 鶴丸拓也, 佐藤晃弘, 若林泰昂, "プラズマジェットが液底への活性酸素供給に与える影響", 第76回応用物理学会秋季学術講演会, 2015年9月15日, 名古屋国際会議場
2. T. Kawasaki, S. Kusumegi, A. Kudo, T. Sakanoshita, T. Tsurumaru, A. Sato, and Y. Wakabayashi, "Detection of Reactive Oxygen Species (ROS) Supplied into Water Bottom by Plasma Jet using Iodo-starch Reactions", 3rd ISNPEDADM, 2015年10月27日, レ・ユニオン島
3. T. Kawasaki, T. Sakanoshita, S. Kusumegi, A. Kudo, T. Tsurumaru, A. Sato, and Y. Wakabayashi, "Supply of Reactive Oxygen Species into Water Bottom by O₂/He Plasma Jet", APSPT-9/SPSM-28, 2015年12月12日, 長崎大学

4. 川崎敏之, 坂井美穂, 池畑義人, 小幡章, “地域創生を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する基礎研究”, NBU チャレンジ OITA 地域創生活動報告 2016, 2016年2月13日, 豊後大野市役所

○日本文理大学学生による学会発表 (計5件)

1. 久壽米木捷太, 工藤章裕, 坂之下朋大, 佐藤晃弘, 鶴丸拓也, 若林泰昂, 川崎敏之, “プラズマジェットの照射距離が液底への ROS 供給に与える影響”, 第39回静電気学会全国大会, 2015年9月25日, 首都大学東京
2. 鶴丸拓也, 久壽米木捷太, 工藤章裕, 坂之下朋大, 佐藤晃弘, 若林泰昂, 川崎敏之, “プラズマジェットの発生条件が水底への ROS 輸送に及ぼす影響”, 平成27年度電気・情報関係学会九州支部連合大会, 2015年9月26日, 福岡大学
3. 坂之下朋大, 久壽米木捷太, 工藤章裕, 鶴丸拓也, 佐藤晃弘, 若林泰昂, 川崎敏之, “プラズマジェットによって水底へ輸送される ROS の検出—ガス流量の影響—”, 平成27年度応用物理学会九州支部学術講演会, 2015年12月5日, 琉球大学
4. 工藤章裕, 久壽米木捷太, 坂之下朋大, 鶴丸拓也, 佐藤晃弘, 若林泰昂, 川崎敏之, “プラズマジェットによって水底に輸送される ROS の検出—水質の影響—”, 平成27年度応用物理学会九州支部学術講演会, 2015年12月5日, 琉球大学
5. 佐藤晃弘, 久壽米木捷太, 工藤章裕, 坂之下朋大, 鶴丸拓也, 若林泰昂, 川崎敏之, 内田儀一郎, 古閑一憲, 白谷正治, “プラズマジェットによりアガロース膜を移動した活性酸素の検出”, 平成27年度応用物理学会九州支部学術講演会, 2015年12月5日, 琉球大学

○共著による学会発表 (計8件)

1. 中島厚, 内田儀一郎, 川崎敏之, 古閑一憲, Thapanut Sarinont, 天野孝昭, 竹中弘祐, 白谷正治, 節原裕一, “大気圧 He/O₂ プラズマジェット照射による液中活性酸素種生成に及ぼすガス流パターンの効果”, 第76回応用物理学会秋季学術講演会, 2015年9月15日, 名古屋国際会議

2. 天野孝昭, サリノント タパナット, 内田儀一郎, 川崎敏之, 古閑一憲, 白谷正治, “KI-デンプン水溶液を用いた大気圧プラズマの活性種照射量の簡便な評価法”, 平成27年度電気・情報関係学会九州支部連合大会, 2015年9月26日, 福岡大学
3. 内田儀一郎, 竹中弘祐, 節原裕一, 川崎敏之, 古閑一憲, 白谷正治, “非平衡プラズマジェットの動的放電特性”, 第21回応用物理学会 プラズマエレクトロニクス分科会 プラズマ新領域研究会『プラズマ流の可視化』, 2015年10月3日, 大阪大学
4. G. Uchida, A. Nakajima, T. Kawasaki, K. Koga, K. Takenaka, M. Shiratani, and Y. Setsuhara, “Gas flow rate dependence of the production of reactive oxygen species in liquid by a plasma-jet irradiation”, ICRP-9/G EC-68/SPP-33, 2015年10月16日, ハワイ
5. K. Koga, T. Amano, T. Sarinont, T. Kawasaki, G. Uchida, H. Seo, N. Itagaki, M. Shiratani, Y. Nakatsu, and A. Tanaka, “Two Dimensional Visualization of Oxidation Effect of Scalable DBD Plasma Irradiation using KI-starch Solution”, AVS-62, 2015年10月22日, カリフォルニア
6. 神澤龍也, 松山友樹, 見市知昭, 川崎敏之, “直流コロナ放電により供給された活性酸素種の二次元分布”, 平成27年電気関係学会関西連合大会, 2015年11月14日, 摂南大学
7. T. Amano, T. Sarinont, G. Uchida, T. Kawasaki, K. Koga, and M. Shiratani, “A Simple Method for Quantifying Dose of Reactive Species Generated by Atmospheric Pressure Plasmas”, 2015 MRS Fall Meeting & Exhibit, 2015年12月3日, ボストン
8. F. Mitsugi, S. Kusumegi, T. Kawasaki, T. Nakamiya, and Y. Sonoda, “Application of Optical Wave Microphone to Plasma Jets”, APSPT-9/SPSM-28, 2015年12月12日, 長崎大学

〔図書〕 (計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

要介護者のコミュニケーション支援システムの開発・

ー・ 共通プラットフォームによる効率良い ICT 技術の利活用・ ー

福島学，坪倉篤志，濱田大助，市田秀樹

日本文理大学・工学部

研究成果の概要：高齢者を含む要介護者の居るコミュニティでは，コミュニケーションがスムーズでないがゆえに意志の疎通が困難となり孤立する場合がある．特に地域コミュニティでは，孤立者の存在は豊かな日常生活を送ることに障りが出るだけでなくコミュニティの減退につながりかねない．この問題への取り組みや研究成果は多く報告されているが，それらを統合することで解決可能な問題があるにもかかわらず使用言語や開発環境の違いにより統合が難しいのが現状である．そこで，要介護者の相互コミュニケーション支援技術の開発と，研究成果を統合する「基盤」について検討した．その結果，コミュニケーション支援に不可欠な1) 認証技術，2) 空間把握技術，3) 地域把握技術，4) 住環境改善技術，を確立した．また研究成果の柔軟な統合を行うために共通基盤化が有用性であることが確認できた．

1. 研究の目的

コミュニケーションがスムーズでないがゆえに意志の疎通が困難となり孤立する場合がある．特に地域コミュニティでは，孤立者の存在は豊かな日常生活を送ることに障りが出るだけでなくコミュニティの減退につながりかねない．

本取り組みは，要介護者の相互コミュニケーション支援を目的とする．その中で研究成果を統合し課題解決につながる「成果を持ち寄れる基盤」の確立を目指す．

2. 研究の方法

支援システムの各部は図1の役割分担で行う．各部の成果はオープンキャンパス等で活用することで「地域ニーズ」を確認する．また成果のうち，学術的な内容は学会で，実用的な内容は地域行事等での展示を行う．また，「研究成果を柔軟に統合した地域課題解決活動」の基盤として図2の共通基盤の有用性検討を目指す．

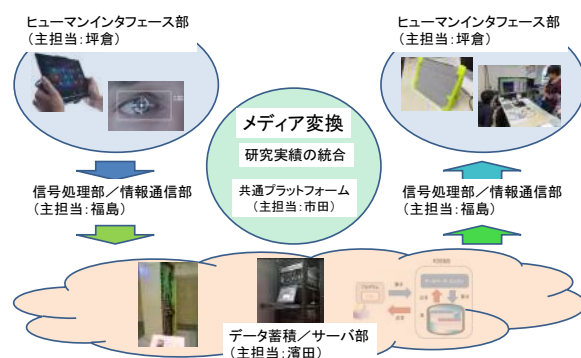


図1 プロジェクトの役割分担

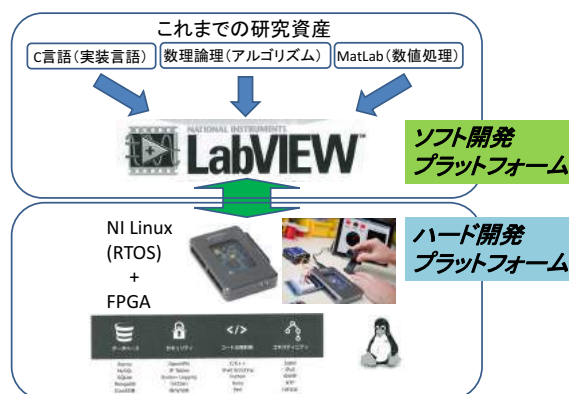


図2 研究成果を柔軟に統合する共通基盤

3. 研究成果

取り組み成果として，1) 顔抽出と本人認証および視線方向識別，2) ステレオビジョンによる空間把握，3) 映像統合による地域把握，4) 調音材による住環境改善，5) 共通プラットフォームの有用性確認，が得られた．

1) は図3に示すように，画像から顔の領域を抽出し，登録者であれば登録名を表示することおよび「どこを見ているか」の判定が可能となった．

これにより，複数人が写っている画像の中から「人物」を特定することが出来るだけでなく，何に気を取られているかがわかる．これは例えば怪我しやすい場所の改善で重要な原因の特定に応用可能な技術である．また，視線が定まらない状況での外出を判定することが出来，例えば徘徊を「出口で検知」することの可能性を示している．

この成果はUuu（障がい者サポート支援事業）のご厚意により図4に示す「別府市福祉まつり」で展示発表とデモンストレーション

を行い市民のみなさまに体験していただいた。

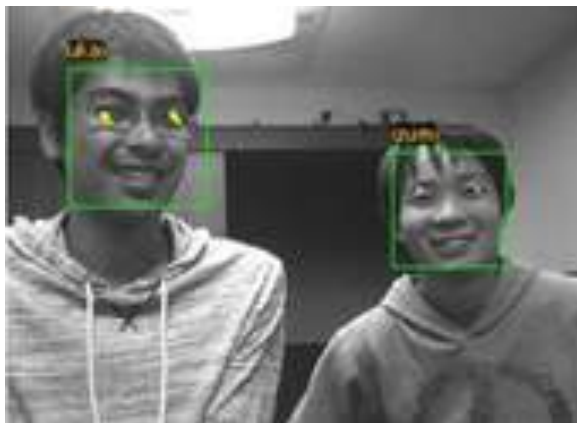


図3 顔抽出と本人認証および視線方向識別



(a) 別府市福祉まつり会場の様子



(b) 来場者に学生が成果を説明している様子
図4 別府市福祉まつりの展示発表の様子

2) は、図5に示す撮像装置により「差のある画像」を取得し、その「差」から部屋やそこにある物の位置関係を導出することで空間情報を取得する。図6に取得した部屋の壁および部屋にある物の位置を可視化した例を示す。

空間情報が取得できれば、例えば1)の成果では「壁のポスタの顔」も「顔識別の対象」とすることを防止することができ、画像処理で技術的課題の多い「物体の区別」を「空間位置の違い」により容易に行うことが可能と

なる。さらに、空間位置の情報を時系列に取得することで、移動体を検出することが可能であり、移動軌跡から発作や転倒等の危険動作を検出することも可能となる。さらに、1)の視線方向判別と組み合わせることで、空間内での動きから「徘徊検知」の精度向上につながる事が可能になると考えている。

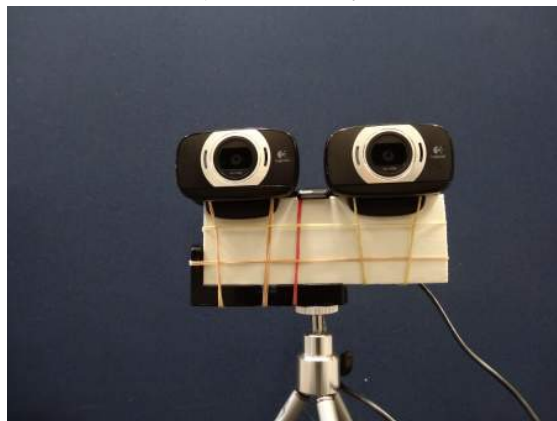


図5 ステレオビジョン撮像装置の試作例

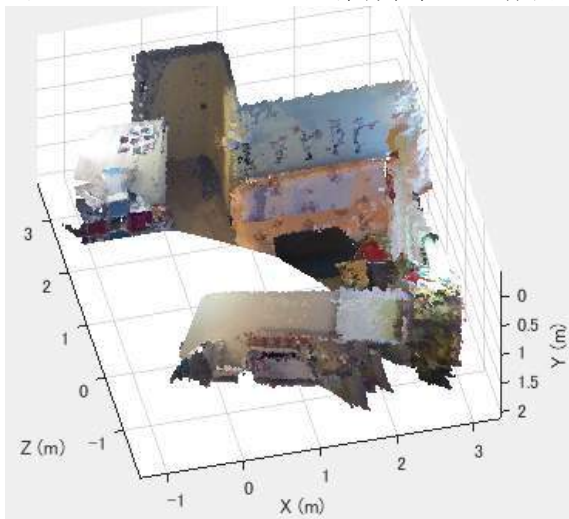


図6 空間情報の可視化例

3) は図7に示すようにドローンで空撮した映像から1枚の地域全景を自動生成することを可能にした。これにより地域の「今の様子」を容易に得られるようになった。スマートフォンでも同様にパノラマ撮影可能であるが、任意のビデオカメラ映像で作成することが可能になり、また「部分更新」可能であり、ビデオの画角によらず全景の把握が可能となった。

これにより、例えばお祭り等の地区の集まりの際に「人の動き」を確認、農作業の進捗を地域で共有することや作業計画を立てる基礎情報、災害時の避難誘導の現状把握情報、さらには防災対策の基礎情報を容易に得ること等への応用が可能であると考えている。また、そのような支援サービスを持つ地域として地域の魅力化にもつなげられるのではない

かと考えている。

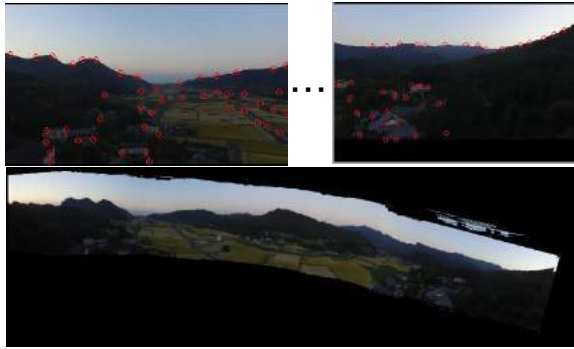


図7 空撮映像の統合による地域把握例
(大分市・木佐上地区)

4) は調音材の物理および心理計測により基礎データを収集し、図8に示す住環境の中でも特に「リラックス度」の改善に成功した。この成果はInterBEE2015 (International Broadcast Equipment Exhibition 国際放送機器展) にて報告した。

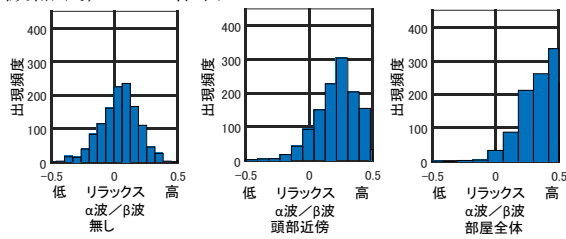
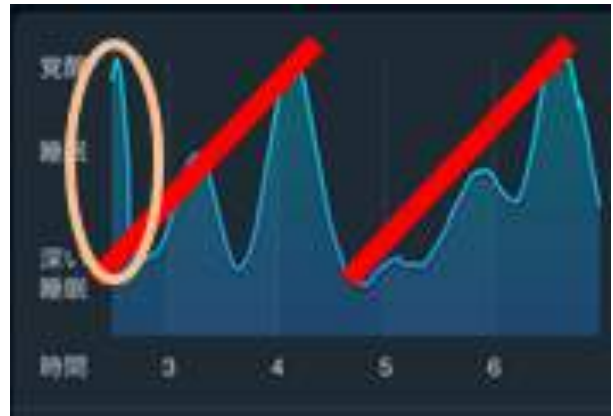


図8 調音材による住環境（リラックス）の改善結果検証例

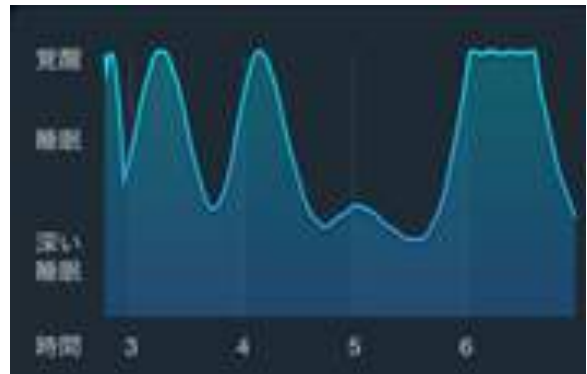
リラックス度は調音材以外の要因によることも考えられる。

そこで、人の意識に依存しない検証方法として「睡眠」を考えた。本当にリラックスできる住環境であれば、睡眠の質が良くなることが考えられる。睡眠の質は、1) 入眠の速さ、2) 寝返りの度合が入眠後から徐々に多くなる、のが良いとされている。そこで、睡眠の質を調べるスマートフォンアプリ (Sleep Cycle Alarm Clock <http://www.sleepcycle.com>) を使用して調音材有と無での睡眠パターンを調べた。その結果を図9に示す。図9は横軸に睡眠時間（入眠時刻から起床時刻）を示し、縦軸に寝返りによる振動の強さを示している。縦軸で振動が弱い（グラフで下）が深い眠りを示し、振動が強い（グラフで上）が浅い眠りを示している。深い眠りは肉体疲労回復、浅い眠りは記憶の整理がなされると言われている。このため、入眠後（グラフ横軸の左端）で深い眠りとなり、横軸で右すなわち時間経過に伴い、縦軸の上下の平均が右肩上がりに推移すると質の良い眠りと判断で

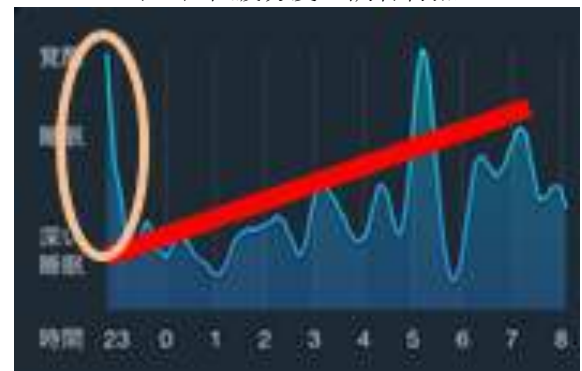
きる。ここでは疲労度は「歩数」で評価することとし、低疲労度が300歩程度、高疲労度が5000歩以上としている。歩数計測は同一システムで計測することで歩数計測誤り率も同程度としている。



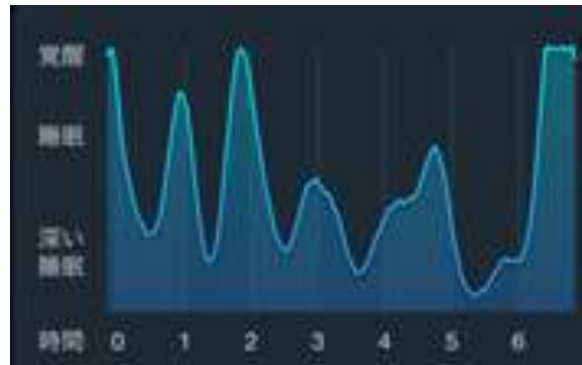
(a-1) 低疲労度・調音材有



(a-2) 低疲労度・調音材無



(b-1) 高疲労度・調音材有



(b-2) 高疲労度・調音材無

図9 調音材有と無での「眠りの質」の比較

図9 (a-1) (b-1) は入眠時に短時間で深い眠りに推移しており、その後の縦軸の変化が右肩上がりとなっている。(a-1)に比べて(b-1)の右肩上がりが緩やかなことから、高疲労時に深い眠りを必要としていることが確認できる。これに対して調音材「無」である(a-2)と(b-2)では、入眠に時間がかかるだけでなく、入眠直後に深い眠りに至っていないことが確認できる。

このことから、調音材による住環境の改善が行えたものと判断する。なお、この実験は健康状態に特に問題の無い実験協力者の結果である。ここで使用した調音材を図10に示す。

予備実験として、パーキンソン病患者の住環境に調音材を設置した。その結果、入眠改善および夜中に起きる回数の減少が確認された。実験協力者から起床時に「もやもやした感じが減った」との評価が得られた。但し、検証事例が少ないので、今後実験例を増やす必要がある。



図10 実験で使用した調音材

5) は、ここで示した新たな技術を含む研究成果の統合を行った。まだ完全ではないものの「各種言語・環境で開発した研究成果」を「他言語・他環境の成果をインポート」する機能を持った「ソフトウェア開発環境およびそれに直結した実装ハードウェア環境」を共通基盤とすることが有用であることが確認できた。特に「実装ハードウェア環境」を「製品開発につながる」ものとするすることで、研究成果の製品化に向けた作り込みにつながりやすくなり、より研究成果の地域課題解決および製品化による持続性の可能性が確認できた。

4. 今後の展開

研究成果の適用可能な範囲と精度の検証が必要であるものの、スムーズなコミュニケーション支援に必要な技術開発に成功した。またそれらの成果を統合することでさらに応用

および適用範囲を拡げることが出来た。今後検証を進めることと地域企業との連携を通して地域課題解決および「地域の魅力」向上に展開していくことを考えている。

謝辞

本研究に協力してくれた、日本文理大学・工学部・情報メディア学科の、鶴飼拓也君、鎌田悠平君、高橋出海君、牧佑樹君、清水真大君、米川修平君、島袋倫君、に感謝する。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 12件)

1. 福島学, 鶴飼拓也, 鎌田悠平, 島袋倫, 米川修平, 丸尾梨紗, 河納隼一, 近藤善隆, 窪田泰也, "ワイヤレス脳波計測機を用いた音響刺激に対する脳活動と調音材の関係調査", 日本文理大学(掲載予定), 2016
2. 福島学, 鶴飼拓也, 河納隼一, 近藤善隆, "電磁波を用いた見守りシステム構築のための距離と減衰量の関係調査", 日本文理大学紀要(掲載予定), 2016
3. 福島学, 鶴飼拓也, 篠原康平, 河納隼一, 近藤善隆, 窪田泰也, "短時間事象の時間周波数分析手法の一検討", 日本文理大学紀要, 第43巻, 第2号, pp.77-84, 2015
4. 福島学, 吉森聖貴, 濱田大助, 牧佑樹, 藁輪佑樹, 鶴飼拓也, 高橋出海, "マルチプラットフォームプログラミングへの取組み", 日本文理大学紀要, 第43巻, 第2号, pp.137-143, 2015
5. 福島学, 河納隼一, 鶴飼拓也, 黒枝翔太, "送信波と受信波の干渉に着目した音響距離推定手法の短時間計測による移動体検出に関する一検討", 日本文理大学紀要, 第43巻, 第1号, pp.35-42, 2015
6. 福島学, 河納隼一, 鶴飼拓也, 高橋出海, 牧佑樹, "動体検出に関する一検討", 日本文理大学紀要, 第42巻, 第2号, pp.43-52, 2014
7. 福島学, 鶴飼拓也, 鎌田悠平, 島袋倫, 米川修平, 丸尾梨紗, 河納隼一, 近藤善隆, 窪田泰也, 松本光雄, 柳川博文, "音響刺激に対する脳活動と調音材の関係調査", 電子情報通信学会応用音響研究会, 2016 (掲載予定)
8. 鶴飼拓也, 舟橋宏樹, 福島学, 河納隼一, 近藤善隆, 松本光雄, 柳川博文, "電磁波を用いた見守りシステム構築のための距離と減衰量の関係調査", 電子情報通信学会応用音響研究会, 2016 (掲載予定)
9. 福島学, 鶴飼拓也, 舟橋宏樹, 河納隼一, 近藤善隆, 窪田泰也, 松本光雄, 柳川博文, "調音材の聴こえに対する効果調査に関する一検討", 日本音響学会 2016年春季研究発表会講演論文集, 1-P-11, 2016
10. 鶴飼拓也, 舟橋宏樹, 福島学, 河納隼一, 近藤善隆, 松本光雄, 柳川博文, "ドップラレーダの距離減衰を用いた対象物距離推定手法の一検討", 日本音響学会 2016年春季研究発表会講演論文集, 1-P-12, 2016
11. 福島学, 鶴飼拓也, 篠原幸平, 河納隼一, 近藤善隆, 窪田泰也, 柳川博文, "時間追従による過渡的伝搬特性計測の一検討", 日本音響学会 2015年秋季研究発表会講演論文集, 1-P-12, 2015
12. 河納隼一, 近藤善隆, 福島学, 松本光雄, 柳川博文, "音響測距法を用いた宅内における人の動き検知への適用事例", 日本音響学会 2015年春季研究発表会講演論文集, 1-Q-22, 2015

地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する

域学協働プロジェクト研究

鍋田耕作・河村裕次・坂口昌宏

(経営経済学部・経営経済学科)

研究成果の概要：豊後大野市の実施する住民主体の介護予防に向けた地域づくりは、地域全体に一定の効果を与えているが、さらに、この実践を通して新たなニーズの充足や地域課題の解決に向けた取組みへと展開できる可能性がある。そこで、この研究では、これまでの地域づくりを基盤に、域学協働で介護予防の内容を検討、実施することで、より効果的な取組にするための仕組みづくり、また、その効果を検証する。本年度は、この研究を進めるにあたり、地域づくり活動の参加者の増加と取組の方向性を確認する必要があると考え、千歳町市民交流の場「楽しく広場ひょうたん」の活動サポートを行った。その成果として、サポート前の利用者の平均は9.3名、参加者（スタッフも含む）は19.7名であった（平成27年7月）が、域学協働での取組を通して、利用者の平均が21.2名、参加者は26名となっている（平成28年2月）。

1. 研究の目的

介護保険法の2014年改正により、高齢者を地域全体で支える地域包括ケアシステムの構築が重要視され、その中でも、費用負担が制度的に保障されていないボランティアなどの支援、地域住民の取組み（互助）がより一層必要とされている。これは、地域住民（ボランティア等）による一般高齢者（要支援者も含め）向けの様々な介護予防に関する取組みが期待されるということを意味している。また、介護保険の財源悪化や受給者の増加を背景に、介護予防の一環として、「要支援者等も参加できる住民運営の通いの場」の充実が求められており、地域における人と人とのつながりを促し、参加者が継続的に通いの場を利用できるような地域づくりが必要とされてきている。

豊後大野市では、全人口（38,454人）に占める高齢者（15,175人）の割合が約39.5%となっている（平成27年2月28日現在）。また、市の大きさが県土の9.5%を占め、町の中心部に人口が集中しており、広い地域に小規模集落が点在している。このような地域で介護サービスとりわけ在宅福祉サービスを展開していくには、かなりの労働力とそのため財源が必要になってくる。実際に、当市の介護保険の状況を見ると、保険料は第5期（2012年～2014年）で月額6,250円（2015年～2017年も同額）と設定され、この額は大分県では1位、全国でも9位となっている。また、1人当たりの給付費も県内トップであり、その原

因は要介護・要支援の認定率が高いことや事業所が多くサービスが受けやすい環境にあること、実際に健康を害している人が多いことがあげられている。

この地域課題解決には、出来るだけ介護サービスの受給を減らせるよう、高齢者の健康寿命を延ばすことが必要である。そのために、住民主体の地域づくりを推進し、心身の安定を図るような介護予防へとつなげることが重要になってくる。ここでは、当市が行ってきた住民主体の地域づくりに対して、域学協働で多様な介護予防（高齢者の生きがいや地域貢献・役割を生み出すことによる介護予防の効果に着目する）を提案し、これまでの取組にプラスする形で、より効果的な介護予防活動を目指していく。このような介護予防の取組は、高齢化の進んでいる地域での共通の課題ではあるが、これまでに域学協働での実践はほとんど見られず、この体制のシステム化と共通の基盤づくり、また、地域において大学がどのような役割（地域での大学の立ち位置、関わり方など）を果たすべきかなどを明らかにしていくことが肝要である。

そこで、本研究では、①域学協働での地域づくりのあり方（住民間の互助や交流の促進、新しい取組の提案・実践から地域住民への引き継ぎ等）を検討し、②この活動による地域への波及効果（地域内でのコミュニケーションや地域貢献に関する視点）、③地域課題解決に向けての教育プログラム（地域志向教育）が及ぼす学生への教育効果（社会人基礎力の

視点)を検証していく。

2. 研究の方法

本年度は、本研究を進めるにあたり、豊後大野市でこのような支援が必要なのかということ地域診断により検討(地域課題としての該当性の判断)し、必要であれば、どのような高齢者を対象にすべきか(対象者の選定)、どのように支援すべきなのか(支援の目的とその方法)を考察し、大学として地域課題解決に向けた取組にどう関わるか(域学協働のあり方)を検討し、これを地域志向教育の中に取り込むための教育プログラムの構築までを試みた。

①本研究に向けての地域診断(ニーズ把握と現状分析)…豊後大野市老人福祉計画及び第6期介護保険事業計画(以下、「計画」と略す。)からの分析とともに、豊後大野市高齢者福祉課・楽らく広場ひょうたん活動スタッフからの聞き取り等から地域診断を行った。

ここでは、当市の計画からの分析を一部紹介する。この計画では、地域包括ケアシステムの実現に向けて、基本目標の一つとして、「高齢者の地域・社会活動、学習活動、就業活動等への参加促進」を挙げている。この目標達成に向けて、「高齢者が、本人の希望や能力を活かして働き続けることや、生きがいを持って暮らしていくことができるようになるためには、高齢者の地域・社会活動への積極的な参加を促し、高齢者が相互に支援しあう地域づくりを推進することが必要です。また、地域や社会と関わりを持つことで、生きがい生まれることは、高齢者の「閉じこもり」を防ぎ、外出の機会が確保されるとともに、健康づくりや介護予防にもつながります。」と述べられている。また、そのために必要な取組として、「高齢者にとって、多様な学習活動に参加することは自己実現や社会参加の良い機会であり、生きがいづくりの重要な要素となります。…就業機会を拡大することやボランティア活動を推進することも、高齢者の生きがいづくりや地域貢献につながります。」と高齢者の生きがいや地域貢献に着目し、その機会の提供が強調されている。

地域診断からの分析：①高齢者の生きがいや地域貢献といっても前期高齢者と後期高齢者とは、その役割などに違いがあるのではないか。また認知症やうつ状態、閉じこもりのリスク、社会参加率などは各年齢層での違いがあるのではないか。

前期高齢者…地域でのボランティア活動、シルバー人材センターなど活躍する場が多いが社会参加率が低い。そこで、地域内での支

援を行う者としての社会参加を促していくことが必要である。

後期高齢者…認知症、うつ状態になるリスクが高まるとともに、閉じこもり傾向、社会参加率の低下がみられる。まず、社会参加の場を提供し、そこで居場所づくりや出番づくりが必要である。

②対象者・目的の決定

上記のような地域診断を通して、下記のような対象者・目的を選定した。

対象者：後期高齢者を中心に、社会参加の少ない者、生きがい支援が必要な者を支援対象とする。※研究対象としての新規性…これまでの地域づくりに関する先行文献・先行事例を参照しても、地域内での後期高齢者の生きがい、地域貢献、地域内でのつながりなどについて取り組んだ事例は少ない。

目的：域学協働で対象者の生きがいを通しての地域内での貢献や役割の模索(地域住民とともに協力して地域貢献を行い、その一部を担うなども含め)し、この取組を通して、地域内での互助関係が構築を促し、その効果として自分の健康(生活の充実、地域内でのコミュニケーションなど)へとつなげる。また、この取組を通して、地域(他世代)への波及効果をもたらす。

独自性：これまでの地域づくりにおける介護予防の先行事例を見ても、対象者の健康状態(身体的機能の向上等)の変化に関する効果を検証したものはあったものの、このような地域との互助関係を形成することによる効果を検証したものは散見されない。

③本研究で明らかにするもの…地域課題解決のための域学協働のあり方とその効果の検証 ※協同研究者の役割も示す。

○地域づくりにおける域学協働のあり方…これまでの地域づくり研究を参考に、住民主体の地域づくりによる介護予防を通して、地域内での互助を生み出すための活動サポート

(教育プログラムを意識した取組)をどのように実践していくのかを検討していく。(地域と大学の視点)(坂口)

○他世代との交流など活動サポートの有用性とその効果(地域の視点)の検証…対象者の生きがいや出番作り、役割づくりによる効果(対象者の生活の広がりの変化、精神的な変化など)、このような取組が及ぼす地域への効果(ボランティアスタッフ・地域の子どもの地域内でのコミュニケーションや生活の質の変化など)を検証する。(鍋田)

○学生の社会人基礎力等の成長(教育の視点)の検証…本研究における教育プログラムの学生の社会人基礎力への効果を検証するととも

に、継続的な外部評価（これまで本人の主観的な評価であったものが、客観的な評価・指標からの視点）を受けることによる学生の変化、ステークホルダーとの協働活動による学生への影響を検証していく。（河村）

○大学の立ち位置の検証…大学が地域における第三者として新たな取組の提案・実践をどのように進めていくのか、また、それを地域住民へどのように引き継いでいくのかを検証する。※これまでの地域づくりの研究では、大学の取組を地域住民に引き継ぐという取組みはほとんど見られない。また、アクションリサーチによる研究においても、このような具体的な方法などを検証したものは、ほとんど見られなかった。（坂口）

3. 研究の成果

本年度の研究成果として、①実際に行った取組の効果を検証、②域学協働のあり方（大学と地域との関係等）の検討、③地域志向の教育プログラムの構築、学生の社会人基礎力の検証が挙げられる。

①実際に行った取組の効果を検証

まず、この研究に当たっての基盤づくりとして行った千歳町市民交流の場「楽しく広場ひょうたん」での活動サポートによる効果を利用者数・参加者（利用者・スタッフ）数より検証する。ここでは、活動の立ち上げから平成28年3月7日現在までの月平均の利用者数と参加者数を示している（図表1）。この結果から、活動サポート（平成27年8月より）を行うことで、参加者の増加という面では、一定の成果はあったのではないかと考えられるが、来年度以降は、活動に参加したことによる効果についても、実証研究（質的調査、量的調査）を行っていく必要がある。

次に、活動サポートの内容については、活動スタッフとの反省会等を通して、対象者の生きがいを地域内で活用すること、地域内での役割や貢献を見出していくこと、住民間での互助や交流に向けての地域での世代間交流などの必要性が認められた。

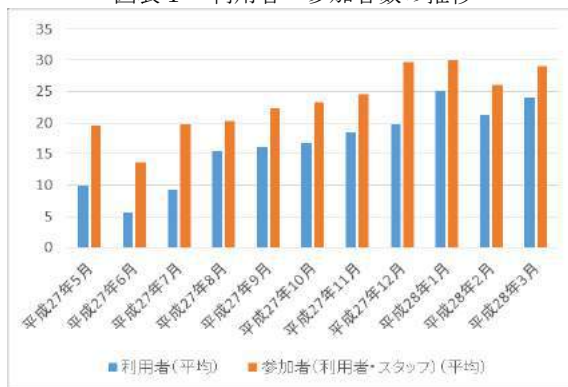
②域学協働のあり方

域学協働のあり方を検討するにあたり、住民主体の地域づくりで大学が地域にどこまで貢献できるのか、どのような方向性で大学が地域住民と協働して、その取り組みを行っていくのかを考えていく必要がある。

そこで、域学協働でⅠ.住民間での互助や交流ができるように下地を作ること（図表2）、Ⅱ.地域の中で生きがいや役割を持つために、地域内で何ができるのかを考える機会を提供すること（図表3）を目的として、その方向性

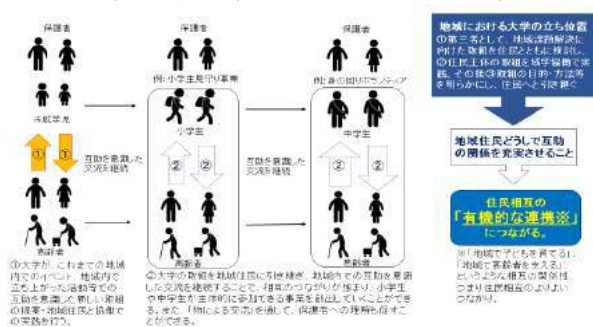
を模索した。

図表1 利用者・参加者数の推移



Ⅰでは、地域内での人と人とのつながりを構築していくために、住民どうしの「見える関係づくり」（住民どうしが地域の人々を知る、関心を持つこと）を図っていくことが必要である。しかし、人と人との交流が困難な場合もあるので、「物による交流」（物を通じた他世代の交流）を図ることで、他世代の互助の関係を形成することができるのではないかと考えた。また、物による交流を図る長所として、地域の子どもと高齢者の交流でも、その物を介して保護者にもこのような活動の理解を促すことができる。保護者の理解が深まれば、「地域で子どもを育てる」、「地域で高齢者を支える」、というような相互の関係性ができ、「住民相互の有機的な連携」つまり、住民相互のよりよいつながりが図れると考える。

図表2 住民間の互助や交流の下地づくりの仕組み

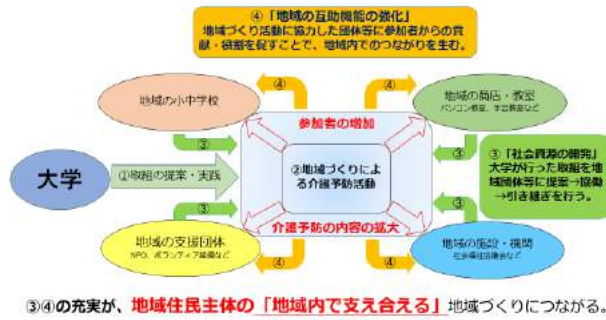


Ⅱでは、住民主体の地域づくりにおいて、最終的には地域内でお互いに支える・支えられる関係を形成することが必要である。

そこで、まず大学としては、対象者を支えられる側として捉えるのではなく、支える側として活動ができるように、新しい事に挑戦するという試みを考えた。これには、自分の可能性を広げ、新たな「生きがい」を見つけてもらうというねらいがある。そして、自分ができる範囲・無理のない範囲で、「他者への貢献」を行ってもらえるよう大学側からの新しい取組の提案・実践を行い、それを地域住民・組織での実践できるよう引き継ぐ。そして、地域づくりの参加者にも地域の学校・施設・機関等と関わってもらうことで「地域の

「互助機能が強化」され、地域内で支え合う地域づくりが展開できると考えている。

図表 3 取組への提案・実施から引き継ぎの仕組み



③地域志向の教育プログラムの構築、学生の社会人基礎力の検証

ここでは、本年度の取組から各学年での活動における役割、社会人基礎力の向上等を示した教育プログラムを検討した（図表 4）。

図表 4 本研究を活用した教育プログラム

学年	2年生前期	2年生後期	3年生前期	3年生後期	4年生前期	4年生後期
学習スタイル	体験交流活動	課題解決に必要な知識の修得	ステージ別スタートの協働による課題解決学習			
学年	2年生前期	2年生後期	3年生前期	3年生後期	4年生前期	4年生後期
役割	○活動の発案 ○企画者役割	○アイデア・アイデアの共有 ○主体的な実践	○客観的な視点 ○企画者役割	○地域課題の把握 ○地域ニーズに応じた実践	○学生間の協働 ○役割分担	○社会人基礎力の向上 ○実践力
科目	○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題	○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題	○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題	○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題	○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題	○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題 ○地域課題 ○社会課題
社会人基礎力	○コミュニケーション力 ○チームワーク力 ○リーダーシップ ○柔軟性	○コミュニケーション力 ○チームワーク力 ○リーダーシップ ○柔軟性	○コミュニケーション力 ○チームワーク力 ○リーダーシップ ○柔軟性	○コミュニケーション力 ○チームワーク力 ○リーダーシップ ○柔軟性	○コミュニケーション力 ○チームワーク力 ○リーダーシップ ○柔軟性	○コミュニケーション力 ○チームワーク力 ○リーダーシップ ○柔軟性
関連事業	○小学生自由研究発表 ○高校生自主大会 ○高校生自主大会	○地域交流教室 ○高校生自主大会 ○高校生自主大会	○地域交流教室 ○高校生自主大会 ○高校生自主大会	○地域交流教室 ○高校生自主大会 ○高校生自主大会	○地域交流教室 ○高校生自主大会 ○高校生自主大会	○地域交流教室 ○高校生自主大会 ○高校生自主大会

本年度の学生の社会人基礎力の検証に当たっては、活動サポートの参加者・不参加者での比較を試みた（図表 5）。

また今後は、社会人基礎力の育成をより実効性のあるもの、客観的な視点・指標で検討ができるように4つの視点での研究を考えている（図表 6）。

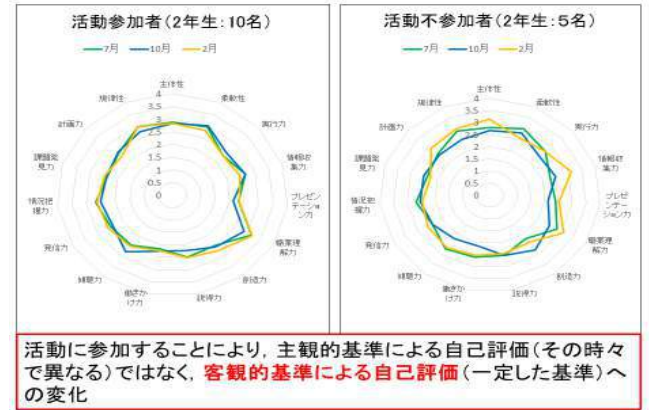
4. 今後の展開

これまで、研究の成果で示した図表 2・3 の取組を教育プログラムに沿って、実践しながら、その効果を検証していく。今後の研究計画については、図表 7 に示す。

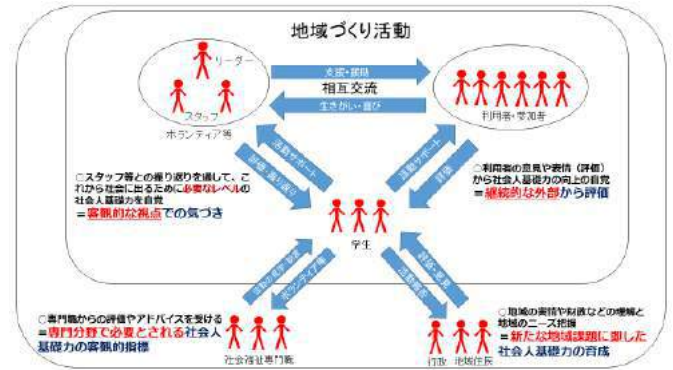
①地域への波及効果（他世代間の互助と交流、地域内で支え合う地域づくりの実現の仕組みづくり、参加者への健康の影響、地域の子どもへの影響（効果の検証））

②地域志向教育への波及効果（第三者（地域外）として地域課題の分析とその解決策の実践、活動参加による社会人基礎力の向上、客観的な検証とその評価方法の検討）

図表 5 活動参加者・不参加者の社会人基礎力の比較



図表 6 社会人基礎力に関する 4 つの視点



図表 7 今後の研究計画（平成 27 年度～30 年度）

	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度
学際的体制の構築								
運営								
仮設構築 （指標検討）	検討							
仮設構築 （地域診断）	検証							
問題解決に向けた検証 （協働のあり方）	提案	検討						
問題解決に向けた検証 （地域の課題・活動手段の活用とその効果の検証）	取組の検証	事前	中間	中間	中間	中間	終了	観察
問題解決に向けた検証 （教員の視点・学生の社会人基礎力等の成長の検証）	事例	中間	中間	中間	中間	中間	終了	学年別・再検証
問題解決に向けた検証 （大学の立ち位置の検証）	検証		検証				終了	
問題解決に向けた教育プログラムの構築 （教育実践）	提案		検討		検討		検討	活動の継続

5. 主な発表論文等

- 鍋田耕作
 [雑誌論文] (計 10 件)
 [学会発表] (計 5 件)
 [図書] (計 2 件)

- 河村裕次
 [雑誌論文] (計 9 件)
 [学会発表] (計 9 件)
 [図書] (計 3 件)

- 坂口昌宏
 [雑誌論文] (計 9 件)
 [学会発表] (計 5 件)
 [図書] (計 1 件)

徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発

鈴木秀男*¹ 吉森聖貴*¹ 福島学*¹ 稲川直裕*²

*¹ 情報メディア学科 *² 機械電気工学科

研究成果の概要：高齢化社会に伴い、認知症などによる高齢者の徘徊が社会問題となっている。本研究では、徘徊高齢者の捜索に役立つ、位置検出システムを構築することを目的としている。このシステムでは、徘徊高齢者の位置を検出するために、防犯カメラ等のカメラ映像を使用する。本年度の研究では、カメラ映像を使つての画像認識ソフトウェアの開発を行った。画像認識には、顔認識と歩行認識の組み合わせを利用することとした。本報告では、顔認証と歩行認証の取り組みについてこれまでの成果をまとめる。

1. はじめに

高齢化社会に伴い、認知症などによる高齢者の徘徊が社会問題となっている。下のグラフは、平成24年度、平成25年度、平成26年度における認知症などによる行方不明者の推移である。平成26年度においては、10500人以上の行方不明者が発生している。このような認知症などによる行方不明者は、今後ますます増加することが予想される。

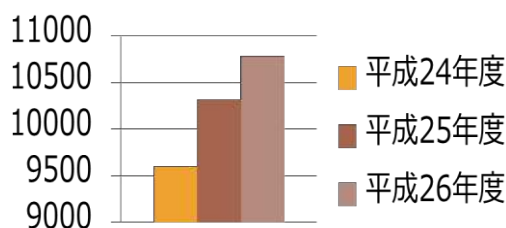


図1 行方不明者の推移
(警視庁統計データ：<https://www.npa.go.jp/toukei/index.htm> より)

このような徘徊高齢者の問題は、単に本人だけの問題ではなく、家族などの介護側にとっても、捜索など大きな負担となり、社会的な責任も家族や介護側にとっての負担となることがある。そして、時には、最悪の事態となってしまうことも現実の問題として存在している。

そこで、筆者らは、徘徊高齢者の位置を検出するシステムを構築することとした。このシステムを使うことによって、徘徊高齢者を探す手助けになればと考えている。

本システムが構築された際の効用について紹介する。移動する高齢者の経路をデータとして蓄積すれば大量のデータが得られる。この大量のデータをビッグデータとして解析することで、高齢者が住みやすい街づくりを実

現することができる。また、位置検出システムの応用として、子供たちの見守り情報など、安全・安心な街づくりにも貢献できるものと考えている。

2. 代表的な位置検出

徘徊高齢者の位置検出を2つの立場で考えてみる。一つは、ウェアラブルな位置検出、もう一つはノン・ウェアラブルな位置検出である。はじめに両者の特徴についてまとめておく。

2. 1 ウェアラブルな位置検出

ウェアラブルな位置検出とは、GPS、ICタグ、発信機などを身に付け、行方不明になった際には、それらの情報をもとに位置を検出するものである。身に付ける機器等は、技術の進歩とともに小型・軽量化され、杖、靴、首掛型、リストバンド等さまざまな方法で身に付けることができる。しかし、ウェアラブルでは、身に付けることが前提であり、それが保証されない限り、位置検出ができないということが課題となっている。

2. 2 ノン・ウェアラブルな位置検出

一方、ノン・ウェアラブルな位置検出とは、特別な機器を身に付ける必要がない方式のことである。例えば、街中カメラである防犯カメラや監視カメラの映像や、周りの人たちが連携して探す見守り隊などがある。この場合、カメラ等の機器インフラ、周囲の人たちの協力が課題となる。しかし、徘徊対象の高齢者の立場からは、身に付けるものを強要（強制）しないため、まったく制約がないことになる。

本研究でも、徘徊高齢者への制約がない、ノン・ウェアラブルな位置検出を採用することにする。

3. ノン・ウェアラブルな画像認識

今回想定しているノン・ウェアラブルな位置検出をする上で必要な要素は、次のようになる。

一つ目は、街中に設置されているカメラ画像を入手することである。街中には多くの防犯カメラや監視カメラなどがあり、これらの画像が主な情報源となる。

二つ目は、徘徊高齢者とカメラ位置のリンクである。両者をリンクすることにより、時系列的な経路の特定が可能となる。

三つ目は、画像に写る人物を特定する方法である。本年度の研究では、この人物特定に必要な画像処理ソフトの開発について検討した。

次に、本システムを構築する際の研究の進め方について説明する。位置検出システムの開発は、大きく次の4段階に分かれる。

最初のステップは、モニターカメラの画像を解析することである。すなわち、人物を特定する処理ソフトの開発となる。

次の段階では、高齢者の歩行時の画像を解析することである。これは、人物の特定に必要なバックデータを作成する。

次は、モニターカメラ画像の処理データを保存することである。これにより、徘徊の途中経路位置を時系列的に記録できる。

最後は、設置済みのカメラ映像・場所の把握となる。空白地帯の拾い出しや新規設置の必要性を検討する。

4. システムの地域への展開例

システムの地域への展開例を二つ紹介しておく。

徘徊高齢者が行方不明になった際、街中に設置された既存のカメラや新規に設置したカメラの映像と徘徊高齢者の映像を画像処理システムで比較する。対象とする人物を探し出し、本人かどうかの一致・不一致の判定を行う。もし、一致した場合には、そのカメラ位置の周辺に捜している人物がいることになる。

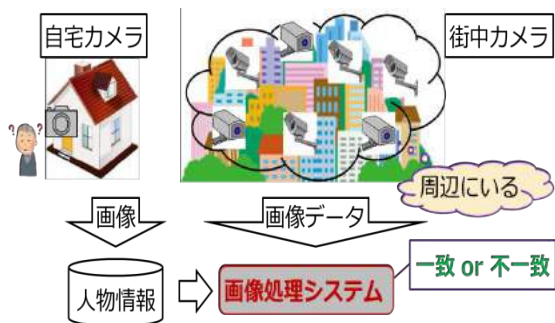


図2 地域への展開例1

さらに発展させた展開例を紹介する。先ほどの展開例から得られる、人物情報、画像情報、時系列情報を使い、行動パターンを地図上へ経路図として表示する。そして、人物がいつ、どこに立ち寄ったのかを把握する。この情報を使い、捜索位置の予測ができる。

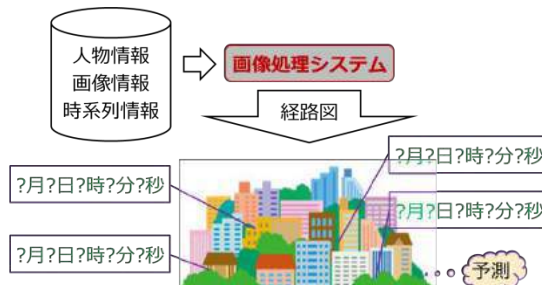


図3 地域への展開例2

5. 実験環境

今回実験に使用した環境を紹介する。実験は予備実験と現地実験に分かれる。現地実験については、実験結果として後程紹介する。

はじめに、予備実験の環境である。本年度の画像処理システムは、画像認識が目的のため、室内において予備実験を実施した。この実験環境では、地域を想定したエリア内に、固定カメラを数個設置し、被験者がエリア内に入り画像認識を行った。すなわち、実験室内を地域と想定したエリアと考え、予備実験を実施した。

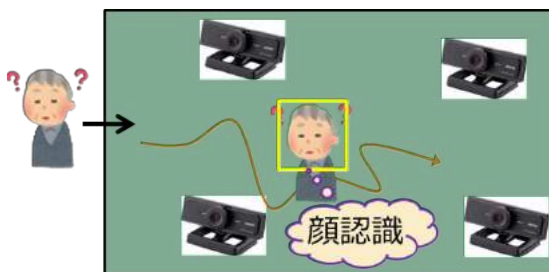


図4 室内での予備実験

実験において、画像認識に利用できる情報について説明する。情報としては、人物の画像、これは異なる複数画像となる。歩行の特徴や体型、色や柄などの服装に関する情報、半袖や長袖など容姿に関する情報もある。実験では、顔認識を検証するため人物の画像を使用している。

6. 実験結果

6. 1 顔認証

現地実験も含めた実験結果について報告する。顔認証において、実際の環境を想定した映像を撮影した。映像は人物が屋外を歩く様子と、人物が屋内歩く様子を撮影した。どちら

らも実際の防犯カメラを想定し撮影している。

人物が屋外を歩く様子では、徘徊高齢者が施設や家を出たことを想定している。一方、屋内を歩く様子では、玄関の近くを撮影し、徘徊高齢者が施設や家を出る直前を想定している。今回の実験結果では、街中カメラを想定し、屋外映像において人物の顔認証を行った。

顔認証において、顔と人物領域を検出した結果を以下に示す。黄色い枠によって人物と顔が抽出されていることが分かる。

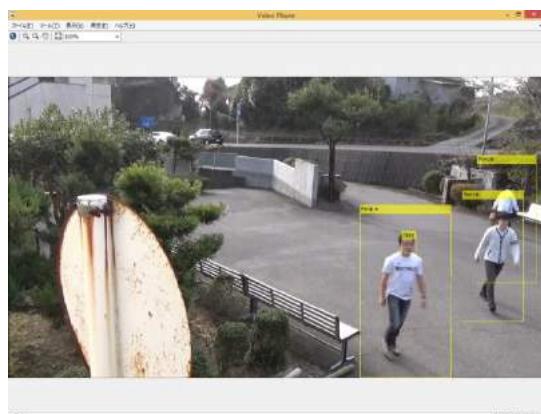


図5 顔と人物の検出結果

次に、抽出された顔領域から人物の顔画像を複数枚未知画像として抽出する。人物ごとに抽出された画像群をまとめたものを未知画像群と呼ぶ。



図6 未知画像群の取出し

あらかじめ用意されているテンプレート画像群と、取り出した未知画像群の中の未知画像を比較する。両者がマッチングすることによって、人物を特定する。

顔認証についての結果は次のようになった。実験室での認識率は48%、実環境での認識率は46%となった。実験条件は、テンプレート画像は一人当たり20枚、未知画像は動画から切り出した10枚、実環境での認識率は屋外を想定しているの、屋外値を示している。

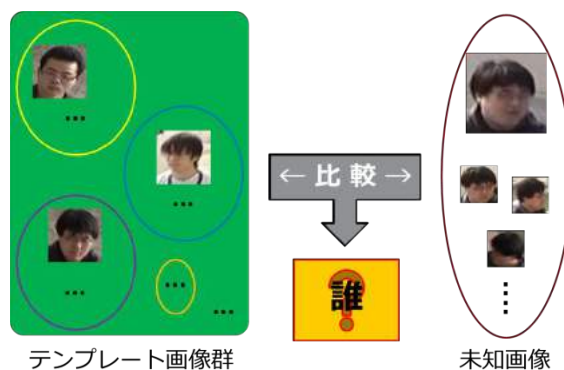


図7 テンプレート画像群との比較

6. 2歩行認証

歩行認証についての現在までの結果を報告する。歩行動画から特徴を抽出する手順は次のようになる。はじめに、歩く人物映像をカメラで撮影する。その映像から人物の頭、手、足をトラッキングする。この結果から個人による動きの特徴を把握する。把握できた特徴を使い歩行動画から個人を識別する。なお、この処理を実装するに当たり、機械学習を使うことにした。

実際のトラッキングポイントの記録例を示す。頭に赤、手に緑、足に紫と黄色のポイントを付けて、このポイントの動きを記録する。グラフは、二人の人物の右手の動きを表している。グラフの形の違いは、人物によって、手の動きが異なることを表している。

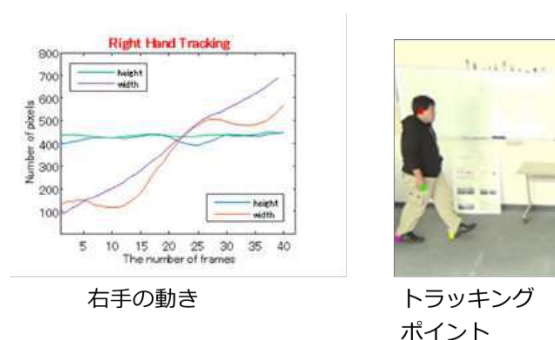


図8 トラッキング記録例

このような特徴を抽出し、人物を推論するために、機械学習を使う。大量の学習用データから特徴を抽出し、与えられた人物の動きから、その人物が誰であることを推論することを考えている。

7. おわりに

今回の実験では、屋外においても室内と同様の認識率を得ることが出来た。認識率自体は50%ほどだが、これは画像の解像度、テンプレートの数や種類に依存すると考えている。

歩行認証については、実験の結果から、人物の特徴点抽出が可能であると考えます。また、人物を特定するために、機械学習が適用できると考えています。

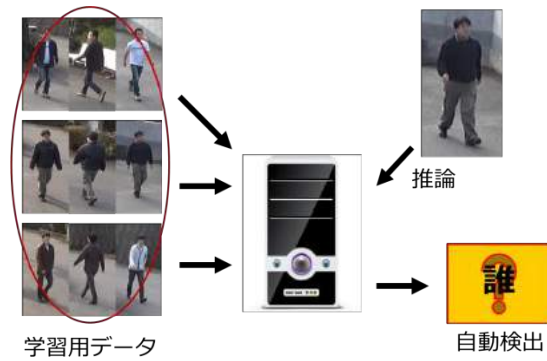


図9 機械学習方式による認証

今後の展開としては、屋外での認識率の高精度化に取り組む必要がある。これは、先ほ

ども触れたが、画像の解像度、テンプレートの数や種類に依存する。これについて検討する必要があると考えている。

歩行認証については、今回の実験では、健康者の動きから特徴を抽出することを試みた。高齢者では、特有の歩行特徴が現れるものと考えているので、歩行特徴による人物特定も可能であると考えている。両者を融合して、「顔+歩行」による認証が出来れば、信頼性も向上するものと考えている。

(謝辞) 本研究を進めるにあたり、吉森研究室の山口翔平君及び知念雅也君には、ソフトウェア開発だけでなく、現地調査にも協力いただいた。この場を借りて感謝する次第である。

平成27年度 日本文理大学 卒業研究・論文・設計 地域志向関連リスト

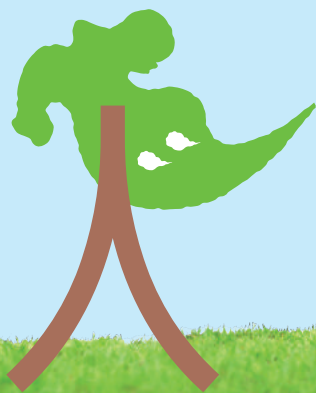
No.	学科	内容	共同研究
1	機械電気工学科	プラズマジェットによる水底への活性酸素輸送について（照射距離の影響）	
2	機械電気工学科	プラズマジェットによる水底への活性酸素輸送について（水質の影響）	
3	機械電気工学科	プラズマジェットによる水底への活性酸素輸送について（ガス流量の影響）	
4	機械電気工学科	プラズマジェットによる水底への活性酸素輸送について（プラズマ発生条件の影響）	
5	機械電気工学科	プラズマジェットによる活性酸素のゲル膜透過について	
6	機械電気工学科	トマト収穫に向けたトマト収穫ロボットの開発	
7	建築学科	Global Communication Centre	
8	建築学科	sinew of nature 自然の筋	
9	建築学科	ふるさと体験村におけるホテルの生息環境の評価に関する研究	
10	建築学科	山国川における出水時の流量と土砂輸送に関する研究	
11	建築学科	大分県における最新測量業務に関する研究	2名
12	建築学科	大分県における最新測量業務に関する研究 - 業界アンケート調査と現状 -	2名
13	建築学科	日差しの街	
14	建築学科	明治以降の耶馬溪図における風景の広がり近代化についての研究	
15	建築学科	1号館 P R O J E C T	
16	建築学科	大分県市町村別空き家バンク制度に関する現状調査について	2名
17	建築学科	ふるさと体験村における出水時の土砂動態に関する研究	
18	建築学科	大分市・別府市におけるラーメン店の出店条件に関する研究	
19	建築学科	竹田市岡本地区における生物多様性に配慮した圃場整備の評価 ～カエルを「生物指標」にして～	
20	建築学科	ミンナノイエ ～再生する町と街～	
21	建築学科	Packet Home - 商店街におけるSNS 的建築の提案-	
22	建築学科	ICTを用いたまちづくりに関する研究～杵築市城下町地区におけるケーススタディ～	
23	建築学科	縁 ～未来への片道切符～	
24	建築学科	つながりの門	
25	航空宇宙工学科	顕微授精における鞭毛運動波形に基づいた精子選択基準に関する研究	
26	情報メディア学科	小出力電磁波レーダを用いた位置推定による独居宅見守りシステムの一検討	
27	情報メディア学科	ニューロマーケティングに向けた脳波計測による心的効果分析の実験的検討	
28	情報メディア学科	基本アルゴリズムの理解と実装コードレビューでの問題についての一検討	
29	情報メディア学科	メニュー表が対象者に与える印象と最も効果的な配置方法の考案	
30	情報メディア学科	SoCを含むIoTネットワーク環境でのシステム開発における基本設計に関する基礎的検討	
31	情報メディア学科	表現研究「大学CMにおける有効な表現方法の研究」	
32	情報メディア学科	映像制作「SPATIOミュージックビデオ ドラマ構成を取り入れたMV	
33	情報メディア学科	湯布院地区・別府地区・長湯地区の観光ホテルおよび旅館のwebサイトに関する調査	
34	情報メディア学科	モバイルフレンドリー対応WEB サイトの現状と対策	
35	情報メディア学科	「人とペットの共存」をテーマとした作品の制作一	
36	情報メディア学科	通信ネットワークにおける不具合原因の効率的特定に必要な基礎データの実験的検討収集	
37	情報メディア学科	防犯カメラの録画映像を対象とした個人識別のための特徴抽出に関する研究	2名
38	情報メディア学科	SNS 記事の作成～ 蒲江の現在～	
39	経営経済学科	駅ビル再開発と消費者行動	20名
40	経営経済学科	大分県のNPO法人の現状と課題	2名
41	経営経済学科	高齢者に対する地域福祉の在り方	4名
42	経営経済学科	宇佐市安心院町のグリーンツーリズムについて	
43	経営経済学科	大分県の一村一品活動の現状と課題	2名
44	経営経済学科	住民同士が関心を持てる地域づくりのための一考察 ～ソーシャルワーカーの視点から～	5名
45	経営経済学科	大分フットボールクラブの財務分析	2名
46	経営経済学科	観光における訪日外国人の満足度と目的の現状	
47	経営経済学科	ふるさと納税の現状と課題～制度がもたらす地域発展の展望～	
48	経営経済学科	マラソン大会がもたらす経済効果	
49	経営経済学科	国際観光温泉文化都市の経済効果分析～別府市の事例分析を中心に～	
50	経営経済学科	わが国の地方公共団体の比較分析一宮崎県と大分県の財務書類を中心として一	

4. 平成 27 年度 成果発表会 & 合同シンポジウム チャレンジ OITA 地域創生活動報告会

成果発表会・合同シンポジウム
プログラム
報告記事
発表資料

地域創生活動報告会 in 豊後大野
プログラム
発表資料

地域創生活動報告会 in 佐賀関
プログラム
発表資料



「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

平成27年度 成果発表会&合同シンポジウム
～地域をまもり、地域をつくる、大学の取り組み～

2016

日時 **2/11** 木

13:00 ▶ 16:30

会場 **ホルトホール大分**

大分市金池南1丁目5番1号
TEL. 097-576-7555

3階 大会議室

地方創生へ向けて、COC採択大学がスクラム!
それぞれの大学の強みを活かした取り組みで、大分県の地域課題の解決へ

<開催趣旨>

NBU日本文理大学と大分県立看護科学大学は、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に選定され、それぞれの強みを活かして大分県の地域課題である少子高齢化に対応した取り組みや教育改革を精力的に行っています。

大学COC事業は、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めることで、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としており、その成果を地域に向けて発信することは重要です。

そこで、両大学のこれまでの取り組みについて学生成果発表を行うとともに、「大分の未来をまもり、つくる」ために我々はどうすべきかを地域住民や、自治体を含めた関係者と議論を深めることを目的に、成果発表会&合同シンポジウムを開催いたします。

プログラム

主催者代表挨拶 13:00

平居 孝之 (NBU日本文理大学 学長)

各大学取組説明 13:05

**豊かな心と専門的課題解決力を持つ
おおいた地域創生人材の育成**

吉村 充功 (NBU日本文理大学 学長室長)

**看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた
地域のまちづくり事業**

佐藤 玉枝 (大分県立看護科学大学 看護学部 教授)

学生取り組み成果発表 14:00

①NBU 日本文理大学

**環境保護による地域コミュニティの活性化
『アクアソーシャルフェス・プロジェクト』**

吉高大亮 (工学部・機械電気工学科・2年)、
森太陽 (工学部・航空宇宙工学科・2年)

②NBU 日本文理大学

小規模集落支援

～豊後大野市大野町土師地区の取り組み～

安部正吾、工藤走、鈴木大樹 (工学部・建築学科・3年)

①大分県立看護科学大学

高齢者の健康の維持・増進に向けた予防的看護の関わりについて～野津原地区の取り組み～

宮本季歩 (看護学部・看護学科・1年)、本多裕花 (看護学部・看護学科・2年)、
荻本明日香 (看護学部・看護学科・3年)

②大分県立看護科学大学

**一人暮らしの高齢者が生きがいをもって若々しく過ごすために
～富士見が丘団地の取り組み～**

倉光真由 (看護学部・看護学科・1年)、岩本美穂 (看護学部・看護学科・3年)

パネルディスカッション 15:00

大分の未来をまもり、つくる人材育成の可能性

■コーディネーター

栗田 充治氏 (亜細亜大学 学長)

■パネリスト

松尾 和行氏 (大分合同新聞社 上席執行役員 論説編集委員室長)

渡邊 信司氏 (大分市 市民部 野津原支所 支所長)

岩波 栄逸氏 (大分都市医師会 副会長)

高見 大介 (日本文理大学 人間育成センター 副センター長)

影山 隆之 (大分県立看護科学大学 看護研究交流センターセンター長)

閉会挨拶 16:25

村嶋 幸代 (大分県立看護科学大学 学長)

主催/

NBU 日本文理大学
大分県立看護科学大学

後援/ 大分県・大分県教育委員会・大分市・大分市教育委員会・豊後大野市・
豊後大野市教育委員会・(一財)日本財団学生ボランティアセンター・
(公社)大分県看護協会・大分合同新聞社・西日本新聞社・NHK大分放送局・
OBS大分放送・TOSテレビ大分・OAB大分朝日放送・OCT大分ケーブルテレビコム

NBU 日本文理大学・大分県立看護科学大学

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

平成27年度 成果発表会&合同シンポジウム ～地域をまもり、地域をつくる、大学の取り組み～

パネルディスカッション登壇者プロフィール

■ コーディネーター

栗田 充治氏 (亜細亜大学 学長)

亜細亜大学・亜細亜大学短期大学部学長。

専門は哲学・倫理学。1990年代からボランティアの分野を手掛け、現在では、街づくり未来塾、ボランティア論、リーダーシップ論等を担当。4月からは、いわゆる自校史科目である「建学の精神を考える」の授業も担当する予定。

日本ボランティア学習協会常任理事、武蔵野市民社会福祉協議会・ボランティアセンター武蔵野運営委員長なども務めている。

■ パネリスト

松尾 和行氏 (大分合同新聞社 上席執行役員 論説編集委員室長)

大分合同新聞社論説編集委員室長。

1977年入社。社会部や政治部の記者、社会部長、編集局次長兼政治部長、編集局長などを経て2015年4月から現職。社会部記者時代は主に事件を取材。政治部では村山首相を担当した。

現在はコラム「東西南北」や論説を執筆している。

渡邊 信司氏 (大分市 市民部 野津原支所 支所長)

大分市 市民部 野津原支所長。

大分県立看護科学大学地(知)の拠点整備事業推進会議委員。

高校、大学とラグビー部に所属し、ラグビー漬けの生活を送る。ラグビーで培った精神的・肉体的タフさと地元野津原をこよなく愛する精神で、大学卒業後の昭和61年4月に旧野津原町役場職員となる。

平成17年1月1日大分市・佐賀関町・野津原町の合併により大分市職員となり、現在に至る。

岩波 栄逸氏 (大分郡市医師会 副会長)

岩波内科クリニック(大分市富士見が丘) / 理事長・院長 / 大分郡市医師会副会長。

大分県立看護科学大学の地(知)の拠点整備事業－看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業－事業推進会議委員長。

現在、大分市連合医師会理事として、厚生労働省のすすめる地域包括ケアシステムの実現に向けて、在宅医療連携拠点体制整備事業に取り組んでいる。

高見 大介 (日本文理大学 人間力育成センター 副センター長)

日本文理大学 学長室室員・人間力育成センター副センター長・工学部建築学科助教・日本ボランティア学習協会理事・英国インターナショナルエディンバラアワードリーダー・日本青少年体験活動奨励制度アドバイザー。

東日本大震災をきっかけに学生ボランティア活動を教育として展開する。また、大分県内で地域活動への学生の参画を正課・正課外の両側面からの取り組みを行う。NBUの人間力教育の現場責任者を努める。

影山 隆之 (大分県立看護科学大学 看護研究交流センター センター長)

大分県立看護科学大学 看護研究交流センター長 / 大学院看護学研究科長 / 精神看護学研究室教授。

平成27年度より、地域と大学との窓口である看護研究交流センターの長として、COC事業による予防的家庭訪問実習にも責任を負う。

離島の精神科医療の立ち上げのため地域社会に入り込んだ20代の経験を想起しつつ、学生を地域に育ててもらう実習を願っている。

文部科学省が地域社会と連携し、地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学を支援する「地（知）の拠点整備事業Center of Community(大学COC事業)」において、大分県内からは平成25年に大分県立看護科学大学、平成26年にNBUが採択を受け、両大学の様々な取組みが展開されています。2/11大分市ホルトホールにおいて「平成27年度 成果発表会&合同シンポジウム～地域をまもり、地域をつくる、大学の取組み」が開催されました。

平成25年度採択：大分県立看護科学大学「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業」
 平成26年度採択：日本文理大学「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」



大学COC事業は、大学が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進めることで、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としており、その成果を地域に向けて発信することは重要です。今回の合同発表会は、両大学のこれまでの取組みについて学生成果発表会を行うとともに、「大分の未来をまもり、つくる」ためにどうすべきかを地域住民や、自治体を含めた関係者と議論を深めることを目的に、開催されました。

パネルディスカッション・コーディネーターの亜細亜大学 栗田 充治学長（中央）、共同成果発表を行った大分県立看護科学大学 村嶋 幸代学長（右）と日本文理大学 平居 孝之学長(左)

平居学長から大学での取組みが充実し、それが地域に拡がって地域創生ができる。本日の合同成果報告会が実りある有意義な時間となることを願いとす旨の主催者代表挨拶があり合同成果報告会がスタートしました。

【各大学取組説明】NBUからは吉村 充功学長室長から「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」と題して、取組みについて説明が行われました。



↑両大学を代表して、COC事業の説明の後、NBUの取組みとして地域をキャンパスにした学びとは何なのか試行錯誤する中から、大分の地域を知り、考え、生きるための科目“地域志向科目”を大幅に増やすカリキュラム改革を行い、これまで学生も地域の方々に学ぶことが出来、お互いに切磋琢磨する関係ができつつある成果を紹介。（左）質疑応答では評価指標について、来場者からの質問もありました。（右）

【学生取り組み成果発表】NBUからは、2組の学生グループが発表を行いました。（NBUの発表分を掲載します。）



↑機械電気工学科2年 吉高大亮さん、航空宇宙工学科2年 森太陽さんが「環境保護による地域コミュニティの活性化」をテーマに「四季の森プロジェクト：アクアソーシャルフェス」の取り組みを紹介。大分市馬場地区磯崎海岸でアカウミガメの産卵環境を保全する活動に携わり、自然環境を豊かにするだけでなく、地域コミュニティの構築に繋がり、それが、防災、福祉等にも役立つ。今後は専門知識を活かし参画したいとの力強い発表がありました。

↑工学部建築学科3年 安部正悟さん、工藤 走さん、鈴木大樹さんの3名が小規模集落支援のテーマで、豊後大野市大野町土師地区での取り組みを報告しました。土師地区での経験を通しての考え方の変化、成長した点、授業の一環でふるさと体験村のウッドデッキを改修する中から、デザインの設計、原価計算、施工等将来に繋がる経験が出来き、技術・知識を身につけていくにつれ自ら考え、動く積極的な姿勢になれたこと等の成果が発表されました。（左）発表の後、豊後大野市土師振興協議会 事務局長 田尻 高二氏より5年に及ぶ、NBU学生への協力の謝辞とそれに伴う住民意識の変化、今後の期待を交えての講評を頂きました。（右）

【パネルディスカッション】「大分の未来をまもり、つくる人材育成の可能性」について、亜細亜大学 栗田学長がコーディネーターとなって、マスコミ、行政、医療、両大学からパネラーが登壇。両大学の取組みとその協力者の方々の取組み、そこから生まれた成果、今後の課題等について、熱心な議論が展開されました。



↑高見 大介人間力育成センター副センター長（写真左：中央）が、今まで携わってきた正課・正課外での取り組みの中から、学生の成長について活動当初は、只地域に行くという感覚であるが、回数を重ねていくにつれ、地域に還るといふ想いに変化していくことに触れ、この変化をどの様に捉えるかが大切で、感動することを覚える取り組みが今後大切になってくるのではないかと、地域の方々と学生がたくさん議論ができる環境が育まれ、大分の教育モデルとして根付き、それが未来に繋がれば良いと思うとの意見を述べました。



↑合同成果発表会&シンポジウム 主催者、発表者、関係者一同：今後、両大学が夫々の取組みを更に充実・発展させ、地域の方々からの協力も得ながら連携し議論を重ねていくことで、地（知）の拠点大学としての役割を展開していくことが確認されました。

豊かな心と 専門的課題解決力を持つ おおいた地域創生人材の育成



日本文理大学 学長室長
COC事業推進責任者
吉村 充功

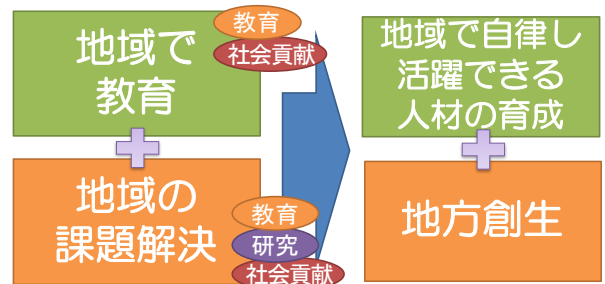
COCとは何か？

文部科学省「地(知)の拠点整備事業」

- 平成25年度より開始した「**地域のための大学**」づくりのための**大学教育改革**
- **COC** : Center Of Community **地(知)の拠点**
- 25年度採択 : **大分県立看護科学大学**
 - 看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業
- 26年度採択 : **日本文理大学**
 - **豊かな心と専門的課題解決力を持つ
おおいた地域創生人材の育成**

事業期間
5年

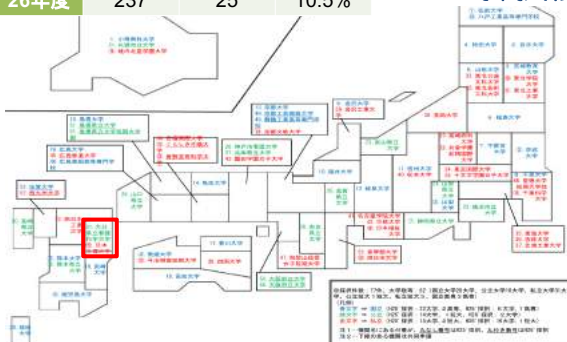
COC (Center Of Community) の目的



地域再生・活性化の核となる大学の形成
(地方創生の拠点づくり)

	申請件数	採択件数	採択率
25年度	319	52	16.3%
26年度	237	25	10.5%

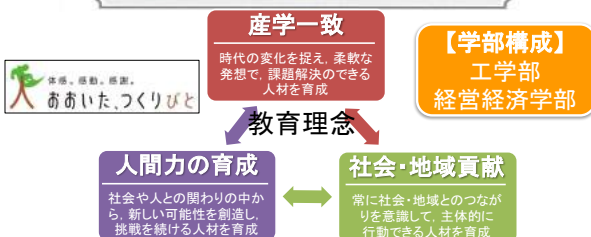
全国のCOC採択校



NBU日本文理大学の COC事業

NBUの建学の精神と教育理念

建学の精神「産学一致」



若者を地域社会・産業界で活躍できる地方創生人
＝「あおいた、つくりびと」として育てる

地域をキャンパスにした学びの原点・・・

- 地元の学生ほど地元の**魅力に気付く機会がない**
⇒ 大分には何もない。刺激がない。など
- 地元でどのような**企業があるかを知る機会がない**
⇒ 比較対象がないまま都会へ就職
- 人間力教育の実践において**地域でのプロジェクト活動が学生の飛躍的な成長に**
⇒ **地域のホンキへの出会い、学びのきっかけ**があれば若者は自ら関わろうとする
⇒ **地域の教育力**は頼るべき存在

NBUが育成するのは「地域創生人」!

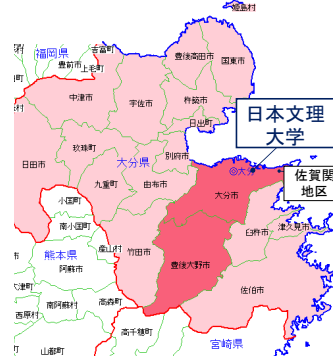
建学の精神 産学一致 教育理念 人間力の育成 社会・地域貢献

地域への愛着を持ち、主体的に課題を発見し、専門的なスキルを活用して住民や関係者と課題解決に取り組むことができる人材

体感。感動。感謝。

あおいた、つくりびとになる

本事業の連携自治体・活動地域



連携自治体	人口推計	高齢化率
大分県	1,171,702	29.43
大分市	477,788	23.48
豊後大野市	37,357	40.08

佐賀関地区の高齢化率は47.7% ※H26年10月1日の数字

地域に根ざした教育カリキュラムへの全学的な改編

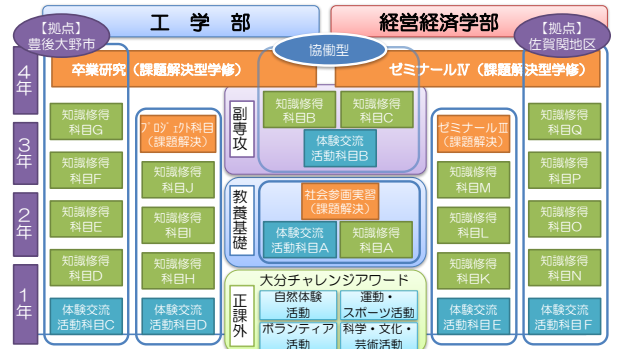
「地域創生人材」育成のための学修サイクルの確立



大分の地域を知り、考え、生きるための科目 = 地域志向科目を大幅に増やすカリキュラム改革

学修サイクルを基にしたカリキュラム体系のイメージ

ナンバリングによる体系化

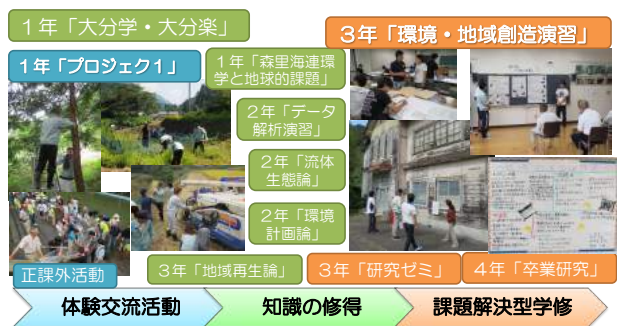


地域課題を解決するプロジェクトの推進

体感 × 教育 × 感動 × 研究 感謝 × 地域貢献



プロジェクト①：小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ支援

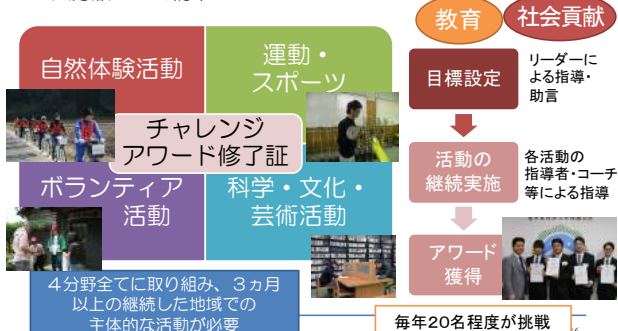


人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」 大分市木佐上地区との連携 旧木佐上小学校の利活用



「正課外活動「大分チャレンジアワード」制度

◎文部科学省が首都圏で実施する青少年体験活動奨励制度の大分版として構築



4分野全てに取り組み、3ヵ月以上の継続した地域での主体的な活動が必要

毎年20名程度が挑戦

その他の学修・学習活動の例 1

- 大分県
 - 【地域・企業理解／学生起業家マインド育成】
 - ・地域企業との連携による若者雇用創出の促進
 - ・若者が県内企業や地域の魅力を知る
 - ・身近な行政政策への若者視点の提案
- 大分市（佐賀関地区中心）
 - ③地域と連携した小学生への文化・歴史・環境教育
 - ③NPOとの連携による体験型観光プロジェクト立案
 - ④関あじ関さは通り商店街での地域活性化活動
 - ⑤体験型福祉・スポーツ自由研究教室の実施
 - ⑤総合型地域スポーツクラブの支援活動（大在地区）
 - ⑥NPOの経営支援・学生地域活動拠点の開設

主な数値目標（H30年度末）

	指標	数値
教育	地域志向科目数	全科目の4割（200科目）
	地域での地域課題解決を扱うゼミ数	「卒業研究（工）」「ゼミナール（経営経済）」それぞれ全体の半数以上
	地域づくり副専攻修了者	30名以上
	正課外活動「大分チャレンジアワード」修了者	100名以上
	ジェネリックスキルの育成	「リテラシー」4.0 「コンピテンシー」4.0
研究	地域共同研究を行う教員数	8名 ⇒ 20名4チーム以上
社会貢献	地域ボランティア活動数	675名 ⇒ 延べ800名以上
	本学が地域貢献していると実感する地域人数の割合	27% ⇒ 40%以上

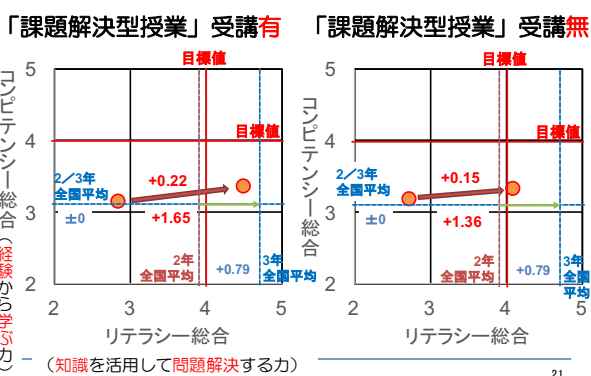
その他の学修・学習活動の例 2

- 豊後大野市
 - ①農林業体験・コミュニティ交流活動
 - ①地域のお祭りイベント等の存続支援
 - ①小学生のお仕事発見ランドの開催
 - ②農業支援ロボット（ものづくり）の試行
 - ②高齢者支援機器（ものづくり）の試行
 - ③観光まちづくりプランの立案
 - ③エコパーク・生物多様性戦略に関連した観光資源発掘活動
 - ③地域での観光コミュニティビジネス（サービ斯拉ーニング）体験活動
 - ⑤千歳地区でのコミュニティ支援活動

H27年度の地域志向科目の実施状況

地域志向科目数（H26：26科目）		地域志向のゼミ活動（H30年目標：200科目）		（H30目標：ゼミ数の半数）	
カテゴリーⅠ：地域での体験交流活動を教育内容に含む科目	25科目	【工学部】卒業研究	10研究室	36研究室	27.8%
カテゴリーⅡ：地域における課題解決に必要な知識を修得する科目	35科目	【経営経済学部】ゼミナール	12ゼミ	19ゼミ	63.2%
カテゴリーⅢ：ステークホルダーとの協働による課題解決型学修科目	100科目	合計	22研究室・ゼミ	56研究室・ゼミ	40.0%
合計	160科目				

ジェネリックスキル（汎用的技能）の成長



これまでの効果

- 地域での実践的な学びは
 - 「ジェネリックスキル」や「人間力」の育成は もちろん
 - 「他人事」から「自分事」へ意識を変化させる
 - 「趣味」の世界から「社会的な役割意識」へ
 - 早い段階での活動は「知識」の不足を痛感する ⇒ 学びへの動機付け
 - 教育プログラムとして機能させることで 地域の特徴・強みを理解することにつながる
 - 地域力の向上＝教育力が地域により効果をもたらす
 - 地域とともに若者を育てるという意欲が大切

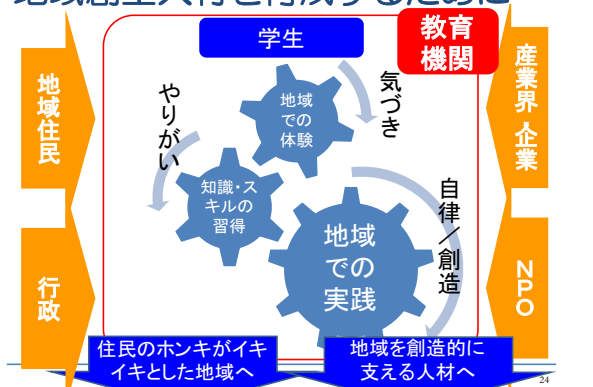
H27年度地域志向プロジェクト研究

No	代表者 学科	代表者 氏名	申請分野	対象自治体名	プロジェクト研究テーマ
1	機械電気 工学学科	川崎敬之	⑦地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）	① 大分県	大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発
2	情報 メディア 学科	福島 学	①小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性化	② 大分市	要介護者のコミュニケーション支援システムの開発 ー共通プラットフォームによる効率良いICT技術の利活用ー
3	経営経済 学科	坂口昌宏	⑤健康増進・生活支援によるコミュニティの維持	③ 豊後大野市	地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究
4	情報 メディア 学科	鈴木秀男	①小規模・高齢化が深刻な集落・地域コミュニティの維持・活性化	③ 豊後大野市	徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発

学内公募を行い、7件の応募から学内外委員の審査を経て4件を採択

22

地域創生人材を育成するために



今年度の成果発表を各地区で実施！

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

NBU チャレンジ OITA

地域創生活動報告会 2016

in 豊後大野

- ・日時：平成 28 年 2 月 13 日 (土) 13:30 ~ 16:30
- ・会場：豊後大野市役所本庁舎 2 階 視聴覚室 (豊後大野市三重町市場 1200 番地)

2/13^土
入場無料・申込不要

- ・学生発表7件
- ・教員研究発表3件

- ・学生発表8件
- ・教員研究発表1件

文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

NBU チャレンジ OITA

地域創生活動報告会 2016

in 佐賀関

- ・日時：平成 28 年 2 月 20 日 (土) 10:00 ~ 12:30
- ・会場：佐賀関市民センター 2 階 研修室 (大分市佐賀関 1407 番地 27)

2/20^土
入場無料・申込不要



環境保護による地域コミュニティの活性化 『アクアソーシャルフェスin大分に参加して』

日本文理大学 工学部機械電気工学科2年
吉高 大亮



四季の森プロジェクトとは

【人間力育成センターの主なプログラム】



【四季の森プロジェクト】



アクアソーシャルフェス2015in大分とは

トヨタ自動車ハイブリッド車「アクア」の販売に際し、全国47都道府県で「水辺の環境保護」をテーマに、地元の自然環境を保護・保全する社会貢献プロジェクトを全国の新聞社と地元の大学やNPOと協力しながら行う環境イベント！



企画内容

テーマ：磯崎海岸をアカウミガメの古里にしよう

竹垣作成

竹垣の役割とは？

1. アカウミガメが産卵する際に必要不可欠な海岸の砂をせき止める
2. 月の光を目印に海へと帰る習性のあるウミガメが、衝波などの光と間違えるのを防ぐために、一昨年、植栽された松の苗木を黒塗りの木から守る

環境教室

アカウミガメの現状や海岸環境について関心を持ってもらうため、様々な環境保全活動に取り組みたい「NPO法人おいた環境保全フォーラム」の方々から、アカウミガメの保護活動を中心に講話をしていただき、環境の大切さについて考えをもち時間を設ける

参加者間の交流

地域の方による焼き出しの昼食や、参加者全員で協働して竹垣作成



アクアソーシャルフェス本番



アクアソーシャルフェスを終えて —参加者の声—

運営スタッフの声

「私たちが生まれ育った地元の方々に支えられて成長してきたことを実感した」
「私たちが立案した企画に快く協力して下さった地域の方々の優しさがありがたかった」

地域社会に参画する事の尊さを実感

一般参加者の声

「地域の方々と来年のビーチクリーン活動で再会する事を約束した」
「他の参加者とSNSを通じて友達が出来た」

環境保護イベントを通じた地域コミュニティ構築の確かな可能性を実感

アクアソーシャルフェスを終えて

—検証—

地域コミュニティ活性化のポイント

① 世代に関わらず誰もが気軽に参加できるプログラムにチームで取り組んだ事

初めて会う参加者、なおかつ普段は中々関わる機会が少ない世代の参加者同士が協働作業を通じて交流を図るしかけがなされていたこと。

② 活動の目的を参加者同士が共有することが出来た事

アカウミガメをイベントのシンボリック存在にすることで共通の目的が生まれ、世代に関わらず参加者同士の距離感を縮めた要因となった。



まとめ



小規模集落支援 ～豊後大野市大野町 土師地区の取り組み

日本文理大学
工学部 建築学科
3年 安部 正吾
工藤 走
鈴木 大樹



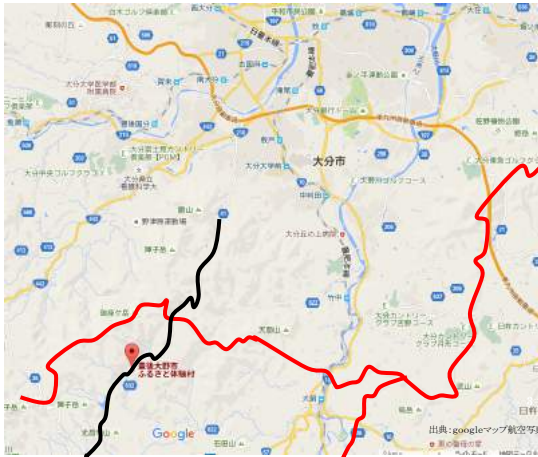
土師地区の概要

- 場所: 大分県豊後大野市大野町北部地区
- 人口: 約200人弱
高齢化率は、約70%



土師地区中心部
県道41号写真

2



出典: googleマップ

取り組みのねらい

- 小規模集落の現状と魅力・課題を知り、**地域コミュニティを維持する取り組み**を身をもって体験
- 地域に関わり、**技術者の視点で地域の課題を解決できる能力**を身に付ける
- 建築学科の学生として3年前から土師地区の方々のご協力を得て活動

5

活動を通しての**変化・成長**



6

土師地区での**活動し始めの**考え



- 建物が古い
- 交通が不便
主にバスがメインの交通手段
(1日に数本程度)



- 体験村以外の**娯楽、買い物施設がない**
- 害虫、獣の出没

魅力が乏しい
小規模集落

7



出典: googleマップ

8

土師地区での経験を通しての考えの変化

- 建物が古い
- 大分市街地では、あまり見れない
- 交通が不便
- ゆったりしたライフサイクル
- 体験村以外の娯楽、買い物施設がない
- 川の上流に当たるため小河川が多い、食べ物を作りだす(果樹を植えることができるetc…)
- 害虫、獣の出没
- ジビエ料理の楽しみ



9

この取組での成長した点



- 現地の方と親しむ力
- 情報収集力
- 課題発見能力
- 発案能力
- 専門的能力

10

1年次の取組

農林業体験活動で地域の営みを知る

11

住民の方に作業内容・道具の使用方法を学び実践!



・住民の方から道具の使い方、作業の目的などを教えてもらう



・この経験を通して、普段住民の皆さんが行っている**農業の大変さ**を身をもって知ると同時に**農家の方に感謝の気持ち**を持った経験だった。

12

全学年有志の取組 ふるさと体験村の運営協力

13

河川プールの改修、開村式の運営協力!



◎夏に行われるふるさと体験村の開村式の準備や当日の運営に協力した

河川プール

- ・土砂出し
- ・プール掃除
- ・プールのペンキ塗り

開村式当日

- ・受付
- ・駐車整備
- ・鮎のつかみ取り
- ・餅つき

14

3年次の取組 地域の課題を探り 解決のための 提案・実践をする

15

インタビュー等を通じて地域の魅力・課題を発見!



・夏に合宿授業として、住民宅を訪問し、インタビューを行い、地域の魅力を発見し、どのようにしていけばよいかなどのプランを立て、最後に地域の方々に発表した。

内容

地域の生活維持策・文化伝承・
古民家の魅力発見


16

地元の声

- ・ふるさと体験村を残してほしい
- ・近くにスーパーなどがほしい
- ・交通の不便さ
- ・古民家がたくさんあるからそれをどうにかしてほしい
- ・・・など

学生の提案

- ・ふるさと体験村をもっとHPなど使ってPRする
- ・食料配達サービスの利用
- ・コミュニティバスの便を増やす
- ・古民家を民宿や休憩所として利用する
- ・・・など



18

ふるさと体験村のウッドデッキを設計・施工！



- ・現在、3年生は授業の一環でふるさと体験村のウッドデッキを改修中

自分たちで全て


- ・デザインの設計
- ・原価計算
- ・施工

18

今後のことについて

環境面の提案として

ホテルを見ることが
できることをPR



大学で環境のことを学んだ結果
自然環境にも目を向けられるようになった

自然環境を武器に
人を呼び込む

19

取り組みへの姿勢の変化

教えてもらったことを体験してみる

↓

受け身の姿勢


↓

3年間、力を
身につけた結果

自ら考え、動く
積極的な姿勢に変化

20

広瀬大分県知事との意見交換会



- ・地域の方々も土師を良くしたいという強い思いがあった
- ・県に対する提案や要望
- ・人口が減っていくという危機感
- ・学生に期待してくれている
- ・・・など

協力していけば

↓

地区の衰退を止め

↓

現状を少しでもいい方向に

21

最後に

- これまでの活動を通し
- 土師地区を今後も残したい
- 実現する可能性がある
- 地元住民の方々と協力しながら
- 学生と地域がともに成長できるような
- 活動を続けていく

22



文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

NBU チャレンジ OITA 地域創生活動報告会 2016

in 豊後大野



- ・日時：平成 28 年 2 月 13 日 (土) 13:30 ~ 16:30
- ・会場：豊後大野市役所本庁舎 2 階 視聴覚室 (豊後大野市三重町市場 1200 番地)

プログラム (13:00 受付開始, 15:10~15:20 休憩)

13:30 ~ 13:35 あいさつ・趣旨説明

「日本文理大学 大学 COC 事業『おおいたつくりびと』での取り組み」学長室 室長 吉村充功

13:35 ~ 15:10 学生取り組み発表 (発表 10 分 / 質疑応答 3 分)

1. 地域づくり支援～市民交流の場・楽しく広場「ひょうたん」(千歳町)の活動サポートを通して～ (経営経済学科・3年生)
2. 朝地小中学校における継続的な予防的心理教育プログラムの実践 (経営経済学科・2年生)
3. 2015 年度サービスラーニング活動報告 - 豊後大野市をフィールドとして - (経営経済学科・1年生)
4. 地域と世界を結ぶ 地域創生・豊後大野まるごと インターネット・エリアピアビジネス (経営経済学科・3年生)
5. 大野町土師地区における農林業体験を通じた小規模集落支援活動 (建築学科・1年生)
6. 大学生による企業魅力発信・求人動画制作 ～(株)リファイン大分編～ (情報メディア学科・経営経済学科・2年生)
7. 大野町ふるさと体験村における河川整備に関する研究 (建築学科・4年生)

15:20 ~ 16:20 地域志向プロジェクト研究発表 (発表 15 分 / 質疑応答 5 分)

1. 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する
域学協働プロジェクト研究
鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏 (経営経済学科)
2. 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発
鈴木秀男、吉森聖貴、福島学 (情報メディア学科)、稲川直裕
(機械電気工学科)
3. 地域創生を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に
関する基礎研究
川崎敏之 (機械電気工学科)、坂井美穂 (情報メディア学科)、
池畑義人 (建築学科)、小幡章 (航空宇宙工学科)

16:20 ~ 16:25 講評 (豊後大野市副市長)

16:25 ~ 16:30 おわりに (主催者お礼の言葉)



NBU 日本文理大学

NIPPON BUNRI UNIVERSITY

〒870-0397 大分県大分市一木1727

TEL: 097-592-1600 (大代表)

Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】

TEL/FAX: 097-524-2663 (直通)

Web: <http://coc-nbu.jp>

e-mail: coc@nbu.ac.jp

【趣旨】

地域創生活動報告会は、地域と学生協働によるこれからの地域づくりをテーマに、「教育・研究・社会貢献(学生正課外)」活動について今年度の成果を学生、教員から地域の皆さまに報告するとともに、今後の発展性について意見交換し、新たな学生活動の可能性を探ります。



NBUチャレンジOITA 地域創生活動報告会 2016 in 豊後大野

日時：平成28年2月13日（土）13：30～16：30

場所：豊後大野市役所本庁舎2階 視聴覚室

報告会プログラム

13：30～13：35

主催者あいさつ 学長 平居孝之

趣旨説明「日本文理大学 大学COC事業『おおいたづくりびと』での取り組み」学長室長 吉村充功

13：35～15：10 学生取り組み発表（発表10分/質疑応答3分）

1. 地域づくり支援 ～市民交流の場・楽らく広場「ひょうたん」（千歳町）の活動サポートを通して～
高橋和輝、藤内健人、長野俊太、松尾昂騎（経営経済学科・3年）
2. 朝地小中学校における継続的な予防的心理教育プログラムの実践
堀亜衣里、西ゆき、池田彩華、藤井太雅、金昇吾、青柳翔真、弘中裕太（経営経済学科・2年）
3. 2015年度サービスラーニング活動報告-豊後大野市をフィールドとして
相川瑞貴、上米良千尋、佐藤海紗、戴駿豪、高山仁、矢田悠馬、矢野洸祐、劉趁欣、丁立昕
（経営経済学科・1年）
4. 地域と世界を結ぶ 地域創生・豊後大野まるごと インターネット・エリアピアビジネス
大塚優太、高倉大暉（経営経済学科・3年）
5. 大野町土師地区における農林業体験を通じた小規模集落支援活動
上田亮（建築学科・1年）
6. 大学生による企業魅力発信・求人動画制作～(株)リファイン大分編～
後藤和典（情報メディア学科・2年）、堀亜衣里、千嶋洋平（経営経済学科・2年）
7. 大野町ふるさと体験村における河川整備に関する研究
二宮愛莉、後藤悠希（建築学科・4年）

（15：10～15：20 休憩）

15：20～16：20 地域志向プロジェクト研究発表【教員】（発表15分/質疑応答5分）

1. 地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究
鍋田耕作、河村裕次、坂口昌宏（経営経済学科）
2. 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発
鈴木秀男、吉森聖貴、福島学（情報メディア学科）、稲川直裕（機械電気工学科）
3. 地域創生を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する基礎研究
川崎敏之（機械電気工学科）、坂井美穂（情報メディア学科）、池畑義人（建築学科）、小幡章（航空宇宙工学科）

16：20～16：25 講評・豊後大野市副市長

16：25～16：30 おわりに（主催者お礼の言葉）

地域づくり支援

～市民交流の場・楽しく広場「ひょうたん」 (千歳町)の活動サポートを通して～

高橋和輝、藤内健人、長野俊太、松尾昂騎(経営経済学科・3年)

今回の報告内容

- ①市民交流の場・楽しく広場「ひょうたん」での体験交流活動
- ②活動サポートに必要な知識・技術の習得
- ③参加者の増加や生きがいを生み出すような課題解決型学修の実践
- ④これまでの教育実践プログラムの紹介(夏休み体験型自由研究教室や佐賀県地区での小学生とその保護者を対象にした企画等)

楽しく広場「ひょうたん」の活動内容

活動の目的

「ちょっと寄り道・・・こことからだが軽くなる場所」

を目指しています

活動内容 毎週月曜日 9:00～11:30

9:00～9:50 生け花・お茶出し

9:50～10:50 豊後大野市の歌・ふんどこ節・スタッフの考えたレクリエーション

10:50～11:20 お茶タイム(フリートーク)

11:20～11:30 連絡事項・お見送り

体験交流活動

- ①ひょうたんの活動見学
- ②活動に参加したときの印象
- ③参加者の印象
- ④スタッフの方々の印象

活動サポートに必要な知識・技術の習得

【参加者の特徴を考えた上での企画立案】

- 参加者が楽しむ、笑顔になれるような楽しい企画
- 色々な参加者を想定して企画
- 身体と頭を使うような活動の提案
- できる、できそうなことを考え、参加者同士で協力し合う取組の提案
- これまでしたことのないような活動の提案

企画書作成に当たって重視した点

- ①活動の時間配分について
- ②活動を通して得られる効果について
- ③リスクマネジメント・安全面への配慮について

課題解決型学修の実践

①運営面での留意点

- 安全面の配慮、参加者が活動を通して良い効果があるように配慮、出来るだけスムーズな進行
- 活動を盛り上げるための配慮
- 参加者が楽しんでもらえるような雰囲気づくり
- 全体の様子を見ながらの進行

課題解決型学修の実践

②参加者への配慮

- 積極的に話しかけるようにした。
- 活動の場を楽しいと思ってもらえるようにした。
- ゲームなどでわからないときには、すぐにサポートするように心がけた。

実際に運営してみて感じたこと

- ①企画した内容が、本当に楽しんでもらえるのが不安であった。
- ②ルール等の説明が伝わらないこともあった。
- ③企画した内容が、自分たちの考えたような効果が出るのか心配だった。
- ④参加者にどう伝わっているのかわからなかった。

この活動を通して成長したと考える 社会人基礎力

- 課題発見力・・・現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- 計画力・・・課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
- 実行力・・・目的を設定し確実に行動する力
- 発信力・・・自分の意見をわかりやすく伝える力
- 働きかけ力・・・他人に働きかけ巻き込む力
- 主体性・・・物事に進んで取り組む力

これから、さらに成長が必要と感じた 社会人基礎力

- ・課題発見力
 - ・計画力
 - ・働きかけ力
 - ・発信力
 - ・柔軟性・・・意見の違いや立場の違いを理解する力
 - ・状況把握力・・・自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
- この活動を通して成長したが、社会に出る前にさらなる成長が必要だと感じた。

地域からの声(スタッフ・利用者からの意見)

- ①参加者(利用者・スタッフ)への効果・影響
- ②活動全体の活性化
- ③他世代との交流(幼稚園児など)
- ④学生の成長

これまでの教育実践プログラムの紹介

- ・小学生を対象にした夏休み体験型自由研究教室
- ・佐賀県地区での小学生とその保護者を対象にした地域交流教室

※このようなプログラムも、豊後大野市でも実践できればと考えています。

朝地小中学校における 継続的な予防的心理教育 プログラムの実践

日本文理大学経営経済学部2年
堀 亜衣里・池田 彩華・西 ゆき・藤井 太雅・
青柳 翔真・金 昇吾・弘中 裕太
日本文理大学経営経済学部准教授 高橋 淳一郎

はじめに

<スクールカウンセラー (SC) の視点から捉えた 小規模校の課題>

- ① クラス替えがないため、人間関係が固定化されてしま
- ② 人数が少ないため、社会性を学ぶ機会が限定されている

不^る適^る応^るや問題行動の要因とな

子どもたちの社会
性の発達を促進す
る環境が必要！

→ **予防的心理教育
プログラムの導入**

予防的心理教育とは

すべての児童生徒を対象とした 予防・開発的カウンセリング

予防的・・・将来に起こり得る問題や状況に備える
ため、事前にある種の能力を習得させ
たり、本人が主体的に自らの力で解決でき
るように援助すること

↓
未熟なスキルを身につける機会を持たせる

<ソーシャルスキルトレーニング (SST) >

その環境に適切な行動のモデルを示し、そこで学習した
モデルの行動を実践してみる(トレーニングする)ことで社
会性を向上させる介入手法

<構成的グループエンカウンター (SGE) >

グループで行なうエクササイズ(グループワーク)と、そ
れに続くシェアリングを通じて他者との心のふれあいを実
感し、自己理解と他者理解を促進していくもの

<対人関係ゲーム (SIGs) >

対人関係が必ず発生するようなゲームを通じて「楽し
い」という気持ちを持つことで対人関係上の不安を抑制す
る。と同時に、ゲームを通じて体験的に社会性を学んでい
く介入手法

平成27年度のプログラム

<4月>

小学1～3年生 (SIGs: 自然な身体接触を味わう・他者と協力する)
平衡感覚ワーク デュオ・シット

<5月>

小学3年生 (SST: あいさつをする)
小学4～6年生 (SIGs: 自然な身体接触を味わう・仲間と協力する)
平衡感覚ワーク こおり鬼
小学1～2年生 (SIGs: 自然な身体接触を味わう) みんな鬼 木とリス
小学3年生 (SGE: 自分を見つめる) 森の何でも屋さん

<6月>

小学1年生 (SST: お友だちを遊びに誘う)
小学2年生 (SST: お友だちに話しかけられたときにどうしたらいいか)
小学4～4年生 (SIGs: 自然な身体接触を味わう) みんな鬼 木とリス
小学5～6年生 (SIGs: 他者と協力する・コミュニケーションを考える)
図形伝達ゲーム
小学1～3年生 (SGE: 自然な身体接触を味わう) 誰の手ゲーム

<11月>

小学1年生 (SST: 順番を待つ)
小学3～4年生 (SIGs: 仲間と協力する・意見を言う/聞く/調整する)
魔法のじゅうたん
小学5～中学3年生 (SIGs: 仲間と協力する・自分の役割を果たす)
くまがり

<12月>

小学2年生 (SST: お友だちを上手に注意する)
小学3年生 (SST: お友だちを上手に注意する)

<1月>

小学1年生 (SST: お友だちに対して怒った時にどうしたらいいか)
小学4～5年生 (SIGs: 意見を言う/聞く/調整する・無意識を体験する)
さつまいも物語
小学6～中学1年生 (SIGs: 仲間と協力する・意見を言う/聞く/調整する)
四角形
中学2年生 (SGE: 自分を見つめる・他者の長所を発見する) 四面鏡
中学3年生 (SGE: 自分を見つめる) 25歳の私からの手紙

<7月>

小学3～6年生 (SIGs: 仲間と協力する) 風船リレー
小学1～3年生 (SIGs: 仲間と協力する・意見を言う/聞く/調整する)
バンガロー殺人事件

<9月>

小学1年生 (SST: お友だちを注意する)
小学3年生 (SST: やさしい言葉を使う)
小学5～中学3年生 (SIGs: 仲間と協力する・自分の役割を果たす)
くまがり

<10月>

小学2年生 (SST: お友だちとの話を続けるためにはどうしたらいいか)
小学3～5年生 (SIGs: 仲間と協力する・自然な身体接触を味わう)
人間知恵の輪
小学6～中学3年生 (SIGs: 仲間と協力する・意見を言う/聞く/調整する)
共同絵画

<2月>

小学2年生 (SST:)
小学3～4年生 (SIGs: 仲間と協力する・他者との心のふれあいを実感する)
メイン・フィールド
小学5～中学2年生 (SIGs: 仲間と協力する・自分の役割を果たす)
くまがり
小学3年生 (SIGs: 他者との心のふれあいを実感する) 私のプレゼント

<3月>

小学3～5年生 (SIGs: 自分を表現する・他者との心のふれあいを実感する)
ブラインド・デート
小学6年生 (SIGs: 他者との心のふれあいを実感する) サヨナラ箱
小学1～2年生 (SIGs: 仲間と協力する・意見を言う/聞く/調整する)
ストーリー・タワー

来年度も同様のねらいを持たせてプログラムを編成する予定

効果測定

<質問紙>

- 学校における社会的スキル尺度(担任評定)→小学校全学年
「関係維持行動」・「関係向上行動」・「関係参加行動」の3因子
- 登校回避感情測定尺度より
「友人関係における孤立感」・「登校嫌悪感」を抜粋(児童評定)→小学4～6年生
- ソーシャルスキル尺度(中学生用)より
「仲間関係スキル」・「コミュニケーションスキル」を抜粋
(担任評定)→中学校全学年
仲間関係スキル・・・「仲間関係の開始」・「仲間関係の維持」・「仲間への援助」
コミュニケーションスキル・・・「聞く・話す」・「非言語コミュニケーション」・
「アサーション」・「話し合い」
- OTK式DEL検査より「学校不適応」・「対人不適応」・「自己不適応」を抜粋
対人恐怖心性尺度
「自分や他人が気になる悩み」・「集団に溶け込めない悩み」・
「社会的場面で当惑する悩み」・「目が気になる悩み」・
「自分を統制できない悩み」・「生きることによって疲れている悩み」の6因子

生徒評定
中学生
全体

Table 1. 小学校全学年における社会的スキルの変化(全体)

因子	pre-test	post-test	t値
関係維持行動	29.33	29.75	1.81*
関係向上行動	18.46	20.06	7.07**
関係参加行動	24.13	24.96	2.77**

** : p<.01 * : p<.10

Table 2. 小学校全学年における社会的スキルの変化(男子)

因子	pre-test	post-test	t値
関係維持行動	28.48	29.32	2.53*
関係向上行動	17.30	19.09	5.67**
関係参加行動	24.11	24.98	2.03*

** : p<.01 * : p<.05

Table 3. 小学校全学年における社会的スキルの変化(女子)

因子	pre-test	post-test	t値
関係維持行動	30.20	30.20	0.00
関係向上行動	19.64	21.05	4.33**
関係参加行動	24.15	24.95	1.87*

** : p<.01 * : p<.10

Table 4. 小学校高学年における学校および友人への適応の変化(全体)

因子	pre-test	post-test	t値
友人関係における孤立感	17.73	15.10	3.71**
登校嫌悪感	14.52	12.56	2.58*

** : p<.01 * : p<.05

Table 5. 小学校高学年における学校および友人への適応の変化(男子)

因子	pre-test	post-test	t値
友人関係における孤立感	18.04	15.55	1.92*
登校嫌悪感	14.93	12.41	2.59*

* : p<.05 ** : p<.10

Table 6. 小学校高学年における学校および友人への適応の変化(女子)

因子	pre-test	post-test	t値
友人関係における孤立感	17.49	14.73	3.56**
登校嫌悪感	14.19	12.68	1.34

** : p<.01

Table 7. 中学生のソーシャルスキルの変化(全体)

因子	pre-test	post-test	t値
仲間関係スキル全体	17.53	18.19	1.58
仲間関係の開始	2.04	2.14	1.84*
仲間関係の維持	2.21	2.22	0.29
仲間への援助	1.52	1.62	1.44
コミュニケーションスキル全体	16.69	17.84	2.06*
聞く・話す	1.91	2.01	1.10
非言語コミュニケーション	1.42	1.80	4.12**
アサーション	1.46	1.62	2.87**
話し合い	2.11	1.88	-3.90**

** : p<.01 * : p<.05 ** : p<.10

Table 8. 中学生のソーシャルスキルの変化(男子)

因子	pre-test	post-test	t値
仲間関係スキル全体	17.37	17.93	0.97
仲間関係の開始	2.17	2.21	0.48
仲間関係の維持	2.15	2.20	0.58
仲間への援助	1.48	1.53	0.53
コミュニケーションスキル全体	17.42	18.00	0.82
聞く・話す	1.93	2.02	0.82
非言語コミュニケーション	1.54	1.83	2.54*
アサーション	1.48	1.63	2.03*
話し合い	2.11	1.89	-2.94**

** : p<.01 * : p<.05 ** : p<.10

Table 9. 中学生のソーシャルスキルの変化(女子)

因子	pre-test	post-test	t値
仲間関係スキル全体	17.81	18.63	1.46
仲間関係の開始	1.81	2.02	3.48**
仲間関係の維持	2.30	2.27	-0.42
仲間への援助	1.58	1.77	1.86*
コミュニケーションスキル全体	15.47	17.56	2.37*
聞く・話す	1.88	2.00	0.72
非言語コミュニケーション	1.22	1.75	3.45**
アサーション	1.42	1.60	2.04*
話し合い	2.09	1.86	-2.50*

** : p<.01 * : p<.05 ** : p<.10

Table 10. 中学生における不適応感の変化1(全体)

因子	pre-test	post-test	t値
学校不適応	4.10	4.65	-1.56
対人不適応	4.11	3.68	1.28
自己不適応	5.32	5.79	-1.60

Table 11. 中学生における不適応感の変化1(男子)

因子	pre-test	post-test	t値
学校不適応	4.00	4.15	-0.42
対人不適応	3.60	3.27	0.91
自己不適応	4.56	5.02	-1.20

Table 12. 中学生における不適応感の変化1(女子)

因子	pre-test	post-test	t値
学校不適応	4.25	5.47	-1.70
対人不適応	4.94	4.34	0.83
自己不適応	6.56	7.03	-1.04

Table 13. 中学生における不適応感の変化2(全体)

因子	pre-test	post-test	t値
自分や他人が気になる悩み	15.99	15.83	0.17
集団に溶け込めない悩み	12.74	13.00	-0.29
社会的場面で当惑する悩み	14.29	15.14	-0.86
目が気になる悩み	13.83	14.14	-0.32
自分を統制できない悩み	13.62	15.57	-2.09*
生きることによって疲れている悩み	12.42	13.79	-1.19

* : p<.05

Table 14. 中学生における不適応感の変化2(男子)

因子	pre-test	post-test	t値
自分や他人が気になる悩み	13.10	13.18	-0.07
集団に溶け込めない悩み	10.58	10.50	0.07
社会的場面で当惑する悩み	12.01	12.73	-0.53
目が気になる悩み	10.88	11.73	-0.63
自分を統制できない悩み	12.06	14.31	-1.58
生きることに疲れている悩み	10.58	12.00	-0.94

Table 15. 中学生における不適応感の変化2(女子)

因子	pre-test	post-test	t値
自分や他人が気になる悩み	20.69	20.13	0.37
集団に溶け込めない悩み	16.25	17.06	-0.52
社会的場面で当惑する悩み	18.00	19.07	-0.74
目が気になる悩み	18.63	18.06	0.43
自分を統制できない悩み	16.17	17.63	-1.70
生きることに疲れている悩み	15.41	16.69	-0.70

まとめ

<小学生>

社会的スキル 上昇
適応が良くなった → 小学生への早期の予防的介入は効果が高い!

<中学生>

コミュニケーションスキル 上昇
仲間関係スキル 変化なし
適応 変化なし → 短期の介入では中学生への効果は限定的

**小学校の早期にプログラムを開始すること
短期で終わらせずに継続的に実施すること**

2015年度 サービスラーニング活動報告 —豊後大野市をフィールドとして—

経営経済学科1年

相川 瑞貴 佐藤 海紗
戴 駿豪 高山 仁
矢田 悠馬 矢野 洸祐
劉 趁欣 丁 立昕
上米良 千尋

© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

講義の目的

- 豊後大野の現状
 - 「おんせん県おおいた」といわれているが温泉のない地域はどうなっているのか？
 - 様々な伝統や文化があるがあまり知られてない。
- 講義の目的
 - 実際に現地に赴き、様々な体験や現地ガイドのコーディネートを通じて、豊後大野の現状や抱えている課題、地域の隠れた魅力を理解、発見すること。

© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

タイムライン

- 2015年8月24日—28日 夏合宿
 - 豊後大野を知る
- 2015年11月8日 第1回豊後大野視察
 - ツアープランの作成・実行
- 2015年12月5日 第2回豊後大野視察
 - 第1回の課題を踏まえたプランの作成・実施
- 2016年2月12日—13日 冬合宿
 - プロのツアーを体験しこれまでの振り返りを行う(里の旅タクシー)

© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

夏合宿で訪れたスポット

日時 2015年 8月24日～26日

1. 普光寺磨崖仏
2. JR朝地駅
3. 道の駅よかわ
4. 沈墜の滝
5. 道の駅朝地
6. 朝倉丈夫記念館
7. 道の駅原尻の滝
8. ロッジ清川



© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

良かった観光スポット

1. 出会橋・轟橋
2. 原尻の滝
3. 神楽会館



© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

豊後大野市の魅力？

- 原尻の滝は日本の滝百選に選ばれているが...
- 出会・轟橋は日本1位2位のアーチの長さを誇るが...

↓
実際に行ってみてみると...
名前負けしている

© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

夏合宿にでた問題点

- お金を使うところが少ない。
- 特にこれといった訪れる場所が少ない。
- 地域住民やタクシードライバーですら地元について知らないことがあった。
- 道が狭く通行しにくいいため交通手段の面で不便。



© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

ツアープランの作成

夏合宿で見つけた魅力・課題



自分たちでツアーをプランニングし、
実際に行った。

© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

NBU 豊後大野紅葉比べコース

白山溪谷
(はくさんけいこく)

宝生寺
(ほうしようじ)

用作公園
(ゆうじやくこうえん)



見ごろには
早かったが...

寺と池と紅葉の
調和

池に映る紅葉が
魅力

2015年11月8日実施

© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

NBU 秋を五感で楽しむコース

原尻の滝
(はらじりのたき)

岡城跡(竹田市)
(おかしょうあと)

The Vege Cafe Ms.
(ベジ・カフェ・ミス)



見て楽しむ

聴いて楽しむ

食べて楽しむ

© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

NBU 里の旅タクシー



© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

NBU 里の旅タクシー



日本最大の石橋と大海にワワワァー!

私だけのパワースポットにウツトリ・ドッキリ

未知の観光スポット

ミステリアスを巡る



© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

NBU 良かったこと

- 豊後大野の自然を感じられた。
- 日本1位と2位の石橋を見て、感動した。
- 豊後大野の野菜や米を食べ、現地の食に触れることができた。



© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

NBU 改善すべき点と感じた点

- 滞在時間より移動時間が長い
- 磨崖仏ばかりで単調
- 駐車場から目的地までの歩道の坂が急すぎて小さな子供や高齢者には厳しい
- ツアーの趣旨が伝わってこない
- 豊後大野の食が提案されていない



© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

NBU 今後の活動に向けて

NBU 今年一年振り返って.....

- 訪れるたびに新しい発見を見つけられる場所
- JRとジャンボタクシーの交通方法がお勧め!



© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

© Department of Business and Economics,
Faculty of Business and Economics, Nippon Bunri University

携帯電話の電波の改善が必要

→スマートフォンユーザーが多数を占める現代ではマイナス要素となり得るのではないか。

この感動をすぐ伝えたい



地元の食材に拘っていることへの
認知度が低く食べるところが少ない



特に、観光スポットの近くで食べるところがない

→食の安全や健康に気を使う人が増えてきたので勿体ない.....

ご清聴ありがとうございました

NBUチャレンジOITA 地域創生活動報告会
2016 in 豊後大野

地域と世界を結ぶ
地域創生・豊後大野まるごと
インターネット・エリアピアビジネス

日本文理大学
経営経済学部経営経済学科
橋本ゼミナール

2016年2月13日(土) 豊後大野市役所本庁舎2階 視聴覚教室

豊後大野市を選んだ理由

- 地域資源を活用したビジネスのハードルが高い
(大分県にありながら温泉がない・他地域との競争が激しい)
⇒これで成功すれば、ほかの地域への波及ができる
- 有効活用できる観光資源・自然がたくさんある。
- 県外(熊本、宮崎など)からもアクセスが良い。
- 日本文理大学と包括連携協定を結んでいる。

豊後大野市の概要



図表引用: ふんご大野 豊の株式会社 <http://sato-no-tabi.jp/>

東京23区の新宿区を除いた広さ

平成27年2月28日現在()内は前月比		
人口 38,454人	(-107人)	65歳以上 高齢化率 39.5%
男 17,847人	(-59人)	
女 20,607人	(-48人)	
世帯数 16,406世帯	(-29世帯)	

8月に豊後大野市 橋本市長さんにインタビュー

①豊後大野市の現状と課題

※周辺に強力な競争相手がいる。★

(湯布院、別府、竹田、阿蘇、高千穂、...)

- 少子高齢化 ・観光客が少ない ・温泉がない
- 知名度がない ・若者の都市への流出
- 宿泊施設が少ない



引用: るるぶ.com

②豊後大野市の強み

• 観光資源はたくさんある→ただし運動していない

- 広大な土地 ・阿蘇噴火による日本ジオパーク(地球に係る自然遺産:地層、岩石、火山、断層など)→滝、渓谷、磨崖仏、...
- 広域連携の可能性(大分、宮崎、熊本) ・県央空港
- 大分県でもっとも多く芸能が残っている

核となる観光資源 「原尻の滝」

原尻の滝(はらじりのたき)は、豊後大野市緒方町原尻の大野川水系緒方川にある滝。日本の滝百選に選ばれています。



バラバラな観光資源を インターネット・エリアピアビジネスで一つに！

豊後大野市丸ごと観光プラン 「来てみたら面白い！」

1. インターネット・ピアビジネスで事業化
2. 原尻の滝を中心に四季折々の観光資源を連動させる。
3. 昼も夜も楽しめる観光資源づくり
4. 豊後大野市のファンとリピータを創る

打開策！！ 新規性

- ・PIAという考え方
- ・PIAと資源を結ぶマッチングの考え方
- ・バラバラな観光資源をインターネットを使って「一本化」して見せること

インターネット・エリアピアビジネスとは

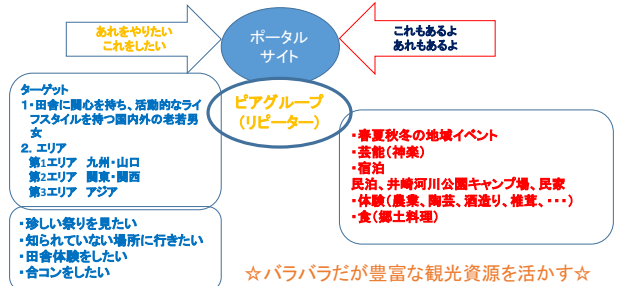
「ピア(Peer)」仲間、同僚、友人

「インターネット・エリアピアビジネス」

- ①インターネットを使って、いろいろな欲求・希望を持つ人たちを“仲間”としてマッチングすること ⇒ 地域への移住・定住に結び付けたい。
- ②地方自治体とコラボする



Step1 観光資源とピアグループ地域創生



事業構想

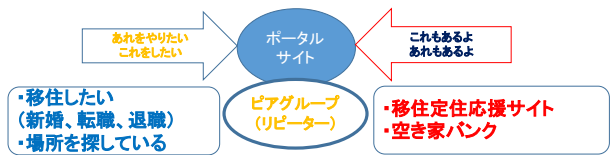
インターネットでピアを募集。NPO法人PIAが窓口になる

販促ツール Facebook, Twitter, LINE, HP	PIAのアイデア			
	PIA(仲間、友人、同好会、興味のある人)を募集	カメラ小僧ピア	春夏秋冬の風景・イベント	農村インテリシップピア
NPO法人PIA ・構成：学生、豊後大野市・役割：情報発信、PIAのお世話新規イベント「開拓」	神楽好きピア	神楽会館、年末	定住・移住ピア	移住・定住応援サイト 空き家バンク
提携外部組織 NPO法人Good NPO法人Nice 様とまじりな	合コンピア	井崎河川公園 キャンプ場	ボランティアピア	農林業 外部NPO
	陶器づくりピア	唄楽(りがく)の里	お米・野菜づくりピア	JA
	オルレピア	奥豊後コース	フルーツピア	道の駅、物産直売、青果店
	地元酒蔵 秘蔵酒ピア	蔵元 (吉良、浜崎、丹後)	滝好きピア	原尻の滝 ちんだの滝

Step2 今後の展開:リピータ・移住・定住

・観光PIAから移住定住場所を探しているPIAへ

PIA ⇒ 皆が知らない体験をした(珍しい) ⇒ 行ったら自慢したい、見せたい (SNS、ツイッター、ブログ)⇒移住・定住



投資と収支

投資: ECサイト構築 収入: 広告収入、手数料収入、補助金
経費: 人件費、事務所経費、サイト運営、サーバー保守、その他

投資	金額	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	
ネットサイト構築	1,000	売上	2,700	3,500	4,500	5,500	6,500
		経費計	2,700	2,700	3,900	4,500	4,500
		(人件費・アルバイト)	1,200	2,400	2,400	3,000	3,000
		(事務所費)	0	0	0	0	0
		(サイト運営)	600	600	600	600	600
		(サーバー保守)	300	300	300	300	300
		(雑費)	600	600	600	600	600
		営業利益	0	800	600	1,000	2,000

(単位:千円)



ヘプタゴン

ご清聴ありがとうございました。



なぱっピー

大野町土師地区における 農林業体験を通じた小規模集落支援活動

建築学科 1年 宮野 行雲
上田 亮

専門科目「プロジェクト1」の目的

- * 小規模集落の現状と魅力・課題を知り、地域コミュニティを維持する取り組みを身をもって体験
 - * 地域に関わり続けることで、2年次以降に技術者の視点で地域の課題を解決できる能力を身に付ける為の基盤を作る
 - * チームで働く力や主体的に行動する人間力を養う
- ↓
- * 大野町土師地区の小規模集落に春・夏・秋の3回季節に応じた農林業体験や地域維持活動を体験
 - * 建築学科1年生の受講生33名が関わっている

5月11日事前研修



入学して間もない
メンバー同士での交流

ポッキーさん指導による
レクリエーション



5月30日 日帰り春の研修

- ・初めての体験村
- ・草刈機を使用したの草刈り作業
- ・フールの泥だし作業

・作業後の食事



7月4、5日 開村式準備【課外】



開村式に向けての準備

7月19日 開村式【課外】



当日の式は大盛況・大成功



8月4～5日 一泊二日研修(1)

食事を作る一つのこと
気づきが豊富にあった



8月4～5日 一泊二日研修(2)



8月4～5日 一泊二日研修(3)

1日目、班ごとの作業



8月4～5日 一泊二日研修(4)



8月4～5日 一泊二日研修(5)

**2日目、班ごとの
作業、食事**



10月10日 日帰り秋の研修(稲刈り)

コンバインの使用など、貴重な体験の数々



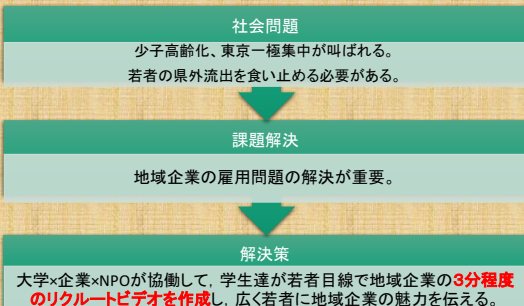
まとめ



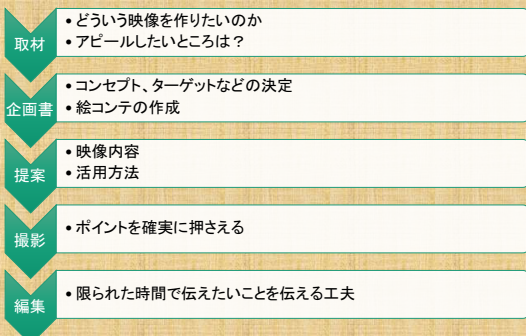
企業魅力発信・求人動画制作 ～(株)リファイン大分編～

情報メディア学科 2年
後藤 和典
経営経済学科 2年
堀 亜衣里
千嶋 洋平

授業のねらい



授業の概要



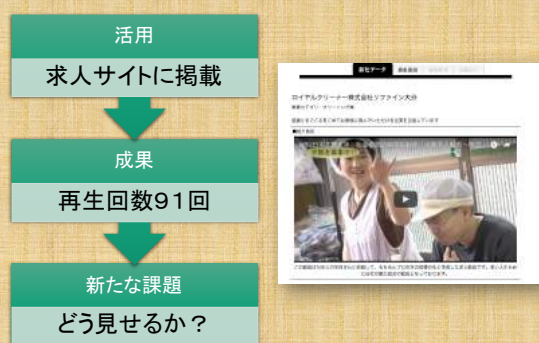
プレビュー



授業を終えて...



授業を終えて...



授業を終えて...

- 地域企業ならではの魅力を発見できた。
- インターネットでは分からない社会の状況を知ることができた。
- ビジネスマナーを学ぶことができた。
- 地域の雇用問題について深く考えることができた。
- 自分たちの生活が多くの人に支えられているということを改めて感じた。

地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する 域学協働プロジェクト研究

日本文理大学 経営経済学部 経営経済学科
鍋田耕作 河村裕次 坂口昌宏

厚生労働省で考えられている「介護予防」とは・・・

- 機能回復訓練などの高齢者本人へのアプローチだけではなく、**地域づくりなどの高齢者本人を取り巻く環境へのアプローチ**も含めたバランスのとれたアプローチができるように介護予防事業を見直す。
- 元気高齢者と二次予防事業対象者を分け隔てなく、住民運営の通いの場を充実させ、**人と人とのつながりを通じて参加者や通いの場が継続的に拡大していくような地域づくり**を推進する。

出典：厚生労働省老健局振興課「介護予防・日常生活支援総合事業の基本的な考え方」抜粋

厚生労働省で考えられている「介護予防」とは・・・

○これからの介護予防は、機能回復訓練などの高齢者本人へのアプローチだけではなく、**生活環境の調整や、地域の中に生きがい・役割を持って生活できるような居場所と出番づくり**など、高齢者本人を取り巻く環境へのアプローチも含めた、バランスのとれたアプローチが重要である。

要介護状態になっても、生きがい・役割を持って生活できる地域の実現を目指す

【出典】介護保険制度の見直しに関する意見（平成25年12月20日社会保障審議会介護保険部会）抜粋

「地域住民を主体とした地域づくり」とは・・・

住民運営の通いの場の充実プログラム

- 市町村の全域で、高齢者が容易に通える範囲に通いの場を**住民主体**で展開
- 前期高齢者のみならず、**後期高齢者や閉じこもり等何らかの支援を要する者の参加を促す**
- 住民自身の積極的な参加と運営による**自律的な拡大**を目指す
- 後期高齢者・要支援者でも行えるレベルの体操などを実施
- 体操などは週1回以上の実施を原則

出典：厚生労働省（市町村による新しい地域づくりの推進）より抜粋

この研究での「地域づくりによる介護予防」とは・・・

○地域における**住民間での互助や交流**を通して、**高齢者が地域の中で生きがいや役割**をもって生活できるようにすることで、介護を予防する効果をあげる取組

- ① **住民間での互助や交流**
- ② **地域の中で生きがいや役割を持つ**

※「互助」とは、お互いに助け合う・支え合うこと。

このような考えの「地域づくりによる介護予防」が、なぜ必要なのか？（参加者の視点）

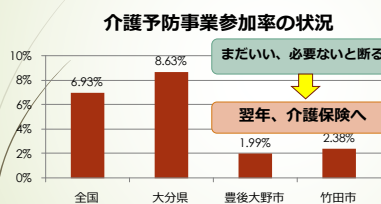
①豊後大野市のニーズ調査から見てきたもの

- ① 75歳以上の方を支えるしくみが必要。
- ② 介護保険を利用する方が他の地域と比べて多く、また高い費用を必要とする方が多い。
- ③ 男女ともに**定額が割って介護保険を使う方が多い**。
- ④ 生活習慣病を放って置いて、脳卒中や人工透析で**介護保険が必要**になる方が多い。
- ⑤ 生活習慣病が悪化する方は、**補給を受けなかったり、お薬をやめたり**する方が多い。
- ⑥ 仕事、役割、健康づくりで**週1回以上の外出が必要**、デイサービス以外に、**ご近所で集まる機会が必要**。
- ⑦ 介護予防教室に誘われても、**参加を断る方が多い**。

介護予防教室に誘われても、**参加を断る方が多い。**

どのような目的にすれば、活動の参加者が増えるのか？

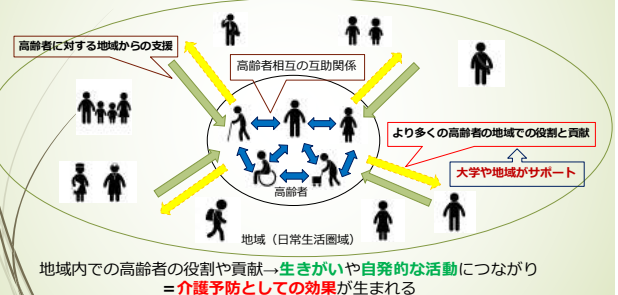
○豊後大野市の方は、市役所・包括支援センターの保健師から、誘われても**介護予防事業に参加しない**。



自分の健康のためという発想から、**地域のため、もしくは生きがい（精神的自立）のために活動**を企画したら、どうか？

地域のため、生きがいによる**自発的な活動が、自分の健康につながる。**

このような考えの「地域づくりによる介護予防」が、なぜ必要なのか？（地域の視点）



「地域づくり」を進めていくために・・・

- ① 住民間での互助や交流→できるように**下地**を作る。
 - 住民どうしの「見える関係づくり」を図っていくこと。
 - ※住民どうしが地域の人々を知る、関心を持つこと。
 - 人と人との交流が困難であれば、「物による交流」を図ること。※互助の関係を形成するために。
- ② 地域の中で生きがいや役割を持つ→何ができるのかを考える**機会**
 - 活動の中で、新しい事に挑戦する、少し困難なことやってみる。※自分の可能性を広げる。新たな「生きがい」を見つける。
 - 自分が出来る範囲・無理のない範囲で、「他者への貢献」を行う。

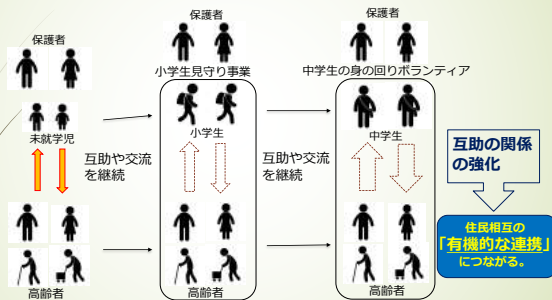
このような「介護予防」を達成するために
本学学生・教員が地域づくり活動でサポートする事は

① 地域住民への活動参加の働きかけ

- 行政と地域住民、地域住民と地域住民との関係（間を埋める）←**第三者**としての役割
- 事業を行うための**下準備**（**有機的な連携**のための関係づくり）

= 住民間での互助や交流→できるように**下地**を作る。

住民間の互助や交流の下地づくりの仕組み



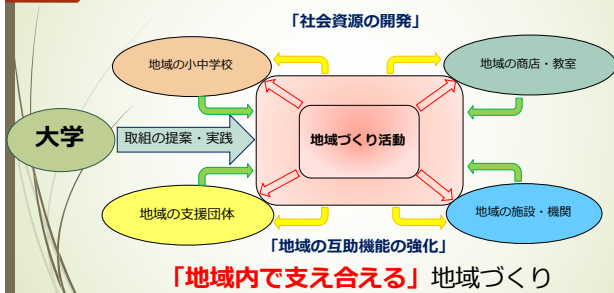
このような「介護予防」を達成するために
本学学生・教員が地域づくり活動で行う事は・・・

② より効果的な取組への提案・実施

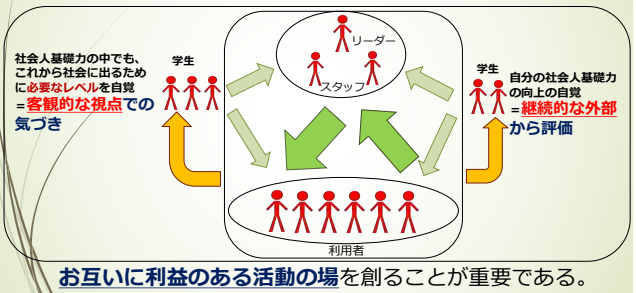
- 大学による提案と実践→「**地域住民**」への引き継ぎ
- 地域で共有できる「**社会資源の開発**」
- **他世代**へつなぐことで、「**地域の互助機能の強化**」

地域の中で生きがいや役割を持つ→何ができるのかを考える**機会**

大学の取組への提案・実施から地域への引き継ぎの仕組み



この研究を通しての学生の成長
(社会人基礎力の視点)



徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発

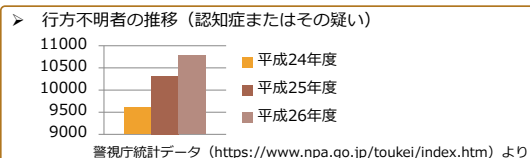
日本文理大学

鈴木秀男*1 吉森聖貴*1 福島学*1 稲川直裕*2
山口翔平*3 知念雅也*3

*1 情報メディア学科
*2 機械電気工学科
*3 情報メディア学科 4年

1. はじめに

- 高齢化社会に伴い
 - 高齢者の徘徊（認知症等）が社会問題となっている
 - ⇒ 周囲の人々の負担や責任、最悪の事態
 - ⇒ 徘徊高齢者の位置検出システム



1. はじめに（つづき）

- 高齢者徘徊への対応（位置検出）
 - ☆ ウェアラブル（Wearable）
 - GPS、ICタグ、発信機など
 - ⇒ 身に付けることが前提
 - 杖、靴、首掛け、リストバンドなど
 - ・位置の把握は可能
 - ・身に付けるかどうかが課題



1. はじめに（つづき）

- 高齢者徘徊への対応（位置検出）
 - ☆ ノン・ウェアラブル（Non Wearable）
 - 街中カメラ（防犯/監視）、見守り隊など
 - ⇒ 身に付ける必要がない
 - ・人物の検出は可能（位置把握）
 - ・高齢者への制約がない
 - 本研究の目指す方向
 - ☆ ノン・ウェアラブルな位置検出



1. はじめに（つづき）

- ノン・ウェアラブルな位置検出
 - 【必要な要素】
 - ☆ 街中に設置されているカメラ画像
 - ⇒ 街中/防犯/監視カメラ等
 - ☆ 徘徊高齢者とカメラ位置のリンク
 - ⇒ 経路の特定
 - ☆ 画像に写る人物を特定
 - ⇒ 画像処理ソフトの開発

1. はじめに（つづき）

- システムの効用
 - ☆ 高齢者の経路をデータとして蓄積
 - ⇒ 大量データによるビッグデータ解析
 - ⇒ 高齢者が住みやすい街づくり
 - ☆ 位置検出システムの応用
 - ⇒ 子供たちの見守り情報など
 - ⇒ 安全・安心な街づくり

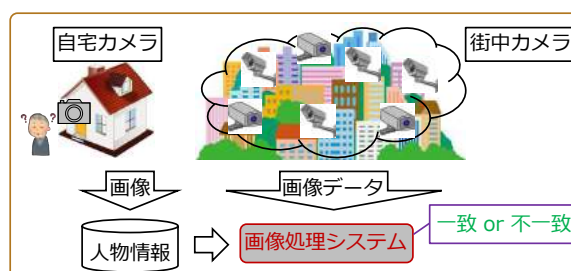


2. 研究の進め方

- 位置検出システムの開発
 - ① モニターカメラの画像を解析
 - ⇒ 人物を特定する処理ソフトの開発
 - ② 高齢者の歩行時の画像を解析
 - ⇒ 人物の特定に必要なバックデータを作成
 - ③ モニターカメラ画像の処理データを保存
 - ⇒ 徘徊の途中経路位置を記録
 - ④ 設置済みのカメラ映像・場所の把握
 - ⇒ 空白地域の拾い出し及び新規設置の検討

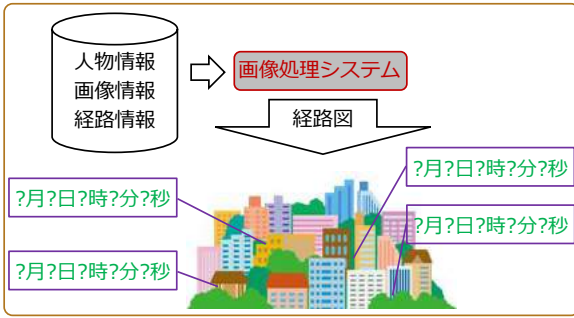
3. 地域への展開例①

- 街中に設置された既存のカメラや新規に設置したカメラの映像と徘徊高齢者の映像を画像処理システムで比較し 一致/不一致 の判定



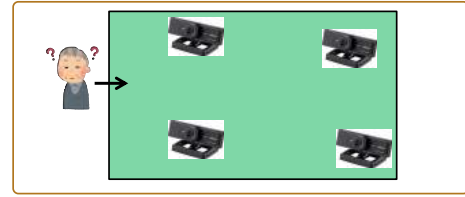
3. 地域への展開例②

- ▶ 行動パターンを地図上へ表示、いつ、どこに立ち寄ったのかを 経路図 として描画する



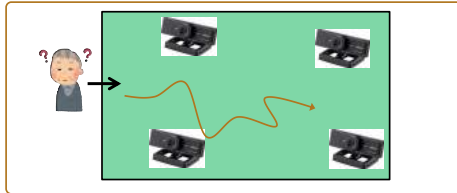
4. 実験環境（予備実験）

- ▶ 本年度の画像処理システム
画像認識が目的 ⇒ 室内での実験環境を想定
- ▶ 地域を想定したエリア内
固定カメラを数個設置
⇒ 被験者がエリア内に入り画像認識



4. 実験環境（つづき）

- ▶ 画像認識に利用できる情報
 - ・人物の画像（異なる複数画像）
 - ・歩行の特徴や体型
 - ・服装（色、柄等）
 - ・容姿（半袖、長そで、腕まくり等）
- ▶ 実験では、人物の画像のみ使用



5. 実験結果（現地実験）

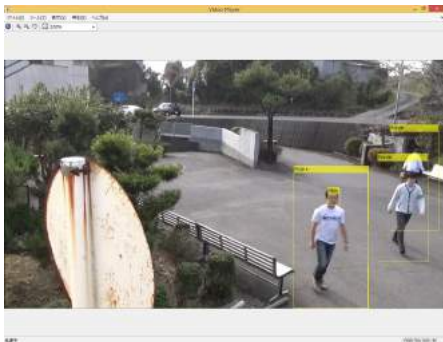
- ▶ 顔認証
実際の環境下における想定映像
屋外 屋内



撮影協力 養護老人ホーム 常楽荘

5. 実験結果（つづき）

- ▶ 顔認証
顔と人物領域を検出（黄色枠）した結果



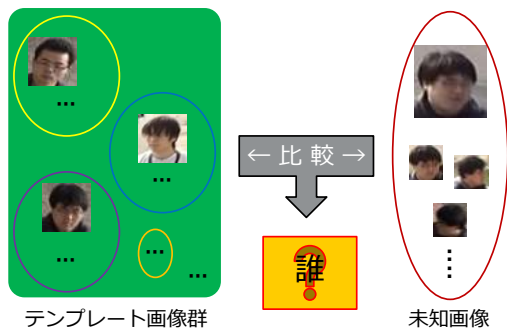
5. 実験結果（つづき）

- ▶ 顔認証
顔領域（黄色枠）から未知画像を抽出



5. 実験結果（つづき）

- ▶ 顔認証
テンプレート画像群と未知画像の比較



5. 実験結果（つづき）

- ▶ 顔認証
認識率

実験室での認識率	48%
実環境での認識率	46%

実験条件

- ・テンプレート画像は一人当たり 20枚
- ・未知画像は動画から切り出した 10枚
- ・実環境での認識率は、屋外値

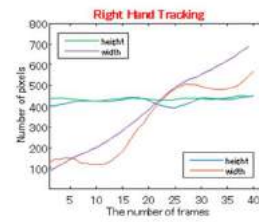
歩行認証

歩行動画からの特徴抽出

- ・ 歩く人物映像をカメラで撮影
- ↓
- ・ 人物の頭、手、足をトラッキング
- ↓
- ・ 個人による動きの特徴を把握
- ↓
- ・ 歩行動画から個人識別
- ↓
- ・ 機械学習 (Deep Learning)

歩行認証

トラッキングポイントの記録



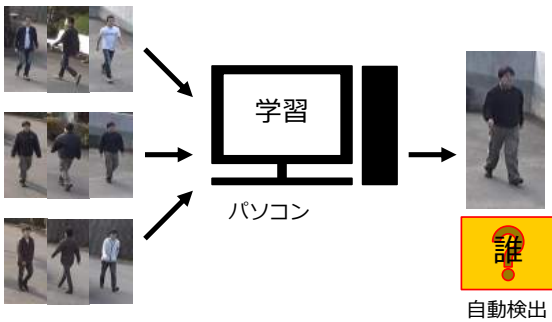
右手の動き



トラッキング
ポイント

歩行認証

歩行動画からの特徴抽出



6. おわりに

【成果】

- ▶ 実験室及び屋外での顔認識率は50%ほど
 - ⇒ 実環境でも実験室と同レベルの認識率
 - ⇒ 解像度、テンプレートの数や種類に依存
- ▶ 歩行特徴については、特徴点抽出が可能
- ▶ マッチングにおいて、機械学習が適用可能

【今後の発展】

- ▶ 屋外での顔認識率の高精度化
 - ⇒ 解像度、テンプレートの数や種類の検討
- ▶ 高齢者特有の歩行特徴の把握
- ▶ “顔+歩行” 認証による信頼性向上

地域創生を目的とした自然エネルギー利用型 プラズマ農業に関する基礎研究

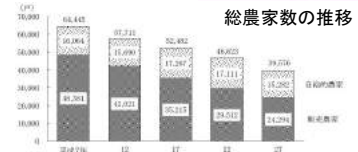
川崎敏之(機械電気), 坂井美穂(情報メディア)
池畑義人(建築学科), 小幡亨(航空宇宙)



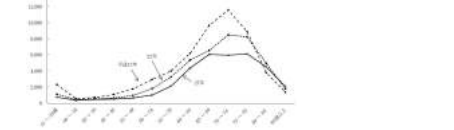
豊後大野市役所本庁舎2階 創生学室
平成28年2月13日(土)

本研究の目的

総農家数の推移



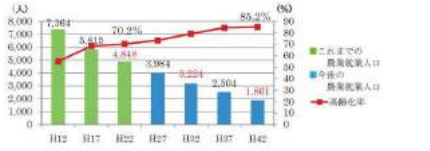
年齢別農業就業人口の推移



2015年農林業センサス
大分県企画振興部統計調査課資料より抜粋(平成27年11月27日公表)

本研究の目的

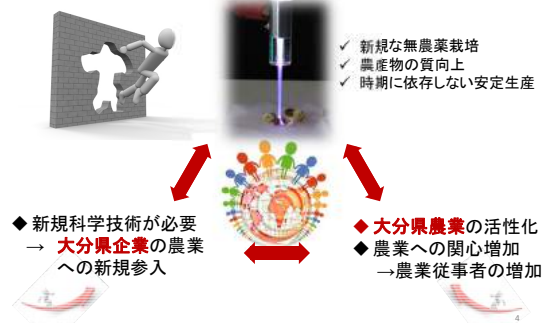
豊富で清らかな流れ大野川が育んだ肥沃
の大地「大分の野菜畑」豊後大野



第2次豊後大野市農業振興計画(平成23年3月発行)より抜粋

本研究の目的

プラズマ農業



本研究体制



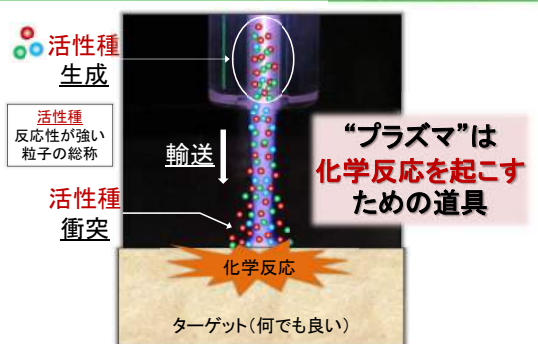
プラズマ状態とは



私たちの生活に役立つプラズマ



プラズマは.....の道具



プラズマと農業の関係

動物

代謝：生命維持活動のために生体内で起こる全ての**化学反応**

植物

光合成：光エネルギーを化学エネルギーに変換する**化学反応**

様々な**化学反応**により動植物は生命を維持

病原菌やウイルスの侵入、様々な要因による**化学反応の狂い** ⇒ **病気**

この狂いを正常に戻すためまたは、予防するため

化学的療法、放射線 薬剤、肥料
これらの代わりに
化学反応が得意な道具 **“プラズマ”** を使う

プラズマ医療 **プラズマ農業**

プラズマと農業の関係

プラズマは**化学反応**が得意

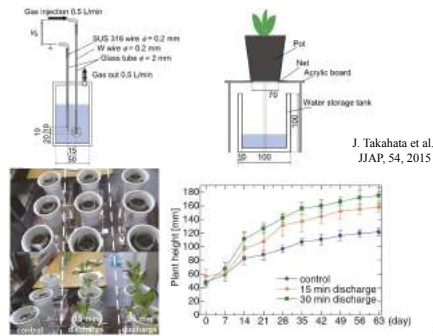
化学反応により生物は生命維持



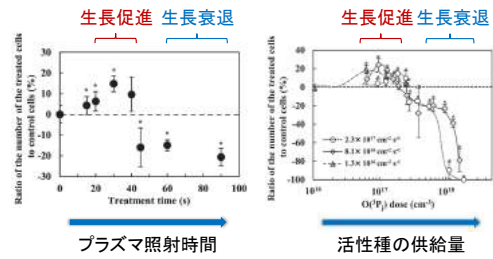
プラズマ医療 プラズマ農業

プラズマの農業への応用

プラズマを照射した水で栽培→生長促進



プラズマの農業への応用



適量の照射が重要である

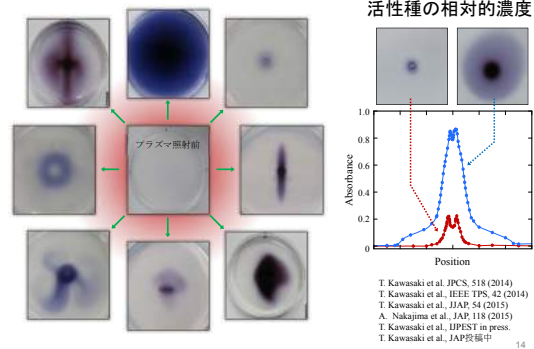
本研究のキーワード

- ◆ 自然エネルギー利用
 - ◆ プラズマ化学反応の制御
 - ◆ 活性種の供給量
 - ◆ 活性種の液中輸送
 - ◆ 植物生長への影響
- 今日は、この部分の結果一部を紹介

ここで紹介するデータのほとんどは本研究室4年生による実験結果



活性種の可視化

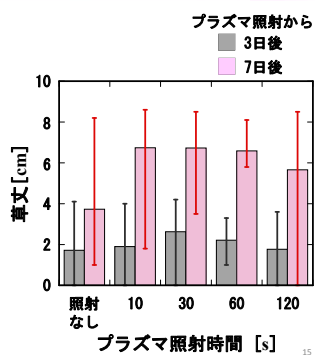


プラズマがカイワレ大根の生長に与える影響

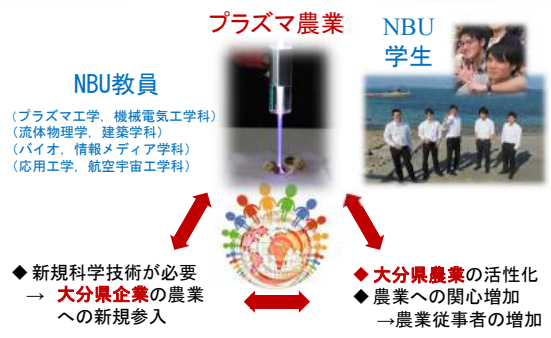
水に5時間浸した種子にプラズマ照射



この結果は機械電気工学科2年生の実験結果



まとめ





文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」

NBU チャレンジ OITA 地域創生活動報告会 2016 in 佐賀関



- ・日時：平成28年2月20日(土) 10:00～12:30
- ・会場：佐賀関市民センター 2階 研修室 (大分市佐賀関1407番地27)

プログラム (9:30 受付開始, 11:10~11:25 休憩)

10:00～10:05 あいさつ・趣旨説明

「日本文理大学 大学COC事業『おおいたつくりびと』での取り組み」学長室 室長 吉村充功

10:05～12:00 学生取り組み発表 (発表10分/質疑応答3分)

1. 佐賀関半島触れる観光プロジェクト～若者を惹きつける食の提案～
(建築学科・3年生)
2. 佐賀関地区での市内小学生とその保護者対象とした地域交流教室～これまでの実践教育プログラムを踏まえて～
(経営経済学科・3年生)
3. 地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取組報告 (経営経済学科・3年生)
4. 韓国料理教室による佐賀関住民との交流会 (経営経済学科・4年生、機械電気工学科・1年生)
5. 「地域活性化を目的とした総合型地域スポーツクラブへのイベント参画」
～チラシによるプロモーションの実践活動報告～ (経営経済学科・3年生)
6. 「水中観測ロボットで見る佐賀関の海」および関崎海星館との共同企画「3Dで見る佐賀関半島」
(機械電気工学科・3年生、大学院環境情報学専攻・2年生)
7. ロボットプロジェクト『地域にいきるものづくり』
～学生のアイデアをカタチに『T.A.J.K.』『らくらく郵便』～
(機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科・1年生)
8. プライバシー問題を生じない見守りシステム実現に向けた
電磁波レーダの利活用 (情報メディア学科・4年生)

12:00～12:20 地域志向プロジェクト研究発表
(発表15分/質疑応答5分)

1. 要介護者のコミュニケーション支援システム開発
～共通プラットフォームによる効率良いICT技術の利活用～
福島学、坪倉篤志、濱田大助 (情報メディア学科)、市田秀樹
(COC事業担当)

12:20～12:25 講評

12:25～12:30 おわりに (主催者お礼の言葉)



NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL: 097-592-1600(大代表)
Web: <http://www.nbu.ac.jp>

【COC事業担当】
TEL/FAX: 097-524-2663(直通)
Web: <http://coc-nbu.jp>
e-mail: coc@nbu.ac.jp

【趣旨】

地域創生活動報告会は、地域と学生協働によるこれからの地域づくりをテーマに、「教育・研究・社会貢献(学生正課外)」活動について今年度の成果を学生、教員から地域の皆さまに報告するとともに、今後の発展性について意見交換し、新たな学生活動の可能性を探ります。



NBUチャレンジOITA 地域創生活動報告会 2016 in 佐賀関

日時：平成28年2月20日（土）10:00～12:30

場所：佐賀関市民センター 研修室

報告会プログラム

10:00～10:05

主催者あいさつ 学長 平居孝之

趣旨説明「日本文理大学 大学COC事業『おおいたつくりびと』での取り組み」 学長室長 吉村充功

10:05～12:00 学生取り組み発表（発表10分/質疑応答3分）

1. 佐賀関半島触れる観光プロジェクト～若者を惹きつける食の提案

安部正吾、工藤走（建築学科・3年）

2. 佐賀関地区での市内小学生とその保護者対象とした地域交流教室

～これまでの実践教育プログラムを踏まえて～

佐藤湧真、菊池佑輔、藤村祐輔、藤内健人（経営経済学科・3年生）

3. 地域活性化プロジェクト「楽・楽マルシェ」での取組報告

藤井悠輝、宮良尚汰（経営経済学科・3年生）

4. 韓国料理教室による佐賀関住民との交流会

金恩聲（経営経済学科・4年生）、間結夏（機械電気工学科・1年生）

5. 「地域活性化を目的とした総合型地域スポーツクラブへのイベント参画」

～チラシによるプロモーションの実践活動報告～

西村史奈（経営経済学科・3年生）

（休憩 11:10～11:20）

6. 「水中観測ロボットで見る佐賀関の海」および関崎海星館との共同企画「3Dで見る佐賀関半島」

井上諒也（機械電気工学科・3年生）、平居宏康（大学院環境情報学専攻・2年生）

7. ロボットプロジェクト：『地域に生きるものづくり』

～学生のアイデアをカタチに 『T.A.J.K』『らくらく郵便』～

那賀智之、岡野滉平、川島俊亮、大里一矢、多賀絵里、緒方脩太郎

渡邊伶司、津行亮介、高橋瑞希、修理雄大、久原和也、岡林和輝

（機械電気工学科、航空宇宙工学科、情報メディア学科・1年生）

8. プライバシ問題を生じない見守りシステム実現に向けた電磁波レーダの利活用

鵜飼拓也（情報メディア学科・4年生）

12:00～12:20 地域志向プロジェクト研究発表【教員】（発表15分/質疑応答5分）

1. 地要介護者のコミュニケーション支援システム開発

～共通プラットフォームによる効率良いICT技術の利活用～

福島学、坪倉篤志、濱田大助（情報メディア学科）、市田秀樹（COC事業担当）

12:20～12:25 講評

12:25～12:30 おわりに（主催者お礼の言葉）

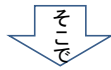
佐賀関半島触れる観光プロジェクト
～若者を惹きつける食の提案～

関アジ関サバが大分なものを ご存知ですか？

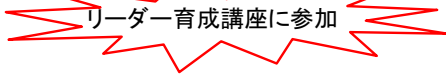
日本文理大学工学部
建築学科 3年
安部 正吾
工藤 走

佐賀関の現状

- ・ 関あじ関さば、みかんなど佐賀関を代表する特産物があるが、現地の活性化には十分に繋がっていない



- ・ 佐賀関をさらに盛り上げるために、多くある魅力を活用することを考えた
- 自らが魅力を再確認、再発見する必要がある



はじめに

- ・ 私たち、地域創生ゼミは佐賀関・関地区に地域創生という視点で地域活性化のための**ヒント**を見つける活動を行っています。
- ・ たとえば、関あじ関さば通りでの**楽・楽マルシェ**や**商店街を巻き込んだ大運動会**などの企画・運営

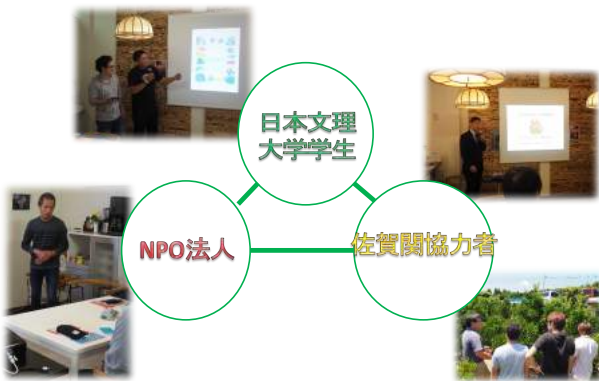


リーダー育成講座とは

内容 街の**魅力**を発見するという趣旨で7回の講座を行った。
佐賀関で働く各方面の専門家による話を聞き、**佐賀関の魅力を観光資源化し、企画・運営**できる人材を育成する

主催 NPO法人さがのせき・彩彩カフェ・日本文理大学・協働団体

活動主体



NPO法人さがのせき・彩彩カフェ/日本文理大学/協働団体 共同主催セミナー JT NPO助成「地域の再生と活性化に向けたリーダー育成講座」

- 第1回 平成27年6月13日(土) リーダー育成講座「佐賀関半島の歴史・文化」
講師:地元観光案内所 会場:まちの駅よらんせ〜(佐賀関)
- 第2回 平成27年7月11日(土) リーダー育成講座「関あじ関さばブランド!」
講師:JA佐賀関支店 会場:まちの駅よらんせ〜(佐賀関)
- 第3回 平成27年8月8日(土) リーダー育成講座「地元農産物の特色!」
講師:JA佐賀関支店 会場:まちの駅よらんせ〜(佐賀関)
- 第4回 平成27年9月12日(土) リーダー育成講座「商業・商店街の活性化策は!」
講師:大分商工会議所西筑後支所 会場:まちの駅よらんせ〜(佐賀関)
- 第5回 平成27年10月10日(土) リーダー育成講座「海・星をめぐる触れる観光とは!」
講師:大分市関崎海星館マネージャー 会場:大分市関崎海星館
- 第6回 平成27年11月14日(土) リーダー育成講座「食後の観光とは、おんせん県!」
講師:大分県観光・地域振興観光・地域探検課 会場:まちの駅よらんせ〜(佐賀関)
- 第7回 平成28年1月16日(土) リーダー育成講座「案内先で料理を体験する」
講師:地元料理人ほか 会場:まちの駅よらんせ〜(佐賀関)



リーダー育成講座を受講して

結果 魅力は多いのだが**魅力の課題**が見つかった

課題の中で、JF佐賀関支店長の坂井さんから伺った「関あじ・関さば」のことに絞って提案を考えていくことにした

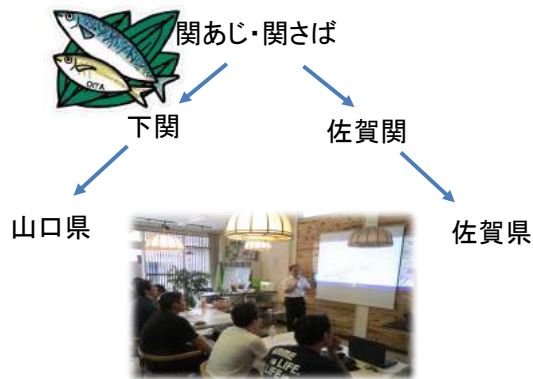
リーダー育成講座取り組みの趣旨

内容 街の**魅力**を発見するという趣旨で7回の講座を行った。
佐賀関で働く各方面の専門家による話を聞き、**佐賀関の魅力を観光資源化し、企画・運営できる人材を育成する**

結果 魅力は多いのだが**魅力の課題**が見つかった

課題の中で今回は、JF佐賀関支店長の坂井さんから伺った「関あじ・関さば」のことに**関して提案していきたい**と思います

県外での関アジ関サバの知名度現状



課題を整理すると

・**県外では関あじ・関さばが大分県佐賀関**だということを知っている人が**意外に少ない**



・**どのようにしたら佐賀関を知ってもらい**かつ**興味を持ってもらえるのか**を考えた

提案

- ・活動の一環で昨年10月に九州未来アワード学生アイデア部門(地域創生を題材とした提案)にエントリーし、関あじ関さばを題材とした提案を行いました
- ・今回はその提案をヒントに**新たな提案**をします！

ターゲット



都市部の**若者**や**ビジネスマン**など

独身世帯

少人数世帯

佐賀関の名を広げるには

どうしたら**関あじ・関さば＝大分県佐賀関**と連想できるようになるのかと**考え**



JF佐賀関支店長の坂井さんから**関あじ・関さばの規格外**を使ったり**りゅうきゅう**があることを聞き、それを使った**関のりゅうきゅう**に**着目**した！

なぜ関のりゅうきゅう丼にしたか？

安価

- ・切れ端を使うため
- ・生産地であるため

日持ち

- ・漬けるため
- ・漁法などが特殊なため鮮度を保つシステムができている

手軽さ

- ・特に調理する必要がない

大分の名物

広報のシステム

弁当のパッケージ又はシール

例えば

「大分名物幸せ関のりゅうきゅう丼」

「大分名物」と書くことで、「関のりゅうきゅう丼」が大分の名物であることが一目で分かる

※パッケージにQRコードをつけ、
それを読み取るだけで動画が
流れるようにする



将来の目標



佐賀県地区での市内小学生とその保護者を対象とした地域交流教室

～これまでの実践教育プログラムを踏まえて～

佐藤湧真、菊池佑輔、藤村祐輔、藤内健人
(経営経済学科 こども・福祉マネジメントコース 3年)

今回の報告内容

- ①大在こどもルームでの体験、夏休みの小学生対象の体験型自由研究教室の企画運営
- ②地域交流教室（準備～運営まで）
- ③交流教室での学びと参加者からの声
- ④今後の取組について

大在こどもルームでの体験交流

目的:児童の健全育成を推進し、子育て中の家庭を支援すること
開所時間:午前9時30分～午後5時

閉所日:日曜日、祝日、年末年始(12月29日から1月3日)
ただし、中央こどもルームは第2・第4月曜日(祝日の場合は翌日以降の平日)、年末年始(12月28日から1月3日)

対象者:市内の児童を対象としています。(乳児や幼児など就学前の子どもは、保護者の方と一緒に利用していただきます。)

利用料:無料

大在こどもルームでの体験交流

活動内容

- ・子どもたちの自主的な遊びを重視している。自由に来て好きな遊びができる。
- ・保護者の方も子どもたちと一緒に活動できる。
- ・ボランティアの先生によるいろいろな教室も開催している。

初めての子どもとのふれあいで、

・距離の取り方

・コミュニケーションの取り方が分からなかった。

小学生対象の体験型自由研究教室

【目的】自由研究を何しよう?と悩んでいる小学生とその保護者を対象に、NBU学生が中心となり、本学の教育カリキュラムを活かした体験型の自由研究教室を行う。

【対象者】大分市内に住む小学生※参加小学生の弟妹(未就学児)や保護者の参加も可。

【開催日時】

- ・第1回目:7月26日(日)9:30～11:30(受付開始9:00)
- ・第2回目:7月26日(日)13:00～15:00(受付開始12:30)
- ・第3回目:8月8日(土)9:30～11:30(受付開始9:00)
- ・第4回目:8月8日(土)13:00～15:00(受付開始12:30)

※複数回の参加も可。ただし、第1・3回目、第2・4回目は同一のプログラムで実施。

小学生対象の体験型自由研究教室(当日のスケジュール(午前))

9:00 受付開始・集合

9:30 体験活動①(45分)

高学年:血液型で本当に性格はわかるのか?

(性格検査の結果を血液型ごとに見比べてみよう)

低学年:思い出絵はがきをつくろう

10:15 休憩(15分)

10:30 体験活動②(45分)

高学年:身体障がい者体験

(体が半分動かないと、どのような苦労があるのか知ろう)

低学年:風船で遊ぼう(風船リレーなど風船を使ったレクリエーション)

11:15 まとめ・参加賞(表彰状等)授与・アンケート記入

小学生対象の体験型自由研究教室(当日のスケジュール(午後))

12:30 受付開始・集合

13:00 体験活動①(45分)

高学年:錯視体験(錯視図形を使った心理実験を体験してみよう)

低学年:福祉食体験(様々な特性に合わせた食に関する工夫を知ろう)

13:45 休憩(15分)

14:00 体験活動②(45分)

高学年:地域のお祭りのお宝探し

低学年:アピール達人になろう

(「粘土とこねる人」を実施し、相互評価で順位をつける)

14:45 まとめ・参加賞(表彰状)授与

保護者からの声(実施1回目)

1. 活動の進行役がわからず、誰の説明を聞けば良いのかわからなかった。
2. 半日のスケジュール表を配布するか掲示してほしい。
3. 低学年では説明が少し難しかった。
4. 子どもの様子を見ながら進行できていない部分があった。子どもたちのペースに合わせて(話しかけながら)進めてほしい。
5. 絵はがきは、最初に何を書くのか考えさせるか、「ちぎり絵」などテーマを決まっていた方がよいのではないかと思った。
6. ただ立っているだけの学生が気になった。子どもが逆にそちらに気をとられてしまう。

2回目実施に向けての改善点 (保護者からの声を参考に)

- 活動の進行役がわからず、誰の説明を聞けば良いのかわからなかった。
→福祉食体験では、**総合司会を設定し、全体進行と説明する者を分けることにした。**
- 子どもの様子を見ながら進行できていない部分があった。子どもたちのペースに合わせて(話しかけながら)進めてほしい。
→出来るだけ一方的な説明を避け、**●加児童に質問しながら説明を進めていくことにした。**
- ただ立っているだけの学生が気になった。子どもが逆にそちらに気をとられてしまう。
→参加児童の数に合わせて、体験活動に入る学生の数を調整することにした。また、出来るだけ**担当制**にして、**●加児童とのコミュニケーションがはかれるようにしていく。**

保護者からの声(実施2回目)

- 子どもたちが楽しめながら、気づきを提供できていた。
- 最初はちゃんとできるか心配したが、お友達と楽しそうに参加できていたので良かった。
- 学生の方々が笑顔でやさしく接してくれたので、子どもたちがのびのびできたと思います。
- 子どもの大変集中して、取り組む姿が見られてよかった。貴重な時間をありがとうございました。
- 大学生とふれ合えて分かりやすく説明してくれて良かったです。家も近いので、また来たいと思います。

佐賀県地区での地域交流教室(企画)

小学生同士や保護者同士の交流をしたいというニーズ(地域課題)に対して、NBU学生が中心となり、本学の教育カリキュラムを活かした体験型の交流教室を行う。

交流教室の目的は、以下の通りである。

- (1) 多くの人とふれあうことで**コミュニケーション能力の向上**を図る
- (2) 誰でも気軽に楽しめることで**身体能力の向上**を図る
- (3) **親子、親同士、子ど同士の交流の場**を作る
- (4) **世代を超え大学生との交流**も行う
- (5) **グループワーク**を行うことで**団結力(他人との協力)**を学ぶ

佐賀県地区での地域交流教室(実施内容)

- (1)日時 平成27年12月20日(日)10時から12時(受付9時30分開始)
- (2)場所 大分市立こうざき小学校(大分市大字本神崎945-2)
- (3)内容
 - 1)アイスブレーキングの実施
 - 2)レクリエーション(ニュースポーツ)の実施
 - ①オーバルボール ②釣っこ ③RDチャレンジ ④ブラズマカー等を予定
- (4)参加者 大分市内の小学生とその保護者(参加児童の弟妹[未就学児]も含む)
- (5)参加費 無料
- (6)定員 30組

佐賀県地区での地域交流教室(準備)



企画書



クリスマスカード・スタンブカード・メダル・賞状

前日のロールプレイで確認したこと

- 1つ1つの企画の内容を見直したり、予想される子供たちの動き
- 子どもたちが走り回るゲームなども考えていたので、安全面の配慮



走りまわる際に、子どもが壁にぶつからないように・・・**四方に大学生を配置**
子ども同士の衝突をしないように・・・**ゲームに数名の大学生を参加**

佐賀県地区での地域交流教室(運営)



会場設営



当日打ち合わせ



受付



子どもたちと飾り付け



案内



駐車場整理

佐賀県地区での地域交流教室(運営)



開会式



アイスブレーキング



班に分かれ、チーム名の決定



釣っこ



RDチャレンジ



オーバルボール

佐賀関地区での地域交流教室(運営)



プラスマーカー



親子でレース



親子で協力



メダルの授与



表彰



記念撮影

保護者からの声

遊びを通して、他校のお友達とも仲良くでき、よかった。
子どもたちが楽しそうだった。
兄弟がバラバラに行動でき、よかった。など

- 子どもどうしの交流 } 目的が達成できた。
→ 子どもと学生との交流 }

今回の企画の反省点

企画の中に、

子どもと保護者が交流できる機会が少なかった。

→ **親子での交流** …目的を達成できなかった。

今後の取組について

豊後大野市で実践している取組を活かして、

- ・ 地域の子どもたちと高齢者の方が触れ合う機会
 - ・ 世代を超えた交流や幅広い世代で楽しめるイベント
- このような企画が、

→ **高齢者の喜びや生きがいを生み、子どもたちは将来の勉強として良い刺激になるのではないかと考える。**

地域活性化プロジェクト 『楽・楽マルシェ』の取組報告

NBUチャレンジOITA 地域創生活動報告会2016 in 佐賀関
2016年2月20日（土） 於：佐賀関市民センター

日本文理大学 経営経済学部3年
藤井 悠輝
宮良 尚汰

報告の構成

- 1 「楽・楽マルシェ」とは
- 2 参加のきっかけ
- 3 取組内容
- 4 感想
- 5 今後の取組

1 「楽・楽まるしえ」とは

・地域交流イベント「楽・楽まるしえ」概要

- ①開催日時・・・毎月第4土曜日（朝10時～午後1時）
- ②場所・・・大分市佐賀関、旧佐賀関町役場跡
- ③主催・・・さかのせきローカルデザイン会議
（日本文理大学×NPO法人さかのせき・彩彩カフェ）
- ④内容・・・地元野菜の直売、地域の特産物販売、
学生カフェなど

2 参加のきっかけ

・大学の会計関連の授業で簿記に興味を持ち、学んだ専門知識や取得した資格を活かせる機会があると先生から聞き、NPO法人主催の町おこしイベント(佐賀関町)に参加しました。



3 取組内容

・「楽・楽まるしえ」での主な取組内容

- ・模擬店を出店し、実際にお金の流れを帳簿に記録し、管理する
- ・自分たちで企画したイベントを実施する
- ・地域の町おこしイベントにも参加する

※授業で学んだ知識を実践する場。実践を通じて簿記や会計などの専門知識の定着化、深化をはかる。
またイベントの企画や地域住民との交流などを通じて、コミュニケーション能力などを養う

参考：取組風景 その1

野菜を販売している様子



帳簿記入の様子



参考：取組風景 その2

佐賀関 夏の夜市に参加：たこ焼き調理



たこ焼き販売



参考：取組風景 その3

佐賀関 夏の夜市



佐賀関 夏の夜市



参考:取組風景 その4

模擬店でオリジナル商品販売



4 感想

- ・佐賀県でのNPO活動では、大学で学んだ専門知識や取得した会計資格を活かすことができました。
- ・実際に地域の方々とふれあうことで、より具体的に地域の課題を考えることができました。



5 今後の取組

- ・今後の取組として、他の地域の活動にも参加してみたいです。
- ・オリジナル商品を開発して、発売したいと思います。

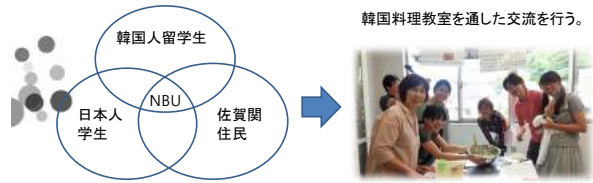


ご清聴ありがとうございました

韓国料理教室による佐賀県との交流会

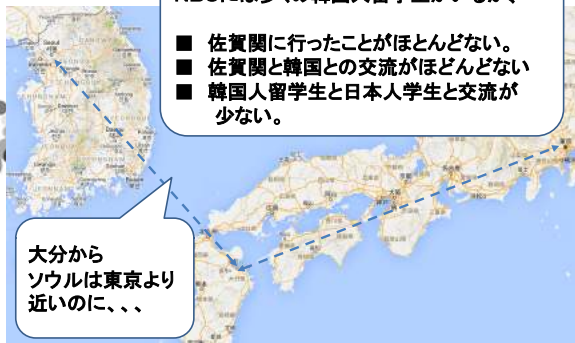
日本文理大学
金恩聲(経営経済学科・4年生)
間結夏(機械電気工学科・1年生)

活動概要とねらい



NBUの韓国留学生、日本人学生と一緒に、佐賀県の地域住民の方へ韓国料理教室を行う。

背景



NBUには多くの韓国留学生がいるが、

- 佐賀県に行ったことがほとんどない。
- 佐賀県と韓国との交流がほとんどない
- 韓国留学生と日本人学生と交流が少ない。

背景とねらい

3者が一緒に韓国料理を作り、一緒に食べることで

共同作業により、お互いの距離を縮めながら、

- 日本人学生、佐賀県住民の方には
- ⇒ 韓国料理や文化に興味を持ってもらう。
 - ⇒ 韓国留学生との新たな交流の機会。

- 韓国留学生には
- ⇒ 佐賀県について知る。
 - ⇒ 日本でのコミュニケーションを広げる。

準備期間 (約3か月)



韓国留学生 ↔ 日本人学生

お互いに性格も言葉も文化も違う我々でしたが、グループを作って準備を行う。

お互いの理解を深めるため、大在公民館にて一緒にリハーサルを行い、試食を行う。



その時、作った料理

料理教室の概要

日時 平成27年7月18日(土)
場所 佐賀県公民館

参加者
韓国留学生 12名
日本人学生 8名
佐賀県住民 14名
メキシコ人 1人
他

費用
会費制 500円/人

料理教室の概要

作った料理



チジミ



キンパ



チャブチュエ



トッポッキ



タツカルビ



当日の様子

9



チャブチェのチーム

10



キンパのチーム

11



チジミのチーム

12



トッポッキのチーム

13

食事後の投票で優勝！！



タッカルビのチーム

14



食事会の様子

15



食事会の様子

16

料理教室の後

まちの駅 よらんせえ〜にて散策



佐賀関の漁港を散策

17

その後の絆

韓国語教室

韓国旅行(予定)

日中韓料理教室

18



学内でボランティアにより
韓国語教室を行う

韓国旅行(予定)



19

日中韓料理教室



20

地域住民の方の感想

知り合いの方に誘われて珍しさもあり
参加しました。美味しいものを食べれ
たらいいなあと思いがらいつてみたら、
学生さんたちは今日の交流の目的や
作る物の内容などをしっかりまとめて
発表してくれとても頼もしかったです。
みんなで作った韓国料理はどれも美味
しく(少し辛く)笑 夏の楽しい思い出にな
りました(´▽`)



21

私達からのメッセージ

今回の料理教室を通して、佐賀関をより身近に
感じるようになりました。

これからも、国際交流を通して地域創生のため
何かお役に立つことをやっていきたいと考えています。

よろしくお願いいたします。

22

THANK YOU!!!



23

「地域活性化を目的とした
総合型地域スポーツクラブへのイベント参画」

～チラシによるプロモーションの実践活動報告～

日本文理大学 経営経済学科・3年
西村史奈

総合型地域スポーツクラブとは

- ◆ 総合型地域スポーツクラブとは、人々が身近な地域でスポーツに親しむことのできる新しいタイプのスポーツクラブで、
 - (1) **多世代**：子どもから高齢者まで
 - (2) **多様目**：様々なスポーツを愛好する人々が
 - (3) **多志向**：初心者からトップレベルまで、
それぞれの志向・レベルに合わせて参加できるという特徴を持つ
- ◆ 地域住民により自主的・主体的に運営されるスポーツクラブ

OZAI元気クラブ

OZAI元気クラブとは

- ◆ 目的：特に非活動的な人（子どもから高齢者まで）に運動や文化的活動を行う場（時間・空間・仲間）を提供すること
- ◆ 平成23年3月設立
- ◆ 会員数215名（平成27年度版 吾角/ソフットより）



大在地区の特徴

- ◆ 新興住宅地である
- ◆ 人口が急増している
27,267人/13.0km²（佐賀関10,347人/49.5km²）平成22年9月末日現在
- ◆ 年少人口（0～14歳）の割合が高い
4,920人（18%） 佐賀関 834人（8%）平成22年9月末日現在

COC事業としての参画



- 経営経済学部で学んだ知識の活用
- NSCA認定校カリキュラム（スポーツトレーナー）で学んだ知識・技術の実践

マーケティングの視点

NSCA認定校カリキュラム



目的・方法

- ◆ 会員増加につながるチラシを使った効果的なプロモーション方法についての検討
- ◆ 子どもの運動実施の二極化の解消となるイベントの実施
 - チャレンジ・ザ・ゲーム
 - かけっこ教室
 - クイズラリーウォーキング

結果（第1回：2015/7/19）

- 大在小学校と大在西小学校に全戸配布
- QRコード
- 安全管理と確実に伝達することを重視して情報量を多くした

新規参加人数
子ども 8名
学生 16名
保護者 4名

【反省点】
● 文字が多すぎる
● 連休中日
● 金額500円 ※参加費一括徴収
● 指導者明記すべき

当日の様子

結果（かけっこ教室：2015/8/29）

新規参加人数
子ども 46名

当日の様子

結果（第2回：2015/9/20）

- 大在小学校と大在西小学校に全戸配布
- QRコード
- 社会福祉施設に直接チラシを持っていく
- アンケート調査で参加希望者に直接郵便で送る
- 内容の簡略化 ニイラストを入れる
- PRの仕方 ニタイトルを大きくする
- 裏面に第1回目の様子を入れて雰囲気伝える
- 指導者名とスタッフを明記する

新規申込人数 3名
※実質0名

参加者
子ども 7名
学生 6名
保護者 6名



- 【反省点】
- 連休中日・時間帯
 - 金額500円
5名分を一括集収
 - 「チャレンジ・ザ・ゲーム」では分からないのでは？



結果（第3回：2015/11/8）

- 大在小学校と大在西小学校に全戸配布
- QRコード
- 社会福祉施設に直接チラシを持っていく
- アンケートで参加希望者に直接郵便で送る
- サブタイトルを変えるニタイトルを小学校単位で変える
- 前回の記録を伝える
- 金額を300円に下げる（実質は同じ）

新規申込人数 3名
※実質0名

参加者
子ども 9名
学生 9名
保護者 1名



- 【反省点】
- ニーズがないのでは？
 - リピート率は非常に高い
 - 伝える方法がよく分からない



結果（第4回：2016/1/24）

- 大在小学校と大在西小学校に全戸配布
- QRコード
- 社会福祉施設に直接チラシを持っていかかった
- 企業のチラシを参考に作る
- 興味がある人しか見ないであろう観点から
ニ画像を大きくしてイメージを伝える
ニ情報のスペースを小さくする
- 参加費200円（実質は同じ）

新規申込人数 6名
2名 公民館名義での贈呈
1名 かけっこ参加者
3名 社会福祉施設
※ 雪のため中止

- 【反省点】
- 隔わりがあることが重要？
 - 総合型クラブの認知度は？
 - タイミングの問題？



考察

プロダクト

- プログラムは非常に良かった

プロモーション

- ニーズ分析の不足
- 配布方法の検討が必要
- マーケティングを統合的に考える必要
- 総合型地域スポーツクラブの認知度は？

その他

- 低学年・未就学児の参加が多い



来年度に向けて

- アンケート調査（ニーズ分析）
- 効果的なプロモーションのさらなる検討
例）「チラシ以外の方法」「配布の方法」など
- 金額設定
- 来年度の実施場所・回数

チャレンジOITA地域創生活動報告会2016 in 佐賀関

「水中観測ロボットで見る佐賀関の海」

NBU
NIPPON BUNRI UNIVERSITY

日本文理大学工学部機械電気工学科3年 ○井上諒也
大学院環境情報学専攻稲川研究室 ○平居宏康

指導教員 大学院航空電子機械工学専攻 稲川直裕

2016/02/20
於 佐賀関市民センター 研修室

簡単に使える水中ロボット！



基地局

操縦桿

HEAVE
SURGE
SWAY
YAW

独自開発・手作り

- ・水中ロボット
- ↓
- ・佐賀関の海
- ↓
- ・クロメ漁

水中撮影成功



Google earth

市黒島 関関産

水分局黒島水産自給おいたのふんふん

報道

OCT市民チャンネル ニュース番組
プラスリポート

「佐賀関 小黒地区 クロメ漁」


放送日 2015-02-26

報道実績

報道実績


- OCT市民チャンネル ニュース番組
プラスリポート
- 佐賀関クロメ漁での
水中ロボットによる撮影成功は**世界発!**
- 水中撮影協力
佐賀関小黒地区の皆様

撮影日 平成27年2月21日
放送日 平成27年2月26日



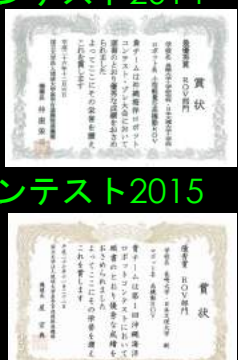
報道実績

- NHKターフィンが来た！生きもの新伝説
放送日 平成27年4月26日
- OCT市民チャンネル プラスリポート
「出前授業・水中ロボットを操縦しよう」
放送日 平成27年3月30日
- OCT市民チャンネル もぎたて情報局
「月刊稲積情報局2015」
放送日 平成27年7月17日
- OCT市民チャンネル プラスリポート
「木佐上ふれあいサマースクール」
放送日 平成27年8月4日



コンテスト実績

- 沖縄海洋ロボットコンテスト2014
「最優秀賞」
- 沖縄海洋ロボットコンテスト2015
「優秀賞」



水中観測ロボットで見る佐賀関の海



日本文理大学

大学院航空電子機械工学専攻

工学部機械電気工学科

稲川研究室

www.nbu.ac.jp/

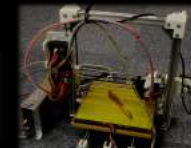


2016-02-20

チャレンジOITA地域創生活動報告会2016 in 佐賀関

「3Dで見る佐賀関半島」

★関崎海星館×NBU稲川研究室共同企画



日本文理大学工学部機械電気工学科3年 ○井上諒也

大学院環境情報学専攻稲川研究室 ○平居宏康

指導教員 大学院航空電子機械工学専攻 稲川直裕

2016/02/20

於 佐賀関市民センター 研修室

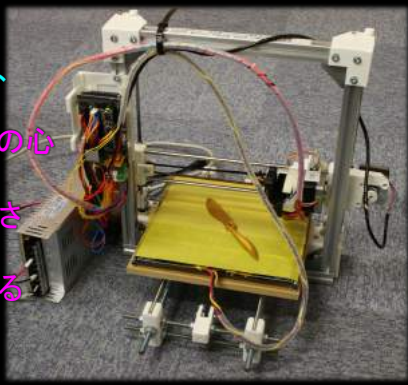
手作り3Dプリンタ！

当研究室では、

★ものづくりの心

★失敗の大切さ

★買わずに作る



・手作り3Dプリンタ

★関崎海星館×NBU稲川研究室
共同企画

・3D佐賀関半島

完全手作り

製作成功！



報道

OCT市民チャンネル ニュース番組
プラスリポート

「3Dでみる佐賀関半島」

放送日 2015-08-10

報道実績

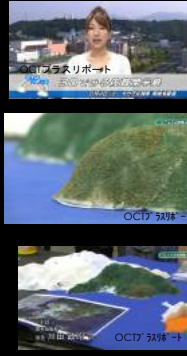
- OCT市民チャンネル ニュース番組
プラスリポート

- 佐賀関半島を
手作り3Dマップで手作り講習会を開催

協力機関

関崎海星館
九州職業能力開発大学校
福山職業能力開発短期大学校

- 撮影日 平成27年8月4日
- 放送日 平成27年8月10日



報道実績

- 大分合同新聞

- 掲載日

平成27年8月27日



背景

日本文理大
手作り3Dマップ講習会



関崎海星館
海星館20周年記念企画
「豊の海を知る」
2015-7-21→2016-3-31



どうやって作るの？

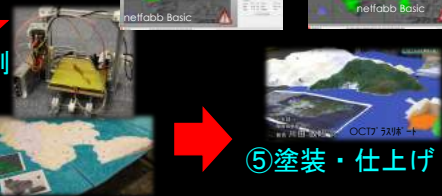
- ①国土地理院
3Dデータ



- ②3Dデータ分割



- ③3D印刷



- ④結合

- ⑤塗装・仕上げ

完成品は 海星館で展示



3Dで見る佐賀関半島
★関崎海星館×NBU稲川研究室共同企画

日本文理大学
大学院航空電子機械工学専攻
工学部機械電気工学科
稲川研究室



★関崎海星館

www.nbu.ac.jp/

2016-02-20



『地域に生きるものづくり』

～学生のアイデアをカタチに 『T.A.J.K』 『らくらく郵便』～



プロジェクトの概要

少子高齢化社会をむかえる日本において、暮らしのスタイルは、大きく変化していく。

これまで暮らしを「ゆたか」にしてきた『モノ』の在り方も、今後、変わっていくことが考えられる。

そこで、「ヒト」と「モノ」の関係性を自分たちなりに考え、今後の社会において必要な「モノ」について、自分たちのアイデアを考えた。



プロジェクトのタイムライン

1. 現状の地域の様子を知る。

→木佐上地区での調査

2. 自分たちのアイデアを考える。

3. 自分たちのアイデアをカタチにする。

プロジェクトのタイムライン

1. 現状の地域の様子を知る。

→木佐上地区での調査

2. 自分たちのアイデアを考える。

3. 自分たちのアイデアをカタチにする。

プロジェクトのタイムライン

1. 現状の地域の様子を知る。

→木佐上地区での調査

2. 自分たちのアイデアを考える。

3. 自分たちのアイデアをカタチにする。

・チームK.G

『T.A.J.K』

・チーム郵便屋さん

『らくらく郵便』



らくらく郵便

郵便屋さん

情報メディア学科

・久原知也 (企画・プレゼン)
・津行亮介 (映像)
・高橋 瑞希 (デザイン)

航空宇宙工学科

・岡林和輝 (ロボティクス)・渡辺伶司 (ディレクター)

機械電気工学科

・修理 雄大 (プログラム)



木佐上周辺での調査で気づいたこと

ポストの数が2個しかない！

木佐上地区周辺と大在駅周辺の比較

・木佐上地区周辺



赤・・・郵便ポスト

・大在駅周辺



緑・・・コンビニ

※同縮尺です

木佐上周辺での調査で気づいたこと

大きな道にしかポストがない。

郵便物の出せるコンビニがない。

→ 郵便物を出すのが不便なのではないか？

現地調査

調査対象	木佐上周辺の高齢者
実施日	12月24日
実施時間	12:30~13:30

～現地の人の声～

- 動けるうちは出しにいけるから大丈夫だが、動けない人にとっては不便だと思う。(60・70・80代男女)
- ポストが遠くて困っている。(70代女性)
- 車がない人は不便。(60代男女)

着眼点

ユーザー

日常の移動が困難な人
(70代くらいの高齢者で移動が困難な方)



ニーズ

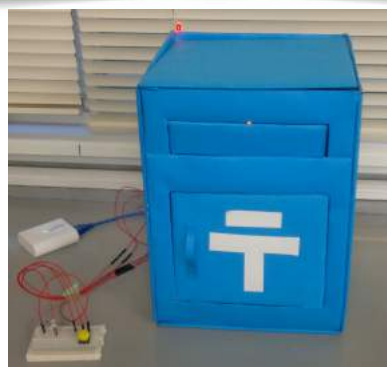
郵便物を気軽に出したい

コンセプト

自宅から郵便物を出せるようにする。



お知らせポストさん



お知らせポストさん



お知らせポストさんが実現すること

このポストがあることにより、郵便ポストまで遠い人や、マンションなどの住宅の郵便事情が改善される。

☞ 気軽に手紙を出せる！



携帯電話網などを利用し、郵便局や郵便配達員に、集配において必要な情報（集荷の有無等）を届ける事により、郵便物の集配システムの効率化（最適化）が考えられる。

☞ 最適化により地域の郵便を守る！



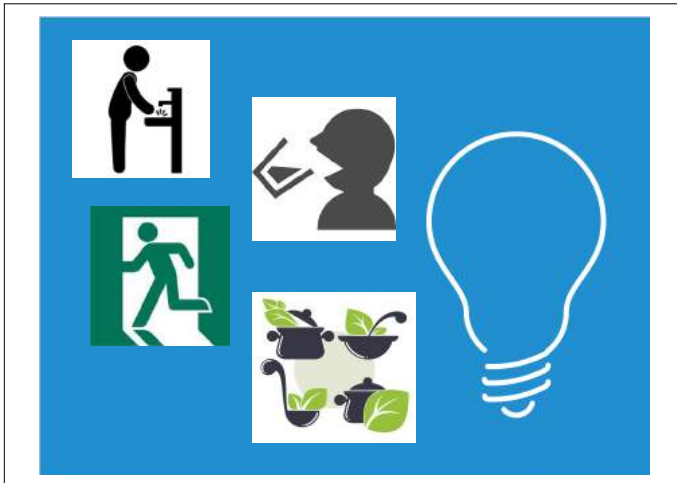
ロボットプロジェクトを通して学んだこと

・ 頭で考えるだけでなく、現地（木佐上地区）に直接調査しに行くことの大切さ

風邪予防どうしてますか？



- 情報メディア学科：多賀・大里・岡野
- 機械電気工学科：川島・緒方
- 航空宇宙工学科：那賀



手洗いの方法	残存ウイルス数 (残存率) ※
手洗いなし	約 1 0 0 万個
流水で 1 5 秒洗い	約 1 万個 (約 1%)
石鹸で 1 0 秒または 3 0 秒もみ洗い後、 流水ですすぎ	約 1 0 0 個 (約 0.01%)
石鹸で 6 0 秒もみ洗い後、 流水で 1 5 秒すすぎ	約 1 0 個 (約 0.001%)
石鹸で 1 0 秒もみ洗い後、 流水で 1 5 秒すすぎを 2 回繰り返す	約 数個 (約 0.0001%)

※手洗いなしと比較した場合
出典：森功次他（感染症学雑誌，80：496-500，2006）

T.A.J.K (手を・洗う・時間を・数える)

利用者に視覚情報を使って
手に残ったウイルス残存数をお知らせする。

T.A.J.K (手を・洗う・時間を・数える) について

水が出る秒数によってLEDが点灯し、綺麗になった程度を伝える。
 0～10秒(赤：不十分):ウイルスが多く残っている。
 10～15秒(黄：普通):ウイルス残存率・約1%(約1万個)
 15～30秒(緑：綺麗):ウイルス残存率・約0.01%(約100個)

ウイルスの個数
1000000
10000
100
1

LEDの色

T.A.J.Kの提案

手をかざした時間（綺麗になった程度）を伝えることで、手洗いへの意識向上に繋がる。

→よりウイルスによる感染を未然に防げるようになるのではないかと。

T. A. J. K (手洗った時間数える) のPV

ロボットプロジェクト入門2

作品名： T. A. J. K

ロボットプロジェクトを通して学んだこと

- ・細かく計画し、変更があれば確認しながら作業を進めること。
- ・各自の作業の進捗状況など、情報を共有すること。
- ・実際に木佐上地区に行ったことで、現地では分からない気付きがあったこと。

ご清聴、ありがとうございます。

プライバシー問題を生じない見守りシステム実現 に向けた電磁波レーダの利活用

201227007 鶴飼拓也(福島研究室)

(延岡工業高等学校卒業 日本文理大学大学院工学研究科環境情報学専攻進学)

プライバシー・個人の尊厳
豊かなところで生きる喜び

大切な人への想い
悔いのない介護

要介護者

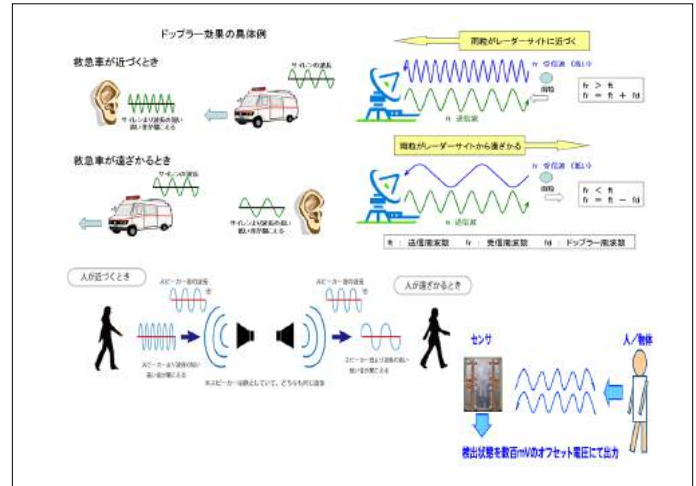
介護者

監視されることへの嫌疑
負担をかけることの抵抗
こころみへの不安感

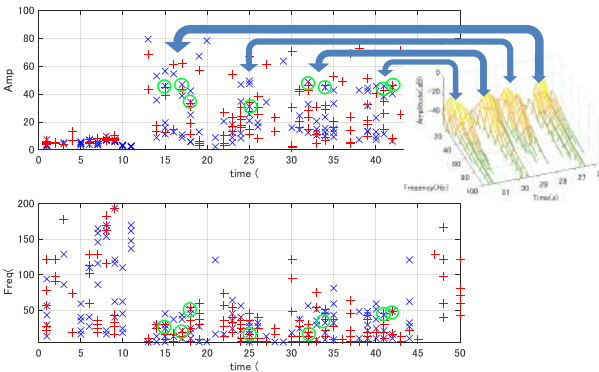
時間的拘束
場所的拘束
... 日常の負担

視覚情報不使用 高透過性/高検知性

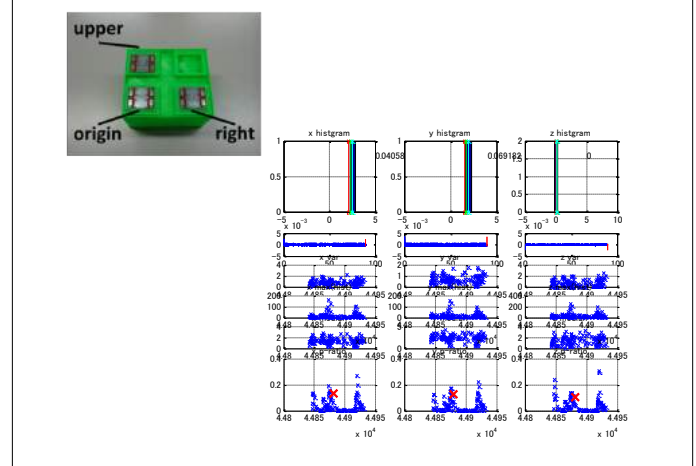
ドップラセンサ



センサ計測データ(Originポイント+Rightポイント)

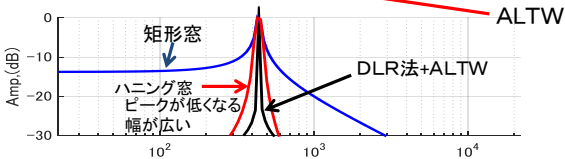
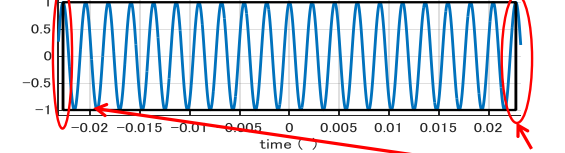


短時間計測で「動体速度+減衰量」が得られた



DLR法+ALTW (適応型窓長制御 Adaptive Length Time Window)

DLR法で無歪の相関関数が得られる



ピークが高い... 検知漏れが少ない } **高検知性**
幅(メインローブ)が狭い... 誤検知が少ない

おわりに

学術的
正しい計測 + 短時間/時間追従

「新たな可能性」を創造

社会的

「プライバシー(人の尊厳を守る) + 「低環境依存」

安心・安全な社会に
「また」1歩近づいた



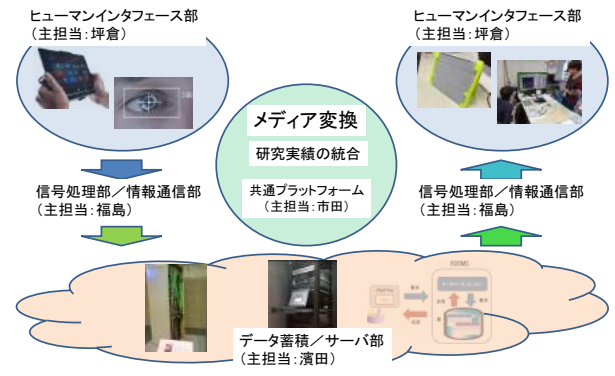
要介護者の コミュニケーション支援システムの開発 — 共通プラットフォームによる 効率良いICT技術の利活用 —

NBU
日本文化理大学
情報メディア学科
公認トピックスサイト

- 情報工学科コース
- メディアデザインコース
- 応用・情報教育コース
- 情報コミュニケーションコース

NBU 日本文化理大学
教授 福島学

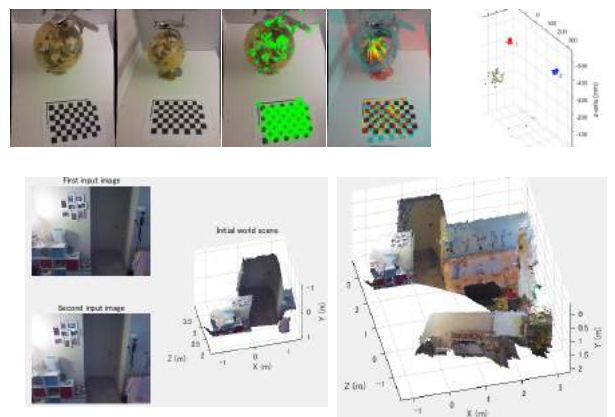
コミュニケーション



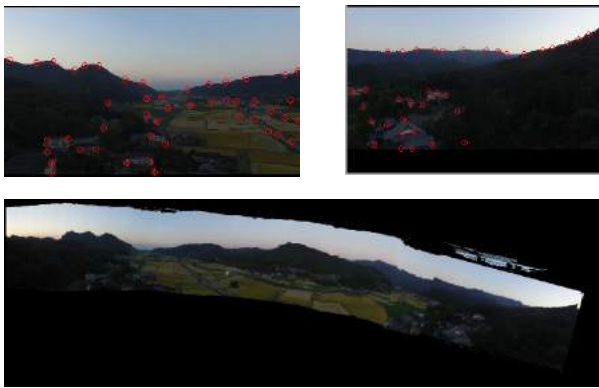
顔で生まれる情報取得



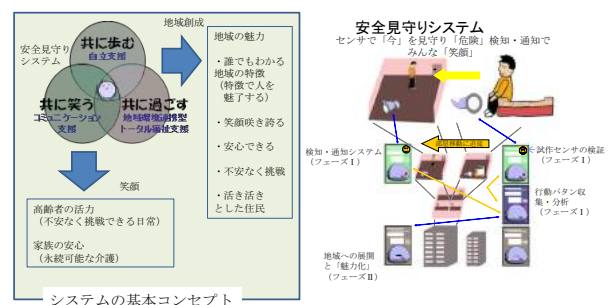
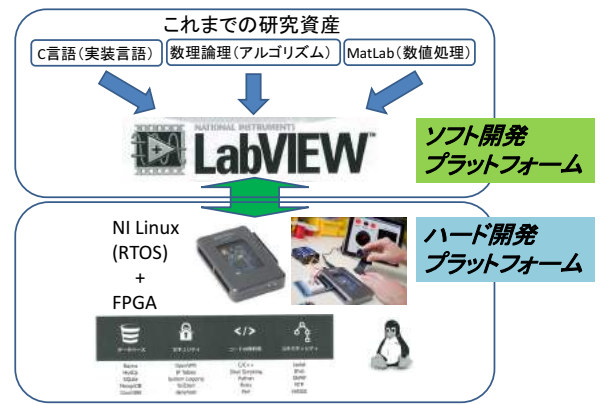
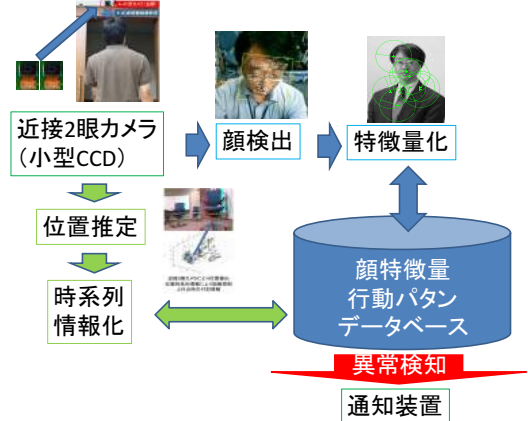
空間で生まれる情報取得



空間で生まれる情報取得



組み合わせると出来ること



コミュニケーション支援 — 共通プラットフォームによる 効率良いICT技術の利活用 —

5. 平成 27 年度 連携推進会議

連携推進会議ガイドライン

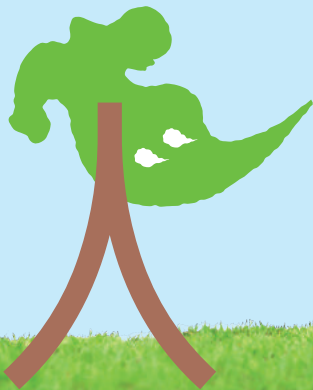
第 1 回連携推進会議

平成 27 年 6 月 26 日開催

第 2 回連携推進会議

平成 27 年 11 月 27 日開催

※各会議資料に関して、本セクションに掲載がない場合は、
「1. 事業概要・目的・事業計画」及び
「2. 大学COC事業 プロジェクトシート」に掲載している。



日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成27年度 第1回 連携推進会議 次第

日 時：平成27年6月26日（金）15：00～16：30

場 所：日本文理大学 情報センター7階 プレゼンテーションルーム

1. 開会

開会あいさつ（学長 平居 孝之）

2. 議事

（1）連携推進会議 運営ガイドラインについて 資料1

（2）本学大学COC事業の概要と平成26年度事業報告 資料2-1 2-2

（3）平成27年度事業計画 資料3-1 3-2

（4）教育カリキュラム改革の状況（地域志向科目の設定） 資料4

（5）平成27年度地域志向プロジェクト研究採択結果 資料5

（6）対象とする地域課題と平成27年度の具体的な取組予定 資料6-1 6-2

（7）今後の進め方及びスケジュールについて

3. その他

4. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成27年度 第1回 連携推進会議

<出席者名簿>

平成27年6月26日

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	研修生	布施 寛弘	本学との連携・調整窓口
企画振興部 芸術文化スポーツ局 芸術文化振興課	主査	師藤 京子	ユネスコエコパーク認定推進活動
企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室	副主幹	武藤 祐治	過疎地域の集落維持・活性化活動
生活環境部 消費生活・男女共同参画プラザ 県民活動支援室	室長	河野 雅弘	NPO法人との協働・経営支援活動
商工労働部 経営金融支援室	主任	大河原 大策	学生起業家マインド育成活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	課長	武藤 康彦	商店街と連携した地域活性化活動
農林水産部 おおいたブランド推進課	課長補佐 (総括)	上田 顕秀	地域ブランド発掘による6次化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	島畑 欣史	総合型地域スポーツクラブ支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 市長室	参事	高田 隆秀	本学との連携・調整窓口
	主査	足立 威士	
市民部 佐賀関支所	参事補	中家 一	地域と連携した地域活性化活動
商工農政部 産業振興課	参事	滋野 慶造	地域ブランドを活かした6次化活動
教育部 スポーツ・健康教育課	教育部次長 兼 課長	有馬 徹	健康で活力に満ちた生活支援活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課 秘書広報係	係長	板井 孝文	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	足立 哲啓	集落維持・活性化活動
商工観光課	課長	大野 真寛	エコパーク認定推進活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名
学長	平居 孝之
学長室長／人間力育成センター長	吉村 充功
工学部長	安田 幸夫
経営経済学部長	橋本 堅次郎
大学院工学研究科長	河邊 博康
大学教育長	島岡 成治

所 属・役 職	氏 名
産学官民連携推進センター長 ／学長室WG担当(研究)	池畑 義人
学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
COO事業担当特任教員	市田 秀樹

	事業全体の概要	H26年度の実施概要	H26年度の成果
概要	<p>本事業の全体の目的は、地域課題である少子高齢社会を豊かに乗り切るために必要な豊かな心と専門的課題解決力を兼ね備える「地域創生人材」を育成することである。つまり、教育では大分県内の少子高齢化が深刻な地域を主な対象に「体験交流活動」「課題解決に必要な知識の修得」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」の学修サイクルによる教育体系を確立し、地域創生人材を輩出する。研究では、地域課題を効率的かつ実践的に解決でき、地域に直接還元できる組織づくりを完成させ、地域の課題解決につなげる。社会貢献では、県民と学生の協働学習・協働実践が実現しやすい環境を整え、行政と連携した「県民参画講座」を開講し、地域再生・活性化を推進する。学長のリーダーシップのもと、以上の取組を通じて、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編と社会貢献活動との有機的な接続、それに基づく研究プロジェクト活動の推進を実現する地(知)の拠点改革、ガバナンス改革を実現する。</p> <p>本年度の目的は、教育では、学修サイクルの確立に向けた枠組みを試行し、教育カリキュラム体系の全学的な再編に向けた環境整備を実現する。研究では、地域志向研究プロジェクトの学内公募、研究を実施し、地域の課題解決に向けた基礎研究の成果を地域に還元する。社会貢献では、学生ボランティア活動が有効に機能するための県民と学生の協働学習体制の環境を整える。以上の取組を通じて、</p>	<p>本年度は、教育活動においては、「地域創生人材」育成のための学修サイクルの確立に向けた試行期間と位置づけており、連携自治体内における1次体験活動や環境保全活動などの「体験交流活動」、地域志向を意識した「課題解決に必要な知識の修得」、ゼミ活動を主体とした「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を中心にそれぞれについて試行を行い、地域を志向した教育カリキュラム体系への全学的な再編にむけての足がかりを付けた。また、研究活動においては、地域の課題解決を取り扱った卒業研究が多くなされるなど、研究成果の一部を地域に還元している。社会貢献活動においても、大分チャレンジアワード制度の確立に向けた学生活動の試行を行い、環境保全活動など、様々な取り組みを実施した。それぞれの活動についての基盤は、H26年度において、弱い分野もあるが、ほぼ形成することが出来た。あわせて学長のリーダーシップのもと、全学での推進体制を整えた。</p>	<p>本年度における取り組みの成果としては、</p> <p>○教育活動：学修サイクルの確立に向けた試行として、大分市佐賀関地区および豊後大野市での「体験交流活動」「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」及び正課外活動「大分チャレンジアワード」をそれぞれ実施した結果、取組参加学生の地域に対する興味や愛着、課題解決への意欲の向上が見られた。</p> <p>○研究活動：地域志向研究プロジェクト実施にむけた教員ヒアリングを実施し、新たな教員間連携による地域研究の可能性が明らかとなったが、地域志向研究プロジェクトの実施体制が整わず、公募型プロジェクト研究の実施については、次年度への繰り越しとした。</p> <p>○社会貢献活動：学生参加型の公開講座、企業向けの人材育成講座を実施し、地域の方々や学生・教員との意見交換の場を設けることで、地(知)の拠点としての位置づけを地域に発信、理解を得ることが出来た。また、これらの講座に学生が参加することで、地域課題へ取り組む姿勢の意識が変化した。</p> <p>○全体：リーフレットやホームページなど学内外への事業内容の周知やアンケートの実施、FD/SD研修会の実施など、学内外のCOC事業への協力体制の確立を目指した結果、次年度の地域志向科目数の増加につながり、地域志向の学生教育を実施する体制が整いつつあり、次年度以降、COC事業を発展的に推進するための成果を残すことが出来た。</p>

	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	
教育	①	10～3月	時間割における「実践型教育実施枠」の確保、地域づくり副専攻の開設	時間割において科目を設定しない時間帯である「実践型教育実施枠」を設定し、地域での実践活動等をまとめた時間で実施できるように時間割編成を変更する。また、地域創生に必要なジェネリックスキル(汎用的能力)を育成するための教育カリキュラム改革として、「地域づくり副専攻制度」を全学で導入する。	時間割において「実践型教育実施枠」を設定することで、時間的な制約が緩和され、地域での実践活動を行うことが容易になる。また、「地域づくり副専攻制度」の導入により、学部によらず、地域が誇るべき資源を理解する能力を習得すると同時に、地域住民や関係者より良い地域社会を主体的につくるために必要なジェネリックスキルを持った人材を輩出できる体制が構築できる。	1年次は月曜・木曜の4・5限、2年次は木曜4・5限を「実践型教育実施枠」として、地域等で自由に活動できる時間を確保した。また、次年度からの地域づくり副専攻の正式な開設準備を整えた。	「実践型教育実施枠」を使つての地域企業への見学・取材などを実施することにより、学生が地域企業のあらたな魅力を見出すことにより、地域企業に対する理解が向上した。また、「実践型教育実施枠」を活用することで「大分チャレンジアワード」等の実践活動の機会を確保することが出来た。	A
	②	10～3月	正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「課題解決型学修」の試行	学修サイクルを確立するための試行として、正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を大分市佐賀関地区、豊後大野市のそれぞれにおいて実施し、H27年度の学修サイクル試行へ向けた取り組み改善に反映させる。	正課教育における「体験交流活動」、ゼミ活動における「ステークホルダーとの協働による課題解決型学修」を試行することで、地域との連携体制構築の足掛かりができてると同時に、「地域創生人材」育成のためのH27年度の学修サイクル試行へ向けた取り組み改善に反映させることができる。	1年次における体験交流活動を建築学科「プロジェクト」で実施(2件、佐賀関地区、豊後大野市)、全学でのゼミ活動における「課題解決型学修」(2件)、地域を題材とした卒業研究(38件)を実施することで、地域との連携体制構築の足掛かりを作った。具体的な取組は③に記載する。	地域と連携した科目やゼミ活動、卒業研究を実施することで、学生が地域課題の存在に気づいたり、課題解決に向けた取り組みを実施することにより、課題解決に向けた手法を身につけることが出来た。また、地域のために主体的に活動する学生が多くなった。	A
	③	10～3月	大分をフィールドとした正課外活動の場の増加、「大分チャレンジアワード」の試行 (大分市佐賀関地区での活動:②③共通) 1次体験活動(農業漁業)、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動 ・商店街での地域活性化活動の実践 ・NPOの経営支援 ・さかのせきローカルデザイン会議の拡充及び定期的な実施(学生と地域の意見交換) (豊後大野市での活動:②③共通) ・1次体験活動(林業)、集落におけるコミュニティ維持活動(福祉支援活動) ・エコパークに関連した観光資源発掘活動 ・学生グリーンツーリズム協会の設立準備	大分の地域をフィールドとした「自然体験活動」、「運動・スポーツ」、「ボランティア活動」、「科学・文化・芸術活動」の4つの分野すべての活動に組み込み、設定した基準をクリアした学生に対して大分チャレンジアワード修了者として認める制度を試行する。	大分チャレンジアワードの導入により、学生個人に対応した地域活動プログラムを確立することができる。	大分をフィールドとした以下の活動を半年にわたって実施し、参加した学生や地域住民の声を聞くことで、事業推進に関わる次年度以降の計画に反映させた。 ・大分チャレンジアワード:活動参加者数15名(修了14名)、アドバイザー資格取得者5名(教職員) 活動内容:自然体験活動の一環としてジオパークに関連した観光資源発掘活動である「ジオツアー」を12月に学生が1泊2日で実施(豊後大野市全域)。ボランティア活動の一環で犬飼町大寒地区で農業体験等を3月に実施等 ・1次体験活動(農業漁業)、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動:正課外活動「四季の森プロジェクト」の一環として、NPO法人ウミネコの会と共同でこども向け体験事業(しめ縄づくり、もちつき等)を実施(12/20,27) ・商店街での地域活性化活動の実践:地域交流イベント「楽・楽マルシェ」の開催(毎月第4土曜日・旧佐賀関町役場、毎回経営経済学科・建築学科学生5名程度が参加し、毎回50名程度の住民・こども達が参加) ・NPOの経営支援:NPO法人さかのせき・彩彩カフェの活動支援、経営分析を経営経済学科のゼミ活動として試行 ・さかのせきローカルデザイン会議の拡充及び定期的な実施(学生と地域の意見交換):マルシェ実施のための定期的な会議を実施 地大会議室 7月14日に佐賀関公民館で	大分市佐賀関地区および豊後大野市において、ボランティア活動や、ゼミ活動、地域の方とのワークショップなど、さまざまな正課外活動の実施、および、大分チャレンジアワード制度を創設し実践することで、特定の分野の学生に限らず、さまざまな学生が正課外活動に参加することが出来た。活動に取り組んだ学生の地域創生人としての成長を確認することが出来た。	A

						・本年度実施。加へて職として、11月には民間企業で ワークショップを実施 ・こども職業体験「お仕事発見ランド」の開催(11/29・佐賀関 公民館)し、8つのお仕事(ロボット・ゲーム・紙ひこうき・イン テリア・水産業・経営・福祉・スポーツ)を教員や学生がこど も達に指導(27名の学生が運営スタッフとして参加し、46名 の子どもが体験) ・佐賀関公民館事業「第9回関崎シーサイドウォーキング」 (2/28)に学生スタッフとして6名参加 ・1次体験活動(林業)、集落におけるコミュニティ維持活動 (福祉支援活動):大野町中土師地区(ふるさと体験村等)で 10月以降不定期に建築学系学生が活動 ・農業支援、里山環境保全支援のためのロボット製作に学 生10名が参加し、半年にわたって実施	
--	--	--	--	--	--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--

※自己点検評価:A:順調に進んでいる、B:やや順調に進んでいる、C:やや遅れている、D:遅れている・未実施

	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	
研究	④	10～3月	産学官民連携推進センターが中心となり、地域研究のシーズとニーズを調査、整理	産学官民連携推進センターが中心となり大学シーズを整理するとともに、自治体等と連携して地域課題研究のニーズを調査、整理する。これらの連絡、情報共有体制を整備し、取り組みを進める。	地域課題研究のシーズとニーズを調査、整理することで、自治体との連絡、情報共有体制が構築できると同時に、大学シーズと企業・地域とのマッチングを図ることができる。	1月から2月にかけて、COC事業担当教員、産学官民連携推進センターを中心にヒアリングを実施し、各教員の研究シーズのほか、COCの事業運営にあたり、各教員が抱えている問題を抽出することができ、次年度以降の事業運営の改善に向けて方策に反映させた。なお、全教員へのヒアリングが完了していないため、次年度に継続してシーズヒアリングを行う。あわせて、自治体関係者、地域金融機関関係者から地域課題研究のニーズに関してヒアリングを実施し、次年度の事業計画に反映させた。	学内教員に対するヒアリングを実施し、学内の地域研究に関するシーズ集を取りまとめることが出来た。また、調査結果から、学部を越えた地域研究など、新たな可能性を見出す事ができ、次年度以降における地域研究の取り組み課題の改善に繋がった。あわせて、自治体関係者、地域金融機関関係者のニーズヒアリングを実施し、地域の課題研究に対するニーズを顕在化することが出来た。	B
	⑤	10月	地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択	地域課題研究ニーズに基づき、地域志向プロジェクト研究の学内公募、採択を行う。	地域志向プロジェクト研究の学内公募を行うことで、地域課題の周知を図ることができると同時に、複数教員によるプロジェクト型研究を顕在化することができる。	地域志向プロジェクト研究の学内公募体制が整わず、成果を出すための十分な公募期間及び研究期間が確保できなかったため、地域志向プロジェクト研究の学内公募を実施できなかった。	④のヒアリングの結果から地域志向プロジェクト研究に対するニーズ、シーズとも確認できたが、十分な成果を出すためには教員間連携による地域志向型研究を実施する体制づくりがまず必要であることが確認されたため、地域志向プロジェクト研究の学内公募を見送った。次年度の新規公募に向けた教員間連携研究を実施する体制作りができた。	D
	⑥	10～3月	地域志向プロジェクト研究の実施	地域志向プロジェクト研究を実施し、地域の課題解決に向けた基礎研究の成果を地域に還元する。	地域志向プロジェクト研究の実施により、複数教員によるプロジェクト型研究を促進することができ、地域へ大学の知を還元することができる。	⑤と同じ理由のため、学内公募型の地域志向プロジェクト研究を実施できなかった。	⑤と同じ理由のため、学内公募型の地域志向プロジェクト研究を実施できなかったが、次年度の新規公募に向けた教員間連携研究を実施する体制作りができた。	D

	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	
社会貢献	⑦	12～2月	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分業」の実施	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分業」を開催し、本取組における大学シーズを広く公表するとともに、地域住民等との意見交換を行う場とする。	未来志向型の市民対象公開講座「大分学・大分業」を実施することで、大分の地域資源の再発見や未来への提言などを行うとともに、地域住民等との意見交換を通じて地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。	「わかもの大分がく」(11月30日、参加人数:学生26名、市民多数)、及び「チャレンジOITA地域創生活動報告会2015 in 豊後大野」(2月21日、参加人数:70名)を開催し、事業内容の報告や学生活動の報告を行い、地域の参加者と意見公開を行い、事業計画の改善に反映させた。	「わかもの大分がく」及び「チャレンジOITA地域創生活動報告会2015 in 豊後大野」を開催し、大分の地域で活動する学生の活動紹介や情報交換、本学の活動報告を行い、地域の方との意見交換を行うことで、学生自身の気づきや地域課題へ取り組む姿勢の意識が変化した。また、地域住民の学生に対する期待の大きさを理解することができた。	A
	⑧	1～2月	地域企業向け地域創生人材講座の実施	地域企業向け地域創生人材講座を開催し、本取組における大学シーズ及び人材育成像を広く公表・普及するとともに、地域企業等との意見交換を行う場とする。	地域企業向け地域創生人材講座を実施することで、本学の「知の資源」を地域の人材育成に還元することができ、地(知)の拠点としての取り組み促進ができる。	地域企業向け「地域創生人材」育成講座を開催(参加人数:約40名)、フォローアップ講座として「チャレンジOITA地域創生人材講座2015 in 佐賀関」を開催(2月14日、参加人数:44名)し、本学の教員が講座およびワークショップを実施することで、「知の資源」を地域の人材育成に還元することが出来た。	地域企業向け「地域創生人材」育成講座、フォローアップ講座として「チャレンジOITA地域創生人材講座2015 in 佐賀関」を開催することで、地域を元気にするヒントを地域企業人や住民に広く知っていただくことが出来た。また、地区の活性化を考えるワークショップでは学生と地域商店街の店主等が佐賀関地区の特徴についての意見交換とプラン作成を行うことで、地域が若者視点の力を必要としていることを学生が感じる事が出来、今後、学生が積極的に地域に入っていくためのきっかけとなった。	A

	計画	項目	内容	期待される成果	実施概要	成果	自己点検評価	
全体	⑨	10～3月	学長室に事業推進ワーキンググループ(WG)を設置、事業推進・統括	学長のリーダーシップを補佐し、本事業を着実に推進・統括する学長室の活動を本格化する。学長室に事業推進ワーキンググループ(WG)を設置し、各取り組みが実効性を持つように組織化する。これらの活動においては、各科目の教育内容・ゼミ活動内容の精査、実践教育推進のための体制整理、「大分チャレンジアワード」の制度設計、H27年度実施の地域志向科目内容の確認をあわせて行い、H27年度に向けた活動推進体制を整理する。	学長室に事業推進ワーキンググループ(WG)を設置、組織化することで、事業を適切に統括し、円滑に推進することができる。	半年間にわたり、計19回の事業推進ワーキンググループを開催し、事業推進に関する意見集約を行い、事業運営に反映させた。	学長が参加し、学長室を中心とした事業推進ワーキンググループ(WG)を開催し、教育内容の精査や学生教育のための環境整備の検討を行った結果、次年度からの地域志向科目数の増加に繋がった(26科目→160科目)。	A
	⑩	10月	事務補佐職員1名の採用	事務補佐職員1名を雇用し、本事業において発生する事務作業の効率化を図る。	事務補佐職員1名を雇用することで、本事業において発生する事務作業の効率化を図ることができる。	10月に新規採用を行い、本事業において発生する事務処理業務に従事した。	事務補佐職員を新規採用することで、本事業において発生する事務作業の効率化を図ることができた。	A

⑪	10月	地域志向活動推進のためのアクティブラーニング設備の充実	地域志向活動推進のために必要なアクティブラーニング設備(グループ学習用デスク・椅子セット、プロジェクターセット、電子黒板等)の導入を図る。	地域志向活動推進のために必要なアクティブラーニング設備の導入を図ることで、地域を題材にしたグループワークやディスカッション、双方向授業等の導入促進、活発化につながり、全学的な地域志向活動を効果的に推進することができる。	2月に電子黒板、プロジェクターなどの整備を行い、学生が学内において地域志向活動をアクティブラーニング形式で行いやすくするための環境整備を行った。また3月に実際に複数のワークショップを実施した。	電子黒板、プロジェクターなどの整備を行い、学生が地域研究や地域でのプロジェクト活動において、活発な議論や電子データの積極的な活用など主体的に取り組むことが確認出来た。	A
⑫	10月	特任教員(地域コーディネータ)1名の採用	自治体、地域住民、地域企業等の本事業におけるステークホルダーと密接な連携を取り、活動を効果的に推進するための特任教員(地域コーディネータ)を雇用する。	特任教員(地域コーディネータ)1名を雇用することで、自治体、地域住民、地域企業等の本事業におけるステークホルダーと密接な連携を取ることができるようになり、本事業を円滑に推進することができる。	1月に採用を行い、本事業に関する全般業務に従事し、学内調整のほか、関係自治体、外部協力者との調整・コーディネートを行った。	本事業における調整業務を円滑に進められるようになったほか、次年度以降の具体的な学生教育プログラムの検討などを行った。	B
⑬	10月	連携推進会議の開催	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を開催し、本事業の円滑な推進、連携を図る。	本学幹部教員と連携自治体の担当部局長等からなる連携推進会議を開催し、情報共有、意思統一を図ることで、本事業の円滑な推進、連携を図ることができる。	10月29日に連携推進会議を実施し(連携自治体参加者19名)、連携自治体へ事業説明と意見聴取を行い、事業推進に関する連携強化、円滑な推進体制の構築につなげた。	連携推進会議を実施し、地域での学生教育の内容やその効果について協議を行った結果、地域と大学が協力して、学生(若者)教育を行っていく重要性が担当者レベルでも確認され、活動地域の拡充や地域との連携構築、効果的な学生教育プログラムの構築につながった。	A
⑭	11月	事業パンフレット・ホームページの制作・公表、シンポジウムの開催	事業パンフレット・ホームページを制作・公表し、広く県民、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信する。また、本事業のキックオフとなるシンポジウムを開催し、県民やステークホルダーに本事業の目的や意義について発信する。	事業パンフレット・ホームページを制作・公表するとともに、キックオフとなるシンポジウムを開催することで、広く県民、学内構成員に本事業の取り組み状況を発信でき、本事業の目的や意義の理解を得ることができる。	事業リーフレットを11月、ホームページの作成・公開を3月、シンポジウムを11月11日に開催し、広く一般県民・市民に事業の活動内容の紹介を行い、事業の内容に対して期待するという意見を頂いた。	事業内容を広く一般に公表・公開することで、学生が地域から期待されていることを実感することで、その期待に応えたいという意識を内発的に促すことに繋がった。	B
⑮	12月	本学の地域貢献度、地域ニーズを把握する県民アンケート調査の実施	本学の地域貢献度や地域ニーズ・課題を把握するための県民アンケート調査を実施し、現状を明らかにするとともに、H27年度の取り組みに向けた事業内容の精査に活用する。	県民アンケート調査を実施することで、本学の地域貢献度や地域ニーズ・課題を把握することができる。現状を明らかにできるとともに、H27年度の取り組みに向けた事業内容の精査に活用することができる。	3月に県民アンケート調査を実施し182名から回答を得た(回収率18.2%)。本学の地域貢献認知度は約3割、本事業に対する期待度は6割から7割と高い結果を得たことで、事業内容に対する評価を得た。	県民アンケート調査を実施し、本学の活動の認知度が3割程度ではあるが、COC事業の取り組みに対する期待度が6割から7割と高い結果となったことを踏まえて、本事業の成果を残しつつ、事業を通して学生教育を行っていく必要性を確認することが出来た。	A
⑯	2~3月	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会の実施	地域志向活動推進のためのFD/SD研修会を実施し、地域志向科目・活動の実施方法等について検討する。	FD/SD研修会を実施することで、地域志向の理解するとともに、地域志向科目・活動の実施方法等について理解を深めることができる。	3月23日に「地域を活かす大学」という内容でFD/SD研修会を実施し(講師:西九州大学 副学長 井本 浩之 先生)、8割弱の教員の参加を得た。	九州の私立大学として唯一のCOC事業の先行事例である西九州大学の事例を聞くことで、教職員の具体的な取組イメージの確立につながったほか、教職員の本事業へのさらなる意識の向上をはかることで、学生教育の新たな展開、質の向上につなげる事が出来た。	A
⑰	2~3月	事業検討・評価委員会の開催・年次成果報告書の発行	事業検討・評価委員会を開催し、H26年度の事業成果を総括、評価するとともに、H27年度に向けた取組内容の妥当性について検討する。また、年次成果報告書を発行し、事業成果を広く公表・普及する。	事業検討・評価委員会を開催し、H26年度の事業成果を総括、評価するとともに、H27年度に向けた取組内容の妥当性検討を通じて、H27年度の事業について見直し、改善を図ることができる。また、年次成果報告書を発行することで、事業成果を広く公表・普及することができる。	3月24日に外部評価委員(自治体3名、民間委員4名)を含む事業検討・評価委員会を実施し、本年度の活動報告を行い、連携強化を強め、一層内容を充実させることが、人材育成に繋がるという意見でまとめ、それを次年度の事業計画の中で反映させていくことで了承された。また、年次報告書を3月に発行した。	外部評価委員を含む事業検討・評価委員会を実施し、今年度の実施状況と次年度計画を報告し、また年次報告書を発行することで、学内教職員のCOC事業への周知と次年度に向けた改善策の浸透、意識の向上をはかることができた。また、あわせて年次報告書をステークホルダーに配布することで本事業の取組成果を広く発信することが出来た。	A

※自己点検評価:A:順調に進んでいる、B:やや順調に進んでいる、C:やや遅れている、D:遅れている・未実施

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）
平成27年度 第2回 連携推進会議 次第

日 時：平成27年11月27日（金） 13：30～15：30

場 所：日本文理大学 情報センター7階 プレゼンテーションルーム

1. 開会

開会あいさつ（学長 平居 孝之）

2. 出席者紹介（新規出席者のみ）

3. 議事

（1）平成27年度取組状況報告（対象とする地域課題7テーマ主要取組） 資料1

3. 自然の積極的な活用による保全と地域活性化（観光・教育）（舩田）

6. NPO法人の活動・経営支援（吉本）

1. 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティの維持・活性化（池畑）

2. 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり（市田）

4. 地域商店及び商店街の活性化による地域振興（今西）

5. 健康増進及び生活支援によるコミュニティの維持（堀）

7. 地域ブランドの発掘による交流人口の増加・産業の活性化（6次化）（工藤）

その他：その他の取組・教育カリキュラム改革等の状況（吉村） 資料2・3

（2）意見交換等

（3）今後のスケジュールについて

3. その他

4. 閉会

事務局：日本文理大学 学長室

日本文理大学 地（知）の拠点整備事業 平成27年度 第2回 連携推進会議

<出席者名簿>

平成27年11月27日

○大分県

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画振興部 政策企画課	主幹	角淵 達彦	本学との連携・調整窓口
企画振興部 芸術文化スポーツ局 芸術文化スポーツ振興課		(欠席)	ユネスコエコパーク認定推進活動
企画振興部 観光・地域局 地域活力応援室	室長	磯田 健	過疎地域の集落維持・活性化活動
	副主幹	武藤 祐治	
生活環境部 消費生活・男女共同 参画プラザ 県民活動支援室		(欠席)	NPO法人との協働・経営支援活動
商工労働部 経営金融支援室		(欠席)	学生起業家マインド育成活動
商工労働部 商業・サービス業振興課	課長	武藤 康彦	商店街と連携した地域活性化活動
農林水産部 おおいたブランド推進課	課長補佐	上田 顕秀	地域ブランド発掘による6次化活動
教育庁 体育保健課	指導主事	島畑 欣史	総合型地域スポーツクラブ支援活動

(敬称略)

○大分市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
企画部 市長室	主査	足立 威士	本学との連携・調整窓口
市民部 佐賀関支所	支所長	太田 宏	地域と連携した地域活性化活動
商工農政部 産業振興課	課長	滝口 裕朗	地域ブランドを活かした6次化活動
教育部 スポーツ・健康教育課	教育部次長 兼 課長	有馬 徹	健康で活力に満ちた生活支援活動

(敬称略)

○豊後大野市

所 属	職 名	氏 名	主な連携取組内容
総務課 秘書広報係	係長	板井 孝文	本学との連携・調整窓口
まちづくり推進課	課長	足立 哲啓	集落維持・活性化活動
商工観光課		(欠席)	エコパーク認定推進活動

(敬称略)

○日本文理大学

所 属・役 職	氏 名
学長	平居 孝之
学長室長／人間力育成センター長	吉村 充功
工学部長	安田 幸夫
経営経済学部長	橋本 堅次郎
大学院工学研究科長	(欠席)
大学教育長	島岡 成治

所 属・役 職	氏 名
産学官民連携推進センター長 ／学長室WG担当(研究)	池畑 義人
FD委員長	本村 裕之
学長室WG担当(全体)	釘宮 啓
学長室WG担当(教育)	鍋田 耕作
学長室WG担当(社会貢献)	高見 大介
COC事業担当特任教員	市田 秀樹

対象とする地域課題と平成 27 年度の具体的な取組の状況

○大分県全域対象

主な課題と取り組み

- 大学生への地域文化教育と魅力発見（大分チャレンジアワード）
- 地域企業・自治体・NPO との連携による地域の魅力発見・若者雇用創出の促進
- 大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究
- フィールド・スタディを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラムの導入

課題	これまでの活動実績（本年度）	今後の展開
大学生への地域文化教育と魅力発見 （大分チャレンジアワード）	地域に関係した歴史文化に触れる「冒険旅行」（11/14～11/15:1泊2日）や各地区での「ボランティア活動」を多数実施した。豊後大野市の「ジオパーク巡り」、地域住民の協力を得た民泊など。	引き続き、「自然体験活動」「ボランティア活動」「運動・スポーツ」「科学・文化・芸術活動」に取り組み、学生の地域に対するマインド、能力を高め、「チャレンジアワード」の獲得を進める。
地域企業との連携による若者雇用創出の促進	大分県中小企業家同友会加盟企業と連携して、2年「社会参画応用」で県内中小企業3社の求人PR動画を若者目線で制作（平成27年度前期、受講生9名）。また、後期「社会参画実習2」でも実施し、県内金融機関、飲食業の上場企業、中小企業1社の動画制作を行っている（受講生9名）。また、制作物については、企業Web、大Webに掲載したほか、学食でも放映した。学生のキャリア教育の一環として実施（県内企業、中小企業の魅力を知る）。	H28/1/21（木）13:00～学内にて成果発表会を実施。 今回の成果や改善点を共有し、今後も継続して実施予定。
若者が県内企業や地域の魅力を知る	2年「産学一致の勧め（全学必修）」において、大分県中小企業家同友会加盟企業（各学部3名）、NPO等（各学部2名）から取組の紹介や地域の魅力についてご講演いただき、地域志向を高めた。 1年「地域創生人材入試入学者」に対し、「おおいた、つくりびと」の志向を高めるため、教員、自治体職員等が講演。	「産学一致の勧め」の外部講師講演は7/1で終了。次年度に向けた拡充について検討。 「おおいた、つくりびと」講演については引き続き、実施予定。
若者が県内企業の魅力を知り、就業マインドを養成	1年前期「社会参画入門」、2年後期「社会参画実習2」（全学必修）において、各学科に係る地元企業を訪問する企業取材実習を実施（1年生1回（13社協力）、2年生工学部2回、経営経済学部1回（16社協力））。1年では企業を知ること働くことやそのための専門分野の学習に対する動機付け、2年では業界研究、企業研究により地元企業を理解する取り組みとして実施。	2年生は12/3の訪問ですべて終了予定。

課題	これまでの活動実績（本年度）	今後の展開
若者が身近な行政施策を知り、関心を持つ	全1年生（工学部・経営経済学部、計約480名）必修の教養基礎科目「社会参画実習1」において、自分たちが住む大分県・大分市に関わる政策のうち、18歳選挙権や自転車マナーなど若者に身近なテーマを自分事として考え、若者として具体的にできることをグループで考え、提案することを目標とした学部混成ワークショップ授業を実施中。11/9, 16に県・市の施策担当者より出張講義を受けた。	12/21に全チームの成果発表。H28/1/18に代表チームによる成果発表を予定。提案書は、すべて担当課へ提出予定。
大学生観光まちづくりプランの立案（JTB）	JTB主催の大学生まちづくりコンテストへ複数の学生チームが参画（本年度は大分地区が対象）。例：豊後大野市を主な対象としたプランの立案をゼミ活動として実施。	次年度も継続開催の見込みであることから、学生の積極的な提案を勧奨する。
九州未来アワード「学生起業アイデア部門」応募	九州内新聞7社が主催する九州未来アワードへ「地域のイノベーションに貢献する、グローバル化の観点をもったアイデア」を学生が2件提案。	1件が最終審査に進んでおり、12/1にレンブラントホテルで最終結果が発表。
地域をフィールドにした人間力の育成	人間力育成センターにおいて、各種正課外プロジェクトを実施。学生消防応援隊の結成・活動、地域安全マップ作製講習会への運営参画、鶴崎23夜祭への運営参画（小学生提灯行列、灯籠制作（建築学科））、各地での農林水産ボランティア等多数。	12/12大分市中心部商店街にて「サンタ・サンタ・サンタ」の活性化イベントを開催。今後も様々な取り組みを通じて学生活動を展開、人間力を育成する。

○大分市：佐賀関地区周辺・大在地区

主な課題と取り組み

- 廃校利用を通じた地域コミュニティ活性化・ものづくり活動（木佐上地区）
- 総合型地域スポーツクラブの支援活動の試行（大在地区）
- NPOへの参画と経営支援
- さがのせきローカルデザイン会議（学生と地域の意見交換）の定期的な実施
- NPOとの連携による体験型観光プロジェクト
- 資源の掘り起こしによるコミュニティ活性化活動・6次化検討
- 1次体験活動（農業漁業）、海岸等の環境保全活動、防犯ボランティア活動
- 商店街での地域活性化活動の実践、連携による職業体験活動
- 学生地域活動拠点の開設、運営
- 地域コミュニティの活性化活動（福祉・スポーツ活動）

課題	これまでの活動実績（本年度）	今後の展開
地域の小学生への文化・歴史・環境教育	佐賀関地域の小学生を対象とした教育NPO（NPOウミネコの会）の取り組みのサポートを行った。「田植え・稲刈り・野外炊飯・環境学習・海辺のキャンプ等」	学生自身が子供たちのニーズと社会的要求（環境教育・体験活動等）を照らし合わせ、自ら実現可能な活動を企画立案し運営する。
商店街での地域活性化活動の実践	地域交流イベント「楽・楽マルシェ」の開催（毎月第4土曜日・旧佐賀関町役場、毎回経営経済学科・建築学科学生5名程度が参加し、毎回50名程度の住民・こども達が参加）。	地域交流イベントとして、かなり地域の中に浸透してきており、今後、定期的の実施していくことで、参加者を増やし、商店街の中で地域のコミュニティ活性化の場を形成していく。今後商店街との連携を強化する。
NPOの経営支援	NPO 法人さがのせき・彩彩カフェの活動支援、経営分析を経営経済学科のゼミ活動として試行。	今年度も継続実施。他法人への拡充の検討。
学生地域活動拠点の開設、運営	H27/6/13に、関あじ関さば通り商店街・まちの駅「よらんせえ〜」内に開設。地域と意見交換するローカルデザイン会議や各種講習を実施。	佐賀関地区での各活動の中心的な場として使用する。また活動状況を定期的に情報発信することで、地域の中に根付くように活動を実施していく。当面は毎週土曜日の活動と不定期でのゼミ活動の実施を目指す。
NPOとの連携による体験型観光プロジェクト	「地域の再生と活性化に向けたリーダー育成講座」をNPO 法人さがのせき・彩彩カフェと連携して開講する。H27/6/13に第1回を開講し、月1回実施。	今後、さらに1回の講座・ワークショップを開催し、H28/3/19に、観光プロジェクトの実証実験を実施する。
地域支援活動の本格実施	地域資源を活かした地域活性化について、学生活動拠点を中心に地元関係者と協議。今後の取り組み、6次化について、実施内容を検討中。	本格実施に向けて、地域内での資源調査を本格化させる。上記項目とも連動。

課題	これまでの活動実績（本年度）	今後の展開
廃校利用を通じた地域コミュニティ活性化、ものづくり活動（木佐上地区）	H27年3月に閉校した木佐上小学校の跡地利用について地元の木佐上コミュニティと協議。今後の利用方針を決定した。また、「ロボットプロジェクト」において、地域を活かし、地域で必要なものづくりについて考えるフィールドワーク、ワークショップを10月末～11月に実施。地域住民との意見交換の場をつくり、意見を集約し、大分市へ跡地利用の提案を行った。	地域住民と共同して、活動を本格化させる。
体験型 自由研究教室の実施（佐賀関地区を含めた大分市東部の小学生を主な対象）	小学生を対象に体験型の自由研究教室を本学学生が中心となって実施する。これまでに内容の検討をおこない、第1・2回（テーマ「みんなが快適に生活していくために大切なことは何だろう？」）をH27/7/26に本学で実施。	今後、佐賀関地区内の小学校と連携をしての実施を検討していく。
小学生同士や保護者同士の交流促進	経営経済学科福祉マネジメントコース・スポーツビジネスコースが連携して、こうざき小学校にて、本学の教育カリキュラムを活かした体験型の交流教室を行う。	12/20に実施予定。
総合型地域スポーツクラブの支援活動の試行（大在地区）	総合型地域スポーツクラブ（OZAI 元気クラブ）と連携して、「チャレンジ・ザ・ゲーム」大会（年5回）、「かけっこ教室」（年1回）、「ウォーキング大会」（年1回）を計画し、実施中。	今後も実施し、「チャレンジ・ザ・ゲーム普及審判員」資格の取得も目指し、普及に勤めていく。
アクアソーシャルフェスの共催による海岸環境保全	大分合同新聞社と共催し、磯崎海岸のビーチクリーニングを実施（6/27）。昨年設置した防砂垣の補修を行い、ウミガメが産卵・ふ化しやすい環境を整備。その後、ウミガメの生態や環境保全についての講義を実施。	若者目線での持続的な環境保全活動を実施。
地域の国際化	7/18に佐賀関公民館にて韓国料理教室を実施。本学留学生、日本人学生、地域住民の交流の場として一緒になって韓国料理を料理し、国際交流を深めた。	中国料理教室等にも発展しており、今後も継続的な開催を検討する。
地域への情報発信	今年度の事業成果を地域に報告し、意見交換する成果発表会を実施する。	2/27（土）午後に佐賀関公民館で実施予定。各取り組みを学生・教員から発表する。

○豊後大野市

主な課題と取り組み

- 集落におけるコミュニティ維持活動
- 1次体験活動（林業・林業）
- 地域でのサービスラーニング体験活動
- エコパークに関連し観光資源発掘活動
- 地域における介護予防活動
- 徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発
- 地域のお祭りイベント等の存続支援

課題	これまでの活動実績（本年度）	今後の展開
1次体験活動（農林業）	大野町土師地区（ふるさと体験村等）で建築学科科目「プロジェクト1」実習授業にて1次体験活動（H27/5/30、H27.8/4-5、10/10）の実施。	集落におけるコミュニティ維持活動の継続実施。
小規模集落支援	H27/8/27～29に実習授業「環境・地域創造演習」で地域を維持するための提案を行うフィールドワーク及び地域への提案を行った。その他、建築学科ゼミ活動として、ふるさと体験村の運営協力を行った（河川プール改修、開村式の運営協力（7/19））。	今後は「建設マネジメント演習及び実習」において、「ふるさと体験村」のケビン関連施設の改修を学生対で行う。
1次体験活動（農業・林業）	犬飼町戸上地区で1次体験活動の継続実施	今後も継続する。
地域のお祭りイベント等の存続支援	どんこ釣り大会（H27/5/5）に運営スタッフとして10名参加	大会実行委員会、地域住民との連携を図り、企画・立案段階からの参画を検討していく。
地域でのサービスラーニング体験活動	里の旅公社と経営経済学部「サービスラーニング」体験活動を実施。H27/8/24～26に、清川町ロジキよかわにて里の旅公社と連携して実施。	今後も継続発展させ、ニュービジネスの検討に向けた地域資源の体験・魅力発見。
集落におけるコミュニティ維持活動（福祉支援活動）	豊後大野市高齢者福祉課との調整を行い、活動拠点を千歳に決定して実施中。竹田市との連携も予定。	課題解決型学修による集落コミュニティ活性化活動
小学生の地域仕事発見	小学生の職業体験イベント「お仕事発見ランド」を本学県央空港キャンパスで実施（7/4）。本学学科に関係する仕事や豊後大野市内の企業、金融機関に応援を依頼し、地元の職業体験も実施した。約80名が参加。	今後も内容を精査しながら、各地での事業実施を検討する。
地域への情報発信	今年度の事業成果を地域に報告し、意見交換する成果発表会を実施する。	2/13（土）午後に豊後大野市役所内で実施予定。各取り組みを学生・教員から発表する。

H27年度 大学COC事業 地域志向プロジェクト研究 採択テーマ一覧

平成27年5月12日～6月1日の期間で大学COC事業「平成27年度 地域志向プロジェクト研究」の公募を行ったところ7件の応募があった。

学内外の審査委員10名による書面審査の後、選定委員会にて厳正なる審査を行い、下記の4件の採択を学長が決定した。

No	代表者 学科	代表者 氏名	参画者氏名(学科)	申請分野	対象自治体名	プロジェクト 研究テーマ名	交付金額 (千円)
1	機械電気工学科	川崎 敏之	・小幡 章(航空宇宙工学科) ・池畑 義人(建築学科) ・坂井 美穂(情報メディア学科)	⑦地域ブランドの発掘による交流 人口の増加・産業の活性(6次 化)	① 大分県	大分県農業のブランド化と関連産業活性化を目的とした自然エネルギー利用型プラズマ農業に関する研究開発	500
2	情報メディア学科	福島 学	・坪倉 篤志(情報メディア学科) ・濱田 大助(情報メディア学科) ・市田 秀樹(大学COC事業担当)	①小規模・高齢化が深刻な集落・ 地域コミュニティの維持・活性	② 大分市	要介護者のコミュニケーション支援システムの開発 ー 共通プラットフォームによる効率良いICT技術の利活用ー	496
3	経営経済学科	坂口 昌宏	・鍋田 耕作(経営経済学科) ・河村 裕次(経営経済学科)	⑤健康増進・生活支援によるコ ミュニティの維持	③ 豊後大野市	地域住民を主体とした地域づくりによる介護予防に関する域学協働プロジェクト研究	500
4	情報メディア学科	鈴木 秀男	・吉森 聖貴(情報メディア学科) ・福島 学(情報メディア学科) ・稲川 直裕(機械電気工学科)	①小規模・高齢化が深刻な集落・ 地域コミュニティの維持・活性	③ 豊後大野市	徘徊老人の位置検出システムのための画像処理ソフトの開発	496
合計							1,992

平成27年度 日本文理大学 教育改革推進事業(教育改革予算) 採択テーマ一覧【COC分】

平成27年8月7日～8月26日の期間で標題の学内公募を行ったところ5件の応募があった(うち地域実践2件)。

学内審査員8名による書面審査の後、審査員会にて厳正なる審査を行い、4件(うち地域実践2件)の採択を学長が決定した。

No	所属	代表者 氏名	参画者氏名(所属)	申請カテゴリー	対象自治体名	事業計画テーマ名	交付金額 (千円)
1	経営経済学科	本村 裕之	・竹田 隆行(経営経済学科) ・堀 仁史(経営経済学科)	②大分県内の地域を対象とした 実践的な教育の取組	大分市	スポーツボランティア・幼年時教育を通じたコミュニケーション能力の醸成	151
2	経営経済学科	今西 衛	・本村 裕之(経営経済学科) ・工藤 順一(経営経済学科)	②大分県内の地域を対象とした 実践的な教育の取組	大分市	フィールド・スタディを中心とした学生主体の地域活性化カリキュラムの導入	233
合計							384

※その他のカテゴリーは、①教育内容・方法の改善に関する取組

人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」

2

01 地域を感じる
地域を訪れ、その状況を感じることで、地域の魅力や、課題点について自ら考えます。

10月28日

02 地域の声を聞く
地域の住人の方に、地域の文化・伝統・歴史や、現在の状況についての話を聞く事で、地域への理解を深めます。

10月24日

03 地域を知る
地域の状況を観察することで、新たな発見や疑問点を見つけるとして、地域の特徴と地域特有の課題を考えます。

11月7日

2015.11. 27 H27年度 第2回 COE連携推進会議

人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」

2

04 課題定義・課題設定
「ひと」と「もの」の関係性をきちんと捉え、様々な社会問題と関連する課題を発見する。

11月10～24日

05 プロトタイプング
課題解決のための「もの」について自由な発想をもって創造し、そのアイデアをカタチにする。

12月～

1月中旬に最終発表会

2015.11. 27 H27年度 第2回 COE連携推進会議

人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」

2

工学部 分野横断プロジェクト：『ロボットプロジェクト』

体験交流活動

知識の修得

1年次 2年次

ロボットプロジェクト
工学部内の分野横断的プロジェクト科目として、様々な課題を解決し、117名が、専門領域へと進路する。

課題解決にむけたものづくり

2015.11. 27 H27年度 第2回 COE連携推進会議

人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」

2

1. 批判的思考と問題解決能力
2. コラボレーションとリーダーシップ
3. 敏捷性と適応力
4. イニシアチブとアントレプレナーシップ
5. 情報へのアクセス力と分析力
6. コミュニケーション力
7. 好奇心と想像力

「つづみハイハイ」 トニーワグナー

2015.11. 27 H27年度 第2回 COE連携推進会議

人口減少社会を支えるための先進的な「ものづくり」

2

大分市木佐上地区との連携

旧木佐上小学校の利活用

- ・プロジェクト科目（ものづくり、etc...）
- ・地域志向教育研究の実践の場としての利用
- ・ICTを利用したSTEM教育の実践
- ・高齢者向けIT教室

2015.11. 27 H27年度 第2回 COE連携推進会議

フィールド・スタディを中心とした 学生主体の地域活性化カリキュラム

日本文理大学
経営経済学部経営経済学科
准教授 今西 衛
教授 本村 裕之
准教授 工藤 順一

カリキュラム概要

- 1 • 学生が大分中心商店街の現場に出て**魅力を発掘**する。
- 2 • 発掘した魅力を効果的に消費者に発信する方法を検討
- 3 • 商店街活性化のための施策の示唆

カリキュラム概要

まちづくりって何だろう？

- 街路をきれいにする？
- 高層ビルを建てる？



出典：大分市ホームページより

カリキュラムのねらい

政策提言のPDCAサイクル



調査と手法

- **将来のまちの動向を予測する手法は？**
 - 定量的な調査を実施する。



NBU 最近の出来事

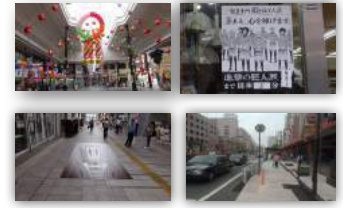
- 東九州自動車道の開通
 - 道路の整備
 - 広域からの観光客の誘客
- JRおおいたシティの開業
 - 新しい商業施設による都市の魅力の増加



出典: NEXCO西日本

NBU 継続的なイベントは疲弊する

- ★中央通り社会実験
- ★七夕まつり
- ★進撃の巨人展
- ★DC
- ★おおいたトイレナール 2015



- イベントの効果は?
- 費用対効果
- 継続性

↓
地域資産を活用し、静と動をミックスすることが重要



地域の人が**地域の資産**に気づいていない

NBU 佐賀関



佐賀県唐津市呼子町のように、飲食店が集積していない
16世紀から続くPPC佐賀関精錬所
世界最大クラスの粗鋼生産量を誇る
肥後藩(熊本県)の飛び地



地域の人が**地域の資産**に気づいた例

NBU 現在の豊後森機関庫



機関庫にSLを配置
JR九州との協調



カリキュラム概念図

NBU アプリによる情報提供

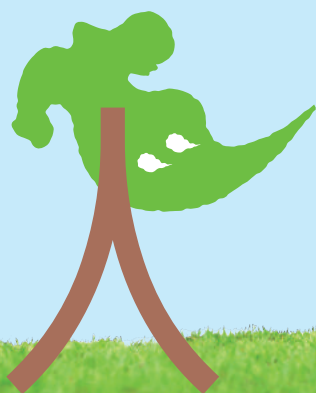


6. 平成 27 年度 大学 COC 事業メディア掲載一覧 図書リスト

メディア掲載一覧

新聞各社，テレビ局各社報道リスト
新聞記事抜粋

大学 COC 事業 図書リスト



【大学COC事業】新聞記事掲載リスト

No.	見出し	内容	新聞名	日付
1	看護科学大と文理大 地域連携の成果を報告	文部科学省「地(知)の拠点整備事業」採択校 大分県立看護科学大学・日本文理大学 共同記者会見	大分合同新聞	2015/4/29(水) 朝刊
2	大分・「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」採択2大学が事業内容報告	文部科学省「地(知)の拠点整備事業」採択校 大分県立看護科学大学・日本文理大学 共同記者会見	大分経済新聞	2015/4/30(木)
3	県立看護大と日本文理大 地方創生へ学生育成 文科省「地(知)の拠点整備事業」に採択	文部科学省「地(知)の拠点整備事業」採択校 大分県立看護科学大学・日本文理大学 共同記者会見	毎日新聞	2015/5/8(金)
4	大分の『つくりびと』に 地域の課題調査・解決へ 日本文理大 学生育成プロジェクト 特別入試入学の新1年生が受講	地域創生人育成プロジェクト「おおいたつくりびとプログラム」スタート	大分合同新聞	2015/5/8(金) 朝刊
5	若い感性が“刺激” 大野町土師地区 住民と日本文理大生が交流	豊後大野市大野町土師地区での建築学科学学生体験活動	大分合同新聞	2015/6/13(土)
6	佐賀関に学生活動拠点 地域の課題解決へ日本文理大	佐賀関まちの駅内のコミュニティスペースに学生の地域課題解決のための活動拠点設置	毎日新聞	2015/6/18(木)
7	ウミガメ帰っておいで! 松植樹や防砂垣作り 磯崎海岸で環境保全イベント	アクアソージャルフェス2015のイベント「帰っておいで! いきものたち!」	大分合同新聞	2015/6/30(火)
8	地域の課題に取り組む拠点 日本文理大 佐賀関・まちの駅に	佐賀関まちの駅内のコミュニティスペースに学生の地域課題解決のための活動拠点設置	大分合同新聞	2015/7/2(木)
9	企業を見て知って 文理大生が動画制作	社会参画実習1(企業課題挑戦型) 企業動画制作発表	大分合同新聞	2015/8/2(日)
10	住民待望の水車 豊後大野土師地区 文理大生らが製作、設置 地域課題解決に活用へ	豊後大野市大野町土師地区での建築学科学学生体験活動	大分合同新聞	2015/8/8(土)
11	文理大「快適生活」を考える 児童、学生と自由研究	小学生を対象とした夏休み体験型自由研究教室	大分合同新聞	2015/8/22(土)
12	モンゴル人学生と交流 香々地小踊りや太鼓演奏しむ	モンゴルプロジェクトの活動	大分合同新聞	2015/8/22(土)
13	「祖母嶺ユネスコエコパーク」へ 25万ヘクタール登録申請 大分・宮崎推進協議会が決定	「祖母嶺ユネスコエコパーク」への登録申請を大分・宮崎推進協議会が決定	大分合同新聞	2015/8/22(土)
14	ものづくりの楽しさ学ぶ 佐賀関半島“3D”で形成	佐賀関・関崎海星館での海の学び教室における、3Dプリンターで作成した佐賀関半島の記事	大分合同新聞	2015/8/27(木) 朝刊
15	“下刈り”で山を美しく 佐伯市で日本文理大生	佐伯市直川の山中を四季の森プロジェクトメンバーが下刈り	大分合同新聞	2015/9/3(木) 朝刊
16	モンゴル学生と相互の文化体験 日本文理大がキャンプ	モンゴルプロジェクトの活動	大分合同新聞	2015/9/15(火)
17	海外目線で新発想 豊後大野 道の駅活性化策練る 日本文理大の留学生4人	道の駅・原尻の海で留学生が活性化策を練る実習を実施	大分合同新聞	2015/9/29(火) 朝刊
18	樹木の再生へ 杉の採穂作業 日本文理大生が枚珠で	四季の森プロジェクトの活動	大分合同新聞	2015/10/6(火)
19	地方創生事業を推進へ 4大学と県が協定	地方創生推進事業(COC+)	大分合同新聞	2015/10/29(木) 夕刊
20	県内就職率10ポイント増を 地域志向の学生育成へ	地方創生推進事業(COC+)	毎日新聞	2015/11/3(火)
21	サンタずらり200人 大分・中心商店街	サンタサンタサンタ2015	毎日新聞	2015/12/13(日)
22	サンタ!サンタ!サンタ!街に笑顔プレゼント	サンタサンタサンタ2015	大分合同新聞	2015/12/14(月) 夕刊
23	若者目線で求人映像 日本文理大2年生授業 県内企業3社PR	社会参画実習2(企業挑戦型)	毎日新聞	2015/1/29(金)
24	4大学、地方創生推進へ 自治体などと協定	大分大、日本文理大、県立看護科学大、別府大の4大学が大学COC+事業にて協定	大分合同新聞	2016/2/6(土) 朝刊
25	少子高齢化など研究成果を発表	NBUと県立看護科学大学との合同研究発表会(活動報告会)を実施	大分合同新聞	2016/2/12(金) 朝刊
26	豊後大野住民と「地域創生」文理大が成果発表会	豊後大野市にて大学COC事業の成果発表会を開催	大分合同新聞	2016/2/23(火) 朝刊
27	祖母嶺山系地域エコパーク 2県の申請書を決定 ユネスコ国内委に提出へ	祖母嶺山系地域のユネスコエコパーク登録に向けての取り組み。大分県と宮崎県の申請書を正式決定	毎日新聞	2016/2/23(火)
28	ウッドデッキを再設計 日本文理大生が建築実習	建築学科 建築マネジメント演習・実習	大分合同新聞	2016/3/3(木) 朝刊
29	「子育て」通じ人生設計考える 大分市日本文理大生が体験交流会	社会福祉援助技術演習1(大分県と連携)	大分合同新聞	2016/3/7(月)
30	被災地の教訓忘れない	大学生啓発方法を検討(看護大と共同)	読売新聞	2016/3/12(土)

【大学COC事業】メディア放映リスト

No.	見出し	番組名(区分)	放送局	放送日
1	消防応援隊結成式	ゆーわくワイド & News(ニュース)	TOS	2015/4/23(木) 18:30~
2	豊後大野市大野町土師地区における地域体験交流活動研修	スーパーJチャンネル(大分版)(ニュース)	OAB	2015/5/30(土) 17:50~
3	祖母嶺ユネスコエコパークの取り組み	ぼっとはーとOITA(番組)	TOS	2015/7/18(土) 11:30~11:45
4	自然の秘密が生んだチカラ! 大分生まれのトンボ発電(マイクロ・エコ風車)	九州・沖縄共同制作番組「世界一の九州が始まる!」(番組)	OBS	2015/11/8(日) 10:15~10:30
5	番組内で、航空・小幡教授が研究と開発を進めている“トンボ型超小型飛翔ロボット”と“マイクロ・エコ風車”を紹介	ファープルもびっくり!そくそく発見 夢のムシ技術(番組)	NHK総合	2016/1/6(水) 20:00~20:43
6	大学COC事業 NBU×看護科学大学 合同研究発表会	OBSイブニングニュース(ニュース)	OBS	2016/2/11(木) 18:50~
7	大学COC事業 NBU×看護科学大学 合同研究発表会	ゆーわくワイド & News(ニュース)	TOS	2016/2/11(木) 18:55~
8	番組内で、学生活動「四季の森プロジェクト」を紹介	豊かな大分!発見!親子で学ぼう!環境保全と地域づくり(番組)	OAB	2016/3/5(土) 15:00~15:30

文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に採択された大分市廻栖野(大分市廻栖野)の村嶋幸代学長(左)と、日本文理大学の平居孝之学長(右)が記者会見を開いた。

看護科学大と文理大 地域連携の成果を報告



大学での取り組みを報告する県立看護科学大の村嶋幸代学長(左)と、日本文理大学の平居孝之学長(右)が28日、大分駅ビル「JRおおいたシティ」で記者会見を開いた。

代学長と、日本文理大学(同市一木)の平居孝之学長が28日、市内の大分駅ビル「JRおおいたシティ」で共同記者会見し、大学の取り組みを報告した。

看護大は2013年度、文理大は14年度に、いずれも5年間の事業採択を受け、地域と連携して教育や研究を進めている。活動内容を広く県民に知ってもらい、大分を担う人材育成を進めようという会見を開いた。

看護大の村嶋学長は、全学生がグループをつくって地域の高齢者宅を訪問する

実習を紹介。「高齢者の日常を知り、何が必要かを学生が考えるようになった」となど成果を報告した。

文理大の平居学長は「地域創生人材」を育成するためのカリキュラム変更など、大学改革について説明。大学が地域で役立つという実績を残したい」と述べた。

大分・「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」採択2 大学が事業内容報告

2015年04月30日

ツイート おすすめ シェア 4 G+ 0



記者会見で各事業の内容を発表

写真を拡大



地図を拡大

大分で文部科学省事業の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」の採択を受けている県立看護科学大学(大分市廻栖野2944)と日本文理大学(一木1727)が4月28日、大分駅ビル「JRおおいたシティ」(大分市要町1)で共同記者会見を開いた。

事業内容については発表する両校の学長

「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」は、大学が地方公共団体や企業等と協働して、「学生にとって魅力ある就職先」を創出し、さらにその「地域が求める人材を養成する」ために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取組を支援する事業。地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的として2013年度から開始された。事業期間は5年間。

県立看護科学大学は2013年度に採択。「看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり」をテーマに予防的家庭訪問実習を創設、1~4年次の異なる学年をグルーピングした「チューター制度」を導入、各グループが4年間同じ高齢者を担当し、対象者の生活環境を長期的な視点で支え学習し、地元や地域に根差した看護師を目指す。

同大学の村嶋幸代学長は「学生自身が地域の中での『高齢者の生活・日常』を知ることで、退院後の生活がイメージできるようになり、一番大切な知識を身につけることができた」と話した。

2014年度に採択された日本文理大学は「豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成」をテーマに、地方創生に特化した科目を増設。地域へ学生を派遣、実際に地域コミュニティと共同で作業・支援活動することにより、主体的に地域の課題やニーズを考え、取り組むことができる人材育成を目指し進める。

同大学の平居孝之学長は「学生と地域の方々の一体感も出てきた。学生自身活動内容を『評価してほしい、広めていこう』という意識が高まってきた。最終的には地域を重視した職業感を持った学生を継続的に輩出し、地域貢献できるように大学をあげて取り組む」と意気込んだ。

文理大学は今後の主要な取り組みとして大分市佐賀間地区での学生生活拠点や豊後大野市での実践育成拠点の開設などを予定している。

県立看護大と日本文理大 地方創生へ学生育成

文科省「地(知)の拠点整備事業」に採択

県立看護科学大(大分市廻栖野)村嶋幸代学長と日本文理大(同市一木)平居孝之学長が文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に採択され、地方創生を目指す学生の育成に力を入れていることをアピールした。



それぞれの大学の取り組みを発表する(左から)村嶋、平居両学長

看護科学大の村嶋学長は4月28日の共同記者会見で、学生が高齢者宅を訪れて健康状態や生活実態を把握し、自宅で暮らし続けられるように支える家庭訪問実習に取り組んでいることを報告した。

原則1~4年の4人でチームを組み、高齢者宅を年3、4回、4年間継続して訪問する。2年間の試行を経て、この4月本格スタートした。全学生必修の実習としており、試行に参加した学生から「健康な高齢者に予防的に何ができるか考える機会があった」という感想があったという。

「地(知)の拠点整備事業」は、地域活性化の拠点となる大学を支援する文科省の事業。全国で7校、県内ではこの2校が採択されている。

【池内敏秀】

日本文理大 学生育成プロジェクト

大分市の日本文理大学で、地域創生を担う学生育成プロジェクト「おおいた、つくりびとプログラム」が本年度スタートした。昨年秋季に導入した「地域創生入試特別入試」で入学した新1年生150人が受講する。

特別入試入学の新1年生が受講



これまでに取り組んできた「地域創生人材」の育成は昨年度、文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に採択された。カリキュラムの一つである同プログラムは、豊かな自然と歴史文化に恵まれた県全体をキャンパスとみなし、新たな大分県をつくる人材の育成を目的としている。

地域の課題調査・解決へ

その後、学生たちは新聞記事から各地の地域情報を収集、自分たちの持っている知識と照らし合わせ、まとめていくワークショップに取り組みました。



宮崎県出身の崎山実名さん(18)は、「もともとボランティアに興味があり、地域で活動できると聞いて特別入試を受けた。地域の子とも高齢者と共に新たな大分県をつくってきたい。子どもたちを将来の『つくりびと』にするのが目標」と意気込みを語った。

「いきものたち」が住みやすいように竹で防砂垣を作る参加者＝大分市佐賀間馬場地区磯崎海岸



ウミガメ帰っておいで!

ウミガメが産卵で上陸することで知られる大分市馬場の磯崎海岸で27日、環境保全イベント「帰っておいで、いきものたち」があった。県内の大学生や地元住民ら約190人が参加。流木や捨てられた花火などのゴミを拾った。明るい光に引き寄せられる習性があるウミガメが迷わないように、市街地の照明を遮る松を植樹。里山整備で出た竹を再利用して、砂の吹き飛びを防止する竹垣も作った。

磯崎海岸で環境保全イベント

イベントはトヨタ自動車などが全国で協賛している環境保護活動「フクアソシエーション」が主催。2015年の一環として、大分合同新聞社・日本文理大学が主催した。

松植樹や防砂垣作り

大分の「つくりびと」

若い感性が「刺激」



草刈り機を使って除草する学生＝豊後大分市大野町中土師

日本文理大学(大分市)の1年生32人が豊後大分市大野町の土師地区を訪れ、草刈りやスキの枝打ちなどを体験して地元住民と交流した。同地区では4年前から年3回、同大学の学生が農作業などを体験している。工学部建築学科の学生が参加。6班に分かれ、地区内にあるキャンパス「ふるさと体験村」周辺の除草や、柴北川河川プールにたまった

大野町 土師地区 住民と日本文理大生が交流

た土の除去作業などを行った。作業服に身を包んで慣れない作業に汗を流した学生たちは、住民手作りのおにぎりや豚汁の昼食を堪能。班ごとに感想を発表して交流を深めた。受け入れを行っている住民組織「土師振興協議会」は昨年、市からふるさと体験村の施設を譲り受けて運営している。田尻高二事務局長(66)＝農業＝は「高齢化が進んでいる地区では、若い学生の感性が刺激になる。キャンパス運営へのアドバイスなどの協力も期待している」と話した。

佐賀関に学生活動拠点

地域の課題解決へ日本文理大

住民と交流 観光プラン開発も



開所式で地元住民のあいさつを聞く日本文理大生

日本文理大学 佐賀関地域学生活動拠点 開所式

日本文理大は13日、大分市佐賀関のまちの駅「よらんせう」内のコミュニティスペースに、学生が地域の課題解決に取り組むための活動拠点を開設した。同大が学外に学生の活動拠点を設置するのは初めて。学生と地域住民との意見交換や、商店街やNPOと連携した交流市場の開催、観光プログラムの開発などを実施する。同大は2014年7月から、定期的に地元商店街やNPOと連携し、地元産の食材の販売やカフェ、運動会を実施するなど、学生による活動を行ってきた。拠点開設を機に活動を本格化させる予定だ。同大工学部の吉村充功教授は「旧佐賀間町は人口が1万人を割っており、高齢化率も高い。今後は学生たちが各地域で同様の課題に直面する。現場で勉強できることは貴重な」と指摘する。

地域活動に参加する工学部3年の工藤走さん(20)は「地域の人たちと交流しながら佐賀関の魅力を知り、人を呼び込めるような観光プランを作りたい」と話している。13日には開所式が開かれた。佐賀関地区社会福祉協議会の後藤淳夫会長は「地元人間はまちづくりを『喜の良かった時』と比べて考えてしまうが、学生には新しい発想で参加立案することを目指す。人材育成のための『リーダー 育成講座』を来年3月まで地元NPOと共同開催する。」と話した。(佐野格)

企業を見て知って

文理大生が動画制作

日本文理大学の学生が県内の中小企業のリクルートビデオを制作した。若者に地元企業の魅力を伝え雇用問題を解消することが目的。企業課題挑戦型プロジェクトを受講している2年生9人が3チームに分かれ地元企業の動画を制作。同大学で成果発表会があった。

県中小企業家同友会や地元企業の社長ら約20人が参加。学生らは動画のコンセプトやターゲット、工夫した点などを発表。完成した動画を披露した。工学部情報メディア学科の榎原百香さん(20)「顔写真」は「動画制作を通して、地元企業を知るとともに、チームワークの大切さも学んだ」と感想を述べた。

同友会の岩尾達也前代表理事は「このプロジェクトによって、若者が地元中小企業を知るきっかけづくりができた。これを機に企業と若者がつながるよりよいシステムを構築できれば」と話していた。



リクルートビデオを披露する学生

豊後大野市大野町の土師地区で地元住民とコミュニティ維持活動に取り組んでいる、日本文理大学(大分市)の工学部建築学科の

住民待望の水車

文理大生らが製作、設置

工学部建築学科は過疎は昨年キャンプ場で組み立てに直面する同地区の活性化で考え、土師地区(豊後大野市)と2011年から交流。現状と課題を学ぶため年一回、1土師地区の清流を引く水車を学んだ。今年、1土師地区の清流を引く水車を学んだ。今年、1土師地区の清流を引く水車を学んだ。

豊後大野市大野町の土師地区で地元住民とコミュニティ維持活動に取り組んでいる、日本文理大学(大分市)の工学部建築学科の



土師地区(右)から河川フルルを引く水路に水車を設置する学生たち。豊後大野市大野町土師のふるさと体験村

「地域課題解決に活用へ」

民の声を聞いた当時の4年... 豊後大野市大野町の土師地区で地元住民とコミュニティ維持活動に取り組んでいる、日本文理大学(大分市)の工学部建築学科の

モンゴル人学生と交流



香々地小踊りや太鼓楽しむ

豊後高田市の香々地小学校(光岡孝樹校長、73人)で21日、児童とモンゴル人学生の文化交流会があった。今年、モンゴルから学生2人を招いた。全校児童に学生2人がモンゴルに伝わる子どもの踊り「ドール」を紹介。野原

香々地小の児童と会談の演奏を体験するモンゴル人学生。21日、豊後高田市の香々地小学校

地域の課題に取り組む拠点

日本文理大学は、大分市佐賀区に期待を込めた。開所と同関のまちの駅「よらんせ」内に、時に地元NPOと協同で取り組むコミュニティスペースに、む「地域の再生と活性化」に学生が地域の課題解決に取り組みたい。第1回は「佐賀関半島の歴史・文化」と題し、佐賀関地域の学生と地域住民の意見交換会を開催した。

日本文理解大 佐賀関まちの駅内に、地域の課題に取り組む拠点



地域の課題に取り組む拠点

「快適生活」考える

大分市の日本文理大学で、小学生を対象とした「体験型自由研究教室」があった。型自由研究教室があった。型自由研究教室があった。型自由研究教室があった。

「快適生活」考える 児童、学生と自由研究

佐賀関半島「3D」で形成



3Dプリンターで作った佐賀関半島の模型について説明する福川直裕准教授＝佐賀関の関崎海星館

ものづくりの楽しさ学ぶ

大分市佐賀関の関崎海星館（川田政昭館長）で海の学び教室「3Dでみる佐賀関半島」があった。「子どもたちにもつくりの魅力を伝えたい」と開催。来館者は3Dプリンターが佐賀関のリアス式海岸を形成していく様子を見入っていた。

稲川直裕准教授がプリンターのしくみや出来上がった模型について訪れた子どもたちに説明し、「既製品ではなく、自分たちでものを作る楽しさを学んでもほしい。失敗を恐れなくて話した。」
模型上の同館の位置を指さしながら「自分が今いる場所が分かった。プリンターで立体的な模型が作れるなんてすごい」と稲川直裕准教授（91）が話した。



顔写真・子どもたちは、ゆっくりと時間をかけてながらも着実に佐賀関半島を再現していくプリンターを興味深そうに見つめていた。

同館の「20周年記念企画展・豊の海を知るの一環」日本文理大学工学部稲川研究室などが作った3Dプリンターで、同大学の学生らが佐賀関半島と高島の模型を製作。来館者は縮尺2万分の1の半島が少しずつ形作られる様子を見学した。

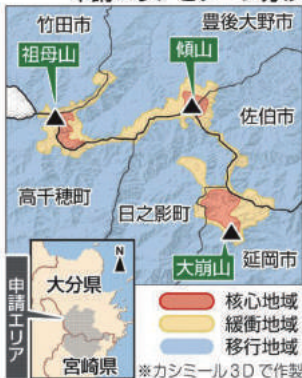
「祖母傾ユネスコエコパーク」へ 25万粉登録申請

祖母傾山系のユネスコエコパーク（生物圏保存地域）登録を目指す大分・宮崎両県の推進協議会は21日、日本ユネスコ国内委員会に提出する申請書概要の内容を決定した。両県の6市町にまたがる約25万粉を領域とし、祖母傾、大崩の3山の山頂周辺を自然保護の「核心地域」とする。27日に提出し、国内候補地としての名乗りを上げる。

宮崎県延岡市役所で総会。前審査を経て来年2月に正国内審査を通れば来年9月を聞き、決定した。今後、正式な申請書案を提出する。国内委員会がユネスコ本部に推薦。2017年5月7月ごろに開かれる理事会での登録決定を目指す。

大分・宮崎推進協決定

「祖母傾ユネスコエコパーク」の申請エリアとゾーン分け



名称は「祖母傾ユネスコエコパーク」で申請する。対象範囲は大分県側が佐伯、竹田市、豊後大野市、祖母山、傾山、佐伯市、高千穂町、日之影町、大崩山、延岡市、宮崎県。ユネスコ本部に推薦。2017年5月7月ごろに開かれる理事会での登録決定を目指す。

側を人が生活を営む移行地帯とする。総会後、協議会の共同代表を務める杉浦嘉雄日本文理大学教授と岩本俊孝宮崎大学副学長が記者会見。この地域には神楽など共通の文化があり、自然への畏敬や歴史を含めて財産だと考えている。九州、四国、中国地方の中では最大の自然林がまとまった所。両県と6市町が一緒に活動できるのも成果だ。と意義を話した。申請書は年内に學術調査

“下刈り”で山を美しく

佐伯市で日本文理大生



下刈りをした日本文理大の学生ら＝佐伯市直川

日本文理大学の学生が佐伯市直川の山中で下刈りを体験した。

同大では専門教育に入る前の1、2年生を対象に里山保全などを行う「四季の森プロジェクト」を発足させ、これまで苗木の生産や植樹などを体験している。



顔写真＝13月に植えた苗木が大きくなっているのに驚いた。これからも森林に関する事に積極的に関わっていきたいと話した。

同大では専門教育に入る前の1、2年生を対象に里山保全などを行う「四季の森プロジェクト」を発足させ、これまで苗木の生産や植樹などを体験している。作業には1、2年生9人が参加。県職員や佐伯広域森林組合職員に指導してもらい、ことし3月に同プロジェクトでスギの苗木を植えた山に入り、鎌を使って雑草を刈った。雑草に埋もれたスギの苗木まで刈ってしまつこともあったが、手際よく刈っていた。

モンゴル学生と相互の文化体験

日本文理大がキャンパ



指導を受けながらお茶をたてるオトコバヤさん（中央）とトヤさん（右）

同大であった茶道体験では、茶道部員が茶を立てる様子を見学。日本人学生が事前に用意したモンゴル語で書かれた資料を基に、手順や道具の説明を受けた。その後、抹茶やお菓子を味わった。バーターソガト・オトコバヤさん（19）とガンツマ・トヤさん（22）は「お茶をたてるのは難しかった。味は苦いけどおいしい」と笑顔。同キ

大分市の日本文理大がキャンパ生10人が参加。共同生活や文化交流を通し、相互理解を深めた。海外の学生との交流を目的とした「モンゴルプロジェクト」の日本での活動の一環として、別府散策、キャンプを開いた。モンゴルから来た学生は、折紙や竹馬などの日本の遊びやモンゴル料理づくり、別府散策、キャンプを開いた。モンゴルから来た学生は、折紙や竹馬などの日本の遊びやモンゴル料理づくり、別府散策、キャンプを開いた。モンゴルから来た学生は、折紙や竹馬などの日本の遊びやモンゴル料理づくり、別府散策、キャンプを開いた。

キャンパのリーダーの大戸隼輔さん20歳。経営経済学科3年。1は「言葉の壁を越える仲になった。今後も日本とモンゴルのつながりを保ちたい」と話している。

海外目線で新発想

道の駅活性化策練る

豊後大野



韓国語に翻訳した道の駅のパンフレット原稿や案内表示を持つ（前列左から）シンさん、木さん（後列左から）バクさん、ハンさん。右上の原尻の滝の日本語解説もその下に韓国語解説を追加

豊後大野市緒方町の道の駅原尻の滝（吉野裕一 駅長）で、日本文理大学（大分市）の韓国語留学生4人が2週間、活性化策を練る実習に取り組んだ。豊後大野市の自然や観光に興味を持って参加した若者たちは、日本独特の「道の駅文化」を住み込みで体感した。

参加したのは経営経済学は「大学で学んだ『大分学』」能だ。

部3年のハン・セソクさんで同市の自然への取り組み（26）とホン・エンさん（22）、みに興味を持った、新入、連絡会と同大学の協定に基づき、工学部のシン・ドンヘンさん、生のバクさんは「早い時づくもの。道の駅からまち（21）3年」とバク・ジョ、期からインターンシップづくりを考える人材の育成。シンさん（18）1年。ハで経験を積もう」と先生に「つなげよう」と全国で実施。シンさんと木さんは「観光に勧められた」と動機はさまざま。いずれも日本語は堪能の視点で刺激を受けた。

韓国語パンフや表示作製

（吉野駅長と「原尻の滝」が手を挙げた。学生たちは売店やレストランでのサービス、市内の道の駅や大分市の物産出荷先の見学などを体験。その中で、ほとんど無かった韓国語の案内表示に注目し、同駅のパンフレットや原尻の滝などの説明を翻訳。また、観光客の目線で店内を見つめ、スタンプコーナーの表示を分かりやすくしたり、先に設置された3Dアートの撮影方法を自らモデルになって提示するなど、いろんな改善を施した。実習中は近くの空き家には一畳がある伝統的な家に住めたのは貴重な体験だったと笑顔。「期間中にあった小松明火祭りの時は忙しくて大変だったけど、写真より美しい光景に感動した。」出荷などで訪れる地元の人たちとの交流が道の駅の原動力だと分かった」と実習の成果に満足していた。

吉野駅長（48）は「積極的な人ばかりで期待以上の効果。今後も続けたい」と話した。（注号）

樹木の再生へ 杉の採穂作業

日本文理大生が珍珠で

珍珠町山下の町有林で日本文理大学（大分市）の学生が杉の採穂作業をした。大分の里山再生と保全を目的とした同大の「四季の森プロジェクト」の一環。2年生4人が参加した。

山林業を体験し、将来設計の参考や働く意義を感じてもらおうと2013年から実施しており町内では初めて。今回は樹木を再生させる仕組みを学ぶのが目的で、県や珍珠郡森林組合などの協力を得ながら杉の穂先を約40センチ単位で摘み取り、その後、切り口を整えて苗木を作る下準備をした。



杉の穂先を摘み取る学生

工学部2年の吉高大亮さん（20）は「林業が盛んな地域で育ったので活動に興味を持った。山林業界で発生している人手不足の問題を解決できる機械の製作など、自分が得意とする

る目線から改善できることがないか検討していきたい」と話していた。

地方創生事業を推進へ

4大学と県が協定

文部科学省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COCON）」に別府大学（平居孝之学長）、県庁で締結式があり、各学長と広瀬勝貞知事が協定書に署名。北野学長は「県内に協定を締結した。学生の県内就職の促進や産業振興、雇用創出、地方創生を担う人材育成のために連携・協働するという内容。」と述べた。



協定を締結した（左から）日本文理、大分、県立看護科学、別府の各大学長と広瀬勝貞知事（中央）＝29日午前、県庁

広瀬知事は「年間2500人程度が県外に転出しているが、このうち23000人の世代をどう大分につなぎ留めるかが課題。全面的に協力したい」と応じた。フランでは5年後に4大で「学生の県内企業への就職率を43%から53%に増やす」ことなどを掲げている。さらに協定には、県内の企業や自治体、経済団体ら事業協働機関で、5年後には33人以上の新規雇用を創出するという目標も盛り込まれている。

県内就職率10ポイント増を

19年度 達成目標 地域志向の学生育成へ

県内4大学と県は、卒業生の県内定着に向け、教育プログラムや企業説明、雇用創出などさまざまな場面で連携する協定を締結した。地域志向の学生を育てて就職を機にした県外への転出を減らし、地方創生につなげる狙い。同時に、2014年度に43%だった県内就職率を19年度に10ポイント増の53%とする数値目標を掲げた。

4大学と県が協定

4大学は▽大分大▽県立看護科学大▽日本文理解大▽別府大▽日本文理解大▽別府大。各学長と広瀬勝貞知事が10月29日、協定書に調印した。協定は大学、自治体、企業がそれぞれが求める人材を育成。地域産業の振興に取り組む学生に魅力のある就職先を作るとしている。

大学別の卒業生の県内就職率(14年度)は▽大分大42%▽県立看護科学大40%▽日本文

域に入って学ぶフィールドワークや、仕事を体験するインターンシップも促す。北野正剛・大分大学長は「企業や自治体と協力し、オール大分で県内就職の促進に取り組みたい」と話した。



記念撮影する(左から)平居孝之・日本文理大、北野・大分大、(1人おいて)村嶋幸代・県立看護科学大、豊田寛三・別府大の各学長。中央は広瀬知事

サンタずらり200人

大分・中心商店街

大分市の中心商店街では12日、日本文理大(大分市)の学生と、よいこのくに保育園(同)の園児ら計200人ほどがサンタクロースに扮して歩き、街はクリスマススムードに包まれた。同大付属高の吹奏楽部が演奏する中、園児と学生が手をつないでパレード。園児の親らが写真に収めていた。ガレリア竹町ドーム広場では園児たちが「赤鼻のトナカイを合唱。ドーム内に元気な声が響いた。」(佐野格)



サンタクロースに扮した園児や大学生ら

サンタ！サンタ！サンタ！

街に笑顔プレゼント

サンタの衣装を身にまとった学生ら約200人がパレードするイベント「サンタ！サンタ！サンタ！」が



サンタやトナカイの仮装で商店街をパレードする日本文理大学の学生たち=12日午後、大分市のセントボルタ中央町、撮影・鎌手美和

015」が12日、大分市中心部であった。日本文理大学の学生が市中心部にぎわいを与えようと、毎年実施している。今年で6回目。

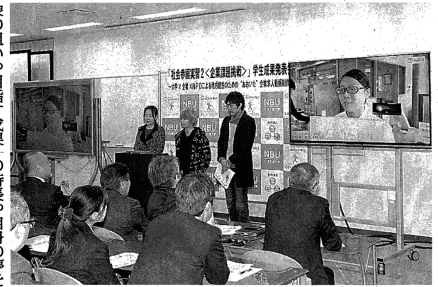
同大学の学生と、同大付属高校の生徒、よいこのくに保育園の園児らが参加した。吹奏楽の演奏に合わせ、市中心部を行進。通行人は「すごい」と歓声を上げたり、写真を撮るなどした。パレードの後はガレリア竹町ドーム広場で、園児によるクリスマスソングの合唱や、ゲームイベントがあった。

臼杵市から買い物に来ていた竹尾洋子さん(47)は「こんなイベントがあるなんて知らなかった。サンタの衣装がかわいいです」と笑顔。学生代表の須賀流星さん(22)は「名物イベントになればうれしい」と話した。

若者目線で求人映像

日本文理大 2年生授業 県内企業3社PR

日本文理大(大分市)の学生が授業の中で県内企業3社の求人映像を製作し、この3社をはじめ地元企業の関係者らにお披露目された。若者の目線を生かした斬新な映像に、3社は「会社説明会に使わせてもらいたい」と高く評価。地域創生に向けて大学と企業が協力する取り組みの一つで、今後も継続する。



学生たち(中央)が作った求人映像を見る県内の企業関係者ら

映像製作は、9年生の「社会実習Ⅱ」という半年間の授業で行った。留学生を含む学生9人が3人ずつ3チームに分かれ、オンライン(フアンミーティング)や光通線(インターネット)で遠隔で制作。2、3分を約4カ月かけて作った。

像の狙いや目指す成果を事前にまとめた後、企業の人事担当者らと意見交換を重ね、社長や若手社員を取材に撮影した。

21日の発表会で3チームはそれぞれ製作の経緯などを説明し、作品を上映し、若手社員が次々登場して会社

少子高齢化など 研究成果を発表

文理大と看護科学大 文部科学省の「地(知)

文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に採択されている大分市の日本文理大学と県立看護科学大学は11日、合同の研究発表会を同市金池南のホルトホール大分で開いた。

両大学は少子高齢化やコミュニティの衰退などをテーマに地域と連携した教

育や研究を進めており、地方の活力となる人材育成で協力している。日本文理大の平居孝之学長は開会のあいさつで「地域の創生を目指すことで大学に活力が生まれ、地域に貢献できるといいます。この思いが大きくなっています」と話した。



約300人が参加した研究発表会

告。「大分の未来をまもり、つくる人材育成の可能性」と題したパネルディスカッションもあった。

4大学、地方創生推進へ 自治体などと協定

大分大学と県内3大学は5日、大分、別府、由布の3市、大分労働局と若者の県内就職の推進に取り組むことなどを盛り込んだ協定を結んだ。

3大学は県立看護科学、

日本文理、別府。大分大学は昨年、文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COCC10)」に「地域と企業の心に響く大分豊じよう化プラン」を申請し、採択され

た。各大学と自治体などが連携し、学生の県内就職の促進や産業振興、雇用創出、地方創生を担う人材育成といった同プランに取り組む。

事業の期間は本年度から5年間。4大学で「学生の県内企業への就職率を43%から53%に増やす」ことなどを数値目標として掲げている。

豊後大野住民と「地域創生」 文理大が成果報告会



学生たちの報告を聞く参加者。豊後大野市中央公民館

学生 介護予防、観光メニュー 教職員は農業、不明者の照合

日本文理大学(大分市、平居孝之学長)は豊後大野市三重町の市中央公民館で、学生や教職員が同市内各地の住民と共に取り組んでいる地域創生活動の成果報告会を開いた。

文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に採択された大分市は、生活体験活動の役割や、フラスマや住民との意見交換を通じた化学反応を応用した農業で課題を解決する方策を研究の可能性があることについて発表。地域に愛着を持ち活性表。工学部の鈴木秀男教授は「地域に愛着を持ち活性表。工学部の鈴木秀男教授は「地域に愛着を持ち活性表。工学部の鈴木秀男教授は」

約100人が出席。経営学部の学生たちは、市で、行方不明になった高齢者や若者の行動を把握するシステムを開発している。工学部の鈴木秀男教授は「地域に愛着を持ち活性表。工学部の鈴木秀男教授は」

(庄亨)

祖母傾山系地域エコパーク

2県の申請書案を決定



協議会をまとめた申請書案を手にする杉井共同代表(左)と日本共同代表

ユネスコ国内委に提出へ

大分・宮崎両県にまたがる祖母傾山系地域のユネスコエコパークを(左)宮崎県側が登録を指す。協議会が2016年2月、佐伯市役所であり、申請書案を正式決定した。2月末までに文部科学省内のユネスコ国内委員会に提出する。その後、国の意見を取り入れるなどして修正し、2017年5月ごろの登録を目指す。(田原広貴)

協議会は大分県側が佐伯、竹田、豊後大野の3市、宮崎県側は延岡市と高千穂、日之影両町、さらに学識関係者で構成。大分側が14年8月、単独で国内委員会に申請したが、宮崎県と一体で実施することなどを求められ、昨年2月に両県をまたがった形で設立。同8月には申請書の概要を提出していた。祖母傾地域は日本南部で最大規模のツガ林を有し、固有種ソノボサンショウウオや希少なニホンカモシカなどが生息する独特な自然環境がある。申請書案はエコパークとして、6市町の祖母山頂を中心とした3地域、計25万平方メートルを指定。温暖帯から冷温帯までの主要な気候が凝縮され、きわめて多様な生物種の宝庫であることや、地元民の環境保全意識が非常に高いことなどを記している。また協議会では、登録決定後に祖母傾地域を持統的に管理し、運営するための計画書案も示され、了承された。協議会共同代表の杉井嘉雄・日本文理大教

新しくなったウッドデッキと、改修作業に当たった日本文理大学工学部の3年生と教職員＝豊後大野市大野町のふるさと体験村



豊後大野市のキャンプ場

ウッドデッキを再設計

日本文理大生が建築実習

豊後大野市大野町中土 建築学科の3年生。バン師のキャンプ場「ふるさ」ガロ13棟のウッドデッキと体験村」で、日本文理大(大分市)の学生たちが宿泊施設のウッドデッキを造り直した。作業したのは、体験村 25人が古いデッキの測量や設計、部材の加工をい。子どもたちも使うものなので、きっちり仕上げたい」と話した。

10人の学生が訪れ、電動工具を使って部材を調整しながら階段を組み上げていった。一部の部材には、取り壊された地区内の旧大野北部小学校の木材が使われた。安部正吾さん(21)「大分市」は「現場で作業するのは初めて。図面との誤差を調整しながら形にしていくなか、とても楽しかった。子どもたちも使うものなので、きっちり仕上げたい」と話した。



防災意識を高める方策を話し合う学生たち

日本文理大3年の清水真大さん(21)は「大学生だからこそできる防災の啓発活動を考え、実行したい」と話した。

■大学生、啓発方法を検討
由布市挾間町の県消防学校では、日本文理大と県立看護科学大(ともに大分市)の学生が防災への理解を深めた。

両大の「大学生消防応援隊」に所属する17人が、消火栓の使い方や、煙に見立てた水蒸気が充満する室内での避難方法を学んだ。

その後、地域のお年寄りや子供に防災意識を高めてもらうための方策を話し合った。参加者からは、商業施設や小学校で消火器の設置場所を巡るスタンプラリーを実施するなどの案が出た。

「子育て」通じ人生設計考える

大分市 日本文理大生が体験交流会



子どもと一緒にパズルで遊ぶ大分市＝大分市大在こどもルーム

大学生に子育てのイメージを持ってもらうと、県は大分市大在こどもルームで、乳幼児と触れ合う体験交流会を開いた。日本文理大学の学生業の一環。学生らは施設

設での取り組みや現代の子育て事情・支援などについて説明を受けた後、自分の人生設計について話し合った。ルームを利用している親子とも交流。おもちゃを使って子どもと遊んだり、保護者に子育てについての質問をしたりと、充実した時間を過ごした。

経営経済学部2年の岡崎光里さん(20)「結婚、出産としっかり人生プランを立てることが大事だと感じた。思っても子育て支援課の久我奈美主任は子育てに困ったときは相談ができる場があることを覚えておいて」と呼び掛けた。

大学 COC 事業 図書リスト

No.	書名	著者名	出版社名	発行年
1	ロングテール - 「売れない商品」を宝の山に変える新戦略	アンダーソン・クリス (著), Chris Anderson (著), 篠森 ゆりこ (翻訳)	早川書房	2014年
2	政策リサーチ入門 - 仮説検証による問題解決の技法	伊藤修一郎	東京大学出版会	2011年
3	グラミンのソーシャル・ビジネス 世界の社会的課題とどう向き合うか	大杉卓三/アシル・アハメッド (著)	集広舎	2012年
4	エスノグラフィー入門 <現場>を質的研究する	小田博志 (著)	春秋社	2010年
5	地域を変えるデザイン - コミュニティが元気になる30のアイデア	寛 裕介 (監修) Issue+design project (著),	英治出版	2011年
6	ソーシャルデザイン実践ガイドー地域の課題を解決する7つのステップ	寛裕介	英治出版	2013年
7	ソーシャルデザイン (アイデアインク)	グリーンズ (編集)	朝日出版社	2012年
8	イノベーションの最終解	クリステンセン・クレイトン・M (著), スコット・D・アンソニー (著), エリック・A・ロス (著), 玉田 俊平太 (その他), 櫻井 祐子 (翻訳)	翔泳社	2014年
9	イノベーションの達人! - 発想する会社をつくる10の人材	ケリー・トム (著), ジョナサン リットマン (著), Tom Kelley (原著), Jonathan Littman (原著), 鈴木 主税 (翻訳)	早川書房	2006年
10	リバーシ・イノベーション	ゴビンダラジャン・ビジャイ (著), クリス・トリンプル (著), 小林 喜一郎 (解説) (その他), 渡部 典子 (翻訳)	ダイヤモンド社	2012年
11	ソーシャルデザイン50の方法 - あなたが世界を変えるとき	今一生 (著)	中央公論新社	2013年
12	THIS IS SERVICE DESIGN THINKING. Basics - Tools - Cases - 領域横断的アプローチによるビジネスモデルの設計	スティックドーン・マーク (著), ヤコブ・シュナイダー (著), 長谷川敦士 (監修), 武山政直 (監修), 渡邊康太郎 (監修), 郷司陽子 (翻訳)	ビー・エヌ・エヌ新社	2013年
13	FabLife-デジタルファブ리케이션から生まれる「つくりかたの未来」 (Make: Japan Books)	田中浩也 (著)	オライリージャパン	2012年
14	世界を巻き込む。 - 誰も思いつかなかった「しくみ」で問題を解決するコペルニクの挑戦	中村俊裕 (著)	ダイヤモンド社	2014年
15	貧乏人の経済学 - もういちど貧困問題を根っこから考える	バナジー・アビジット・V (著), エスター・デュフロ (著), 山形浩生 (翻訳)	みすず書房	2012年
16	政策立案の技法	バーダック・ユージン (著), 白石 賢司 (翻訳), 鍋島 学 (翻訳), 南津 和広 (翻訳)	東洋経済新報社	2012年
17	コ・イノベーション経営: 価値共創の未来に向けて	プラハラード・C・K (著), ベンカト・ラマスワミ (著), 一條 和生 (その他), 有賀 裕子	東洋経済新報社	2013年
18	ラーニング・レボリューション - MIT 発 世界を変える「100ドルPC」プロジェクト	ベンダー・ウォルター, チャールズ・ケイン, ジョディ・コーニッシュ, ニール・ドナヒュー, 松本 裕 (翻訳)	英治出版	2014年
19	インサイドボックス 究極の創造的思考法	ボイド・ドリュウ (著), ジェイコブ ゴールデンバーグ (著), Drew Boyd (原著), Jacob Goldenberg (原著), 池村 千秋 (翻訳)	文藝春秋	2014年
20	世界一大きな問題のシンプルな解き方 - 私が貧困解決の現場で学んだこと	ポラック・ポール (著), 東方 雅美 (翻訳)	英治出版	2011年
21	なぜデザインが必要なのか - 世界を変えるイノベーションの最前線	ラプトン・エレン (著), カーラ マカーティ (著), マチルダ マケイド (著), シンシア スミス (著), 北村 陽子 (翻訳)	英治出版	2012年
22	システム×デザイン思考で世界を変える 慶應 SDM 「イノベーションのつくり方」	前野隆司 (著), 保井俊之 (著), 白坂成功 (著), 富田欣和 (著), 石橋金徳 (著), 岩田徹 (著), 八木田寛之 (著)	日経 BP 社	2014年
23	「ソーシャルデザイン」の教科書	村田智明	生産性出版	2014年
24	ソーシャルインパクト 価値共創(CSV)が企業・ビジネス・働き方を変える	玉村 雅敏 (著, 編集), 横田 浩一 (著), 上木原 弘修 (著), 池本 修悟 (著)	産学社	2014年
25	実践ソーシャルイノベーション - 知を価値に変えたコミュニティ・企業・NPO	野中 郁次郎 (著), 廣瀬 文乃 (著), 平田透 (著)	千倉書房	2014年
26	世界で最もクリエイティブな国デンマークに学ぶ 発想力の鍛え方	クリスチャン・ステーディル (著), リーネ・タンゴー (著), 関根光宏 (翻訳), 山田美明 (翻訳)	クロスメディア・パブリッシング	2014年

27	ワーク・シフト - 孤独と貧困から自由になる働き方の未来図	リンダ・グラットン (著), 池村 千秋 (翻訳)	プレジデント社	2012年
28	CEOからDEOへ - 「デザインするリーダー」になる方法	マリア・ジュディース (著), クリストファー・アイランド (著), 坂東智子 (翻訳)	ビー・エヌ・エヌ新社	2014年
29	続・百年の愚行	小崎 哲哉 (著), Think the Earth (著)	Think the Earth	2014年
30	誰が世界を変えるのか ソーシャルイノベーションはここから始まる	フランシス ウェスリー (著), ブレングラツィンマーマン (著), マイケル クインパットン (著), エリック ヤング (著), 東出 顕子 (翻訳)	英治出版	2008年
31	問いかける技術-確かな人間関係と優れた組織をつくる	エドガー・H・シャイン (著), 金井 壽宏 (監修), 原賀 真紀子 (翻訳)	英治出版	2014年
32	OCICA〜石巻 牡鹿半島、小さな漁村の物語〜	一般社団法人つむぎや (著)	つむぎや	2012年
33	OLIVE いのちを守るハンドブック	NOSIGNER (編集)	メディアファクトリー	2011年
34	街角で見つけた、デザイン・シンキング	竹原あき子 (著)	日経BP社	2014年
35	デザインマネジメント	田子 學(慶應義塾大学大学院特任教授/エムテド代表) (著), 田子 裕子 (著), 橋口 寛 (著)	日経BP社	2014年
36	地域の魅力を伝えるデザイン—Design for local paper media in Japan	齋藤あきこ (編集)	ビー・エヌ・エヌ新社	2014年
37	なぜ繁栄している商店街は1%しかないのか	辻井 啓作【著】	CCCメディアハウス	2014年
38	ビジネスモデル・ジェネレーション ビジネスモデル設計書	アレックス・オスターワルダー (著), イヴ・ピニユール (著), 小山 龍介 (翻訳)	翔泳社	2012年
39	Value Proposition Design: How to Create Products and Services Customers Want (Strategyzer)	Alexander Osterwalder (著), Yves Pigneur (著), Gregory Bernarda (著), Alan Smith (著), Trish Papadakos (デザイン)	Wiley	2014年
40	描きながら考える力 ~The Doodle Revolution~	サニー・ブラウン Sunni Brown (著), 壁谷さくら (翻訳)	クロスメディア・パブリッシング	2015年
41	未来を発明するためにいまできること スタンフォード大学 集中講義II	ティナ・シーリグ (著), 高遠裕子 (翻訳)	CCCメディアハウス	2012年
42	問題解決ができる、デザインの発想法	Ellen Lupton (編集), 郷司 陽子 (翻訳)	ビー・エヌ・エヌ新社	2012年
43	日本をソーシャルデザインする (idea ink(アイデアインク))	グリーンズ (編集)	朝日出版社	2013年
44	地方創生を考える - 偽薬効果に終わらせないために	諏訪 雄三【著】	新評論	2015年
45	訪日外国人インバウンド市場攻略の鉄則 - 地方創生の起爆剤に! 日経MOOK	ジャパンショッピングツーリズム協会	日本経済新聞出版社	2015年
46	「地方創生」でまちは活性化する - まち・ひと・しごと創生による地域活性化事例	小林 勇治/波形 克彦【編著】	同友館	2015年
47	「地方創生」!それでも輝く地方企業の理由 ベストセレクトBB*Big birdのbest books	野口 秀行/谷田貝 孝一/弓削 徹【著】	ベストブック	2015年
48	「地方創生」で地方消滅は阻止できるか - 地方再生策と補助金改革	高寄 昇三【著】	公人の友社	2015年
49	協創力が稼ぐ時代 - ビジネス思考の日本創生・地方創生 Nanaブックス	笹谷 秀光【著】	ウィズワークス	2015年
50	北陸資本主義 - 「地方創生」の最先端モデルがここにある!!	清丸 恵三郎【著】	洋泉社	2015年
51	地方創生の正体 - なぜ地域政策は失敗するのか ちくま新書	山下 祐介/金井 利之【著】	筑摩書房	2015年
52	スマートコミュニティ (vol. 5) コンパクトシティ+ネットワークと地方創生 Jihyo books	柏木 孝夫【監修】	時評社	2015年
53	地方創生ビジネスの教科書	増田 寛也【監修・解説】	文藝春秋	2015年
54	地方創生に挑む地域金融 - 「縮小」阻止へ金融・資本市場からのアプローチ	岩崎 俊博【編】/野村資本市場研究所【著】	金融財政事情研究会	2015年
55	「消滅自治体」は都会の子が救う - 地方創生の原理と方法 コミュニティ・ブックス	三浦 清一郎【著】	日本地域社会研究所	2015年
56	地方創生はアクティブシニアのワープステイ (里山留学) からはじまる!	ワープステイ推進協議会【著】	住宅新報社	2014年
57	社会の未来はきっと明るい - 地方創生と社会起業家の実例	長井 隆行【著】	平成出版 (渋谷区)	2015年

58	私の地方創生論	今村 奈良臣【著】	農山漁村文化協会	2015年
59	人口減少時代の地方創生論 - 日本型州構想がこの国を元気にする	佐々木 信夫【著】	PHP研究所	2015年
60	誇れる郷土データ・ブック 〈2015年版〉 地方の創生と再生 ふるさとシリーズ	古田 陽久/古田 真美【著】/世界遺産総合研究所【企画・編】	シンクタンクせとうち総合研究機構	2015年
61	人口減少・高齢化と生活環境 - 山間地域とソーシャル・キャピタルの事例に学ぶ (新装版)	堤 研二【著】	九州大学出版会	2015年
62	都市・地域の持続可能性アセスメント - 人口減少時代のプランニングシステム	原科 幸彦/小泉 秀樹【編著】	学芸出版社 (京都)	2015年
63	人口減少×デザイン - 地域と日本の大問題を、データとデザイン思考で考える	寛 裕介【著】	英治出版	2015年
64	人口減少社会の雇用 - 若者・女性・高齢者・障害者・外国人労働者の雇用の未来は？	西川 清之【著】	文真堂	2015年
65	人口減少時代の公共施設改革 - まちづくりがキーワード	内藤 伸浩【著】	時事通信出版局	2015年
66	人口減少と少子化対策 人口学ライブラリー	高橋 重郷/大淵 寛【編著】	原書房	2015年
67	人口減少時代の都市ビジョン	樫野 孝人【著】	カナリアコミュニケーションズ	2015年
68	夕張再生市長 - 課題先進地で見た「人口減少ニッポン」を生き抜くヒント	鈴木 直道【著】	講談社	2014年
69	地域人口減少白書 〈2014-2018〉 - 全国1800市区町村地域戦略策定の基礎データ	北海道総合研究調査会【編著】/樋口 美雄【監修】	生産性出版	2014年
70	キロワットアワー・イズ・マネー - エネルギー価値の創造で人口減少を生き抜く いしずえ新書 (改訂版)	村上 敦【著】	いしずえ	2014年
71	人口問題研究 〈第70巻第1号 (2014年)〉 特集: 少子・超高齢・人口減少社会の人口移動 その2	国立社会保障・人口問題研究所	厚生労働統計協会	2014年
72	人口減少時代の地域経営 - みんなで進める「地域の経営学」実践講座	海野 進【著】	同友館	2014年
73	人口問題研究 〈第69巻第4号 (2013年)〉 特集: 少子・超高齢・人口減少社会の人口移動-第7回人口移動調	国立社会保障・人口問題研究所	厚生労働統計協会	2014年
74	地域再生 - 人口減少時代の地域まちづくり	鈴木 浩/山口 幹幸/川崎 直宏/中川 智之【編著】	日本評論社	2013年
75	道の駅/地域産業振興と交流の拠点	関 満博/酒本 宏【編】	新評論	2011年
76	ボランティアコーディネーション力 - 市民の社会参加を支えるチカラ	日本ボランティアコーディネーター協会【編】/早瀬 昇/筒井 のり子【著】	中央法規出版	2015年
77	社会参加とボランティア	海野 和之【著】	八千代出版	2014年
78	大学と社会貢献 - 学生ボランティア活動の教育的意義 アカデミア叢書	木村 佐枝子【著】	創元社 (大阪)	2014年
79	わかる!できる!NPO法人会計	関西NPO会計税務研究会【編】	大阪ボランティア協会	2014年
80	新ボランティア学のすすめ - 支援する/されるフィールドで何を学ぶか	内海 成治/中村 安秀【編】	昭和堂 (京都)	2014年
81	社会福祉施設のためのボランティア・コーディネーションガイドブック		東京ボランティア・市民活動センター	2014年
82	人が集まるボランティア組織をどうつくるのか - 「双方向の学び」を活かしたマネジメント	長沼 豊【著】	ミネルヴァ書房	2014年
83	ボランティア白書 〈2014〉	「広がれボランティアの輪」連絡会議【編】	筒井書房	2014年
84	地域を変える高校生たち - 市民とのフォーラムからボランティア、まちづくりへ	宮下 与兵衛【編・著】/栗又 衛/波岡 知朗【著】	かもがわ出版	2014年
85	コミュニティ革命 - 「地域プロデューサー」が日本を変える	高橋 英興【著】	彩流社	2015年
86	高齢社会のアクションリサーチ - 新たなコミュニティ創りをめざして	JST社会技術研究開発センター/秋山 弘子【編著】	東京大学出版会	2015年
87	2050年超高齢社会のコミュニティ構想	若林靖永/樋口恵子 (評論家)	岩波書店	2015年
88	地域活動の時代を拓く - コミュニティづくりのコーディネーター×サポーターの コミュニティ・ブックス	みんなで本を出そう会【編】	日本地域社会研究所	2015年
89	農業再生に挑むコミュニティビジネス - 豊かな地域資源を生かすために シリーズいま日本の「農」を問	曾根原 久司/西辻 一真/平野 俊己/佐藤 幸次/南部町商工観光交流課【著】	ミネルヴァ書房	2015年

	う			
90	たすけられ上手たすけ上手に生きる	上野谷 加代子【著】	全国コミュニティライフサポートセンター	2015年
91	市民がつくる地域福祉のすすめ方	藤井 博志【監修】/宝塚市社会福祉協議会【編】	全国コミュニティライフサポートセンター	2015年
92	越境する対話と学び - 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ	香川 秀太/青山 征彦【編】	新曜社	2015年
93	生涯学習まちづくりの人材育成 - 人こそ最大の地域資源である! コミュニティ・ブックス	瀬沼 克彰【著】	日本地域社会研究所	2015年
94	革新挑戦 - 中小小売商の灯を消すな	松田 十刻【著】	盛岡出版コミュニティ	2015年
95	アトム通貨で描くコミュニティ・デザイン - 人とまちが紡ぐ未来	アトム通貨実行委員会【編】	新評論	2015年
96	SNSを活用した農山村地域コミュニティの再構築	鬼塚 健一郎【著】	農林統計出版	2015年
97	コミュニティソーシャルワークの理論と実践	日本地域福祉研究所【監修】/中島 修/菱沼 幹男【共編】	中央法規出版	2015年
98	コミュニティFMの可能性 - 公共性・地域・コミュニケーション	北郷 裕美【著】	青弓社	2015年
99	コミュニティパワー - エネルギーで地域を豊かにする	飯田哲也/環境エネルギー政策研究所	学芸出版社(京都)	2014年
100	コミュニティカフェと地域社会 - 支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践	倉持 香苗【著】	明石書店	2014年
101	地域は消えない - コミュニティ再生の現場から	岡崎 昌之【編】/全労済協会【監修】	日本経済評論社	2014年
102	世のため人のため自分のための地域活動 - 社会とつながる幸せの実践 コミュニティ・ブックス	みんなで本を出そう会【編】	日本地域社会研究所	2014年
103	現代コミュニティとは何か - 「現代コミュニティの社会学」入門	船津 衛/浅川 達人【著】	恒星社厚生閣	2014年
104	人がつながる居場所のつくり方 - 日野社会教育センターが実践したコミュニティデザイン	日野社会教育センター【編著】	WAVE出版	2014年
105	観光デザインとコミュニティデザイン - 地域融合型観光ビジネスモデルの創造者〈観光デザイナー〉	小川 功【著】	日本経済評論社	2014年
106	祭りと地方都市 - 都市コミュニティ論の再興	竹元 秀樹【著】	新曜社	2014年
107	つながる／つながらないの社会学 - 個人化する時代のコミュニティのかたち	長田 攻一/田所 承己【編】	弘文堂	2014年
108	コミュニティリーダーを育てる	龍谷大学社会学部コミュニティマネジメント学科【編】	晃洋書房	2014年
109	地域活性化を成功に導く5つの提言 - 自立・継続と人財育成	須田 憲和【著】	カナリアコミュニケーションズ	2015年
110	地域活性化マーケティング - 地域価値を創る・高める方法論	宮副 謙司【著】	同友館	2014年
111	全国農村サミット〈2013〉 地域資源の活用による地域活性化と大学の役割	日本大学生物資源科学部【編】	農林統計協会	2014年
112	地域活性化への試論 - 地域ブランドの視点	片山 富弘【編著】	五紘舎	2014年
113	ジオパークを楽しむ本 - 日本列島ジオサイト地質百選	全国地質調査業協会連合会/地質情報整備活用機構/ジオ多様性研究会【共編】	オーム社	2013年
114	生物多様性のブランド化戦略 - 豊岡コウノトリ育むお米にみる成功モデル	矢部 光保/林 岳【編著】	筑波書房	2015年
115	日本全国行ってみたいなあんな町こんな町〈1〉 沖縄・鹿児島・宮崎・熊本・大分・長崎・佐賀	東 菜奈【著】	岩崎書店	2014年
116	酒と肴の文化地理 - 大分の地域食をめぐる旅	中村 周作【著】	原書房	2014年
117	大分方言語録 - 大分合同新聞・教えて! ぶんぶん〈大分方言〉改題	-	大分合同新聞社	2014年
118	コンテンツツーリズム研究 - 情報社会の観光行動と地域振興	岡本 健【編著】	福村出版	2015年
119	農の6次産業化と地域振興	熊倉 功夫【監修】/米屋 武文【編】	春風社	2015年
120	地域振興としての農村空間の商品化	田林 明【編著】	農林統計出版	2015年
121	地域振興に活かす自然エネルギー	田畑 保【著】	筑波書房	2014年
122	スポーツ・コモンズ - 総合型地域スポーツクラブの	クラブネッツ【監修】/黒須 充/水上 博	創文企画	2014年

	近未来像	司【編著】		
123	地域スポーツクラブの“法人格”を取得しよう！ - 理想のクラブ運営ガイド SPORTS MANAGEMENT	谷塚 哲【著】	カンゼン	2013年
124	新市民伝 - NPOを担う人々	辻 陽明/新市民伝制作プロジェクト【著】	講談社エディトリアル	2015年
125	NPOの後継者 - 僕らが主役になれる場所 文化とまちづくり叢書	富永 一夫/永井 祐子【著】	水曜社	2015年
126	NPOの教科書 - 初歩的な疑問から答える	乙武 洋匡/佐藤 大吾【著】	日経BP社	2015年
127	地域ブランドクリエイターズファイル - 地域をつくるクリエイター100人の事例集 エイムック	-	■出版社	2015年
128	地域マーケティングの核心 - 地域ブランドの構築と支持される地域づくり	佐々木 茂/石川 和男/石原 慎士【編著】	同友館	2014年
129	地域デザイン 〈第2号(2013)〉 - 地域デザイン学会誌 地域ブランドと地域の価値創造	地域デザイン学会【編】	地域デザイン学会	2013年
130	廃校利活用による農山村再生 JC総研ブックレット	岸上 光克【著】/小田切 徳美【監修】	筑波書房	2015年
131	地方創生 実現ハンドブック 人や仕事が増え、地方が元気になる処方箋	著者名：トーマツベンチャーサポート【著】/日経トップリーダー【著】	日経BP社	2015年

7. 補足資料





「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】 アンケート調査 報告書

2015年3月30日



調査概要

調査目的

本年度、文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に本学が選定され、それに付随する本学の取り組みに対し、住民の認知度や取組への期待度を図ることを目的として実施した。

調査エリア

大分県

調査手法

郵送調査(対象者から郵送にてアンケートを返送して頂く)

調査設計

<調査の対象と標本の抽出方法>

- ①電話帳から無作為に200名を抽出した。
- ②大分県内居住者800名の自宅へ飛び込みで訪問し、アンケートを依頼した。

<アンケート配布と回収方法>

- ①郵送にてアンケートを配布。後日、対象者から郵送にてアンケートを返送。
- ②直接アンケートを配布。後日、対象者から郵送にてアンケートを返送。

調査票の 回収結果

配布数	回収数	有効回収数	回収率
1,000件	182件	182件	18.2%

調査期間

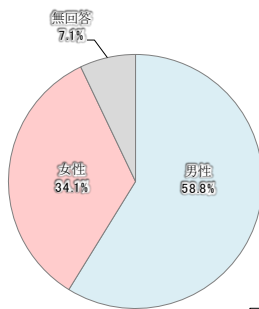
2015年3月4日(水)~17日(火)

調査結果利 用上の注意

数字は、百分比のポイント以下2位を四捨五入しているため、回答比率の合計は、必ずしも100%ちょうどになるとは限らない。
数表、図表、文中に占める「n」は、比率算出上の基数(標本数)である。
数表、図表に示す選択肢はスペースの関係で文言を省略している場合があるので、巻末の調査票を参照のこと。

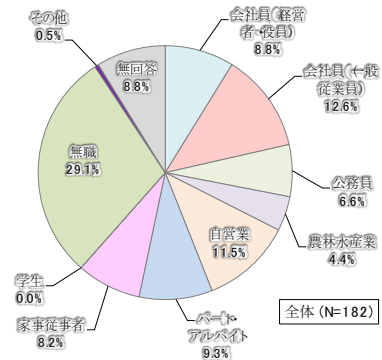
標本構成

性別構成比



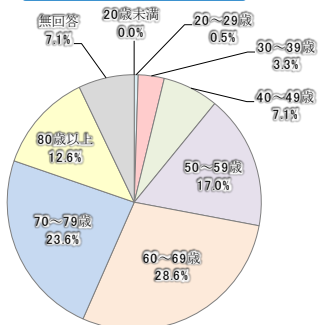
全体 (N=182)

職業別構成比



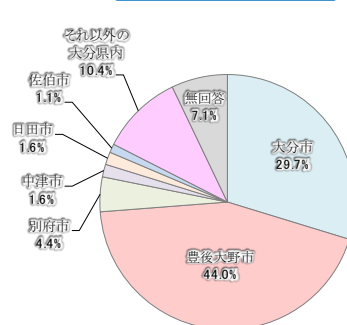
全体 (N=182)

年齢別構成比



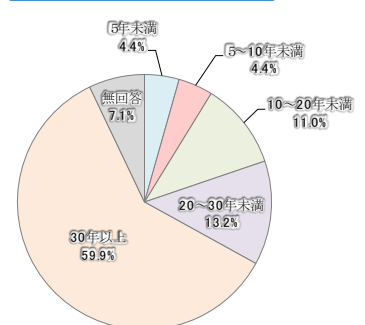
全体 (N=182)

居住地別構成比



全体 (N=182)

居住地年数別構成比



全体 (N=182)

「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

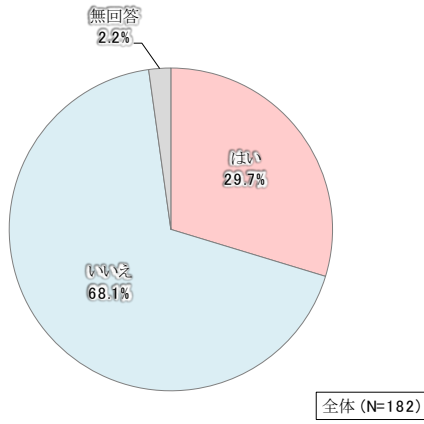
調査結果

大学の活動について① (大学活動の認知率、貢献度)

活動の認知は全体の約3割。貢献度については『貢献している』(「とても貢献している」+「やや貢献している」)が全体の約9割を占める。

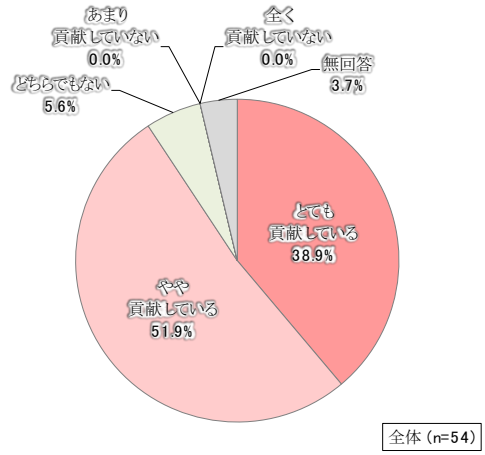
Q. 本学の活動をご存じですか。

●大学活動の認知度



Q. 「はい」とお答えおたいただいた方へ、その活動の取り組みへの感想をお答え下さい。

●大学活動の貢献度(活動の認知者ベース)



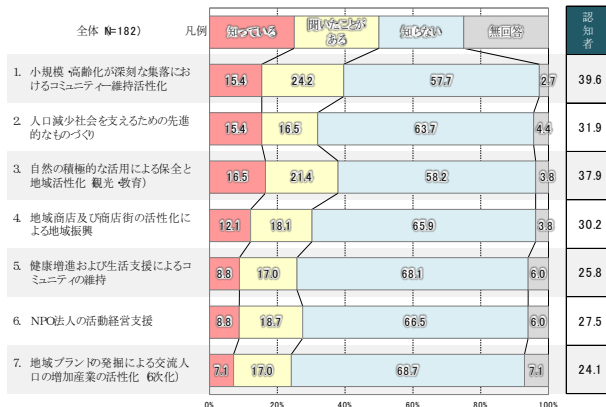
「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

大学の活動について② (各分野の認知度と期待度)

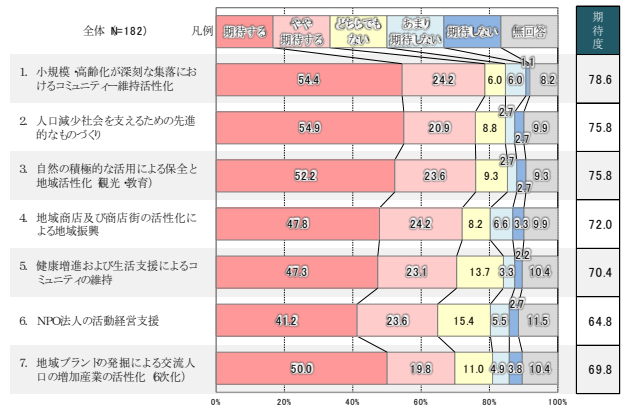
各分野の『認知者』は概ね2割から3割。一方、『期待度』(「期待する」+「やや期待する」)は6割から7割にのぼる。

Q. 本学が行っている、または行おうとしている次の分野の活動について、あなたの「本学活動の認知度」、「本学への期待度」をお知らせください。

●各分野の認知度



●各分野の期待度



『認知者』は、「知っている」と「聞いたことがある」の合計値。

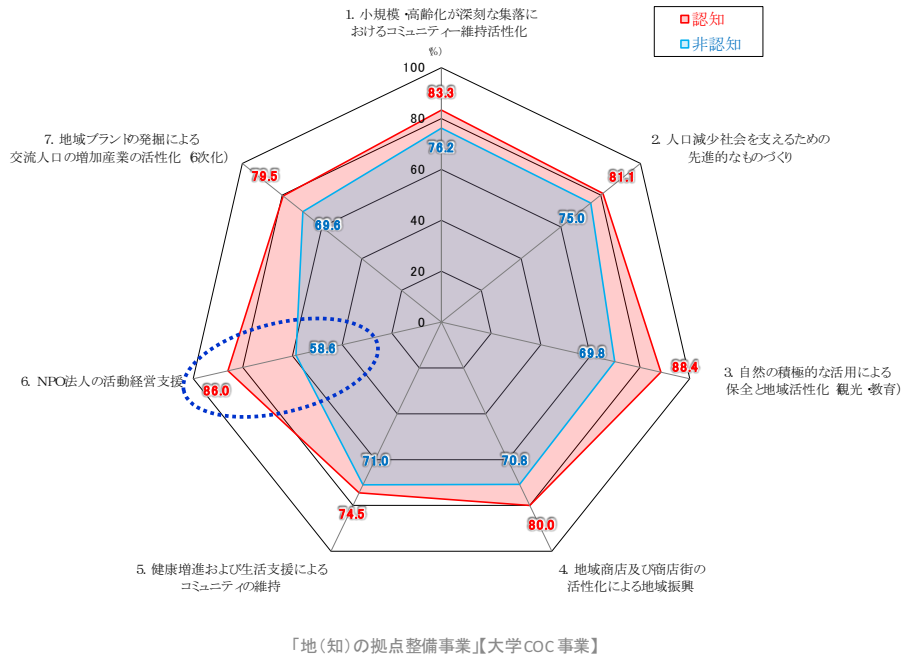
『期待度』は、「期待する」と「やや期待する」の合計値。

大学の活動について② (認知×期待度)

各分野の認知状況から各分野の期待度をみると、「NPO法人の活動経営支援」では、認知者の期待度は高い(86.0%)ものの、非認知者は58.6%に留まり、認知率で期待度が大きく異なる。

Q. 本学が行っている、または行おうとしている次の分野の活動について、あなたの「本学活動の認知度」、「本学への期待度」をお知らせください。

●各分野の認知状況における期待度



6

大学の活動について③ (各分野の認知度と期待度)

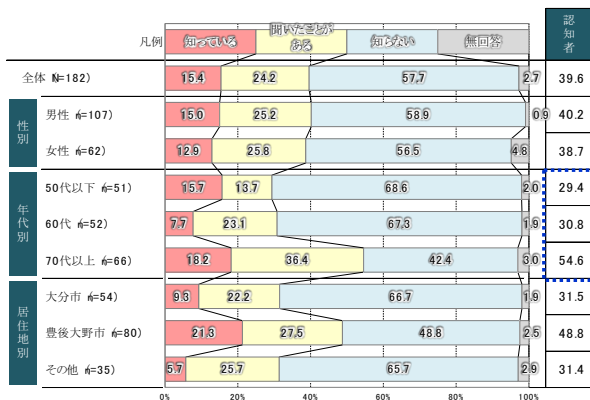
認知は年代が上がるほど高くなるが、逆に期待度は年代が下がるほど高くなる傾向。



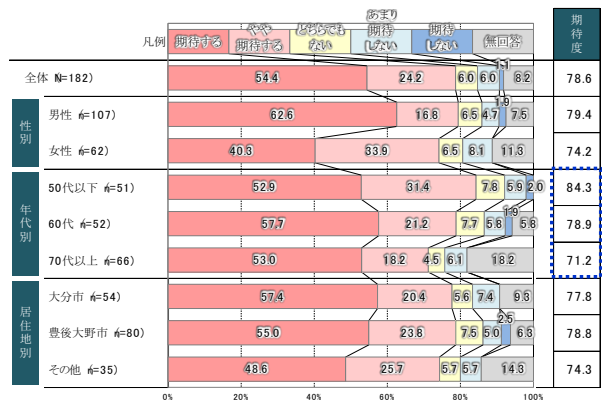
活動: 小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ維持活性化

内容: 高齢化が進んでいる地区・集落での活動(祭りなど)へ本学学生が参画します

●認知度(全体)



●期待度



7

大学の活動について③ (各分野の認知度と期待度)

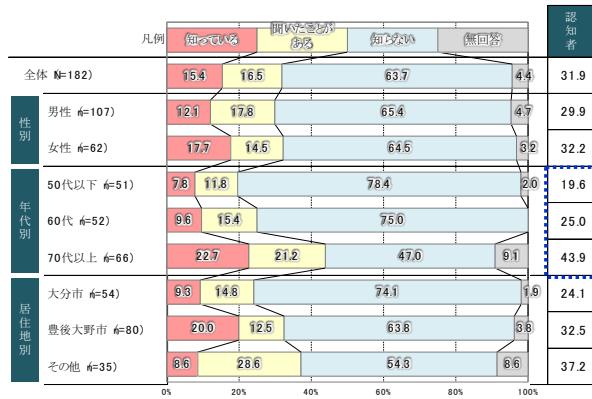
前項と同様、認知は年代が上がるほど高くなるが、逆に期待度は年代が下がるほど高くなる傾向。



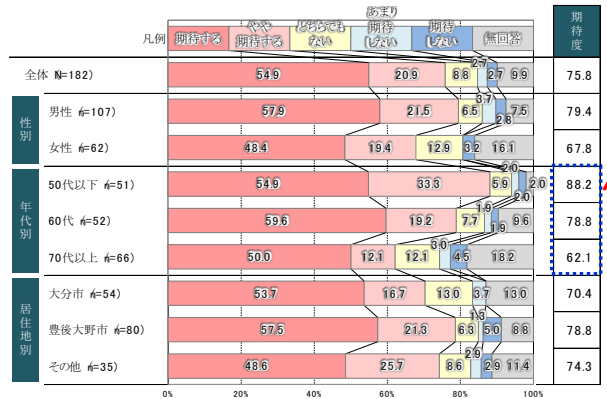
活動: 人口減少社会を支えるための先進的なものづくり

内容: 人手不足を補う農業・林業支援ロボット、環境観測ロボットの開発を実践を行います。

●認知度(全体)



●期待度



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

大学の活動について③ (各分野の認知度と期待度)

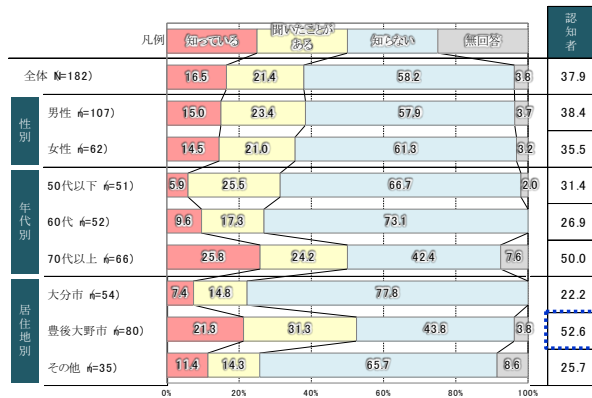
豊後大野市居住者では認知者(52.6%)が約半数。期待度は約8割(81.3%)に上る。



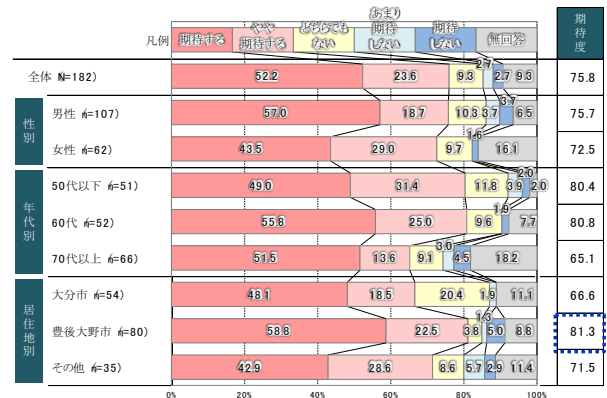
活動: 自然の積極的な活用による保全と地域活性化(観光・教育)

内容: 豊後大野市ジオパーク構想・エコパーク構想と連携した自然保護に関わるひとづくりや学生活動による観光振興を図ります。

●認知度(全体)



●期待度



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

大学の活動について③ (各分野の認知度と期待度)

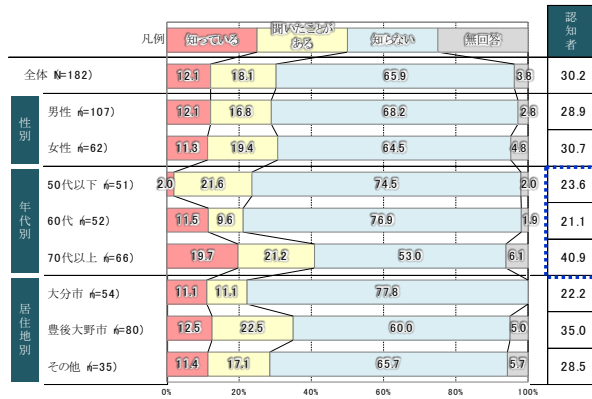
認知は年代が上がるほど高く、期待度は年代が下がるほど高くなる傾向。
また、女性よりも男性の期待度が大きく高い。



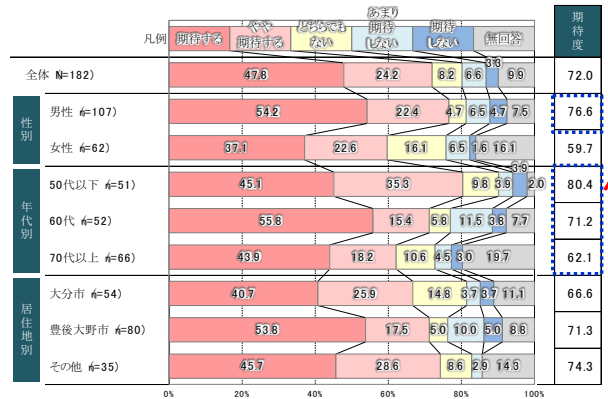
活動：地域商店及び商店街の活性化による地域振興

内容：地域の商店や商店街と連携して学生活動拠点を設置し、人の流れを呼び戻すための地域振興や商店街の活性化に取り組みます。

●認知度(全体)



●期待度



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

大学の活動について③ (各分野の認知度と期待度)

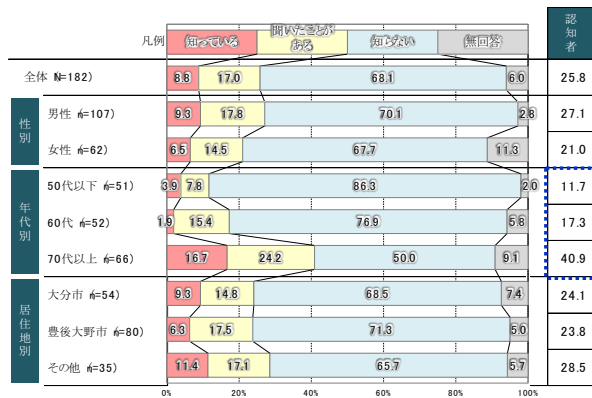
認知は年代が上がるほど高く、期待度は年代が下がるほど高い。
また、女性よりも男性の期待度が大きく高い。



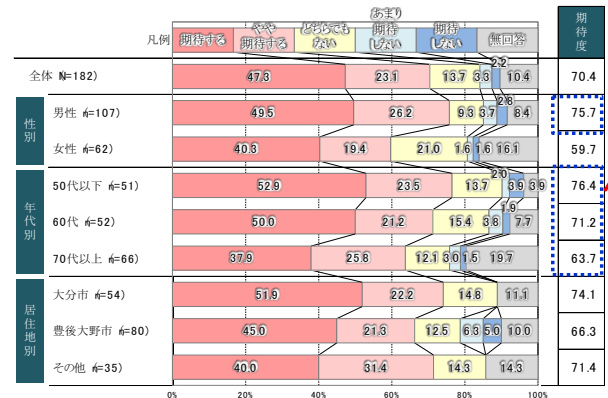
活動：健康増進および生活支援によるコミュニティの維持

内容：総合型地域スポーツクラブの活動支援や高齢者の生活支援活動を教員と学生が共同して行っていきます。

●認知度(全体)



●期待度



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

大学の活動について③ (各分野の認知度と期待度)

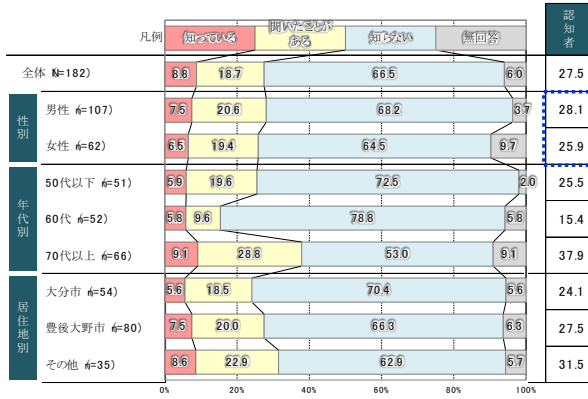
性別において認知率に大きな差はないが、期待度は男性が女性を大きく上回る。



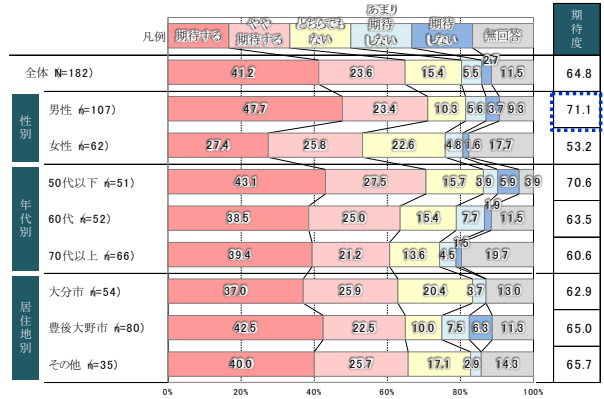
活動: NPO法人の活動経営支援

内容: 地域で活躍するNPO(社会貢献活動等を行う市民団体等)との協働活動と財務改善の提案をしています。

●認知度(全体)



●期待度



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

大学の活動について③ (各分野の認知度と期待度)

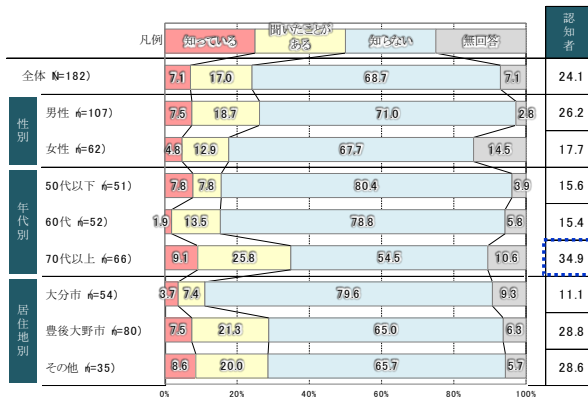
**認知について70代以上が突出して高い。
一方、期待度は50代以下が約8割と、70代以上(57.6%)を大きく上回っている。**



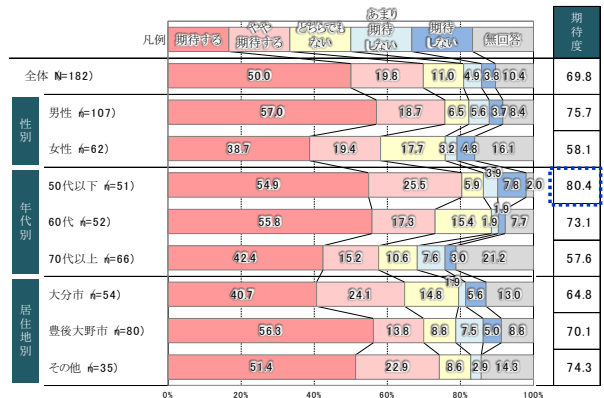
活動: 地域ブランドの発掘による交流人口の増加産業の活性化(6次化)

内容: 地域の特産品の発掘をおこない、それをブランド化し流通させることで、地域の活性を推進していきます。

●認知度(全体)



●期待度

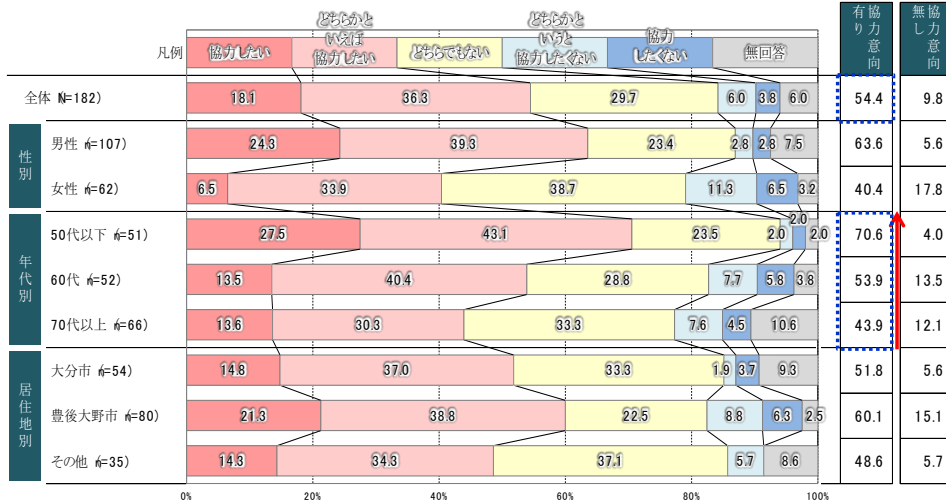


「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

本学の地域活動への協力意向

『協力意向有り』は全体の54.4%。
年代が下がるほど協力意向が高くなる傾向。

Q. 本学の地域での活動(教育・研究・社会貢献)に対して協力してみたいですか。



『協力意向有り』は、「協力したい」と「どちらかといえば協力したい」の合計値。
『協力意向無し』は、「どちらかといえば協力したくない」と「協力したくない」の合計値。

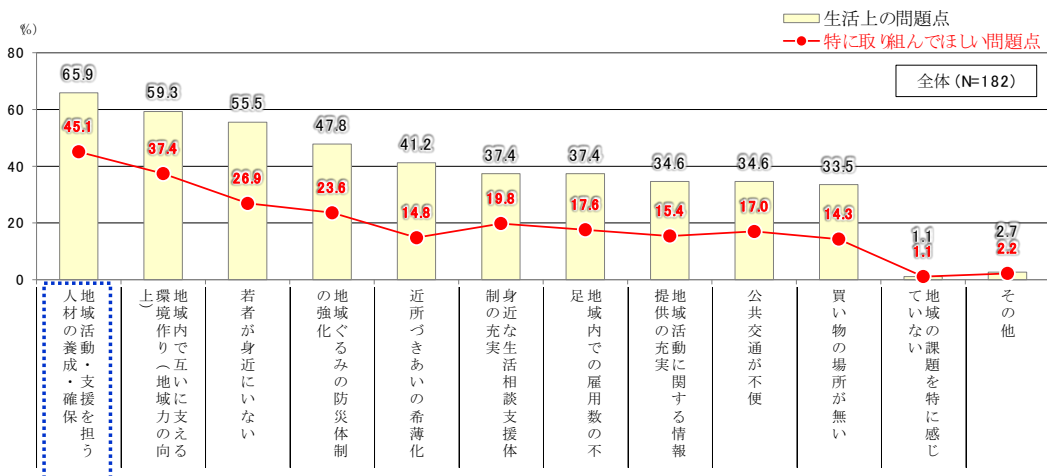
「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

14

地域課題や生活上の問題点と本学に取り組んで欲しい課題(全体)

「人材の養成・確保」が「生活上の問題点」、「特に取り組んでほしい問題点」とともに最も高い。

Q. あなたが感じている地域課題や生活上の問題点は以下のうちどれですか。また、その中で本学に特に取り組んで欲しい(改善してほしい)課題をお知らせください。



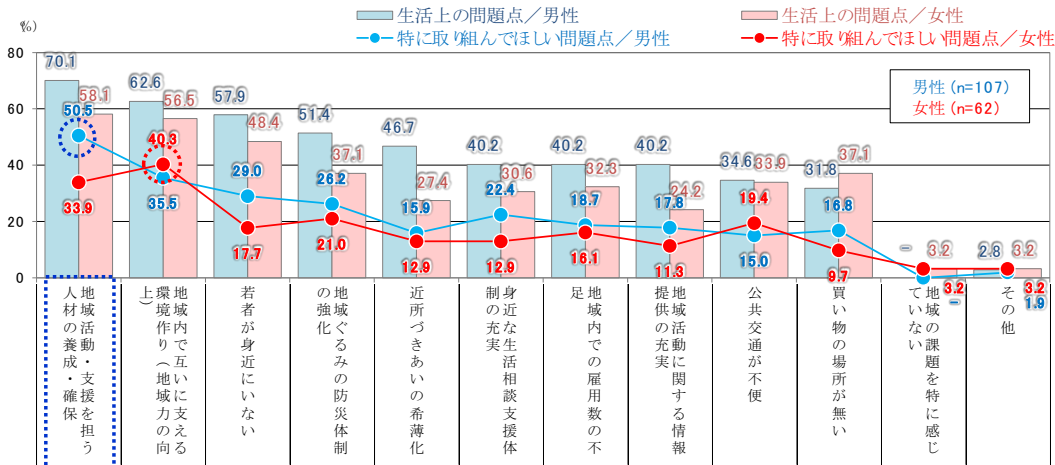
「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

15

地域課題や生活上の問題点と本学に取り組んで欲しい課題(性別)

性別で問題点や課題をみたところ、男女ともに「人材の養成・確保」を最も多く挙げている。一方、特に取り組んで欲しい課題については、男性は「人材の養成・確保」であるのに対し、女性は「地域内で互いに支える環境作り」となっている。

Q. あなたが感じている地域課題や生活上の問題点は以下のうちどれですか。また、その中で本学に特に取り組んで欲しい(改善してほしい)課題をお知らせください。

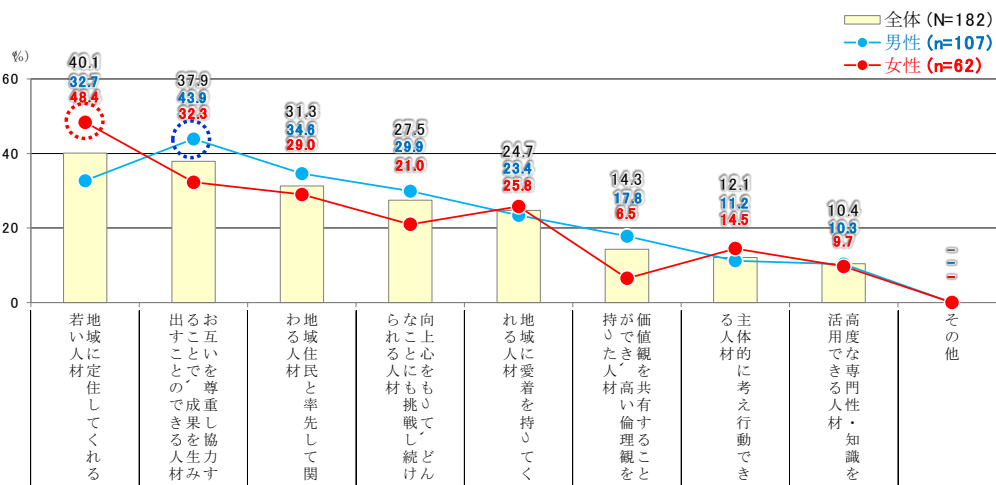


「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

地域の中で活躍してほしい人材

全体では「地域に定住してくれる若い人材」が最も多い。性別では、男性は「お互いを尊重し協力することで、成果を生み出すことのできる人材」、女性は「地域に定住してくれる若い人材」と異なる。

Q. お住まいの地域の中で今後活躍して欲しい人材として当てはまるものをお選びください。

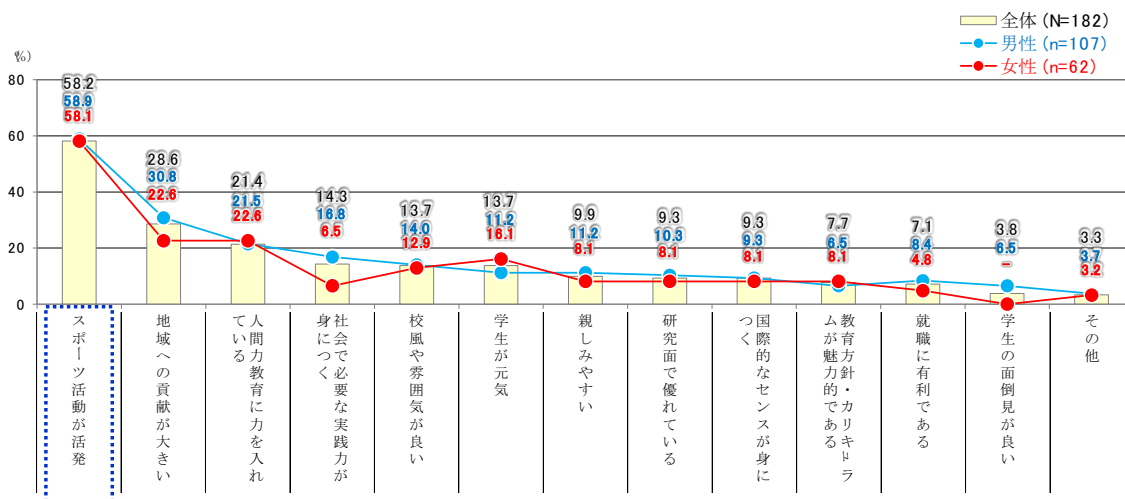


「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

本学についてのイメージ

「スポーツ活動が活発」(58.2%)が突出して高い。
他に、「地域への貢献が大きい」「人間力教育に力を入れている」「社会で必要な実践力が身につく」

Q. 本学についてどのようなイメージをお持ちですか。あてはまるものをお選びください。



「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

18

ご意見・ご要望

「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

本学に取り組んで欲しいこと、ご意見・ご要望

**本学の各活動について『期待する』との意見が最も挙げられている。
地域の高齢化ならびに人口減少に不安を抱く人が多く、学生の若い力に期待が寄せられている。**

Q. 本学の教育・研究・社会貢献活動について、取り組んで欲しいこと、ご要望、ご意見がありましたら、ご自由にお書き下さい。

●今後の活動に期待 (23件)
大変申し訳ない事ですが、日本文理大学の事はあまり知りません。昔、工業系の大学だったかと思うのですが、当地(佐賀県)は、パンパシフィック・カップ(株)佐賀製錬所という大企業がありますが、その反面過疎化が進み、10年すれば空き家や空き地だらけになると思われます。老人や介護施設だらけになる前に、その空き家や空き地等を利用して若い者が起業して活気づけて頂けたらと思います。
学生たちが迅速な地域で活動して欲しいと大変活況が湧いてきます。これからも地道な活動でも良いですから、継続して下さい。
大分県の救世主になって頑張ってください。他県になくて大分にある物、他県にあって大分ないもの、大分の魅力は何か、考えてみるのは重要な事です。そうする事によって必要の人材は何か、どのような人材のどのような向性が求めているか、大分県民としての誇り、自分の住んでいる地域の誇りを持つことが活性化の出発点だと思います。高速度道路も福岡まで結ばれます。2020年には東京オリンピックもあります。国内・地域創成の方針です。一灯照耀、万灯照耀という言葉があるように、小さな活動でも地道に続けていければ将来必ず表を結びます。
当校の活動内容、支持します。
私の町内では高齢者が多く町内の行事、祭り、防災など大変苦労しています。(50代の私でも若いと言われる)若者や学生さんの力を借り、地域の活性化につながればと思います。
高齢化が深刻な事ですが、お互いに助け合っている事があります。この地域の人や物や自然を活用して、若い人達を見て未来に希望を持って、安心して暮らすような場所にしていくべきだと感じています。このお便りを通じて、初めて貴校のHPで色んな事を知りました。身近に若い人達が沢山いて、とても心強かったです。
竹田市に住んでいるが、竹田でも最大は90%以上の人が高齢者だと思っています。皆々の方々の今後の活動に期待しています。頑張ってください。
近所、知人に学生がいません。夏に花火があり、その音が家に居ても聞かれます。一本祭りだど町内の人から聞きました。ここに家を造ってきて20年。定年退職後にここで生活していますが、あまり騒がしい所ではないようです。学生さんたちの若い人達と交流でもあれば楽しい生活が出来るかなと思います。
やっている事は素晴らしいと思います。大分県民として期待しています。
中津にあった洋館の移設等、非常に感心しています。今後地域に注目して頂きたいと思っています。
大分県全般において地域活動に期待します。
今後、人口の高齢化が進みますが先ず進んでいけるお年寄りも優しい社会を築いて欲しいと同時に、若者にも生き甲斐、働き甲斐のある社会を作らねばなりません。貴大学の今後の益々の活躍を祈願致します。頑張ってください。
地域の課題は数えきれない程多岐にわたります。特に地域のコミュニティーがこの先進されるかが心配である。自分は40代であるが、周りの人達を見て60~70代が殆どである。昔ながらの土地・農地・森林をどう守り、管理、維持していく事が出来るか、国策で各地域の現状を把握して取組まなければ、日本そのもの危ういのではないのでしょうか。貴学の取組を通じて、全国に発信できるような期待しています。頑張ってください。
今回、文理大の取組が初めて少しだけ理解できた。やはり、大学というものは偉いものだと思い直しました。世界的な視野を持つ事、より小さな地域に対して温かい目で見てくれること、どちらも大事な事だと思っています。大分で学んでくれた若者に期待しています。
アンケートを見ていながら、地域に貢献したいという思いが強く出てきました。今から、是非とも率先して地域活動に頑張りたいと思います。
過疎化が進む地域及び環境保全のために、学生さんが真剣に取り組む姿が大変評価致します。また、その活動に対して地元へ恩を返すような事もなく本当に感謝しています。学生さんが地元で活動して頂きありがたいのですが、一過性の活性化に終わらず、その後継続して頂く事を期待しています。2/21の豊後大野市役所での発表を見学し、それらの活動に対し大変驚きました。今後とも、よろしく願います。
貴校が県内唯一の私立大学として創立されて以来、各学部の実績による学生の質の向上、産官が実施する事業に対する教員の協力、支援等、産学一致の精神のもと、着々と成果を挙げられて今日に至っている事は、大いに評価致します。その結果、狭き門である貴学(COC事業)に選定された事は、大変意義あるものであり、その努力に敬意を表します。有能な人材育成等、諸種の事業の実施に至って困難が伴ったとしても、これまで培ったノウハウと公立高校にない柔軟性を持って取組めば、必ずや結果を出すものと思っております。大いに期待します。
是非、豊かな心で解決策を持って地域の未来を創る力になって欲しいと思います。頑張ってください。
国際色豊かな大学として学ぶ学生諸君の向学心、研究心、地域(県内外)に貢献したいという意気や報道等で感じられ立派なと思われ、大分県の誇りも思っております。益々の発展を祈念しております。
ご存知のように各地域とも多くの課題(高齢化など)があり、今後益々深刻になります。問題点の把握と解消にご尽力願います。今回のアンケートは評価します。今後とも取組みを期待します。
いよいよ活動している事を今回知りました。これからも、学業・地域活動頑張ってください。
4月から新卒の文理高校に縁があり、入学する事になりました。私も一緒に高校を訪ねて後輩さんのサークルの良さ、元気の良さまで伺いました。その説明の中で、初めて大分市にある文理大の存在を知りました。正直、佐賀に行きたい事ではなかったのですが、何となく大分まで後押ししてあげようという気持ちになりました。もうすぐ70ですが地域で頑張っています。どうぞ若き力を思えば、地域活性化の立役者として、引っ張って下さい。心より期待致します。
広範多岐にわたる教育へのご熱意、まことにご苦労様です。今後益々御学の発展を祈念申し上げます。

「地(知)の拠点整備事業【大学COC事業】

20

本学に取り組んで欲しいこと、ご意見・ご要望

●活動に対する提案、要望 (16件)
私は、豊後大野市朝地支所に勤めています。合併により市の中心部から最も離れた気候が損なわれています。しかし、総合型スポーツクラブや、伝統芸能である深山流神楽の活動を通じ、少しでも地域に活力を生み出したいと考えています。また、旧町の中心部であった交差点周辺でゴミの処理や交通の不便が生じており、NBLの地域活動の取組みに非常に興味を持ちました。一緒に神楽の練習をして地区の祭りに参加してもらったり、地域の買物の不便を解消する方策について考えあうことが出来れば、素晴らしいなと感じました。
佐賀県内では、若者が少ないお祭りの山引き、おみこ担ぎをして頂く、あがりとごまきです。知の取組なども是非願っています。
社会貢献活動は、大学が地域に出ているだけでなく、大学が地域に受け入れられる事も含まれていると思います。子ども達のみならず、全ての世代に渡って楽しめるような公共講座や臨時の教室等の開催を望みます。
長時間滞在時の研修で、実態を把握し解決策を提示して欲しい。地域にある資源(施設)を利用して生業が出来る仕組みを提示して欲しい。
先ず随分以前より対象自治体に語を構えてはどうでしょうか。大分市の佐賀県地区は本校舎にもほど近く24時間、365日そこで生活をし、地元の方々の息吹を耳にしながら学習する事も大切です。都会のアパートに住めば、時々現地へ尋ねても上回りが分からないと思います。半端な気持ちでは、地元の人とはそう簡単には受け入れられません。頑張ってください。
高齢化・過疎化・少子化が進む中、共通の問題点、各地域における問題点を理解、把握した上で若い力で解決策を考えていければ、必ず良い結果が出てくると思います。
専門の研究活動を生かして、産学官の共同により、地域産業の活性化に貢献していただきたい。
大学の名称はよく知っていますが、国立ではない私立なのにユニークな活動をしているのほど程度には認識していません。私も一人なので、学生さんのボランティア活動には感謝しています。私共との接点が増えれば地域の為に大きな力になると思います。
田舎のコミュニティーでお茶会等、素晴らしいと思います。若者らしく写真、SNSなど活用し、情報発信して欲しいと思います。外の人がイベント活動を通じて、田舎に来てくれて交流する事を望みます。NPOと協力して、農作業、林業など(酒まんじゅう、みそ作りなど、昔ながらの事を、一緒に体験など)
地域商店街に残っている市民家の修復をして、保存活用して地域の賑わいに協力して頂ければありがたいと思います。住民と触れ合い大学の認知度を高め、地域の活性化になればと思います。
年寄りになると、どうしても風雨、地震、家事など不意の災害が怖いになります。若い人の様に、簡単に動作等が出来ません。若い人の力を借りなければなりません。緊急事態などは、どうしても若い人の力を借りる事になります。どうか年寄りも困る事のない様、よろしく願います。
各自自治体における地域振興の成功例と、仮にその例を大分県の自治体に当てはめた場合の効果の研究など
私は豊後大野市に住んでいますが、少子・高齢化により限界集落や消滅集落ばかりが目立ち、集落の維持が出来ない状況です。先般、市報で豊後大野市土師地区の社会貢献活動を見ましたが将来に渡って出来る事ではなくその場しのぎと受け取れません。もっと根本的な方策はないか、と思います。
人口減少や高齢化の町は、稼ぐ力が無い、若者に魅力がないのではないのでしょうか。稼ぐ会社や店には、パワーや気がある。もっと企業優待が必要。地域住民は変化を望まない為、外部の人をもっと移住させるべき。
①社会人として自立でき倫理感のある普通の人になる。同時に他の人に対して思いや心を養う。また、平和な国づくりのリーダーになってほしい。真の平和な国とは何か、地域の活動に取り組んでほしい。最後に、地域活動は地域の成果が定着するのではないだろうか?
高齢化が進む中、買物も出来ず困っている人も多い。一人暮らしの人が多いため、心のケアも必要なのではないかと思っています。お願いします。いい知恵をだして下さい。若者の考えをどんどん出して下さい!
●広報に関する意見 (12件)
今回このようなアンケートがきましたが、学校の諸活動についてあまり知りません。一部の誰かがいる人達のみでの活動展開ではなく、もっと幅広い教育活動を展開して知名度を上げる必要があると思います。若者の力は無限です。
遠くあるので、全然情報がよく分かりません。
一般の人が関わる事(学園祭など、一般の人が利用できる施設など、知る機会がない)
文理大といえば、チャリディング、エコー、学食が美味しいらしいというイメージは持ってなかったのですが、先日佐賀県民Cで、環境問題のシンポジウムがあった時、海洋探索ロボットの話を聞いて、いろんな活動をしている事を知りました。こんな風に、どんどん地域に出ていって活動内容を伝える事も大切だと感じています。
宇佐市には、あまり知られていないのではないのでしょうか。宇佐市の地域で活動を広めてほしい。
地域では一部の人のしか知らないのが現状。せっかく活動しているのが、もったいない。
地域の人々と密着し、情報の共有を図ってほしい。
貴学の事は良く理解していません。どんな学部、学科があるのかもあまり知りたくありません。知名度を上げる為にもっとPRして下さい。大分県人の私でこれですから、他県ではなおさらだと思います。九州内であれば、福岡大学、西宮学院大学などの私立になつて欲しい。大学のPR、SNSなどの力を入れて下さい。
問題のよう質問を受けても、NBL自身の校園も良く理解してない状況で答えがありません。このような質問の前に、NBLはどんな活動をして、どんな素晴らしい大学で、どういった事をまず知らせるべきかと思っております。
地域での活動や教育の面と色々となつてから先の事を、写真や文章等でアピールして知ってもらいたい。又、スポーツ等の写真を載せて知ってもらいたい。又、スポーツ等の写真を載せて知ってもらいたい。又、スポーツ等の写真を載せて知ってもらいたい。
豊後大野市までNBLの事が知られていない。もっといろんな活動(活動)を知らせてほしい。昔のイメージのままの大人が多いです。
文理大が十分に活動が知られていないが、地方に来て顔を見てほしい。

「地(知)の拠点整備事業【大学COC事業】

21

本学に取り組んで欲しいこと、ご意見・ご要望

<p>●人材育成に関する意見 (8件)</p> <p>大分県内には現在短大も含めて、11校の大学があります。介護・芸術・工科・農業・医学等は、はっきり目的がある大学です。貴大学は立命大と同じ様に、留学生が多いと聞きました。留学生を生かした地域の活動を充実してほしいと思っています。</p> <p>大分の自然、風土、特産品が相対的に高いと思うが、地域住民にはあまり、その意識を持つ(共有)している人は少ない。大学では、この地域力をもっと深掘して高い意識を持つ学生を育てて、地域貢献してほしい。</p> <p>貴校に対する印象として、チアリーディング等スポーツに対して熱心だということが大変よく分かります。これから若者の育成に大いに取り組んでほしいと願っています。余談ですが、娘が貴校の同窓です。頑張ってください。</p> <p>社会貢献等を通して人間性の豊かな学生を育ててほしいと思います。小規模・高齢化の進んだ地域には若い力が特に必要だと思います。</p> <p>若者の自律性の欠如、身勝手が取りださしている今日、学校でしっかりと道徳、強い意志、ボランティア精神を養ってもらいたい。今の若者が社会を背負うようになった時、日本はどのようなのかと心配の声を聞くけど、しっかりとした人間性を学校で作ってほしい。</p> <p>もっともっと田舎生活に貢献出来る人材の育成に力を入れてほしい。地域に残れる人(学生)の教育をして欲しい。唯々、給料(金)だけではない。</p> <p>①現在の若者はあまり挨拶出来ない若者が多いような気がする。②本学生と話した事はありますが少し消極的です。③学校に対する誇りを持ってもらいたい。</p> <p>地域の人々と積極的に関わり、協力していような人材を育ててほしい。</p>
<p>●その他 (9件)</p> <p>子どもが大きくなって、大学なんて無縁の生活です。だから、ちょっと分からない。ただ、お祭りの時に隣のブースで、野津(だと思)うのお野菜を売っていたあなた達の先輩が、とても明るく楽しげな感じがしたと記憶があるくらいです。</p> <p>貴学COC事業に選定された事知りませんでした。文理大学は身近な感じがしますが、イメージ的にあまり良いイメージがありませんでした。近年、テレビ等でスポーツ活動が優れている事は知っていましたが、他には知りません。私の子どもは高校2年生です。大学進学を目標としています。文理の進学は考えていませんでした。ただ、今回パンフレット等を見たりして少し身近に感じています。子どもにも話してみようかなと思いました。</p> <p>豊後大野では、毎月50名以上人口が少なくなっています。対策が見つからない現状を変えたい。うまくいっている地域の情報を知りたい。</p> <p>社会貢献活動に頑張っている姿が、将来役に立つと思います。</p> <p>何をやるにしても人口が少ないし、老人が多い、若い人達がいません。村が消えていきそう。空き家多いです。</p> <p>よそ者の出入りが多すぎてきい。</p> <p>山林や荒れた田畑の清掃を地域の人と共に行えば、獣も民家に下りてこないようになると思う。山が荒れて食べ物がないために彼らは山から下りてくる。全て人間のせいなのだ。原点に戻りきれいな山を取り戻したい。でも一人ではできない。みんなに声をかけて欲しい!</p> <p>コミュニティバス以外に交通の方法はないのか考えてほしい。路面バス、鉄道など、お金がかかるかもしれませんが、募金を募った方法はあるはず。あと、農家の人達を守ってほしい。建築業にお金を使いすぎの気がする。日本人は農耕民族だったはず。昔に戻ろう。</p> <p>コミュニティバスが運行している地区では、人が住んでいるのか宿があるのか分からない程寂れています。地域環境の破壊はここから始まるのではないかと危機感を持っています。</p>

「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

22

調査結果まとめ

「地(知)の拠点整備事業」【大学COC事業】

調査結果まとめ

活動の認知度や期待度、協力意向

- ☞ 「活動の認知率」は約3割。「貢献度」は約9割を占める。
- ☞ 各分野の活動認知率は2割から3割。期待度は6割から7割となっている。
「小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ維持活性化」が認知率、期待度ともに最も高い。
- ☞ 各分野を詳細にみると、概ね認知者は70代以上の高齢層が高いものの、期待度は50代以下の若年層が高い傾向がみられる。また、女性よりも男性の期待度が比較的高い。
- ☞ 本学の活動への協力意向は54.4%。年齢が下がるほど協力率が高くなる傾向。

地域課題や問題点、活躍してほしい人材

- ☞ 地域課題や生活の問題点として、「地域活動・支援を担う人材の養成・確保」が最も多い。
性別では、男性は「人材の養成・確保」、女性は「地域内で互いに支える環境作り」がそれぞれ最も多い。
- ☞ 地域の中で活躍してほしい人材として「地域に定住してくれる若い人材」。
男性は「お互いを尊重し協力することで、成果を生み出すことのできる人材」、
女性は「地域に定住してくれる若い人材」を最も望む。

その他

- ☞ 本校のイメージは「スポーツ活動が活発」が突出して高い。次いで「地域への貢献が大きい」「人間力教育に力を入れている」「社会で必要な実践力が身につく」の順。
- ☞ 意見・要望では、本校の活動を期待する意見が多く、学生の若い力に期待が寄せられている。

参考資料(調査票)

参考資料(調査票)

「地(知)の拠点整備事業【大学COC事業】アンケート調査表

問1. これまでに本学の活動を実際に見たり、新聞・テレビ・ホームページなどの報道をご覧になって、本学の地域貢献への取り組みへの感想として、あてはまるものを1つ選び、番号に○を付けてください。

問1-1. 本学の活動をご存じですか。

1. はい 2. いいえ

問1-2. 問1-1で「はい」とお答えおたいただいた方へ、その活動の取り組みへの感想をお答え下さい。

1. とても貢献している 4. あまり貢献していない
2. やや貢献している 5. 全く貢献していない
3. どちらでもない

問2. 同封のパンフレットをご覧になって、本学が行っている、または行おうとしている次の分野の活動について、あなたの「本学活動の認知度」、「本学への期待度」をそれぞれあてはまるものを1つ選び、番号に○を付けてください。

活動分野	項目	①認知度			②期待度				
		知らない	知っている	よく知っている	期待する	期待しない	期待する	期待しない	期待する
1	小規模・高齢化が深刻な集落におけるコミュニティ維持活性化 【活動内容】高齢化が進んでいる地区・集落での活動(祭など)へ本学学生が参加します。	1	2	3	1	2	3	4	5
2	人口減少社会を支えるための先進的なものづくり 【活動内容】人口不足を補う農業・林業支援ロボット、環境観測ロボットの開発と実践を行います。	1	2	3	1	2	3	4	5
3	自然の積極的な活用による保全と地域活性化(観光・教育) 【活動内容】豊後大野市ジオパーク構想・エコパーク構想と連携した自然保護に関わるひとづくりや学生活動による観光振興を図ります。	1	2	3	1	2	3	4	5
4	地域商店及び商店街の活性化による地域振興 【活動内容】地域の商店や商店街と連携して、学生活動拠点を設置し、人の流れを呼び戻すための地域振興や商店街の活性化に取り組みます。	1	2	3	1	2	3	4	5

活動分野	項目	①認知度			②期待度				
		知らない	知っている	よく知っている	期待する	期待しない	期待する	期待しない	期待する
5	健康増進および生活支援によるコミュニティの維持 【活動内容】総合型地域スポーツクラブの活動支援や高齢者の生活支援活動を教員と学生が共同で行っています。	1	2	3	1	2	3	4	5
6	NPO法人の活動経費支援 【活動内容】地域で活躍するNPO(社会貢献活動等を行う市民団体等)との協働活動と財務改善の提案をしています。	1	2	3	1	2	3	4	5
7	地域ブランドの発掘による交流人口の増加産業の活性化(6次化) 【活動内容】地域の特産品の発掘をおこない、それをブランド化し流通させることで、地域の活性化を推進していきます。	1	2	3	1	2	3	4	5

問3. 本学の地域での活動(教育・研究・社会貢献)に対して協力してみたいですか。あてはまるものを次の中から1つ選び、番号に○を付けてください。

1. 協力したい 4. どちらかという協力したくない
2. どちらかといえば協力したい 5. 協力したくない
3. どちらでもない

問4. あなたが感じている地域課題や生活上の問題点は以下のうちどれですか。あてはまるものをいくつでも選び○を付けてください。また、その中で本学に特に取り組んで欲しい(改善してほしい)課題を3つまで選び、○を付けてください。

番号	項目	地域課題・問題点(○はくつでも)	特に取り組んで欲しい課題(○は3つまで)
1	近所づきあいの希薄化	1	1
2	地域内で互いに支える環境作り(地域力の向上)	2	2
3	地域活動・支援を担う人材の養成・確保	3	3
4	身近な生活相談支援体制の充実	4	4
5	地域活動に関する情報提供の充実	5	5
6	地域ぐるみの防災体制の強化	6	6
7	地域内での雇用数の不足	7	7
8	若者が身近にいない	8	8
9	公共交通が不便	9	9
10	買い物場所が無い	10	10
11	地域の課題を特に感じていない	11	11
12	その他()	12	12

「地(知)の拠点整備事業【大学COC事業】

参考資料(調査票)

問5. お住まいの地域の中で今後活躍して欲しい人材として当てはまるものを、以下のうちから2つまで選び○を付けてください。

1. 向上心をもって、どんなことにも挑戦し続けられる人材
2. 高度な専門性・知識を活用できる人材
3. お互いを尊重し協力することで、成果を生み出すことのできる人材
4. 価値観を共有することができ、高い倫理観を持った人材
5. 主体的に考え行動できる人材
6. 地域に定住してくれる若い人材
7. 地域住民と率先して関わる人材
8. 地域に愛着を持ってくれる人材
9. その他()

問6. 本学についてどのようなイメージをお持ちですか。あてはまるものを3つまで選び、番号に○を付けてください。

1. 校風や雰囲気が良い 8. 人間力教育に力を入れている
2. 就職に有利である 9. 地域への貢献が大きい
3. 教育方針・カリキュラムが魅力的である 10. スポーツ活動が活発
4. 研究面で優れている 11. 学生が元気
5. 学生の面倒見が良い 12. 親しみやすい
6. 国際的なセンスが身につく 13. その他()
7. 社会に必要な実践力が身につく

問7. 本学の教育・研究・社会貢献活動について、取り組んで欲しいこと、ご要望、ご意見がありましたら、ご自由にお書き下さい。(自由回答)

自由回答欄

<<最後にあなたのことについてお尋ねいたします。あてはまる番号に○をつけてください。>>

問1. あなたの性別は

1. 男性 2. 女性

問2. あなたの年齢は

1. 20歳未満 3. 30~39歳 5. 50~59歳 7. 70~79歳
2. 20~29歳 4. 40~49歳 6. 60~69歳 8. 80歳以上

問3. あなたの職種は

1. 会社員(経営者・役員) 6. パート・アルバイト
2. 会社員(一般従業者) 7. 家事従事者
3. 公務員 8. 学生
4. 農林水産業 9. 無職
5. 自営業 10. その他()

問4. あなたがお住まいの地区はどちらですか。大分市在住の方は、地区までお答え下さい。

1. 大分市 3. 別府市 5. 日田市 7. それ以外の大分県内
2. 豊後大野市 4. 中津市 6. 佐伯市 (・町・村)
地区

問5. 今のお住まいの地区には、何年お住まいになりますか。

1. 5年未満 3. 10~20年未満 5. 30年以上
2. 5~10年未満 4. 20~30年未満

文部科学省「地（知）の拠点整備事業」平成 26 年度採択
『豊かな心と専門的課題解決力を持つおおいた地域創生人材の育成』

平成 27 年度
日本文理大学
「地（知）の拠点整備事業」 年次報告書

発行日：平成 28 年 3 月 31 日

編集：学校法人 文理学園

日本文理大学 大学 COC 事業担当

編集責任者 吉村充功（事業推進責任者）

〒879-0397 大分県大分市大字一木 1727

e-mail: coc@nbu.ac.jp

発行者：日本文理大学 学長 平居孝之

印刷：三和印刷出版（株）



文部科学省
地(知)の拠点

NBU 日本文理大学
NIPPON BUNRI UNIVERSITY